

北^{きた}塚^{つか}屋^や (Ⅱ)

国道140号バイパス関係(寄居町・花園町工区)

埋蔵文化財発掘調査報告

— IV —

1 9 8 5

序

県の中央部を貫く関越自動車道の建設は、埼玉の幹線道路整備を強力に推し進める契機となりました。その結果、各インターチェンジに接続する幹線道路は、バイパス化が進められております。国道140号線バイパス（寄居・花園工区）もそのひとつで、花園インターチェンジから秩父方向への便をはかることを目的としており、現在、このバイパスは開通しております。

国道140号バイパスの寄居・花園工区の路線内には上南原、下南原、塚屋、北塚屋という4箇所の遺跡が存在するため、事前に発掘調査を行いました。その結果については5回に分けて報告することになっております。すでに3冊は刊行されており、今回の報告は4冊目となります。

本報告書も既刊の報告書と同様、貴重な資料的価値を備えているものと考えております。本書が今後の学術研究、教育普及活動に広く活用されることを念じております。

最後になりましたが、発掘調査・整理作業にあたり寄居町教育委員会、花園町教育委員会、県土木部道路建設課、熊谷土木事務所ならびに地元関係各位より、多大な御協力、御支援を賜りましたことに対して厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例 言

1. 本書は埼玉県大里郡寄居町大字桜沢に所在する北塚屋遺跡（委保記第17—2535号）A・B区の発掘調査報告書縄文時代編である。

2. 調査は一般国道140号線バイパス建設に先だつ事前調査であり、埼玉県土木部道路建設課の委託により、埼玉県教育委員会が昭和53・54年度にかけて実施した。

3. 報告書の作成は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和57年度より受託し、作業を続けている。刊行に際しては、遺跡の性格を以って成果を三分し、それぞれ別冊化編集する法を用いた。これらの書名と報告対象は以下のとおりである。

『塚屋・北塚屋』（塚屋遺跡、北塚屋遺跡C区の縄文時代遺構・遺物） 既刊

『北塚屋(Ⅱ)』（北塚屋遺跡A・B区の縄文時代遺構・遺物） 本書

『小前田古墳群』（両遺跡に重複する古墳時代以降の遺構・遺物） 近刊

なお、本書にかかる整理作業は昭和58・59年度に受託し、これを実施した。

4. 発掘調査、および整理作業の担当者、組織は第Ⅰ章に示した。この他、整理作業に関しては、西井幸雄の協力を得、小島糸子、山浦正恵の補助を受けた。

また、土器展開写真は小川忠博氏に依頼した。


5. 本書の執筆と編集は、当事業団調査研究部長、同副部長の監修の下、整理担当者として西井・小島が分担して行った。執筆分担の責は各文末に附記している。


6. 本書内の挿図における指示は次のとおりである。


○ X・Yによる数値表示は平面公共座標第Ⅸ系に基づく座標値を表わし、方位は全て座標北を表わす。

○ 挿図類の縮尺は次の率を基本としている。また、これに漏れる類は個別に記した。
遺構^{1/100}、土器^{1/5}、^{1/10}、石器^{1/10}、^{1/5}、^{1/10}、土・石製品^{1/5}、

○ 挿図内スクリーン部の指示は次のとおりである。


 遺構実測図中の地山

 遺構実測図中の焼土

 遺構実測図中の粘土

 遺構実測図中の攪乱部断面

 遺構実測図中の塊状土断面

 土器実測図中の可視赤彩部

 土器実測図中の隆帯剥落部

目 次

序

例 言

I	発掘調査に至る経過	1
II	地理的環境と周辺遺跡	3
III	調査概要	5
1.	遺跡概観	5
a	地区設定と層序	5
b	遺構と遺物の概要	6
2.	調査経過	9
IV	検出遺構と出土遺物	11
1.	検出遺構	11
a	住居跡	11
b	土壇・集石	44
2.	出土遺物	73
a	土器	73
b	石器	169
c	土製品	228
d	石製品	230
V	資料検討	231
1.	出土土器	231
2.	出土石器	247
3.	検出遺構	253

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡……………	3	第33図	第55号～第69号土壇……………	57
第2図	扇状地形と周辺の縄文遺跡……………	4	第34図	第70号～第83号土壇……………	58
第3図	基本層序……………	5	第35図	第84号～第97号土壇……………	59
第4図	検出遺構の分布概念図……………	6	第36図	第98号～第112号土壇……………	60
第5図	検出遺構全測と塚屋・北塚屋遺跡、 全体図、周辺地形図……………	7	第37図	第113号～第125号土壇……………	61
第6図	第1号住居跡……………	12	第38図	第126号～第141号土壇……………	62
第7図	第2号住居跡……………	13	第39図	第142号～第156号土壇……………	63
第8図	第3号住居跡……………	14	第40図	第157号～第173号土壇……………	64
第9図	B～D-1～4 遺物出土状況……………	15	第41図	第174号～第188号土壇……………	65
第10図	第7号住居跡……………	16	第42図	第189号～第203号土壇……………	66
第11図	第8号住居跡……………	17	第43図	第204号～第219号土壇……………	67
第12図	第10号、第11号住居跡……………	18	第44図	第220号～第233号土壇……………	68
第13図	第12号、第13号住居跡……………	20	第45図	第234号～第245号土壇……………	69
第14図	第14～16号住居跡……………	21	第46図	第246号～第249号土壇 第1号～第9号集石……………	70
第15図	第17号住居跡……………	23	第47図	第10号～第24号集石……………	71
第16図	第18号、第19号住居跡……………	24	第48図	第25号～第36号集石……………	72
第17図	第20号～22号住居跡……………	26	第49図	住居跡出土土器(1)……………	87
第18図	第23号、第24号住居跡……………	27	第50図	住居跡出土土器(2)……………	88
第19図	第25号住居跡……………	29	第51図	住居跡出土土器(3)……………	89
第20図	第26号～第28号住居跡……………	30	第52図	住居跡出土土器(4)……………	90
第21図	第29号、第30号住居跡……………	31	第53図	住居跡出土土器(5)……………	91
第22図	第31号、第32号住居跡……………	33	第54図	住居跡出土土器(6)……………	92
第23図	第33号、第34号住居跡……………	35	第55図	住居跡出土土器(7)……………	93
第24図	第35・36号住居跡……………	36	第56図	住居跡出土土器(8)……………	94
第25図	第37号住居跡……………	37	第57図	住居跡出土土器(9)……………	95
第26図	第38～40号住居跡(1)……………	38	第58図	住居跡出土土器(10)……………	96
第27図	第38～40号住居跡(2)……………	39	第59図	住居跡出土土器(11)……………	97
第28図	第41号、第42号住居跡……………	41	第60図	住居跡出土土器(12)……………	98
第29図	土壇・集石の分類と要素別集計……………	45	第61図	住居跡出土土器(13)……………	99
第30図	第1号～第16号、第20号土壇……………	54	第62図	住居跡出土土器(14)……………	100
第31図	第17号～第19号 第21号～第37号土壇……………	55	第63図	住居跡出土土器(15)……………	101
第32図	第38号～第54号土壇……………	56	第64図	住居跡出土土器(16)……………	102
			第65図	住居跡出土土器(17)……………	103

第66図	住居跡出土土器 (18)	104	第102図	住居跡出土土器 (54)	140
第67図	住居跡出土土器 (19)	105	第103図	土壇出土土器 (1)	150
第68図	住居跡出土土器 (20)	106	第104図	土壇出土土器 (2)	151
第69図	住居跡出土土器 (21)	107	第105図	土壇出土土器 (3)	152
第70図	住居跡出土土器 (22)	108	第106図	土壇出土土器 (4)	153
第71図	住居跡出土土器 (23)	109	第107図	土壇出土土器 (5)	154
第72図	住居跡出土土器 (24)	110	第108図	土壇出土土器 (6)	155
第73図	住居跡出土土器 (25)	111	第109図	土壇出土土器 (7)	156
第74図	住居跡出土土器 (26)	112	第110図	土壇出土土器 (8)	157
第75図	住居跡出土土器 (27)	113	第111図	土壇出土土器 (9)	158
第76図	住居跡出土土器 (28)	114	第112図	土壇出土土器 (10)	159
第77図	住居跡出土土器 (29)	115	第113図	土壇出土土器 (11)	160
第78図	住居跡出土土器 (30)	116	第114図	集石出土土器 (1)、単独埋甕	163
第79図	住居跡出土土器 (31)	117	第115図	集石出土土器 (2)	164
第80図	住居跡出土土器 (32)	118	第116図	集石出土土器 (3)	165
第81図	住居跡出土土器 (33)	119	第117図	グリッド出土土器 (1)	166
第82図	住居跡出土土器 (34)	120	第118図	グリッド出土土器 (2)	167
第83図	住居跡出土土器 (35)	121	第119図	グリッド出土土器 (3)	168
第84図	住居跡出土土器 (36)	122	第120図	打製石斧部位名称模式図	169
第85図	住居跡出土土器 (37)	123	第121図	出土石器 (1) 住居跡	180
第86図	住居跡出土土器 (38)	124	第122図	出土石器 (2) 住居跡	181
第87図	住居跡出土土器 (39)	125	第123図	出土石器 (3) 住居跡	182
第88図	住居跡出土土器 (40)	126	第124図	出土石器 (4) 住居跡	183
第89図	住居跡出土土器 (41)	127	第125図	出土石器 (5) 土壇・グリッド	184
第90図	住居跡出土土器 (42)	128	第126図	出土石器 (6) 住居跡	185
第91図	住居跡出土土器 (43)	129	第127図	出土石器 (7) 住居跡	186
第92図	住居跡出土土器 (44)	130	第128図	出土石器 (8) 住居跡	187
第93図	住居跡出土土器 (45)	131	第129図	出土石器 (9) 住居跡	188
第94図	住居跡出土土器 (46)	132	第130図	出土石器 (10) 住居跡	189
第95図	住居跡出土土器 (47)	133	第131図	出土石器 (11) 住居跡	190
第96図	住居跡出土土器 (48)	134	第132図	出土石器 (12) 住居跡	191
第97図	住居跡出土土器 (49)	135	第133図	出土石器 (13) 住居跡	192
第98図	住居跡出土土器 (50)	136	第134図	出土石器 (14) 住居跡	193
第99図	住居跡出土土器 (51)	137	第135図	出土石器 (15) 住居跡	194
第100図	住居跡出土土器 (52)	138	第136図	出土石器 (16) 住居跡	195
第101図	住居跡出土土器 (53)	139	第137図	出土石器 (17) 住居跡	196

第138図	出土石器 (18) 住居跡	197	第159図	出土石器 (39) 住居跡	218
第139図	出土石器 (19) 住居跡	198	第160図	出土石器 (40) 住居跡	219
第140図	出土石器 (20) 住居跡	199	第161図	出土石器 (41) 住居跡	220
第141図	出土石器 (21) 住居跡	200	第162図	出土石器 (42) 住居跡	221
第142図	出土石器 (22) 住居跡	201	第163図	出土石器 (43) 住居跡	222
第143図	出土石器 (23) 住居跡	202	第164図	出土石器(44)住居跡・グリフ	223
第144図	出土石器 (24) 住居跡	203	第165図	土製品	229
第145図	出土石器 (25) 住居跡	204	第166図	石製品	230
第146図	出土石器 (26) 住居跡	205	第167図	抽象文土器二態と人形類例	233
第147図	出土石器 (27) 住居跡	206	第168図	北塚屋 I ~ III 期の土器 (1)	234
第148図	出土石器 (28) 住居跡	207	第169図	北塚屋 I ~ III 期の土器 (2)	235
第149図	出土石器 (29) 住居跡	208	第170図	北塚屋 N 期の土器 (1)	240
第150図	出土石器 (30) 住居跡	209	第171図	北塚屋 N 期の土器 (2)	241
第151図	出土石器 (31) 住居跡	210	第172図	北塚屋 V ~ VI 期の土器 (1)	244
第152図	出土石器 (32) 住居跡	211	第173図	北塚屋 V ~ VI 期の土器 (2)	245
第153図	出土石器 (33) 住居跡	212	第174図	打製石斧集成図 (1)	248
第154図	出土石器 (34) 住居跡	213	第175図	打製石斧集成図 (2)	249
第155図	出土石器 (35) 住居跡	214	第176図	打製石斧相関図	251
第156図	出土石器 (36) 住居跡	215	第177図	遺構変遷図	257
第157図	出土石器 (37) 住居跡	216	第178図	集石土壌相関図	259
第158図	出土石器 (38) 住居跡	217			

表 目 次

第1表	遺構番号新旧対照表	10	第10表	集石一覽表	53
第2表	住居跡一覽表	43	第11表	出土石器点数一覽表 (1)	178
第3表	土壌一覽表 (1)	46	第12表	出土石器点数一覽表 (2)	179
第4表	土壌一覽表 (2)	47	第13表	石器計測表 (1)	224
第5表	土壌一覽表 (3)	48	第14表	石器計測表 (2)	225
第6表	土壌一覽表 (4)	49	第15表	石器計測表 (3)	226
第7表	土壌一覽表 (5)	50	第16表	石器計測表 (4)	227
第8表	土壌一覽表 (6)	51	第17表	時間幅概念対比表	231
第9表	土壌一覽表 (7)	52			

圖 版 目 次

- 図版1 遺跡航空写真、B区東遺構確認時
A区住居跡群
- 図版2 第1号、第2号住居跡
- 図版3 第3号住居跡、住居跡微細
- 図版4 第5号、第7号住居跡、住居跡微細
- 図版5 第8号、第10号住居跡
- 図版6 第12号、第13号住居跡
- 図版7 第14~16号住居跡、住居跡微細
- 図版8 第17号、第18号住居跡
- 図版9 第19号、第20号住居跡、住居跡微細
- 図版10 第21号、第22号住居跡
- 図版11 第23号、第25号住居跡
- 図版12 第26・27号住居跡、住居跡微細
- 図版13 第28号~第32号住居跡
- 図版14 第33号、第34号住居跡
- 図版15 第35号、第36号住居跡
- 図版16 第37号~第39号住居跡、住居跡微細
- 図版17 第40号~第42号住居跡、住居跡微細
- 図版18 第1号、第3号~第5号、第17号土壇
第31号、第37号、第56号土壇
- 図版19 第70・71号、第75号、第76号、第83号土壇
第80号、第86号、第93号、第94号土壇
- 図版20 第96号、第98号、第100号土壇
第103号、第106号、第115号土壇
第131・132号、第141号土壇
- 図版21 第156号、第160・161号、第168号土壇
第171・172号、第177号、第180・181号土壇
第197号、第198・199号土壇
- 図版22 第200号、第203号、第211号土壇
第214・215号、第219号、第227号土壇
第245号、第248・249号土壇
- 図版23 第1号、第7号、第8号、第12号集石
- 図版24 第14号、第15号、第22号集石
第25号、第26号、第28号集石
- 図版25 出土土器(1)
- 図版26 出土土器(2)
- 図版27 出土土器(3)
- 図版28 出土土器(4)
- 図版29 出土土器(5)
- 図版30 出土土器(6)
- 図版31 出土土器展開写真(1)
- 図版32 出土土器展開写真(2)
- 図版33 出土土器展開写真(3)
- 図版34 出土土器展開写真(4)
- 図版35 出土土器展開写真(5)
- 図版36 出土土器展開写真(6)
- 図版37 有舌尖頭器・石鏃
楔形石器・石匙・磨製石斧
- 図版38 第7号住居跡出土打製石斧
- 図版39 打製石斧拡大
- 図版40 土鈴、大珠、耳飾

I 発掘調査に至る経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため各種の道路建設工事を進めているが、一般国道140号線でも関越自動車道の建設等に伴い、寄居町、花園村地内でバイパスの建設が計画された。

県教育局文化財保護課では、開発関係部局と各種の協議を図っている。今回の事業の担当課である県土木部道路建設課とも同様の調整を進めていた。

道路建設課から路線内の文化財の所在について文化財保護室（当時）あて照会があったのは、昭和48年12月17日付け道建第1103号をもってであった。これに基づいて文化財保護室では分布調査を実施した結果、縄文時代の集落跡及び古墳群が所在することが確認された。この結果を検討して、昭和49年5月28日付け教文第905号をもって、1.文化財は現状保存することが望ましい。2.やむを得ずかかる区域については発掘調査を実施されたい。という主旨で道路建設課あて回答した。

その後、文化財保護課と道路建設課では保存策について種々の調整がなされたが、道路変更は不可能となったため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。路線内には小前田古墳群をはじめ4ヶ所の遺跡が確認されているが、これらの遺跡について改めて発掘調査のための協議を開始した。

昭和52年2月22日付け道建第741号をもって道路建設課から文化財保護課へ「一般国道140号寄居町、花園村地内の道路改良事業区域内における埋蔵文化財調査について」という協議書が提出された。その内容は次のとおりである。

1. 調査時期および範囲
2. 調査費用（概算）
3. 調査機関

また、調査は昭和52年度・53年度に実施してほしい旨の連絡もあった。

文化財保護課ではこれらに基づいて道路建設課と協議を進め、昭和52年度に花園村黒田地区所在の上南原遺跡の調査、昭和53年度に花園村小前田地区の塚屋遺跡と寄居町桜沢地区の北塚屋遺跡の調査を実施することとなった。発掘調査は文化財保護課が執行委任を受けて行われた。

埼玉県知事からは文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘通知が、県教育長からは同法第98条の2に基づく埋蔵文化財発掘調査通知が文化庁長官へ提出され、塚屋遺跡、北塚屋遺跡は昭和53年9月1日から調査が開始された。

文化庁からは委保記第17—2535号をもって調査通知を受理した旨の通知があった。

（埼玉県教育局文化財保護課）

（『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第25集より転載）

発掘調査の組織

1. 発掘 (昭和53・54年度)

主体者 埼玉県教育委員会 事務局 埼玉県教育局文化財保護課 企画調整 埼玉県教育局文化財保護課 庶務経理 埼玉県教育局文化財保護課 発掘 埼玉県教育局文化財保護課	教 育 長 課 長 課 長 補 佐 (兼 庶務課長) 文化財第二係長 同 文化財第三係長 (非常勤職員) (同) (同)	石 田 正 利 杉 山 泰 之 奥 泉 信 早 川 智 明 (53年度) 栗 原 文 蔵 (54年度) 柿 沼 幹 夫 駒 宮 史 朗 本 間 岳 史 井 上 尚 明 太 田 和 夫 上 教 志 千 村 修 平 横 川 好 富 鈴 木 敏 昭 市 川 修 (同) 山 形 洋 一 (同) 曾 根 原 裕 明 (同) 宮 昌 之
---	---	--

2. 整理 (昭和58・59年度)

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 庶務経理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 整理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長 副 理 事 長 常 務 理 事 管 理 部 長 同 調 査 研 究 部 長 同 調 査 研 究 副 部 長 (兼 調査研究第五課長)	長 井 五 郎 岩 上 進 石 川 正 美 佐 野 長 二 (58年度) 小 宮 秀 男 (59年度) 関 野 栄 一 江 田 和 美 裾 田 啓 子 (58年度) 岡 野 美 智 子 (59年度) 本 庄 胡 人 福 田 浩 横 川 好 富 (58年度) 中 島 利 治 (59年度) 小 川 良 祐 鈴 木 敏 昭 (58年度) 黒 坂 禎 二 (59年度)
---	--	--

3. 協力者

大里郡花園町教育委員会、大里郡寄居町教育委員会、地元区長及び地元住民

II 地理的環境と周辺遺跡

北塚屋遺跡は秩父鉄道小前田駅の南西1kmの荒川左岸に位置する。現在は荒川が寄居市街を脱けて巨曲する立ヶ瀬対岸の攻撃面にあたり、遺跡直下は比高差15m程の崖面を経て荒川流路に至る。周辺は往時同河川が形成した荒川扇状地の扇頂下に相当し、北東に広げられた巨大な翼は、南端を東流する現流路によって左岸の櫛状台地と右岸の江南台地とに画されている。

扇状地を侵蝕して形づくられた河岸段丘は、寄居鉢形段丘と称され、形質差により六面に分類されている(堀口1983)。本遺跡は櫛状台地南縁の段丘低位面に相当する寄居I面に立地する。

周辺の縄文時代遺跡は、扇状・段丘地形の縁部に沿って分布している。これらを立地形の観点より見れば、大きく四つの遺跡群として分離できる。すなわち、①上武山地麓部の遺跡群、②荒川左岸低位段丘上の遺跡群、③荒川旧流路を拠点とする遺跡群、④荒川右岸の中段段丘面にあたる江南



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/50,000)

1. 北塚屋遺跡 2. 塚屋遺跡 3. 小前田古墳群 4. 金蔵遺跡(中) 5. 岩崎遺跡(前・中) 6. 前耕地遺跡(前・中)
7. 中島遺跡(不詳) 8. 萩和田遺跡(中) 9. 水川台遺跡(中) 10. 薬師台遺跡(前・中) 11. 八幡台遺跡(中)
12. 愛宕山東遺跡(中・後) 13. 東遺跡(中・後) 14. 上の原遺跡(早・中) 15. 甘粕原遺跡(早・前・中)
16. ゴシン遺跡(早・前・中) 17. 大塚遺跡(中・後) 18. 露梨子遺跡(中・後) 19. 西岸谷二遺跡(前)
20. 西岸谷遺跡(中) 21. 町田耕地遺跡(後) 22. 羽毛田遺跡(後) 23・24. 櫛屋遺跡(中・後・晩)
25. 日向遺跡(前・中) 25. 上郷西遺跡(前) 27. 上郷A遺跡(不詳) 28. むじな塚遺跡(中) 29. 東原遺跡(後)
30. 昌国寺遺跡(後) 31. 常楽寺南遺跡(後) 32. 南側上町遺跡(中) 33. 宮の輪遺跡(中) 34. 伊勢原遺跡(中)
35. 庚申塚遺跡(中・後) 36. 上南原遺跡(前) 37. 前耕地遺跡(前・中) 38. 下南原遺跡(中)
39. 宮台遺跡(中・後) 40. 東大塚遺跡(中) 41. 西上遺跡(中) 42. 宮林遺跡(草創・早・前・中)

面に立地する遺跡群の四群である。これらのうち、①・③は小規模な遺跡が多く分布も散漫である。既調査の遺跡では、草創期より後期の遺物を検出した宮林遺跡（宮井1984）がある。

注目すべきは②・④に見る現荒川両岸での対称性である。

②では、本遺跡をはじめとして、諸磯 a・b 期の住居跡 22 軒を検出した塚屋遺跡（市川1983）、同期住居跡 11 軒を調査した上南原遺跡（市川1982）、加曾利 E Ⅱ 期を中心とした住居跡 25 軒を報告した台耕地遺跡（鈴木1983）等、前期中葉や中期中葉の大遺跡が営まれている。しかし、遺跡単位での分布は稀薄で、寄居町中小前田と花園町黒田の小群に分かつことができる。

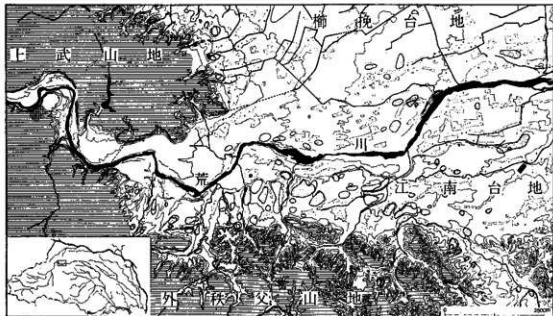
一方、④では小河川に開折された独立状台地に密集して遺跡が確認されている。だが、分布域は広いものの、既調査の遺跡では単一期においての遺構分布規模で対岸に勝るものなく、加曾利 E Ⅱ 期の住居跡 11 軒を検出した牛無具利遺跡（寄居町1984）が目立つ程度である。

また、④の崖下には②と同じ低位段丘が形成されているが、散布地 1 箇所を見るのみで、対岸や崖上と好対称をなしている。

これら遺跡群の設営期は中期中葉が突出しており、①から④の全群で見出され、なかでも加曾利 E Ⅱ 期が主体となっている。これに次ぐのが諸磯 a・b 期の遺跡で、②・④を主な分布域としている。また、黒浜期の遺跡も多く検出されているが、甘粕原遺跡（並木 1978）、南大塚遺跡（高木 1982）をはじめとして、主たる分布は④に限られている。

このような分布の粗密、遺跡規模の大小、そして段丘面選択と立地形の多様性は、それぞれの遺跡、あるいは集合体としての遺跡群が有する性格の一端を表わしているといえるだろう。寄居、花園町に展開する縄文の軌跡は、その変化に富む類型を媒介として、超時適地性と限時行動圏に関する多くの課題を我々に提示している。

なお、『塚屋・北塚屋』においても同題の記述を掲げてある。合わせ参照されたい。（黒坂）



第2図 扇状地形と周辺の縄文遺跡 (1/100,000)

Ⅲ 調査概要

1. 遺跡概観

a 地区設定と層序

今回の報告対象となるのは幅員25m、路線長325mと橋梁接続道路を合わせた約11,200m²である。東西に長い調査区を包括するため、平面直角座標第K系に測る大基準点を5、同小基準点を14設定した。さらに、東西50m、南北10m間隔を基本とするこれら遺跡内基準点を分割することにより、10×10mの基本グリッドとした。このグリッド列を、北東より西方向に数字、南方向にアルファベット順で呼称し、各グリッドを規定した。本書ではアルファベットを先行させて表現している。

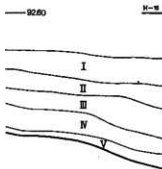
調査は各グリッドを最小単位として行ったが、進行上、地区名称を用いている。路線の東西を既設道路によって分割し、西よりA・B・C区と表わしたものであるが、B区の橋梁接続部に関しては南区と命名し、適宜B区と分離して扱った。

調査区内の土層は路線長を反映し、様々な変化を見せている。各地点に共通するのが段丘地形が多い礫の包含である。その含量は、やはり地点によって異なるが、A区東側のB～E-19・20では表土削除の段階で砂礫層が帯状に露頭していた。砂礫層とその周辺は乾燥の速い黒褐色土で覆われており、B区東端の住居跡集中地点では遺構確認面にこの層が広がり、遺構検出を妨げられた。

これら土質に主因を求むるべきか、縄文時代住居跡内の炉跡に残された焼土は極めて少量で、独立層の広がりとして把握し得たのは第40号住居跡の埋燬部のみである。また、遺物、特に土器の風化著しく、本来展開していたであろう文様が消失に等しい状態と化した破片が多い。

第3図は砂礫の稀薄な南区H-15東壁の土層断面図である。A・B区においても、層厚を減ずるものの、同様な層序を確認している。30cm程の表土下は遺物を多く包含する茶褐色土(第Ⅱ層)が堆積している。砂礫層露出地区周辺ではこれが黒褐色化する。直下の第Ⅲ層が主たる遺構確認面となった層で、明黄褐色粒子を多く含む明褐色土層がこれにあたる。しかし、確認面が同質土で占められていたわけではなく、第Ⅳ層(黒褐色粘質土)や第Ⅴ層(黄褐色粘質土)下に堆積する砂礫・黒褐色土層の上昇が対象地内の至るところに見られ、小規模なものでは数m単位で浮沈が繰返されている。また、中央土壌群の確認面は、第Ⅲ層と同色ながらも砂質化著しかった。

遺構確認は黒色や黒褐色土を目安として行ったが、一度これが乾燥すれば周囲との区別が困難となり、降雨を待たねばならなかった。また、覆土判別し難く遺物分布図作成途上で住居跡の判定を下したものの、炉辺石の露出や柱穴の確認によって住居跡の存在を確認したのも等もある。こうして完掘した住居跡は、床や壁面に多くの砂礫が露出しており、往時の人々が劣悪な環境をおしてこの地に居を構えた動機に興味を抱かざるを得ない。



第3図 基本層序 (1/40)

b 遺構と遺物の概要

今回報告の対象区では住居跡42軒、土壇249基、集石36基を検出した。これらは全て縄文時代中期に造営されたものである。既報告のC区を含め、北塚屋遺跡では住居跡44軒、土壇253基、集石36基の中期遺構を調査したこととなる。C区を含めた住居跡造営期の内訳は、藤内～戸尻期11軒、加曾利EⅠ期10軒、同EⅡ期16軒、同EⅢ期1軒、判定不能6軒となった。

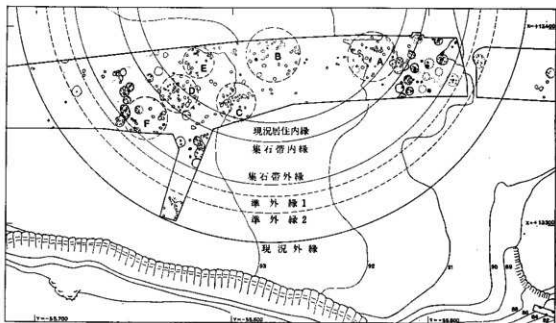
住居跡群の分布は、B区東端よりC区西端と、南区よりB区西端を経てA区東端に至る地区との二群に分かれており、中央には土壇群が展開している。また、昭和54年度にはB区南側を寄居町教育委員会が調査し、同期の住居跡を2軒検出している（埼玉県教育委員会1979）。これらを勘案すれば、路線が環状集落の南部を東西に貫いたと解するのが妥当であろう。

第4図は遺構配置をもとに環状集落を想定し、遺構分布概念線を加えたものである。多少の縮小もあろうが、路線内に現れた住居跡二大群は100m以上隔っており、占地の観点よりすれば、かなり大規模な集落跡であると判定して誤りはあるまい。なお、周辺地を含めた立地地形は約1.5%東傾する緩斜面であり、未掘地、特に北方での集落展開を歪める地形的要因はない。

第4図に示す環径により現景観としての集落規模を推定すれば、住居跡帯内線径130m程の大規模占地となる。同外線については三線を示した。1は確認住居跡44軒の約82%、2は89%、現況外線は98%を包括する。また最後者は全遺構に対しても約98%を包み込んでいる。論議は多くあろうが、ここでは最前者を住居跡帯外線、最後者を集落外線を指示する概念線と認めておく。

同心円概念線による規定は集石にも通ずる。図内スクリーン地区は既掘地における集石集中帯である。このスクリーン部内に収まる集石数は検出36基の83%にあたり、その内・外線は住居跡帯と完全重複する。

土壇に関しては、同心円による傾向を見出すことができない。しかし、敷地点への平面集中化傾



第4図 検出遺構の分布概念図 (1/2,000)

向があるため、それらを便宜的な正円で囲い、東よりA～F群とした。後述するが、これら土壌群のうち、いくつかは主体期の継続期間を認め得るものである。また、B群では隣接土壌で垂節を検出した。

遺構平面形態は多くが円を基調としている。住居跡ではここに小穴4～6本を穿ち主柱とするのが一般的である。炉跡は石囲埋設、石囲、埋設の三態が多い。しかし、床面に何ら小穴の痕跡を残さないもの等もあり、埋設設定の偏差を含め、既述三要素の組み合わせは類型を選ばない。一方、土壌、集石の断面形では「なべ底」が多く、集石型は浮石置と平石置の二態に大別できる傾向もある。

遺物は天箱総数で約350箱に及ぶ。殆どが集落設営朝に伴うもので、東接する塚屋諸磯集落の痕跡は僅か8点を見るのみである。他では後期の遺物が7点出土している。中期土器のうち、最も量比を得るのが加曾利EⅠ式である。次いで、同EⅡ式が続いており、勝坂系は住居軒数に比して遺物が少ない。また、段丘立地を反映して石器も莫大な量が出土した。

以上が今回報告の概要である。埼玉県北における大規模な中期集落の報告は花園町台耕地遺跡(鈴木1983)に次ぐものであり、想定される環状集落は県内でも屈指の規模を誇る遺跡となる。

なお、今回の報告に際し、調査時の遺構番号による整理作業に困難が生じた。そのため、旧番を破棄し、東側より新番を付すこととした。発掘調査時の遺構実測図や写真、整理作業時の遺物注記等は全て旧番を印している。資料実見の際は次頁の対照表を参照していただきたい。(黒坂)

2. 調査経過

本調査は、昭和53年9月1日より昭和54年9月11日を期日として行った。しかし、人員配置の都合上、塚屋遺跡の調査を先行させたため、本書関連地区の調査を開始したのは10月となつてからのことであつた。関連地区での作業は、便義上、A区、B区中央、B区東、南区、B区西の順で着手した。各地区での所要時間は2～4ヶ月であつたが、B区東のみは遺構確認に困難が伴つたために期間限度まで調査を継続した。各期での進行状況は以下のとおりである。

(53年10～12月) 10月2日、器材移動とともにA区表土削除を開始。同区遺構精査には11月下旬まで主力を注ぐ。次いでB区中央の遺構確認に移り、土壌群を検出。A区の遺構調査は12月中旬に完了。

(54年1～3月) B区中央土壌群の調査を継続、1月中旬よりはB区東遺構確認も同時に行う。土質・色の関係上、遺構確認に手間取り、約1ヶ月を要した。途中、B区中央土壌群の調査完了とともに南区、B区西に着手、遺構確認作業に専念する。1月下旬、確認作業が容易であつた南区より遺構精査に移行し、B区東、西の順で精査を始める。

(54年4～6月) 4月上旬には南区遺構調査を終え、B区東、西に分離して精査を続行。なかでも主力は前者に注ぎ、遺物全点分布図の作成とともに遺構精査を行う。

(54年7～9月) 7月下旬、B区西の調査を終了し、東側未確認遺構の再検出を行う。この間、既検出の遺構も並行して精査を続ける。再確認の結果、新たに数軒の住居跡や土壌を検出、即座に精査へと移行し、9月上旬に全ての調査を終了する。

(黒坂)

第1表 道橋番号新旧対照表

住居跡		土 壌											
新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番
1	B-26	1	B-4	49	B-225	97	B-75	145	B-249	193	B-150	241	A-12
2	B-2	2	B-1	50	B-226	98	B-76	146	B-248	194	B-157	242	B-238
3	B-3	3	B-2	51	B-66	99	B-79	147	B-136	195	B-158	243	B-244
4	B-25	4	B-3	52	B-41	100	B-123	148	B-134	196	B-159	244	A-3
5	B-4	5	B-7	53	B-40	101	B-93	149	B-133	197	B-161	245	A-4
6	B-24	6	B-6	54	B-44	102	B-254	150	B-135	198	B-221	246	A-1
7	B-1	7	B-5	55	B-269	103	B-253	151	B-137	199	B-217	247	A-2
8	B-6	8	B-222	56	B-65	104	B-252	152	B-119	200	B-164	248	A-13
9	B-23	9	B-31	57	B-53	105	B-109	153	B-120	201	B-163	249	A-14
10	B-5	10	B-14	58	B-54	106	B-111	154	B-121	202	B-160		
11	B-22	11	B-15	59	B-64	107	B-168	155	B-129	203	B-162		
12	B-21	12	B-10	60	B-52	108	B-215	156	B-122	204	B-202	1	B-171土
13	B-7	13	B-13	61	B-51	109	B-214	157	B-141	205	B-203	2	B-172土
14	B-8	14	B-18	62	B-67	110	B-87	158	B-144	206	B-204	3	B-177土
15	B-9	15	B-19	63	B-68	111	B-86	159	B-143	207	B-205	4	B-176土
16	B-10	16	B-16	64	B-229	112	B-85	160	B-146	208	B-207	5	B-175土
17	B-19	17	B-11	65	B-102	113	B-84	161	B-147	209	B-206	6	B-173土
18	B-20	18	B-12	66	B-47	114	B-82	162	B-148	210	B-208	7	B-174土
19	B-18	19	B-17	67	B-63	115	B-83	163	B-151	211	B-183	8	B-260土
20	南-1	20	B-227	68	B-55	116	B-78	164	B-154	212	B-180b	9	B-223土
21	南-2	21	B-9	69	B-58	117	B-80	165	B-155	213	B-180a	10	B-262土
22	南-3	22	B-21	70	B-56	118	B-230	166	B-156	214	B-170b	11	B-263土
23	南-8	23	B-232	71	B-57	119	B-89b	167	B-152	215	B-170a	12	B-261土
24	B-11	24	B-36	72	B-62	120	B-89a	168	B-153	216	B-182	13	B-264土
25	南-4	25	B-38	73	B-59	121	B-89c	169	B-211	217	B-246	14	B-259土
26	南-5	26	B-268	74	B-224	122	B-90a	170	B-179	218	B-245	15	B-258土
27	南-9	27	B-23	75	B-105	123	B-90b	171	B-165	219	B-138	16	B-257土
28	南-6	28	B-231	76	B-50	124	B-81	172	B-166	220	B-139	17	B-265土
29	南-7	29	B-24	77	B-48	125	B-92	173	B-178	221	B-140	18	B-273土
30	B-12	30	B-28	78	B-45	126	B-219	174	B-201	222	B-251	19	B-270土
31	B-13	31	B-30	79	B-46	127	B-220	175	B-200	223	B-218	20	B-272土
32	B-14	32	B-29	80	B-49	128	B-91	176	B-196	224	B-209	21	B-8土
33	B-16	33	B-228	81	B-108	129	B-115	177	B-197	225	B-169	22	B-266土
34	B-15	34	B-20	82	B-107	130	B-117	178	B-199	226	B-237	23	B-266土
35	B-17	35	B-22	83	B-106	131	B-113	179	B-198	227	B-236	24	B-267土
36	A-3	36	B-39	84	B-167	132	B-114	180	B-189	228	A-15	25	B-255土
37	A-4c	37	B-25	85	B-110	133	B-112	181	B-188	229	A-8	25	B-255土
38	A-4b	38	B-27	86	B-61	134	B-116	182	B-210	230	A-7	26	B-60土
39	A-4a	39	B-233	87	B-69	135	B-118	183	B-187	231	A-6	27	B-131土
40	A-2	40	B-234	88	B-99	136	B-142	184	B-185	232	A-5a	28	B-132土
41	A-1	41	B-37	89	B-70	137	B-145	185	B-191	233	A-5b	29	B-149土
42	A-5	42	B-32	90	B-124	138	B-271	186	B-186	234	A-16	30	B-181土
		43	B-26	91	B-100	139	B-213	187	B-184	235	A-9	31	B-241土
		44	B-33	92	B-235	140	B-212	188	B-247	236	B-250	32	B-242土
		45	B-34	93	B-71	141	B-195	189	B-130	237	A-10	33	B-239土
		49	B-35	94	B-72	142	B-192	190	B-128	238	B-240	34	A-1集
		47	B-43	95	B-74	143	B-183	191	B-127	239	A-17	35	A-2集
		48	B-42	96	B-77	144	B-216	192	B-126	240	A-11	36	A-3集

Ⅳ 検出遺構と出土遺物

1. 検出遺構

a. 住居跡

第1号住居跡(第6図)

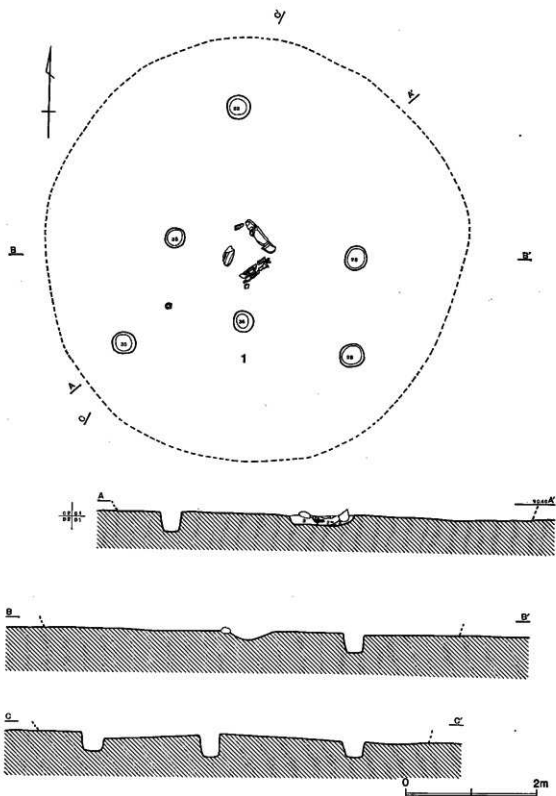
C-1・2グリッドで検出された。今回の調査区の東端に位置する。本住居跡が構築された面は黒色土層中であり、形態は不詳であった。わずかに確認された6本の柱穴から規模は約6.4mの径を有する円を基調とする住居跡であろうと推測される。炉址はほぼ中央部で方形の石囲炉が検出された。この石囲炉は長大な河原石で組まれており、南西部と北西部の一部を欠く。炉址内の堆積土は3層に分層できた。1層-黒褐色土。2層-焼土を含み、わずかに赤味を帯びる黒褐色土で土器片を含む。3層-粘性を帯び、乾くと堅緻に変ずる黒褐色土。本住居跡からは床面レベルで土器の小破片がわずかに出土してはいるが、時期を絞る決定的な資料は検出されていない。だが、石組炉の特徴を参考にすれば、おそらく加曾利EⅠ～EⅡ時期頃に営まれていた住居跡であると推定されよう。

第2号住居跡(第7図)

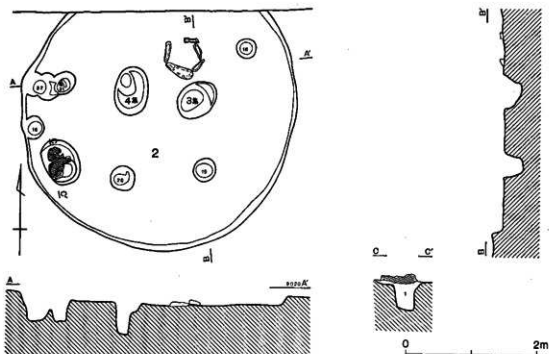
A-2グリッドに位置し、北側の一部は調査区外の為、未調査のまま残された。また、第3号、第4号の集石土壇とも重複している。本住居跡も黒色土層中から掘り込まれており、プランの確認は不安視された。だが、幸いにも床面は黄褐色土層中に構築され、壁も約16cmの高さまで検出された。プランは径4.35mの円で、柱穴は6本、炉址は中央より北に寄っている。6本の柱穴の内、主柱穴と思われるものは4本(おそらく未調査部分にもう1本あると思われる)であろう。西壁に接する2本はあたかも出入口部を思わせるように配置されているが詳細は不明。炉址は扁平長大な河原石で五角形に組まれているが、北側の一部を欠く。なお、南西の壁に寄って床面のレベルで粘土塊が検出され注意された。この粘土塊の下には性格不明のピットが掘られていたが、あるいは土器作りに関係を持つ住居内の遺構であったらうか。いずれにしろ、その決定的な証跡は検出されていない。本住居跡からの出土遺物は多く、てん箱で12箱を数える。実測図化された土器も30点に及び石器も29点検出された。これらの遺物から、この住居跡の所属時期は加曾利EⅠ古式期と判定される。

第3号住居跡(第8図)

B-2グリッドに位置する。黒色土層中から掘り込まれた本住居跡の壁はわずかの立ちあがり確認されたにすぎない。プランは長径5.90×短径5.14mの円で、北壁は第7号集石土壇に切られる。柱穴は不規則に12箇所が検出されたが、炉の状態から建て替えの可能性もあり、廃絶時での柱穴数ではない。炉は内側に胴下半部を欠く深鉢が埋設された方形石囲炉であり、扁平長大な河原石で組まれている。だが、この炉の東西断面を調べる為、一部を掘り下げたところ、炉の東辺にあたる炉石の下にNo.2(第54図3-1)の土器がNo.1(同図3-2)にほぼ接して検出された。精査の結果、



第6圖 第1号住居跡

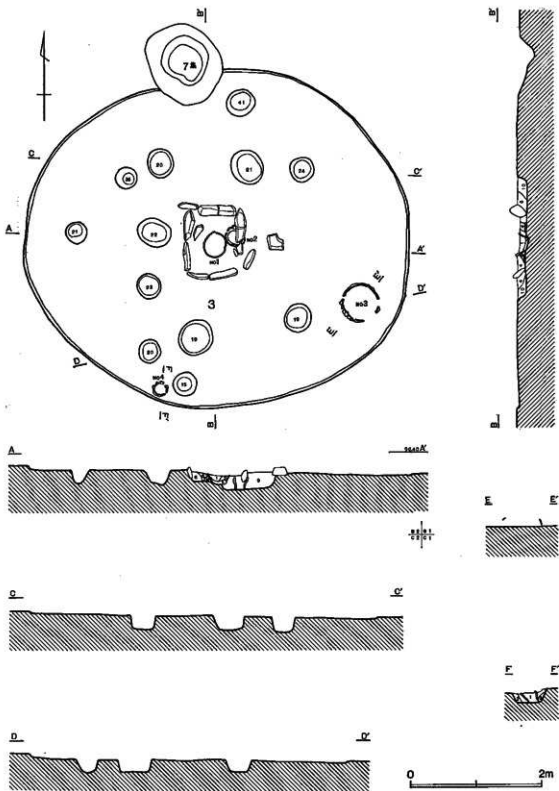


第7図 第2号住居跡

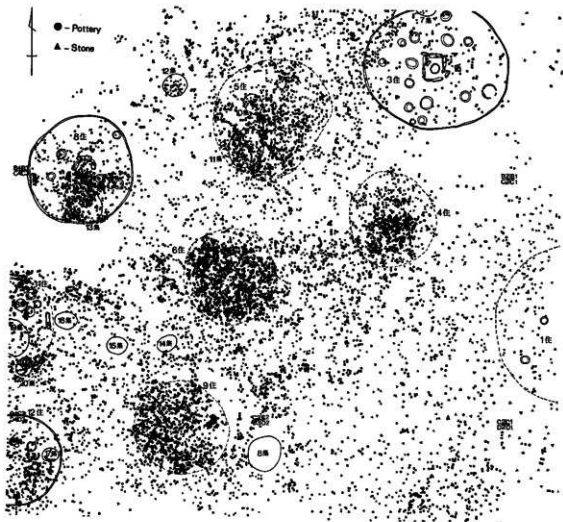
No. 2はNo. 1の炉以前に埋設された炉体土器であることが判明した。炉の層序は、以下の通りである。1層—黒褐色土、白砂が多く、炭化物、焼土粒を微量含む。2層—暗褐色土、炭化物、焼土粒を微量含む。3層—やや粘性のある黒色土で炭化物を含有。4層—黄褐色のブロックを含み、炭化物を少量含むが、全体に明るい黒褐色土、小砂粒子を多量に含む。5層—暗褐色土、ローム粒子、白砂を比較的多く含む。6層—焼土を多量に含有する赤褐色土。7層—黒褐色土、4層と類似するがやや暗い。8層—黒色土、3層と類似するが黒色味強い。9層—黒褐色土、4層に類似。10層—暗褐色土、5層と同。また、南東の壁際で検出されたNo. 3の土器は口縁のみしか残存していなかったが、明らかに床上に伏せられていた土器であり、原位置を保っていたと考えられた。一方、No. 4は床面下に口縁を上にして埋設されていた埋壺であり、南壁下に配されていた。なお、この埋壺は住居の中心へやや傾いて検出されている。土層は、1層—白砂を多量に含む黒色土、2層—白砂を多量に含む暗褐色土、3層—白砂を若干含む黒色土である。本住居跡からはNo. 1～No. 4の復元可能な土器が4個体出土したのみ（おそらくNo. 1、No. 3、No. 4はセットとして把握されよう）で他には殆んど検出されていない。いずれの土器も加曾利EⅡ中式期の所産であり、住居跡の時期も同時期と考えられる。

第4号住居跡（第9図）

C-2グリッドを中心に遺物の集中がみられたことから認定された住居跡であり、確証はない。黒色土中でもあり、炉体土器や石囲炉などの明確な構築物でも確認しない限り非常に検出は不可能に近い。だが、破線部の外に比べ、内側は遺物の検出レベルがさらに下位にまで下がっていた事実が確認されている。実測図化された土器が2点と石器が3点出土している。時期は加曾利EⅠ新式



第8图 第3号住居跡



第9図 B～D-1～4 遺物出土状況

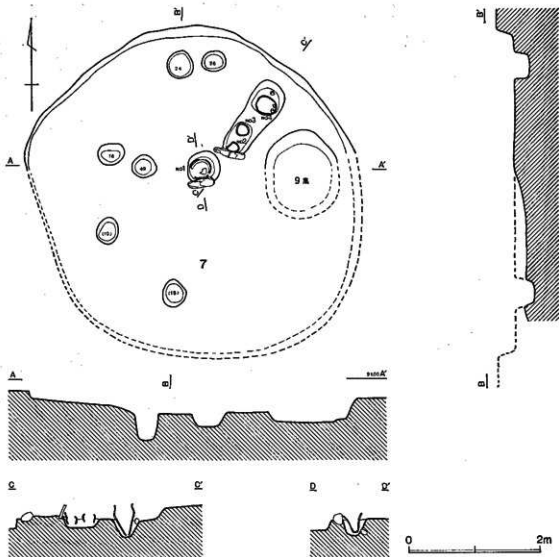
期に比定される。

第5号住居跡（第9図）

B-2・3グリッドを中心に遺物の集中がみられたが、黒色土層中の為にプラン等は全く確認できなかった。また、第10号及び第11号集石土壇が重複しているが、その先後関係は不詳であった。5個体の土器が実測図化された。石器も比較的多く打製石斧の19点をはじめ総数で32点出土している。時期は大旨加曾利EⅠ中式期である。

第6号住居跡（第9図）

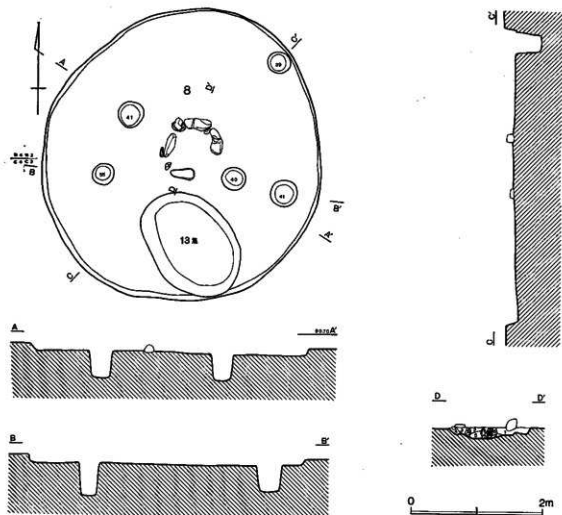
C-2・3グリッドを中心に著しい遺物の集中がみられた為に住居跡と想定した。だが、第4、第5号住居跡同様、黒色土中の為にプラン等は全く不明であった。6点の土器が実測図化されたが、加曾利EⅡ式期のものが主体を占めていた。出土石器は総数で103点である。



第10図 第7号住居跡

第7号住居跡（第10図）

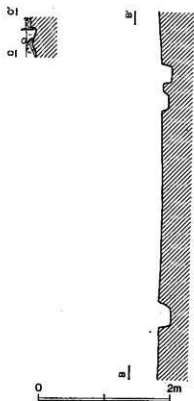
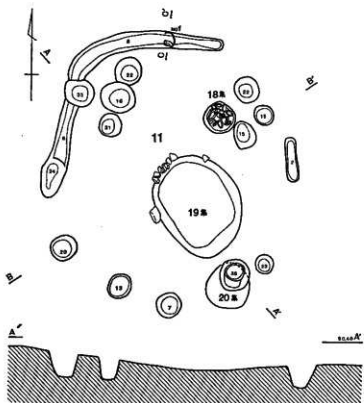
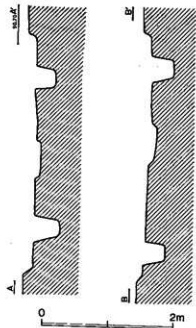
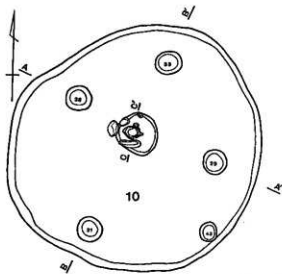
A—3グリッドで検出されたが、南半は攪乱で壁、床面は確認できなかった。プランは径5.1mのほぼ円形と推定される。確認された柱穴は6本。炉はほぼ住居の中央に位置し、内部に炉体土器の埋設された石囲炉である。だが、石囲の石は南側の一边をのぞき他は抜き去られたのか見当らなかった。あるいは、No.2の埋壘にもたれていた板状の石はその残骸かも知れない。炉址の北東には壁に向かって3個体の埋壘が一行に連なって発見された。いずれも正位で胴下部を欠く。また、この埋壘はそれぞれが口縁を床面より上に出していたと思われ、特にNo.4の長大な無文土器（第57図7—5）は約1/2が床上に突出していたことは明らかであろう。本住居跡の所属時期は炉体及び3個体の埋壘から、加曾利EⅡ中式期と推定される。なお、石器は51点検出されている。また、本住居跡は第9号集石土壌と重複し、同集石の後出が確認されている。



第11図 第8号住居跡

第8号住居跡 (第11図)

B・C-3グリッドで検出された。黒色土層中から掘り込まれており、遺物の集中が著しかった為に見えられた住居跡である。床面は黄褐色土を若干掘りくぼめてつくられている。プランは4.55×4.30mの円形であり、柱穴は5本のみ確認された。炉は内部に深鉢胴部上半を埋設した土器埋設方形石囲炉であり、東辺の石組が一部欠けている。炉址の土層説明を以下に記す。1層—黒色土、白砂、ローム類似の土粒、炭化物を若干含む。2層—黒褐色土、白砂を多量に含む。3層—黒色土、炭化物が極めて少量混じる。4層—黒褐色土、ローム類似の土粒が入る。5層—暗褐色土、砂粒、炭化物、焼土粒を含む。6層—暗褐色土、白砂を若干含む。7層—暗褐色土、焼土粒、炭化物を若干含む。8層—黒褐色土、炭化物を若干含む。住居の時期は、4点の実測図化された土器及び復元不可能であった炉体土器から加曾利E1新式期と判定される。なお、第13号集石土壇と南壁際で重複しているが、集石面が床面より上位にあることや、出土土器等から第13号集石土壇の方が新しい。石器は28点が出土している。



第12圖 第10号、第11号住居跡

第9号住居跡 (第9図)

C・D-3グリッドに位置し、遺物の集中から住居跡と想定された。だが、黒色土層中でもあり、炉址、柱穴等は全く検出不能であった。もともと焼土の残存しがたい遺跡であり、炉石、炉体土器が発見されても、焼土は見受けられない例が多く、もし、そうした炉石等が抜き去られていると炉址の検出は極めて困難となるのである。だが、いずれにしろ積極的な住居跡としての判定基準は見い出されていない。復元実測された土器は3点で、藤内Ⅱ式期に比定される。石器は63点が出土している。

第10号住居跡 (第12図)

B-3・4グリッドで検出された。本住居跡の確認面及び床面は礫層であり、その構築には多大な困難がともなったことと思われる。勿論、打製石斧による損削は不可能であったろう。プランは3.90×3.82mの円形であり、5本の柱穴が比較的規則的に配されている。炉址は土器埋設石囲炉であるが、石組は相当攪乱されており、南、西の2辺がかろうじて原位置を保っているにすぎない。おそらく方形の石囲炉であろう。6点の土器が実測図化されたが、本住居跡は炉体土器等から藤内Ⅱ式期に比定される。石器の出土は7点であった。

第11号住居跡 (第12図)

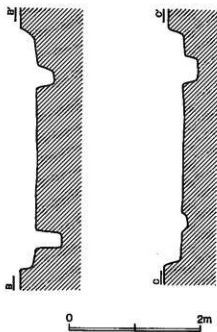
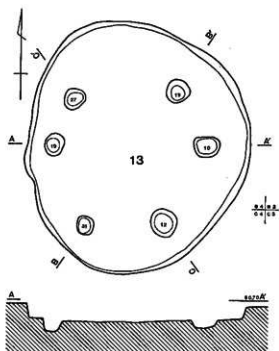
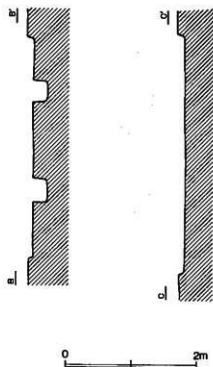
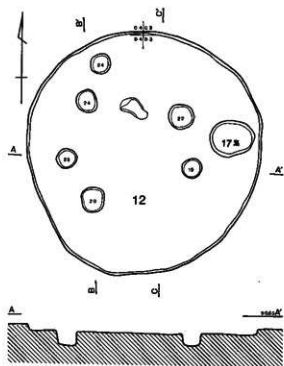
第12号住居跡の北方にあたり、C-3・4グリッドに位置する。遺物の集中がみられることから住居跡と想定された。黒色土層から黄褐色土層に達すると図のように柱穴状のピットが12本と北西部に壁溝と思われる溝が検出された。だが、それらは同時共存を意味しない。なぜならば、溝内出土の土器(第60図11-1)は阿玉台Ⅱ式であり、他の覆土出土土器とは時期的なへだたりがあるからである。あるいは1軒のみではないかも知れない。溝内出土土器の土層は、1層一粒子が細かく、ややしまりのある黒褐色土層、2層一粒子が粗く、しまりのない黒色土層、3層一細かなローム粒子の混じる暗黄褐色土層。なお、覆土出土の土器は計31個体復元実測された。時期は加曾利EⅠ中式期のものが主体を占める。出土石器は打製石斧76点、砥石2点等の総計177点であった。なお、第18号、第19号、第20号の各集石土壇と重複関係にある。

第12号住居跡 (第13図)

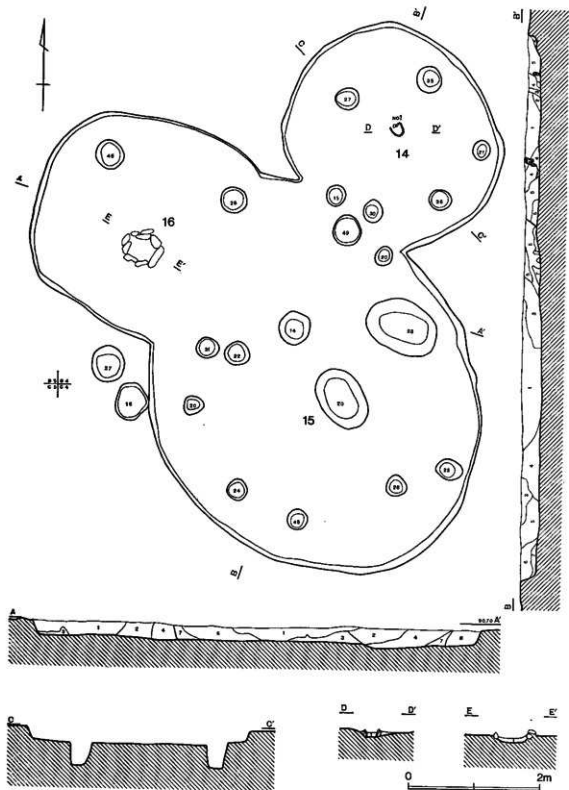
D-3・4グリッドに主に位置する。黒色土層中に存在する住居跡で、やはり遺物の集中出土から想定された。床面はかろうじて黄褐色土層中に達していた為に円形のプランが確認された。長径3.76×短径3.60mを測る。柱穴は6本。炉址は石囲炉に用いられたと思われる扁平長大な河原石が1個発見されただけで詳細は不明であった。覆土出土土器が2点実測図化された。時期は藤内Ⅱ式期に比定されよう。石器は31点出土している。また、住居の東壁に近い部分に第17号集石土壇が重複している。

第13号住居跡 (第13図)

B・C-4グリッドで検出された。第8号住居跡の西方にあたり、ここは遺構確認面が礫層であった。その為に黒色土層中の住居跡とは条件が異なり、遺物の集中度は無視しても遺構の発見は比較的容易であった。本住居跡のプランは3.85×3.40mのやや南北にのびた円を呈する。柱穴は6本が規則的に検出された。だが、礫層中の住居跡の通例ではあるが炉址(とりわけ焼土が発見される



第13图 第12号、第13号住居跡



第14图 第14~16号住居跡

ことは少ない)は見出されなかった。遺物は、土器、石器ともに出土しておらず、本住居跡の時期は不明である。

第14号住居跡 (第14図)

B-4 グリッドで検出された。プランは円形で長径3.44m×短径3.10mを測るが、南西部を第15号住居跡に切られている。どちらの住居跡も礫層中に掘り込まれ、床も礫層であり、床レベルはほぼ等しい。柱穴は6本確認された。炉址は土器埋設炉であり、胴部のみ深鉢(第65図14-3)が埋設されていた。炉の層序は、1層—白砂と若干の炭化物を含む暗褐色土、2層—小礫を含む黒褐色土、となっている。また、住居跡の土層断面は以下の通りである。1層—黒褐色土層、砂質に富み、土器片を含有。2層—黒褐色土層、砂質に富み、1層より明るい。3層—暗褐色土層、砂質に富む。4層—暗褐色土層、砂質に富み、3層より褐色味強い。5層—暗褐色土層、4層より明るく、砂質に富む。6層—茶褐色土層、砂質に富む。7層—暗黄褐色土層、砂利を多量に含む。土器は炉体土器をはじめとして、5点が復元実測された。石器は3点出土している。本住居跡の時期はおそらく勝坂終末と考えられる。

第15号住居跡 (第14図)

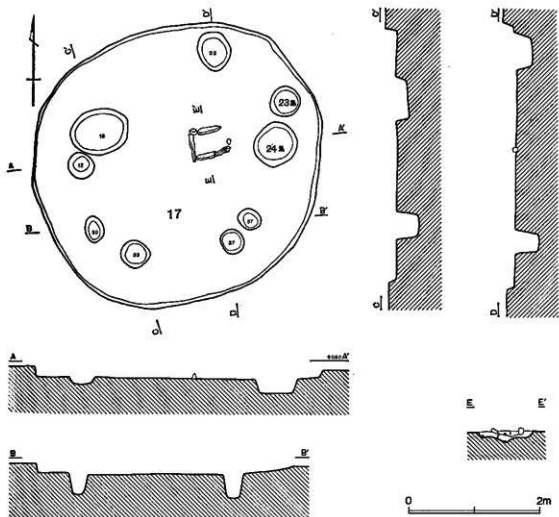
第14号住居跡の南に一部を重複して検出されており、B・C-4 グリッドに位置する。さらに本住居跡は北東部で第16号住居跡を切っている。プランは南東—北西を長軸とする楕円形を呈しており、6.0m×4.91mを測る。柱穴は10本検出されている。炉址は不明。だが、おそらく住居の中央部にある凹みが炉址であろうと推定している。何故なら、本住居跡のように礫層中の住居では、石組や土器埋設などの証拠がなければ焼土は全く流失しており、炉址の判定は不可能に近いからである。第14号住居跡の土器埋設炉、第16号住居跡の石囲炉においても焼土は全く検出されていない。なお、本住居跡の土層は次の通りである。1層—黒色土層、砂質に富む。2層—黒色土層、砂質に富み、5層より黒味強い。3層—黒褐色土層、礫を含み、砂質に富む。4層—黒色土層、砂質に富み、礫を多量に含む。5層—暗黄褐色土層、径5~1cmの礫を含む砂利層。6層—黒褐色土層、黄褐色粒子を含む。7層—黄褐色土層、砂質に富む。8層—黄褐色土層、礫を多量に含む。復元実測された土器は8点あり、本住居跡の時期は加曾利EⅡ古式期と判定される。石器は比較的多く、29点出土している。

第16号住居跡 (第14図)

B-4・5 グリッドに位置し、住居の南東部を第15号住居跡に切られている。プランは隅丸方形状を呈しており、3.5m×3.3mを測る。柱穴は北東と北西部のコーナーにそれぞれ検出されたが、他は不明であった。炉は住居中央部よりやや南西に寄って検出された。9個の河原石を組み合わせて円形に構築した、いわゆる円形石囲炉である。礫層中の住居の通例で炉内の土層には焼土が見い出されず、小礫を含む暗褐色土であった。焼土は流失してしまったのであろう。本住居跡からは6点の土器が復元実測された。勝坂終末に時期が比定される。石器は25点出土している。

第17号住居跡 (第15図)

黒色土層中から掘り込まれた住居跡でC・D-4 グリッドに位置する。プランは円で4.53×4.13mを測る。柱穴は6本のみ確認されている。炉址は中央よりやや北東に寄って検出された。方形石

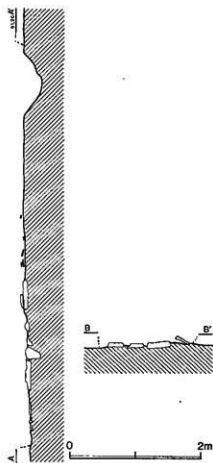
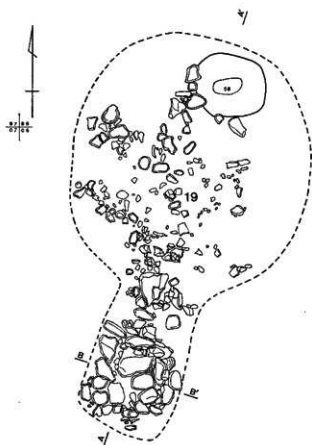
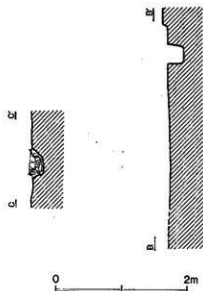
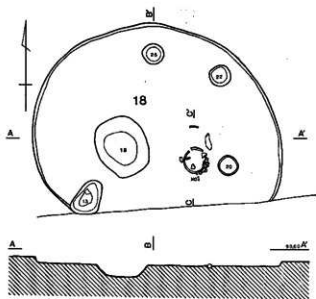


第15図 第17号住居跡

囲炉である。長大で扁平な河原石によって組まれるが、東辺のみ欠損する。炉址内の土層は、1層—黒褐色土層、わずかに炭化物粒子及び焼けた細砂利を含む、2層—1層より黒色味がやや強い黒褐色土層で、土器片を若干含む、というように2層に分層されたが、焼土は検出されなかった。覆土内出土土器は多く、復元実測された土器は16点を数える。出土石器は26点である。以上から、本住居跡の時期は加曾利E1中式期と判定される。なお、本住居跡は第23号、第24号の両集石土塚によって床面を切られている。

第18号住居跡 (第16図)

第17号住居跡の南にすぐ隣接しており、D-4グリッドに位置する。プランは円であるが、南側の一部は調査区外の為、未調査となっている。規模は3.90×3.40mである。現状では柱穴は4本検出されている。炉址は土器埋設炉であり、中央よりやや東寄りに設けられている。炉址の土層は、1層—黄褐色味の強い黒褐色土層、2層—全体に明るい、1層より暗い黒褐色土層で、炭化物、白砂粒を含有する、3層—2層よりやや暗いが他は同じ黒褐色土層で、土器片の含有がある、4層



第16图 第18号、第19号住居跡

一黒褐色土層、黄褐色土ブロックと黒褐色土との混合層、やや軟質で白砂粒含有する、5層—黒色土層、黒色土ブロックと黄褐色土粒との混合層、土器片粒、白砂粒含有、6層—黒褐色土層だが、全体に明るい、白砂粒含有、7層—黒褐色土層で全体に暗い、白砂粒含有、土器片微量含有、となっている。また、炉址の西方には0.92×0.77mで、深さ0.18mのピットが検出されている。本住居跡の時期は炉体土器（第70図18—1）から加曾利EⅡ古式期と比定される。なお、石器は18点出土している。

第19号住居跡（第16図）

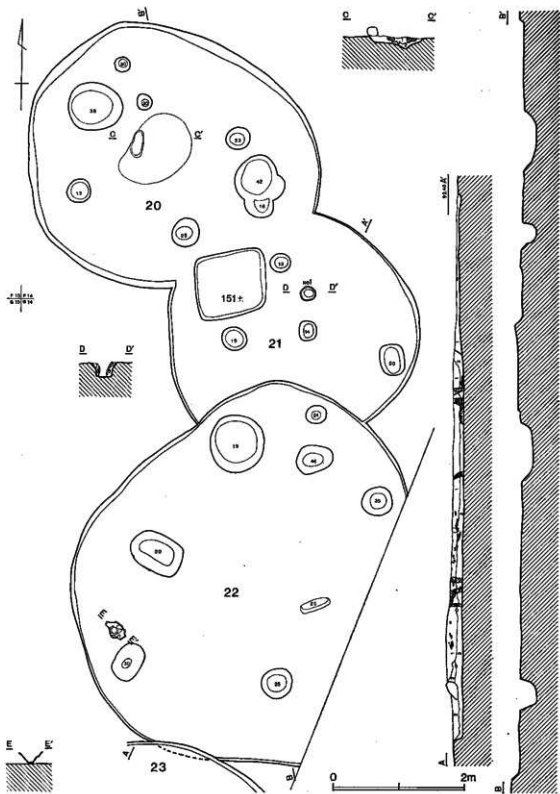
D—10グリッドで検出された。これまでの住居跡群よりも西方に離れて一軒のみ存在する。つまり、北塚屋遺跡が環状集落であったとの前提で言えば、他の住居跡群にくらべ、比較的内側に離れてポツンと存在していたことにならう。プランは柄鏡形を呈し、張り出しを南に持つ。床面には、緑泥片岩による扁平な平石が敷かれていたようだが、攪乱も激しく、原位置を保っていたものは少ない。張り出し部は比較的遺存状態が良好であった。規模は6.15×3.15mである。柱穴、炉址等は検出しえなかった。敷石面から、つぶれた深鉢（第71図19—1）の出土があったのみである。本住居跡の時期は、その土器から加曾利EⅢ式期に比定された。なお、本住居跡は黄褐色を呈する砂質の土層上に構築されていた。

第20号住居跡（第17図）

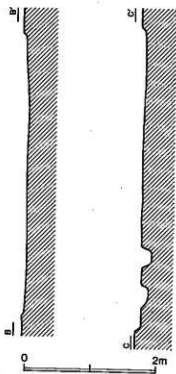
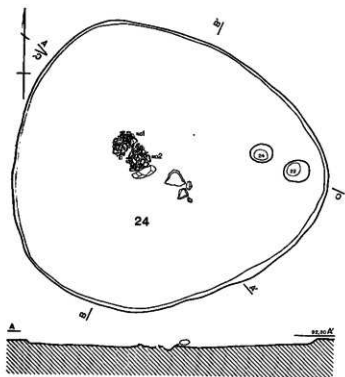
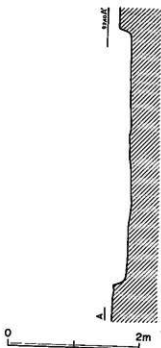
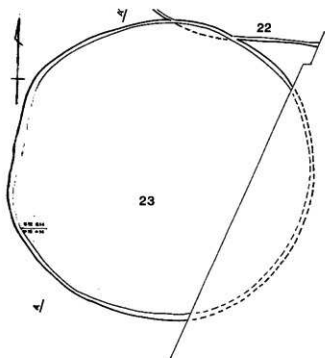
F—14グリッドで検出された。南東部は第21号住居跡を切っている。プランは楕円形で4.62×3.98m、柱穴は8本検出されているが、不規則でもあり、必ずしも全てが本住居跡に伴う柱穴とは言えないかも知れない。炉址はほぼ中央部にあり、石囲炉を構成していた1個の炉石のみが遺存していた。おそらく方形石囲炉の西辺のものであろう。炉址の土層は、1層—黒色土層で炭化物、土器片を含む、2層—褐色土層、砂質土であるがしまりは良好、炭化物等はあまり含まれない。3層—黄褐色砂質土層、地山の黄色砂質土層が混入、となっていた。なお、本住居跡からは時期比定が可能な土器の出土がなかった。だが、炉址の状態等から、おそらく加曾利EⅠ～EⅡ式期頃に営まれていた住居跡と思われる。

第21号住居跡（第17図）

F・G—14グリッドに位置し、北西部を第20号住居跡に、南部を第22号住居跡に切られている。さらに、第151号土壇も重複している為に、遺存状態は必ずしも良くない。プランは円形と推定され、3.85×3.65mの規模を有する、やや小型の住居跡である。柱穴は4本検出されている。だが、第22号住居跡の最北に位置する柱穴は、おそらく本住居跡に伴うものであろう。炉址は土器埋設炉であった。その層位は、1層—褐色土層、砂質を帯びており、しまりがいい、2層—黄褐色土層、砂質を非常に帯びて、しまりがいい、黒色の粒子が混入している、である。なお、本住居跡は、遺構確認面から床までが浅く、覆土は1層しか確認されなかった。1層—茶褐色土層、粒子粗くしまりのない層であり、土器片を含む。石器は1点出土している。本住居跡の時期は炉体土器（第71図21—1）より藤内Ⅱ式期と考えられる。



第17图 第20~22号住居跡



第18圖 第23号、第24号住居跡

第22号住居跡 (第17図)

G-14グリッドで検出された。北側は第21号住居跡を切り、南壁部はわずかではあるが、第23号住居跡に重なっていた。特に第23号住居跡との重複部分では、床面レベルの相違から、床を貼っていたのではないかと精査したが、その証拠は全く見出しえなかった。プランは楕円形で、規模は長軸5.90×短軸5.35mを測り、比較的大型の住居跡であった。柱穴は現状で6本検出されている。炉址は不明。なお、本住居跡の南西壁の近くで、床上に正位に置かれた深鉢の底部(第75図22-20)が検出されている。本住居跡からの出土土器は非常に多く、復元実測も26点を数えるに到った。時期は加曾利EⅠ古式期に比定される。出土石器は41点である。なお、本住居跡の土層断面は次の3層に分けられる。1層一暗褐色土層、粒子細かくしまりあり、土器片をやや多く含む。2層一茶褐色土層、粒子は細かいがしまりに欠ける。3層一褐色土層、1層に比べ、しまりに欠ける、土器片も1層に比べ少ない。

第23号住居跡 (第18図)

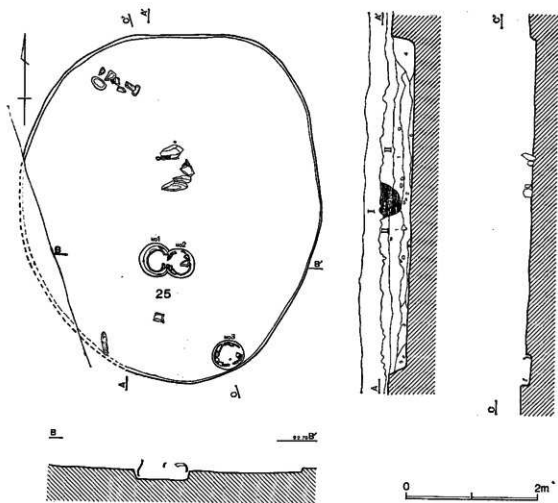
G・H-14・15グリッドに位置し、北端は第22号住居跡に重複され、また、東側は調査区外にのびている為に未調査のまま残された。プランは4.60×4.55mの円形を呈する。柱穴、炉址は明らかにしえなかった。時期は2点の覆土中出土土器から藤内Ⅰ式期段階と考えられる。石器は12点出土している。

第24号住居跡 (第18図)

E-15グリッドに位置する。北塚屋遺跡では住居跡群の最も内側に位置するといえ、土壌群の濃密に分布する部分へ入り込んでいる。プランはやや東側が張ってはいるが一応円形である。規模は長軸4.62×短軸4.33mである。柱穴は2本しか確認できなかった。炉址は土器埋設石囲炉であり、2個体の土器と石囲炉の一边を構成する長大な河原石が1個検出された。炉址出土の2個体はいずれも浅鉢の下半部であり無文、石器は3点出土している。本住居跡の時期は加曾利EⅠ新式期である。

第25号住居跡 (第19図)

F・G-15グリッドで検出された。プランは南北にややのびた楕円形を示し、長軸5.30×短軸4.70mを測る。住居の西側の一部は調査区外の為に未調査のまま残された。住居の掘り込み面は非常に確認が難しく、かろうじて事後処理的に土層断面で判断しえなすぎない。全体的に本住居跡を含む、第20号住居跡以降の北塚屋遺跡の西側に集中する住居跡群は、ローム層中に構築されていなかった為にその検出が非常に難しかったと言える。さて、本住居跡からは柱穴の発見がなかった。炉址は方形石囲炉であったが、西辺の河原石を欠く。内部には土器の埋設はない。炉址の南0.9mの位置には2個体の深鉢(第77図25-2・3)の胴上半部が逆位に並置されていたが、詳しくみればNo.2がNo.1を切っていたことが明らかである。床面下への埋設は浅い。さらに、南壁際にも深鉢の逆位埋設(同図25-4)があったが、同じく床面下への掘り込みは浅かった。以上の土器から本住居跡の時期は加曾利EⅠ新式期と考えられる。石器は6点出土している。土層説明は以下の通りである。Ⅰ層一灰褐色土層、表土。Ⅱ層一暗茶褐色土、粒子は粗いが、しまりは良好。1層一黒褐色土、粒子は粗くⅡ層に類似するが、本層には土器粒子、土器片などの遺物を包含している。2

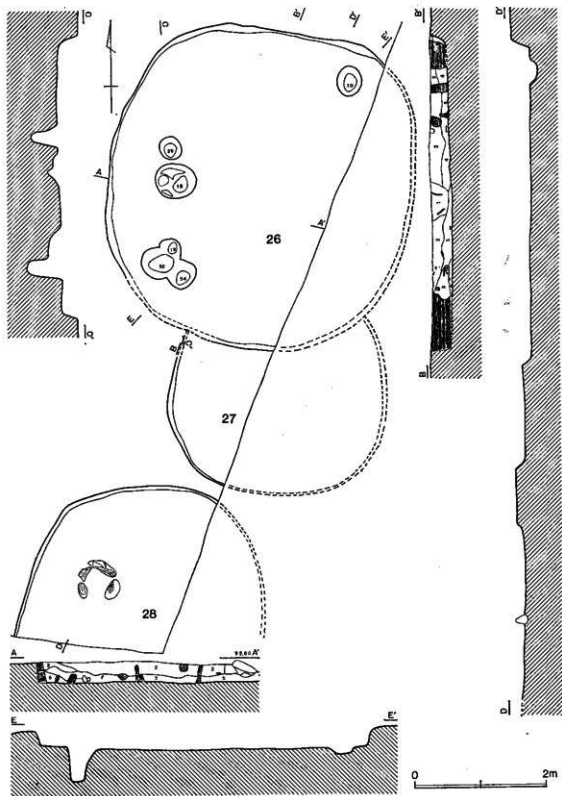


第19図 第25号住居跡

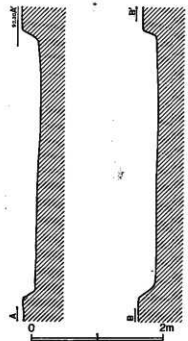
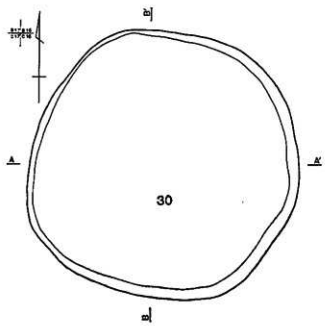
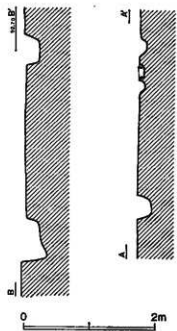
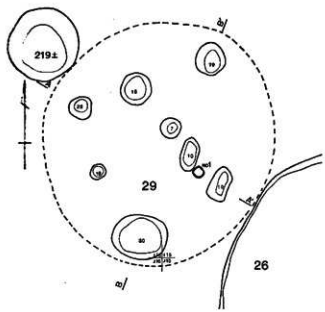
層一黒褐色土、粒子はやや細くなり赤色明度が増す、また土器粒子が混入している。3層一明茶褐色土、粒子細かく粘性、しまり強い。4層一暗褐色土、粘性、しまりが強く、土器片を含む。5層一暗褐色土、粘性、しまりが強く、土器片を含む、やや灰色を帯びる。6層一黒褐色土、2層に類似するが黒味が強い。

第26号住居跡 (第20図)

I・J-15グリッドで検出され、南は第27号住居跡と重複し、西は第29号住居跡と接する。東半は調査区外の為に未調査のまま残される。プランは円形で、 $4.90 \times 4.85\text{m}$ の規模が推定される。柱穴は不規則に見えられたのみにとどまる。炉址の検出はなかった。出土土器は6点の実測図化が可能であった。出土石器は34点である。なお、住居跡のほぼ中央部に当たる覆土中から単独埋壺が検出されている。時期は、以上から井戸尻式段階が想定される。覆土の土層説明は以下のごとくである。1層一明褐色土、単独埋壺の覆土。2層一明褐色土、土器片、炭化物を多量に含み、径1mm弱の細かい石の粒を比較的多く含んでいる。3層一茶褐色土、粒子は細かく、しまりは比較的良好、炭化物を含む。4層一褐色土、粒子はやや粗く、1層よりしまりがない、土器片、炭化物を1層に



第20圖 第26号~第28号住居跡



第21图 第29号、第30号住居跡

準じて含む。5層一暗茶褐色土、粒子粗くしまりが無い。6層一黄褐色土、最もしまりがある、土器片、炭化物を含む。

第27号住居跡（第20図）

J-15グリッドに位置する。第26号住居跡に北半部を切られ、東部も大半が調査区域外となっている為に、正確なプランは不明とせざるをえないが、検出部分から、本住居跡は円形を呈していたことが推定される。柱穴、炉址の検出はなく、遺物の出土も見られなかった。

第28号住居跡（第20図）

J-15グリッドで検出された。本遺跡で最南端に位置する住居跡であり、東半は調査区域外の為に未調査部分として残され、南半はすでに削平を受けてしまっていた。だが、おそらく円形プランを呈していたのであろう。床から遺構確認面までの壁の立ち上がりは浅く、柱穴も検出されなかった。炉址は石囲炉であり、南側の1枚は抜けているが、五角形を呈していたようである。各辺はそれぞれが1枚の長大な河原石である。本住居跡出土の土器は覆土中からの1点のみで、加曾利EⅡ新式に比定される。石器は7点出土している。

第29号住居跡（第21図）

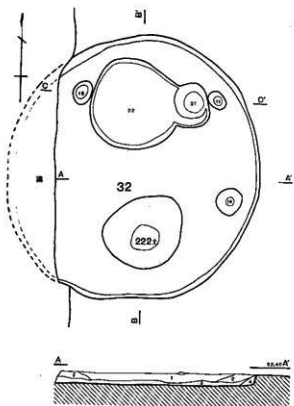
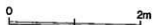
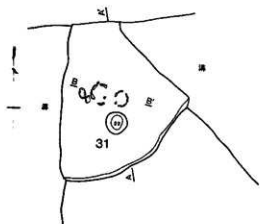
I・J-15・16グリッドに位置し、第26号住居跡、第219号土壇と隣接、あるいは重複していたと推測される住居跡で、壁の検出はなかった。ただ柱穴、炉体土器の存在から住居跡と判定されたのである。柱穴は、不規則ではあるが、6本確認されている。炉址は南東部に寄って検出された。炉体には深鉢の胴部（第80図29-5）が埋設されていた。この炉体土器のまわりの凹んでいる箇所は、石囲炉の痕跡と考えられる。本住居跡出土の土器は5個体が実測図化された。石器の出土はない。時期は井戸尻式期段階であろう。

第30号住居跡（第21図）

B・C-16グリッドで検出された。プランは円形で、長軸4.10×短軸4.07mを測る。壁の立ち上がりは約0.25mである。柱穴、炉址の検出はなかった。果たして通常の住居跡であろうか。時期は覆土出土の実測図化した3個体の土器から加曾利EⅠ中式期に比定される。石器は9点検出されている。

第31号住居跡（第22図）

B-17グリッドで検出された。第1号溝と第2号溝（両遺構は次回報告予定）に切られている為に発掘された部分は全体の約20%に過ぎない。規模は径4.8mの円形プランが推測される。壁の立ち上がりは0.16mであった。柱穴は1箇所のみ確認された。炉址は不明であったが、床上には河原石も見受けられた。また、床からわずかに浮いて2個体の土器が検出されている。石器は7点出土している。本住居跡の時期は加曾利EⅡ新式期である。なお、土層は以下の通りである。1層一茶褐色土、比較的しまりが良いが、径1mm程の砂を含んでいる。2層一暗褐色土、炭化物を含む。1層同様しまりがある。3層一褐色土、砂を含む、2層に比ししまりが無い。4層一褐色土、3層より砂を含む量が多い。5層一明褐色土、砂を4層よりも多く含み、最もしまりが無い。



第22图 第31号、第32号住居跡

第32号住居跡（第22図）

C-17グリッドに位置する。西側を第1号溝によって切られる。さらに、第222号土壌にも切られている。プランは円形が考えられ、径4.0mの規模と推定される。柱穴様のピットは4本検出されたが、炉址は見出しえなかった。住居の北寄りの位置にある大きく浅いピットは何なのかは不明である。なお、本住居跡の覆土からは比較的遺物の検出量は多く、7個の土器が復元実測された。石器は6点出土している。以上の資料から、本住居跡は藤内Ⅱ式段階に時期比定される。本住居跡の土層は以下の通りである。1層—暗褐色土、黒色土を混入し、黄褐色土粒を含む、全体にしまりがなく砂質を帯びる。2層—暗褐色土、1層より黄褐色土の混入多く明るい、他は同じ。3層—暗褐色土、1層より砂質味が強い。4層—茶褐色土、黄褐色土を多量に含む、堅緻である。

第33号住居跡（第23図）

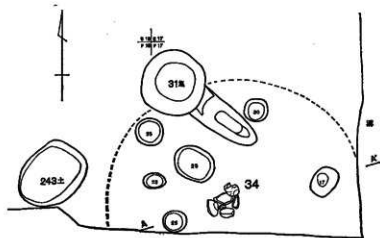
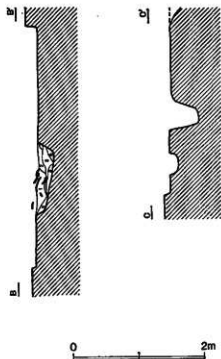
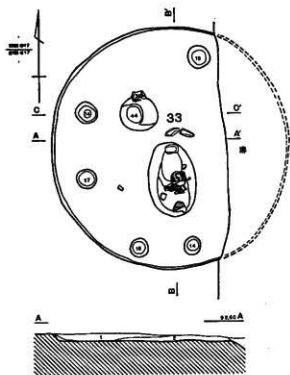
D・E-17グリッドで検出された。東側は第1号溝によって切られている。プランは円形を呈しており、直径は3.7mを測る。柱穴は現状で5本確認されている。炉址は石囲炉であったようだが形態は不詳。石囲炉の石材は比較的小振りであり、あるいは円形状を呈していたのかも知れない。炉址と隣接するかのよう南北に長いピットが炉址のすぐ南に検出されたが、ここからは横位の深鉢が出土している。このピットの土層を以下に記す。1層—黒褐色土、全体に暗い、軟質で粘性あり、火山灰、ローム粒と少量の炭化物を含む。2層—暗褐色土、軟質で粘性あり、全体に明るい。3層—暗褐色土、軟質で粘性あり、2層より明るい。4層—茶褐色土、軟質で粘性ある。5層—黒褐色土、1層より明るく、黄褐色土を多く含有、軟質で粘性ある。6層—黒褐色土、軟質でしまりなし。また、本住居跡の土層は、1層—暗褐色土、全体に黒味を帯び堅緻、火山灰粒を多量に、炭化物粒子を若干、そして土器片を含む。2層—暗褐色土、基本的には1層と同じだが、やや明るい。3層—黄褐色土、やや黒味を帯び砂質味がある、となっていた。なお、本住居跡からは他に石器が5点検出されている。時期は井戸尻式期と考えられる。

第34号住居跡（第23図）

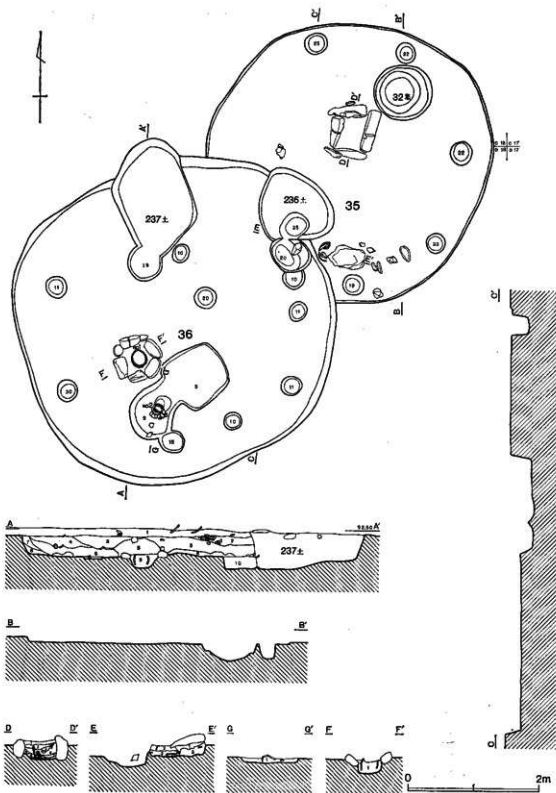
E・F-17・18グリッドで検出され、西は第1号溝で切れ、南半は未調査区に含まれていた。また、第31号集石土壌とも重複している。壁の立ちあがり等はつかめなかった為にプランは不明とせざるをえないが、6本の柱穴と炉址は確認されている。炉址は石囲炉であり、河原石が円形状に組まれている。さらに注意すべきは炉底にも石が敷かれている点であり、あたかも集石土壌の底を見るようである。なお、本住居跡からは残念ながら時期認定が可能な遺物は全く出土していない。

第35号住居跡（第24図）

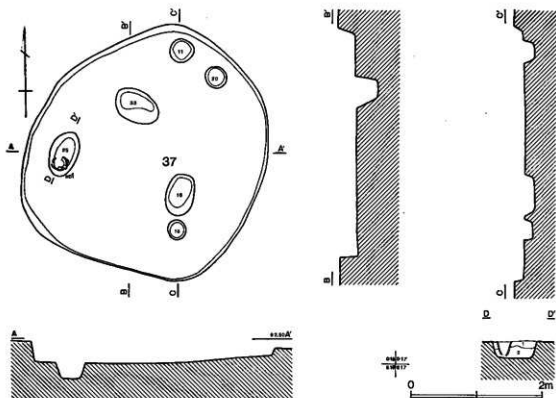
C・D-8グリッドで検出された。第36号住居跡、第236号土壌、第32号集石土壌と重複している。その先後関係は発掘時の所見では第236号土壌→第35号住居跡→第36号住居跡→第32号集石土壌と判断された。プランは円形で、長軸4.22×短軸4.20mを測る。柱穴は5本確認している。炉址は方形の石囲炉であり、長大な河原石によって築かれている。炉址の土層説明をここでしておく。1層—褐色土、焼土粒子を微量含む、土層は比較的粗いがしまりはある。2層—黒褐色土、1層よりしまりのない土層で炭化物を微量含む、細砂粒を含む。3層—茶褐色土、粒子は細かく、しまり



第23图 第33号、第34号住居跡



第24图 第35・36号住居跡

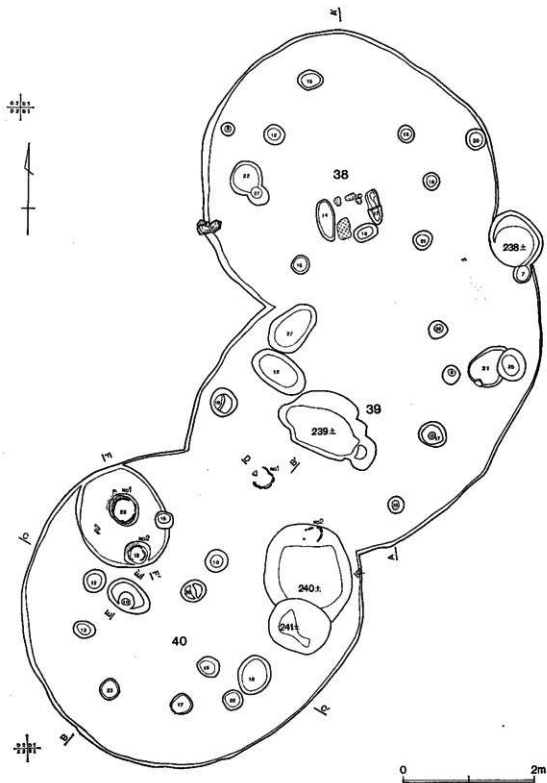


第25図 第37号住居跡

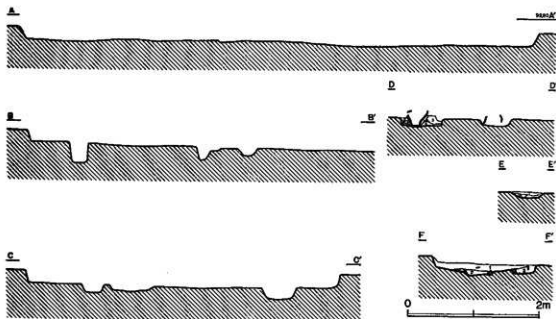
は2層よりある、焼土、炭化物粒子を微量含む、粒の細かい砂を含むが粘性ややある。4層—褐色土、粒子は細かいがしまりは無い。炭化物粒子を微量含む(量は3層より多い)、粘性あり。5層—茶褐色土、粒子は細かいがしまりは無い、炭化物粒子を微量含む、粘性あり。6層—暗赤褐色土、粒子は細かいが5層よりしまりは無い。焼土をブロック状に含む、粘性あり。7層—灰褐色土、粒子は細かいがしまりは無い、炭化物をブロック状に含む、粘性あり。8層—赤褐色土、粒子は細かいがしまりは最も無い、焼土を多量に含む、粘性あり。9層—黄褐色土、粒子は細かく7層同様しまりなし、粘性を有する。なお、本住居跡からは時期判別可能な土器が出土しておらず、時期に関しては不明とせざるをえない。

第36号住居跡 (第24図)

D—18グリッドで検出され、第35号住居跡、第236号土壌、第237号土壌と重複していた。その先後関係は、第236号土壌→第35号住居跡→第36号住居跡→第237号土壌となっていた。本住居跡のプランは円形で、径4.75mを測る。柱穴状のピットは12箇所検出されたがすべてが確実に本住居跡の主柱穴であるとは断定しえない。特に第236号土壌周辺のピットは第35号住居跡にともなうものもあると考えておいた方が良いでしょう。炉址はやや南西に寄って検出された。土器埋設の石囲炉であり、石囲炉の平面プランは円であった。また、炉址の南東に浅い不整形の凹みがあるが、そこからは風化の著しい逆位の深鉢が検出されている。本住居跡からの出土遺物は比較的多く、復元実測が可能だった土器も11個体を数えた。石器はかなり多く59点出土している。以上から本住居跡は加曾



第26图 第38~40号住居跡(1)



第27図 第38～40号住居跡(2)

利EⅡ新式期に時期比定される。なお、本住居跡の土層説明は以下に記す。1層—明褐色土、円礫径3cm程のものを多く含む。2層—暗褐色土、炭化物、土器片を少量含む。3層—黒褐色土、多量の炭化物粒子を含む、2、3層は1層に比べ、粒子が細かい。4層—暗褐色土、3層に比べやや黒味を帯びている。5層—黒褐色土、多量の炭化物、土器片を多く含む、黄色パミスを含む。6層—褐色土、炭化物粒子を含み、しまりが良い。7層—褐色土、やや黄色味を帯びる。8層—ローム新移層。9層—黒褐色土、炭化物、焼土粒をわずかに含む。10層—褐色土、7層と類似するが、やや黒色味を帯びる。

第37号住居跡（第25図）

D—18グリッドで検出された。住居跡の北壁は第36号住居跡と接し、南には第38号住居跡が近くに隣接している。プランは円形を呈し、規模は径3.8mを測る。柱穴は3本確認されたにとどまった。他にもピットはあるが遺憾ながら意味不明である。炉址は検出されなかった。ただ、住居跡の西壁際で埋甕が検出された。底部を欠く胴下半の絞紗状モチーフを有する深鉢であったが、風化が著しかった。埋甕部分の土層は、1層—暗茶褐色土であり、少量の炭化物粒子を含む。2層—黄褐色土、ロームブロックを含む、となっていた。なお、本住居跡の時期は加曾利EⅡ新式期に比定される。

第38号住居跡（第26・27図）

D・E—18グリッドで検出された。この住居跡から南へかけては次第に土質の為か遺構の確認には多大な困難を伴った。本住居跡は南を第39号住居跡と切り合いが、プランは径約4.5mの円形と推定される。柱穴状のピットは10本検出された。炉址は石囲炉であり、1枚の長大な河原石と炉石の抜かれた跡とから、形態は方形であったことが窺われる。本住居跡からは3個体の土器が復元実

測された。石器は11点出土している。以上から、本住居跡の営まれていた時期は加曾利EⅡ古式期に比定される。

第39号住居跡 (第26・27図)

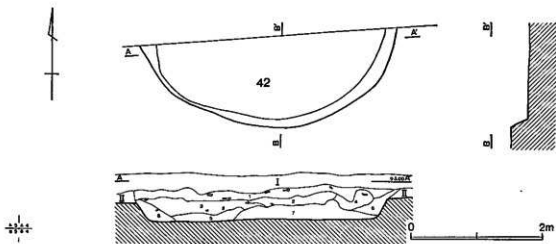
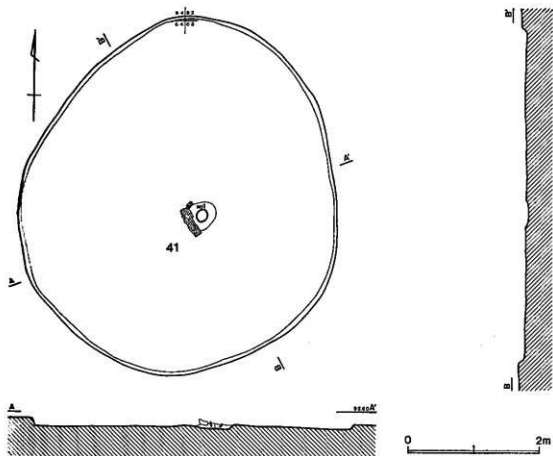
E-18グリッドで検出された。北を第38号住居跡、南を第40号住居跡と重複する。プランは楕円形で、長軸6.0×短軸4.17mの規模を有する。柱穴と考えられるピットは5本検出されているが、炉址は見えていない。第239号土壌とした部分が、あるいは炉址の痕跡であったかも知れないが、確実な決め手は見い出せなかった。なお、南西部には2個の埋壔が存在する。№1は正位、№2は逆位で検出された。埋壔部分の土層断面は以下のごとくである。1層—黄褐色土、炭化物を含む、砂粒子の混入が見られる。2層—黄褐色土、ロームと黒色土の混合土層である。3層—暗褐色土、粒子は細かく、しまりあり、砂粒子の混入もある。4層—黒色土、粒子は細かいが、3層に比べしまりはない。5層—暗黄褐色土、炭化物を含む、4層同様しまりはない。6層—褐色土、炭化物、砂粒子を含む、粒子は細かく、最もしまりがある。本住居跡からの出土土器は、埋壔の2個体を含めても3個体の復元実測が可能であったにすぎない。出土石器は6点である。本住居跡の時期は以上から加曾利EⅡ中式期と考えられる。なお、第40号住居跡との先後関係は精査にもかかわらず、不詳であった。

第40号住居跡 (第26・27図)

E・F-18グリッドに位置し、北東部を第39号住居跡と切り合う。プランは円形で、長軸5.1×短軸4.72mを測る。柱穴ピットは多く、不規則に11箇所検出された。炉址としては、炭化物を含むピットをそれに比定した。だが、住居の北西壁際に2個の埋壔が住居の中央から放射状に並んで検出されたが、その際、以下にも土層説明で触れるが、焼土粒子が検出されている。当初は、これは埋壔炉ではないかとの判断から、壁の再確認、及び外部の精査を繰り返したが、本プランで壁の立ち上がりが再確認された。炉址を否定する積極的な証拠があるわけではないが、本報告書ではこれを埋壔として扱っておく。炉址断面の土層説明。1層—黒褐色土、土器片、炭化物を含む、粒子は粗くしまりはない。2層—黄褐色土、粒子が細かいが、比較的しまりがない。埋壔部の土層説明は以下の通りである。1層—暗褐色土、少量の炭化物、焼土粒子を含む。2層—暗褐色土。3層—灰褐色土。本住居跡出土土器は4点が復元実測された。石器は48点出土している。以上から、本住居跡の時期は加曾利EⅡ中式期と考えられる。なお、第240号、第241号の2基の土壌とも重複関係にあるが、先後関係はつかめなかった。

第41号住居跡 (第28図)

D-20・21グリッドで検出された。この周辺は、遺構の確認面が礫層に変わってきており、なおかつ、遺物の散布もまばらになっている。本遺跡の西端に近い住居跡ということになる。プランは大略円形である。規模は長軸5.50×短軸4.88mを測る。柱穴は全く確認できなかった。炉址は中央よりやや南東に寄って検出された。土器を内部に埋設した、土器埋設石囲炉であった。炉石は片岩製の長大な石であり、おそらく形態は方形であったと推定される。炉址の土層は、1層—焼土ブロックを含む黒褐色土、となっていた。なお、本住居跡からは炉体土器である深鉢の胴部が検出されたにとどまる。石器は1点出土している。従って、本住居跡は加曾利EⅡ中式期に時期比定され



第28圖 第41号, 第42号住居跡

る。

第42号住居跡（第28図）

B-21グリッドで検出された、本遺跡の最西端の住居跡である。だが、約60%強は調査区域外に含まれる為に未調査のまま残された。調査した部分から本住居跡のプランを推定すると円となる。だが、柱穴、炉址は全く検出されていない。壁の立ち上がりは、確認面からは約30cmであったが、土層断面図の観察からは、約50cmまで確認された。ここで土層図の説明をしておこう。1層—灰褐色耕作土。1層—暗茶褐色土。1層—明褐色土、径2～5cmの礫が混入している。粒子は粗く、しまりはない、土器片（多い）、炭化物を含む。2層—黒褐色土、土器片を含む、粒子は粗く、しまりはない。径2cm前後の小石が混入している。3層—赤褐色土、土器片を含む、粒子は比較的細かく、2層に比べると小石の混入の度合いが少ない。4層—黒褐色土、粒子は粗く、しまりもない、径1～10cmまでの礫の混入が著しい。5層—暗茶褐色土、粒子の粗い土の中に径1～20cm程の礫の混入が見られる。6層—明茶褐色土、粒子は最も粗くしまりもない。7層—灰褐色砂礫層。8層—茶褐色土、径3cm前後の礫が少量みられる。3層に比し粒子は粗く、しまりもない。なお、本住居跡からは実測図化が可能な土器は1点も出土しなかったが、覆土出土の土器片から本住居跡の時期を推定すると加曾利E I 新式期と思われる。石器は1点出土している。

（鈴木）

第2表 住居跡一覧表

(単位[m])

番号	グリッド	規模	平面形態	炉形態	主軸方向	造営期	備考
1	C-1・2	(6.4)×(6.4)	不明	石囲	N-52°-E	不明	覆土認定
2	A-2	4.35×4.21	円	石囲	N-52°-E	加E I古(Na)	粘土塊 炉直復
3	B-2	5.90×5.14	円	石囲土器埋設	N-2°-E	加E II中(Va)	←7集
4	B・C-2	(4.0)×(3.6)	不明	—	不明	加E I新(Va)	認定
5	B-2・3	(4.9)×(4.9)	不明	—	不明	加E I中(Na)	認定
6	C-2・3	(4.0)×(3.8)	不明	—	不明	加E II古(Vb)	認定
7	A-3	5.10×(5.0)	円	石囲土器埋設	N-40°-E	加E II中(Va)	→9集
8	B・C-3	4.55×4.30	円	石囲土器埋設	(N-10°-E)	加E I新(Va)	→13集
9	C・D-3	(3.9)×(3.8)	不明	—	不明	藤内 I(IIb)	認定
10	B-3・4	3.90×3.82	円	石囲土器埋設	N-12°-W	藤内 I(IIb)	
11	C-3・4	(5.0)×(4.0)	不明	炉なし	N-17°-E	加E I中(Nb)	覆土認定
12	C・D-3・4	3.76×3.62	円	石囲	N-7°-E	藤内 I(IIb)	→17集
13	B・C-4	3.85×3.45	円	炉なし	(N)	不明	
14	B-4	3.44×(3.1)	円	土器埋設	N-10°-W	井戸尻(II)	→15住
15	B・C-4	(6.0)×4.91	楕円	炉なし	(N-20°-W)	加E II古(Vb)	←14-16住
16	B-4・5	(3.5)×3.36	隅丸方形	石囲	N-19°-E	井戸尻(II)	→15住
17	C・D-4	4.53×4.13	円	石囲	N-84°-E	加E I中(Nb)	→23-24集
18	D-4	3.90×(3.4)	円	土器埋設	(N-82°-W)	加E I古(Va)	
19	D-10	(6.2)×(3.2)	網鏡	炉なし	N-19°-E	加E N(VI)	敷石住居跡
20	F-14	4.62×3.98	楕円	石囲	N-66°-W	不明	覆土認定
21	F・G-14	3.85×(3.7)	円	炉なし	(N-2°-W)	藤内 I(IIb)	→22住
22	G-14	(5.9)×5.35	楕円	炉なし	(N-29°-E)	加E I古(Na)	←21住
23	G・H-14・15	(4.6)×(4.5)	円	炉なし	不明	藤内 I(IIa)	
24	E-15	4.62×4.33	円	石囲土器埋設	(N-37°-E)	加E I新(Va)	
25	F・G-15	5.30×(4.7)	楕円	石囲	N-17°-W	加E II新(Nb)	
26	I・J-15	4.90×(4.8)	円	炉なし	不明	井戸尻(II)	→単独埋没
27	J-15	不明	円	—	不明	不明	
28	J-15	不明	円	石囲	(N-58°-W)	加E II新(Nb)	
29	I・J-15・16	(3.9)×(3.6)	不明	石囲土器埋設	(N-66°-W)	井戸尻(II)	覆土認定
30	B・C-16	4.10×4.07	円	炉なし	不明	加E I中(Nb)	
31	B-17	不明	円	—	不明	加E II新(Nb)	
32	C-17	4.02×(4.0)	円	炉なし	(N)	藤内 I(IIb)	
33	D・E-17	3.70×(3.7)	円	石囲	N	井戸尻(II)	
34	E・F-17・18	(4.0)×(4.0)	不明	石囲	不明	不明	覆土認定
35	C・D-8	4.22×(4.2)	円	石囲	N-11°-E	不明	→32集
36	D-18	4.75×4.75	円	石囲土器埋設	(N-20°-W)	加E II新(Nb)	→237土
37	D-18	3.84×3.81	円	炉なし	不明	加E II新(Nb)	
38	D・E-18	(4.7)×4.35	円	石囲	N-9°-W	加E II古(Vb)	
39	E-18	(6.0)×4.17	楕円	炉なし	不明	加E II中(Va)	←240土
40	E・F-18	(5.1)×4.72	円	地床炉	(N-14°-W)	加E II中(Va)	
41	D-20・21	5.50×4.88	円	石囲土器埋設	(N-65°-E)	加E II中(Va)	
42	B-21	(4.5)×(4.2)	円	—	不明	加E I新(Va)	

b 土墳・集石

今報告では249基の住居と36基の集石を紹介する。個別の計測値や要素型は、頁数の関係上、全て一覧化した(第3～10表)。これに伴う不足を補うために、ここで概説を加えておく。

土 墳 (第30～46図)

分布には環状等、配置規制を断言できる明確な典型例がない。そして、土墳群面積の広さを反映してか、検出基数に比して重複が少ない。それでもなお、数地区において集中化傾向が現れ、第Ⅲ章ではこれをA～E群とした(第4図)。もとより、これらは時空的統括を意味する群別ではない。しかし、造営期大別や現況分布の点でいくつかの傾向が見出せた。

A群では勝坂期より加曾利EⅢ期までの各期の所産があるが、中央の空白部を境として、さらに北東群と南西群に分つことができる。両者を対象として空白部に面する端線を加えると、住居跡帯に開口する形となる。時期別の分布では加曾利EⅡ期の所産に拡散化傾向が窺える。

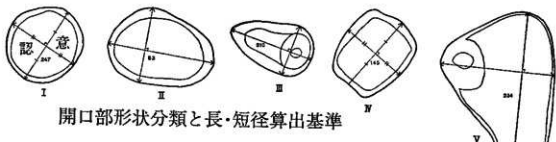
これに対し、B群は外縁が同円周上に位置しており、あたかも環状化規制の結果とも解釈できる配置関係を示している。これらのうち、時期判定可能であったものには勝坂期が最も多く、これは外縁でも同様であった。特筆すべきは中央に位置する第72・75・76号土墳である。三基は形態、長軸方向に近似性を有し、後二者では墳底直上より大珠が出土している。前二者が勝坂期の所産と判定できるなど、三者は近い時期に同一用途を念頭に並列配置化されたと推定できる。

一方、D群は、人形二体を主題化する土器が出土した第141号土墳をはじめとして勝坂期の土墳も数基重複するものの、F群東部と対面して加曾利EⅠ新よりEⅡ・Ⅲ期までの所産が広く分布している。また、C群は柙外西方よりの直線状分布を示しているが、これらのうち、時期判定可能であるものもD・F群のそれと近似する。三群に取囲まれた第24号住居跡の異釜を擁する特殊性より見ると、同地周辺の占地規制を彷彿させる。なお、D群柙よりははずれるが、住居跡群側の第197号土墳よりは加曾利EⅠ新期の良好な一括土器資料が出土している。

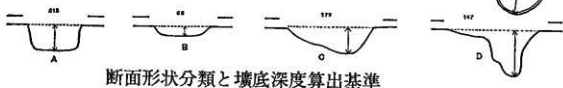
加えて、群別を逸したが、第228・247号土墳をはじめとする西方の一群は、加曾利EⅡ期を中心として造営期の近接する二土墳が対面し、さらにそれらが直線上に並ぶ。この延長上には勝坂期の一括土器を検出した第249号土墳があり、これも第248号土墳と接している。

土墳形態は平面五、断面四態で分類を行った(第29図)。開口部型のうち、Ⅰ・Ⅱの分離は長短径比1.1を目安として行い、Ⅲは西洋梨形、Ⅳは不定形を意図した。一方、断面型は、鍋底形A・Bの別を開口部長径と墳底深度比2.5を境界として行った。また、Cは片流れ若しくはV字、Dは有小穴を対象としている。第29図には上記分類模式図と要素別集計を示した。開口部型と断面型の相関ではⅡA・ⅡBが最も多く、群別においても変化ない。なお、今調査では所謂袋状土墳を検出してはいない。

多くの場合、形態、長軸方向と分布、造営期別の間に関連な有機的関連を見出すことができない。しかし、既述の如く、第72・75・76号土墳の近似には注意が必要であろう。同期かつ同形態、規模を呈するものに、第18・35・48・86・88号土墳がある。このうち、第18号土墳では粗製石匙を検出し、第48号土墳では用途を彷彿させる一握の骨片が出土している。また、第86号土墳では、第75号土墳と同様、挙大礫が多く覆土中に散乱していた。



開口部形状分類と長・短径算出基準



断面形状分類と壙底深度算出基準



集石断面分類

土壌形態相関関係

開口部形状	A	B	C	D	計
I	25 101	47 190	18 7.3	5 2.0	95 384
II	8 3.2	55 223	21 8.5	1 0.4	85 34.4
III	1 0.4	23 9.3	13 5.3	4 1.6	41 16.6
IV	1 0.4	12 4.9	4 1.6	2 0.8	19 7.7
V	2 0.8	2 0.8	2 0.8	1 0.4	7 2.8
計	37 14.9	139 56.3	58 23.5	13 5.2	247 100

同左 A群

開口部形状	A	B	C	D	計
I	7	12	1	0	20
II	0	10	1	0	11
III	1	1	0	0	2
IV	0	2	1	0	3
V	0	0	0	0	0
計	8	25	3	0	36

同左 B群

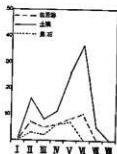
開口部形状	A	B	C	D	計
I	1	3	1	0	5
II	1	14	4	0	19
III	0	0	1	0	1
IV	0	2	2	0	4
V	0	0	0	0	0
計	2	19	8	0	29

同左 C群

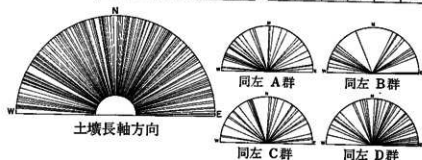
開口部形状	A	B	C	D	計
I	5	3	3	0	11
II	2	7	4	0	13
III	0	4	3	1	8
IV	0	0	1	0	1
V	0	0	1	0	1
計	7	14	12	1	34

同左 D群

開口部形状	A	B	C	D	計
I	5	6	4	2	17
II	1	5	3	0	9
III	0	6	5	3	14
IV	1	0	0	1	2
V	0	1	0	0	1
計	7	18	12	6	43



大棒での造営期



土壌長軸方向

第29図 土壌・集石の分類と要素別集計

覆土は、埋設期や土壌の性格を具現するものではなく、地山に影響された変質が唯一の傾向である。一般に、確認面においては茶から暗褐色系土を見ることが多く、下層ほど明度を増し、城底付近では黄褐色系土に移行する。城底深度に勝るものの中には中層で黒褐色化した後に同過程を辿るものがある。一方、土質は地山の影響を受けA群附近では砂質化著しい。これに対し、D群附近では小石や砂塊を多く含む土が専ら堆積していた。混入粒子は他に炭化物小粒が多く見られた。

出土遺物量は個別差著しく、土器の場合、多数の出土を見ても風化や小片が主因で時期判定に窮することも多い。目安程度になろうか、一覧表備考欄には土器出土破片数(接合後)を併載した。これらの造営期は新道並行期より加曾利EⅢ期までがあり、加曾利EⅡ期の基数が最も多い。しかし、時期判定可能であったものは47%に過ぎず、中には誤断を恐れずに細別化したものもある。そのため、一定時景観の復元には枷が負わされているのも事実であり、既述の傾向も判定不能土壌の造営期いかんでは改正を要することも附記しておく。

集石(第46~48図)

集石は全36基中の32基が住居跡帯に重複して造営されており、範外となるものが極端に少ない。結果として、住居跡との重複が多く、東方群内では特にその傾向が強い。造営期は判定可能23基のうち21基が加曾利EⅠ期までの所産である。しかし、第10・11号集石出土土器などは、重複する第5号住居跡のそれと接合し得る例も多い。従って、同期住居跡と重複するものは、土器混入による誤断を念頭に検討を加える必要がある。

形態分類では前出土城二態の他に集石型を加えた。aは城底の平石敷を特徴とする型であり、bは浮石型である。これを造営期大枠との相関で見たとした場合、勝坂期の所産にa型が多い傾向がある。また、分布域外の4基は全てb型であった。城内に集積された石は、a・bの別なく、多くが加熱されている。そして、検出困難な土質にもかかわらず、第4・8・10・11号集石では焼土の堆積も確認した。a型のものには集石教材に大型石器、土器大片を転用している例も多い。

なお、以下の一覧表備考欄に示した重複遺構との先後は、調査時に確認した関係であり、造営期別の基準と集石平均値、扁平率の算出基準は第V章に示した。また、第23・24号集石は、実測図面に不備があり紹介し得なかつたが、一部が土器敷となっている。(黒坂)

第3表 土壌一覧表(1)

(単位 m)

番号	グリッド	属群	長径	短径	深度	長軸方向	開口型	断面型	造営期	備考
1	A-3		1.06	0.80	0.16	N-75°-W	Ⅱ	B	V a	1
2	B-1		1.42	1.28	0.16	N-1°-E	I	C	Ⅱ	14
3	B-2		1.18	1.02	0.20	N-82°-E	I	B		
4	B-4		1.42	0.90	0.28	N-60°-W	Ⅱ	B	加曾利E	12
5	A・B-4	A	1.20	1.16	0.26	N-24°-W	I	B	V	4
6	B-4	A	1.32	1.14	0.34	N-53°-W	Ⅱ	B	加曾利E	12
7	B-4	A	1.30	(1.04)	0.34	N-80°-E	V	B	V b	26
8	A-4・5	A	(2.42)	1.1	0.18	N-41°-W	Ⅱ	B		
9	A-5	A	1.50	1.06	0.14	N-58°-W	I	B		
10	A-5	A	0.98	0.92	0.10	N-61°-E	I	B		

第4表 土壌一覽表(2)

(單位 m)

番号	グリッド	属群	長径	短径	深度	長軸方向	開口型	断面型	造営期	備考
11	A・B-5	A	0.82	0.78	0.16	N-40°-E	I	B	不明	1
12	A・B-4・5	A	1.30	1.10	0.36	N-41°-W	II	B		
13	A・B-5	A	0.90	0.86	0.38	N-17°-E	I	A	II a	1
14	B-5	A	1.48	0.98	(0.22)	N-57°-W	II	B	II	11
15	B-5	A	1.38	0.90	0.18	N-72°-W	I	B		
16	B-5	A	0.72	0.64	0.20	N-86°-W	I	B		
17	B-5	A	1.32	1.10	0.34	N-47°-W	I	B	V	←18上 4
18	B-5	A	1.66	(1.20)	0.42	N-68°-W	II	B	II	→17土 28 石庭
19	B-5	A	0.84	0.82	0.14	N-1°-E	I	B	勝坂	2
20	B-5	A	0.66	(0.62)	(0.06)	N-85°-W	I	B		
21	B-5	A	1.34	1.08	0.30	N-69°-E	II	B		
22	B-5	A	0.54	0.54	0.18	N-25°-E	I	B	勝坂	3
23	B-5	A	0.66	0.62	0.18	N-6°-E	I	C		
24	C-5	A	1.10	0.96	0.46	N-70°-W	II	A	V	6
25	C-5	A	0.64	0.58	0.44	N-69°-W	I	A		
26	C-5		0.72	0.68	0.14	N-42°-W	I	B		
27	A-6	A	0.98	0.88	0.16	N-48°-W	I	B		
28	A・B-6	A	0.58	0.54	0.30	N-58°-W	I	A		
29	B-6	A	1.46	1.34	0.12	N-2°-E	I	B	V	3
30	B-6	A	1.00	0.76	0.10	N-85°-E	II	B	V	3
31	B-6	A	0.98	0.82	0.52	N-79°-E	I	B	V	9
32	B-6	A	1.06	0.80	0.10	N-48°-E	II	B	V	3
33	B-5・6	A	1.14	0.80	0.22	N-67°-W	II	B		
34	B-5・6	A	0.78	0.68	0.24	N-43°-E	I	B	V	7
35	B-6	A	1.46	1.14	0.36	N-86°-W	V	B	I	19
36	B-6	A	0.54	0.50	0.36	N-35°-W	I	A	V	11
37	B-6	A	0.80	0.66	0.16	N-52°-E	V	C	勝坂	41
38	B-6	A	1.22	0.84	0.24	N-18°-W	II	C		
39	B-6	A	0.92	0.80	0.32	N-20°-W	I	A		
40	B・C-6	A	1.50	1.36	0.18	N-47°-W	I	B		
41	C-6	A	1.00	0.88	0.42	N-75°-W	I	A		
42	B-7		1.00	0.58	0.14	N-81°-W	II	B	V	5
43	B-7		0.78	0.56	0.10	N-65°-E	V	B		
44	B-7		0.70	0.64	0.14	N-60°-E	I	C	II b	19
45	B-7		0.66	0.60	0.18	N-17°-E	I	B		
46	B・C-8		0.96	0.88	0.12	N-14°-E	I	C	V	14
47	A・B-9	B	1.34	0.90	0.34	N-55°-E	II	B	加曾利E	1
48	B-9	B	1.90	1.84	0.14	N-25°-E	I	B	II	骨片 27
49	B-9	B	0.58	0.54	0.22	N-89°-E	I	C		
50	B-9		0.54	0.48	0.24	N-10°-W	I	A		

第5表 土壌一覧表(3)

(単位 m)

番号	グリップ	属群	長径	短径	深度	長軸方向	開口型	断面型	造営期	備考
51	B-9		0.68	0.60	0.26	N-70°-W	I	A		
52	B-9	B	1.36	1.12	0.24	N-55°-W	II	B	Ⅳ	1
53	C-9	B	1.64	1.16	0.16	N-78°-W	II	B	Ⅳ	1
54	D-9		0.96	0.80	0.10	N-37°-E	I	C		
55	D-9		(1.42)	(1.04)	0.40	N-52°-E	II	C		
56	B-9・10	B	1.98	1.32	0.24	N-39°-E	III	C	加曾利E	1
57	A-10	B	1.02	0.98	0.44	N-63°-E	I	A	Ⅱb	79
58	A-10	B	1.46	1.16	0.16	N-55°-E	II	B	勝坂	7
59	A-10	B	2.44	2.08	0.42	N-89°-E	II	C	Ⅳ	59
60	A・B-10	B	1.18	1.10	0.12	N-23°-W	I	B	Ⅱa	25
61	B-10	B	1.18	0.86	0.22	N-69°-W	II	B		
62	B-10	B	1.48	1.16	0.34	N-72°-W	IV	C	Ⅳ	7
63	B-10	B	1.36	0.90	0.10	N-52°-W	II	B		
64	C-10	B	1.10	0.74	0.20	N-72°-W	II	B		
65	C-10	B	1.28	1.10	0.24	N-60°-E	I	B		
66	C-10	B	1.58	1.36	0.14	N-58°-W	II	B		
67	A-10・11	B	0.60	0.46	0.08	N-65°-W	II	B		
68	A-11	B	0.90	0.72	0.14	N-67°-E	IV	B		
69	A-11	B	1.46	0.94	0.40	N-55°-E	II	C		
70	A・B-11	B	1.58	0.84	0.18	N-57°-E	II	B		
71	B-11	B	0.70	0.50	0.18	N-88°-E	II	C		
72	B-11	B	1.92	1.20	0.10	N-83°-W	IV	B	Ⅱ	8
73	B-11	B	1.24	1.00	0.26	N-42°-E	II	C	Ⅳ	3
74	B-11	B	1.70	0.68	0.12	N-30°-E	II	B		
75	B-11	B	2.38	(1.64)	0.34	N-88°-E	IV	C	Ⅲ	大球 拳大礫多 大球
76	B-11	B	2.00	1.56	0.10	W-E	II	B		
77	C-11	B	2.52	2.00	0.26	N-88°-E	II	B		
78	D-10・11		1.34	1.14	0.32	N-72°-W	III	B		
79	D-10・11		0.92	0.70	0.12	N-65°-W	I	B		
80	D-11		1.16	1.02	0.28	N-53°-E	I	B		
81	A-12		0.76	(0.68)	0.18	N-75°-E	(1)	B		
82	A-12		1.00	0.80	0.24	N-6°-E	II	B		
83	B-12	B	1.34	0.94	0.50	N-31°-E	II	A	I	13
84	B-12・13		1.76	1.58	0.34	N-20°-W	IV	B		
85	B-12		0.88	0.80	0.22	N-42°-E	I	B	Ⅳb	2
86	B-12	B	1.96	1.22	0.14	N-50°-W	II	B	Ⅲ	拳大礫多
87	C-12		1.08	0.86	0.18	N-99°-E	II	B		
88	C-12		2.30	1.81	0.18	N-15°-W	IV	B	Ⅱb	26
89	D-11・12	C	1.18	0.78	0.20	N-84°-E	II	B		
90	D-12	C	2.00	1.36	0.24	N-38°-W	II	B		

第6表 土壌一覽表(4)

(單位 m)

番号	グリッド	属群	長径	短径	深度	長軸方向	開口型	断面型	造営期	備考
91	D-12	C	2.64	1.86	0.30	N-57°-W	V	C	M	8
92	D-12	C	0.64	0.58	0.26	N-33°-E	I	A		
93	D-13	C	1.21	0.96	0.24	N-82°-W	II	C	W b	33
94	D-12	C	0.98	0.92	0.38	N-13°-E	I	A	V	6
95	D-12	C	0.88	0.66	0.30	N-55°-W	II	A		
96	D-12	C	0.92	0.72	0.34	N-40°-E	II	B	W	9
97	D-12	C	0.50	0.44	0.14	N-50°-E	I	C		
98	D-12	C	1.04	0.96	0.22	N-23°-W	I	B		
99	D-12	C	0.64	0.50	0.28	N-43°-E	II	A		
100	D・E-12	C	0.92	0.80	0.10	N-2°-E	II	C	W	12
101	D・E-12	C	1.28	1.04	0.20	N-82°-E	II	C		
102	E-12	C	1.02	0.82	0.32	N-47°-W	II	B	W	2
103	E-12	C	1.20	1.02	0.34	N-48°-W	II	B	V	19
104	E-12	C	0.80	0.76	0.46	N-57°-E	I	A		
105	A・B-13		1.08	1.00	0.50	N-9°-W	I	C		
106	B-13		1.06	0.96	0.30	N-7°-E	II	C	不 明	浅鉢主 33
107	B-12-13		1.26	0.80	0.44	N-55°-W	II	B		
108	C-13		1.38	1.21	0.22	N-6°-W	I	B		
109	C-13		1.88	1.68	0.14	N-71°-E	I	B		
110	C・D-13	C	1.26	0.84	0.36	N-22°-W	III	B		
111	D-12-13	C	1.42	0.90	0.24	N-22°-E	II	B		
112	D-13	C	1.16	1.00	0.18	N-19°-W	II	B		
113	D-13	C	0.66	0.62	0.24	N-10°-E	I	A	V	2
114	D-13	C	1.08	0.68	0.30	N-82°-W	II	C		
115	D-13	C	1.66	0.88	0.28	N-20°-E	III	C		
116	D-12-13	C	1.08	0.80	0.24	N-25°-W	II	B		
117	D-12-13	C	1.14	1.00	0.20	N-76°-E	I	B		
118	D-13	C	0.46	0.44	0.28	N-5°-E	I	A		
119	D-13	C	(2.76)	1.60	0.46	N-55°-E	III	C	V	49
120	D-13	C	(2.30)	(1.22)	0.46	N-34°-E	III	D		
121	D-13	C	(1.02)	0.42	0.22	N-23°-W	II	B		
122	D-13	C	(2.20)	0.82	0.12	N-65°-W	II	B	V	36
123	D-13	C	2.28	1.16	0.82	N-63°-E	IV	C	W	26
124	D・E-13	C	0.80	0.70	0.16	N-33°-E	I	B	W	4
125	E-13	C	1.10	0.64	0.12	N-2°-E	III	C		
126	E-13	C	1.00	0.82	0.22	N-2°-E	I	C	W	5
127	E-13	C	1.06	0.86	0.12	N-83°-W	I	C		
128	E-13		1.58	0.92	0.22	N-78°-W	II	C	不 明	2
129	A・B-14		(1.70)	0.74	0.20	N-29°-W	III	B		
130	B-14		1.18	0.96	0.20	N-37°-W	II	C		

第7表 土壌一覽表(5)

(單位 m)

番号	グリッド	属群	長径	短径	深度	長軸方向	開口型	断面型	造器期	備考
131	B-14		1.38	0.98	0.20	N-45°-W	Ⅱ	B	Ⅱ b	5
132	B-14		1.02	0.90	0.32	N-40°-W	Ⅰ	A	V	12
133	B-14		0.72	0.64	0.30	N-70°-E	Ⅰ	A		炭化物
134	B-14		1.10	1.00	0.30	N-58°-W	Ⅰ	B	勝坂	48
135	B-14-15		1.10	1.04	0.28	N-32°-E	Ⅰ	B	Ⅱ	13
136	B-14		0.82	0.76	0.32	N-37°-E	Ⅰ	C	勝坂	14
137	C-14		1.06	0.82	0.12	W-E	Ⅲ	B		
138	C-14		0.84	0.64	0.46	N-35°-W	Ⅱ	A	不明	1
139	C-13-14		1.58	1.44	0.12	N-74°-E	Ⅰ	B		
140	C・D-14		2.80	1.74	0.08	N-40°-W	Ⅱ	B	不明	1
141	D-14	D	1.42	1.24	0.28	N-24°-W	Ⅱ	B	Ⅱ b	人形土器 2
142	D-14		0.72	0.70	0.16	N-29°-W	Ⅰ	B		
143	E-14		0.76	0.64	0.18	N-81°-E	Ⅰ	C		
144	E-14		1.60	1.10	0.22	N-67°-E	Ⅱ	B		耳飾
145	E-14		1.22	1.04	0.24	N-40°-E	Ⅱ	B	加曾利E	2
146	E-14		2.20	1.26	0.44	N-82°-W	Ⅲ	C	V b	66
147	F-14		1.24	0.76	0.12	N-39°-E	Ⅱ	B		
148	F-14		1.18	0.98	0.10	N-40°-E	Ⅱ	C		
149	F-14		1.40	1.22	0.68	N-87°-W	Ⅱ	D		
150	F-14		0.66	0.58	0.12	N-27°-E	Ⅰ	B		
151	F-14		1.10	0.98	0.12	N-77°-E	Ⅱ	B		
152	B-14-15		0.50	0.46	0.24	N-22°-E	Ⅰ	A		
153	B-14-15		0.88	0.74	0.14	N-37°-E	Ⅱ	B		
154	B-15		1.28	0.94	0.26	N-54°-E	Ⅱ	C		
155	B-15		1.38	1.24	0.30	N-38°-E	Ⅰ	B	V	23
156	B-15		1.66	1.34	0.42	N-53°-W	Ⅱ	B	Ⅱ a	69
157	B-15		1.08	1.04	0.40	N-32°-W	Ⅰ	C	V a	79
158	B・C-15		(2.68)	1.46	0.24	N-2°-E	Ⅱ	C	不明	6
159	C-15		1.36	0.96	0.08	N-70°-E	Ⅱ	B		
160	C-15		0.76	0.70	0.28	N-8°-W	Ⅰ	B		
161	C-15	E	0.88	0.68	0.22	N-67°-W	Ⅱ	B	Ⅱ	1
162	C-15	D	1.48	1.24	0.26	N-72°-E	Ⅲ	B	Ⅱ	5
163	C-15	D	1.50	1.22	0.26	N-22°-E	Ⅱ	B		
164	C-15	D	0.88	0.74	0.18	N-80°-E	Ⅰ	C		
165	C-15	D	0.74	0.60	0.14	N-52°-W	Ⅲ	C		
166	C-15	D	0.50	0.48	0.16	N-56°-W	Ⅲ	B		
167	C-15	D	0.52	0.52	0.24	N-8°-W	Ⅰ	A		
168	C・D-15	D	0.96	0.68	0.28	N-54°-E	Ⅱ	B		
169	D-15	D	1.00	0.86	0.20	N-25°-E	Ⅰ	B		
170	D-15	D	1.04	0.94	0.18	N-57°-W	Ⅰ	B		

第8表 土塊一覽表(6)

(單位 m)

番号	グリッド	属群	長径	短径	深度	長軸方向	開口型	断面型	造替期	備考
171	C・D-15・16	D	1.36	0.64	0.18	N-65°-E	Ⅱ	C		
172	D-15・16	D	1.22	0.62	0.36	N-54°-E	Ⅰ	B	Ⅱ	1
173	D-15	D	0.84	0.80	0.26	N-11°-E	Ⅰ	C		
174	D-15	D	0.56	0.52	0.10	N-85°-E	Ⅰ	B		
175	D-15	D	0.86	0.72	0.26	N-60°-E	Ⅰ	C		
176	D-15	D	0.82	0.64	0.22	N-16°-W	Ⅱ	B		
177	D-15	D	1.34	1.14	0.44	N-7°-E	Ⅱ	D	Ⅱ b	20
178	D-15	D	0.98	0.96	0.22	N-6°-E	Ⅰ	C		
179	D-15	D	1.32	0.94	0.40	N-68°-E	Ⅱ	C	Ⅱ b	33
180	D-15	D	1.74	1.72	0.42	N-25°-E	Ⅰ	D	Ⅱ	13
181	D・E-15	D	(2.74)	1.90	0.14	N-29°-E	Ⅱ	B	Ⅱ	11
182	D-15	D	0.92	(0.80)	0.22	N-50°-E	Ⅱ	C	Ⅱ	5
183	D-15	D	1.50	1.28	0.36	N-13°-W	Ⅰ	C	Ⅱ	180
184	D・E-15	D	0.82	0.70	0.24	N-10°-W	Ⅱ	B	Ⅱ	16
185	E-14・15		0.66	0.56	0.22	N-22°-W	Ⅰ	B	Ⅱ a	5
186	E-15	D	0.80	0.60	0.26	N-87°-E	Ⅱ	B	V	26
187	E-15	D	1.06	0.92	0.16	N-82°-E	Ⅱ	B		
188	E・F-14・15		2.40	1.96	0.24	N-81°-W	V	C	V a	46
189	F-15		0.94	0.90	0.08	N-21°-W	Ⅰ	B	V	27
190	B-16		2.82	2.36	0.28	N-25°-E	Ⅱ	B	不 明	4
191	B-16		(1.98)	(1.20)	(0.22)	N-68°-E	Ⅱ	B	Ⅱ b	6
192	B-16-17		2.56	(1.40)	0.68	N-72°-W	Ⅰ	A	Ⅱ a	73
193	C-15・16	D	0.94	0.88	0.28	N-25°-E	Ⅰ	C		
194	C-15・16	D	0.72	0.66	0.28	N-2°-E	Ⅰ	B		
195	C-16	D	0.80	0.72	0.30	N-16°-E	Ⅰ	A		
196	C・D-16	D	0.90	0.78	0.44	N-14°-W	Ⅱ	A		
197	C・D-16		1.42	1.30	0.52	N-31°-W	Ⅰ	B	V a	類集石 427
198	D-15・16	D	0.44	0.40	0.26	N-88°-E	Ⅱ	A		
199	D-15-16	D	1.30	1.20	0.44	N-78°-E	Ⅰ	B		
200	D-16	D	1.00	0.96	0.40	N-61°-E	Ⅰ	A	不 明	4
201	D-16	D	0.52	0.50	0.28	N-46°-E	Ⅰ	A		
202	D-16	D	0.88	0.86	0.48	N-65°-W	Ⅰ	A	V	24
203	D-16		1.92	1.66	0.86	N-14°-W	Ⅱ	D	V a	527
204	D-16	D	0.98	0.96	0.32	N-26°-W	Ⅰ	B	勝 板	3
205	D-16	D	1.08	0.78	0.26	N-45°-E	Ⅱ	D		
206	D-16	D	1.16	1.06	0.36	N-78°-W	Ⅱ	C	V	10
207	D-16	D	0.90	0.74	0.26	N-37°-E	Ⅱ	C	Ⅱ	3
208	D-16	D	1.06	0.96	0.20	N-23°-E	Ⅰ	D		
209	D-16	D	0.92	0.64	0.40	N-32°-E	Ⅱ	D	Ⅱ b	5
210	D-16	D	1.30	0.80	0.42	N-69°-W	Ⅱ	D	Ⅱ	7

第9表 土壌一覽表(7)

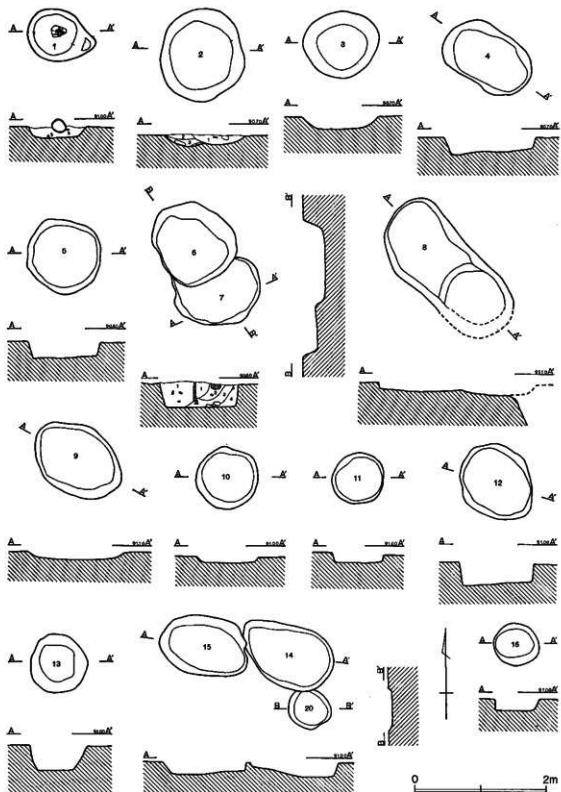
(単位 m)

番号	グリッド	属群	長径	短径	深度	長軸方向	開口型	断面型	造管期	備考
211	D・E-15・16	D	1.60	1.46	0.18	N-45°-W	V	B		
212	E-16	F	(2.10)	1.88	0.42	N-71°-E	I	D	V a	焼石 57
213	E-16	F	(1.32)	1.14	0.08	N-45°-E	III	B	W b	69
214	E-16	F	(1.90)	1.64	0.32	N-60°-W	II	C	V b	←215± 345
215	E-16	F	(1.98)	1.74	0.76	N-86°-W	I	A	V a	→214± 270
216	F-16	F	1.54	1.30	0.28	N-50°-W	III	B	V b	101
217	F-16	F	0.98	0.92	0.20	N-40°-W	I	B	W b	190
218	F-16・17	F	0.90	0.74	0.40	N-2°-W	II	A		
219	I-16		1.12	1.08	0.30	N-15°-E	I	B	V a	108
220	J-16		1.04	0.94	0.18	N-38°-E	I	C		
221	J-16		1.02	1.00	0.18	N-4°-W	I	B		
222	C-17		1.24	0.10	0.54	N-37°-N	III	C	II a	39
223	D-16・17	F	0.84	0.72	0.34	N-16°-W	III	C	V a	19
224	E-17	F	1.52	1.04	0.14	N-32°-E	IV	B	不 明	6
225	E-16・17	F	1.38	1.26	0.38	N-32°-W	I	C	W b	118
226	E-17	F	0.88	0.84	0.24	N-78°-E	I	D		
227	E-17	F	1.36	1.12	0.34	N-34°-W	IV	B	W	64
228	C-18		3.90	(2.82)	0.19	N-9°-E	II	B	V a	2
229	C-18		(1.00)	0.96	0.38	N-87°-W	I	B	V a	←230± 30
230	C-18		(1.00)	0.98	0.20	N-63°-E	III	B	II	→229± 6
231	C-18		2.14	2.04	0.56	N-2°-E	I	D	W b	82
232	C-18-19		不				明	V a	←233± 396	
233	C-18								→232±	
234	C-18		2.82	1.74	0.42	N-3°-E	V	D		
235	C-18		1.46	1.14	0.38	N-87°-E	II	B	勝 坂	25
236	D-18		1.86	1.14	0.36	N-8°-W	V	B	W b	30
237	C・D-18		1.52	1.14	0.52	N-31°-W	IV	B	W	←36住 5
238	E-18	F	1.12	0.80	0.44	不 明	V	A	V b	7
239	E-18		1.62	0.96	0.58	N-60°-W	V	A		
240	E-18		1.58	1.36	0.52	N-31°-W	II	A	V a	→39住 277
241	E-18		0.92	0.88	0.36	N-81°-E	I	A		
242	E-17・18	F	1.00	0.74	0.12	N-42°-E	II	B	W	11
243	F-18	F	1.10	0.84	0.32	N-46°-E	III	B		
244	C-19		1.22	1.14	0.22	N-19°-E	I	B	W	50
245	C-19		1.50	1.30	0.34	N-40°-W	III	B	V a	219
246	C-20		1.62	1.34	0.36	N-7°-W	II	B	W b	11
247	C-20		1.20	1.14	0.36	N-22°-E	I	B	W b	137
248	C-23		0.84	0.72	0.04	N-54°-W	II	B	勝 坂	14
249	C-23		1.38	0.92	0.20	N-86°-W	II	C	II b	364

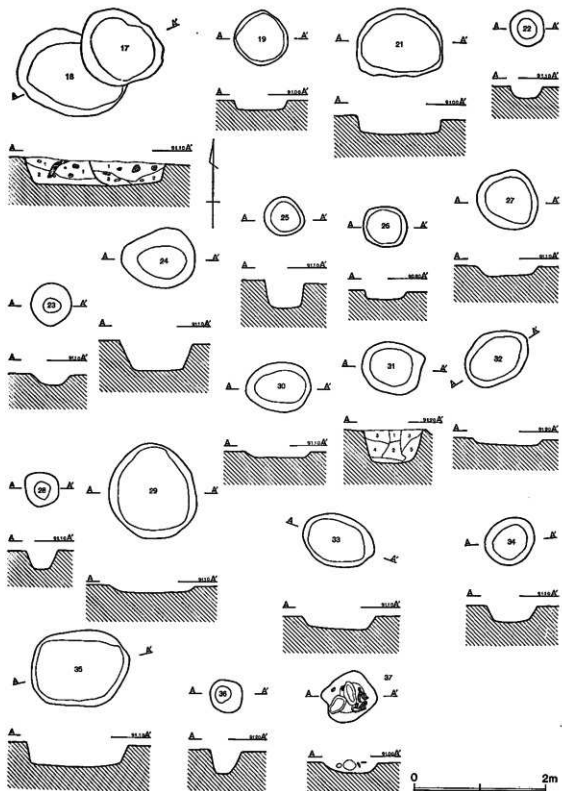
第10表 集石一覧表

(単位 m、%)

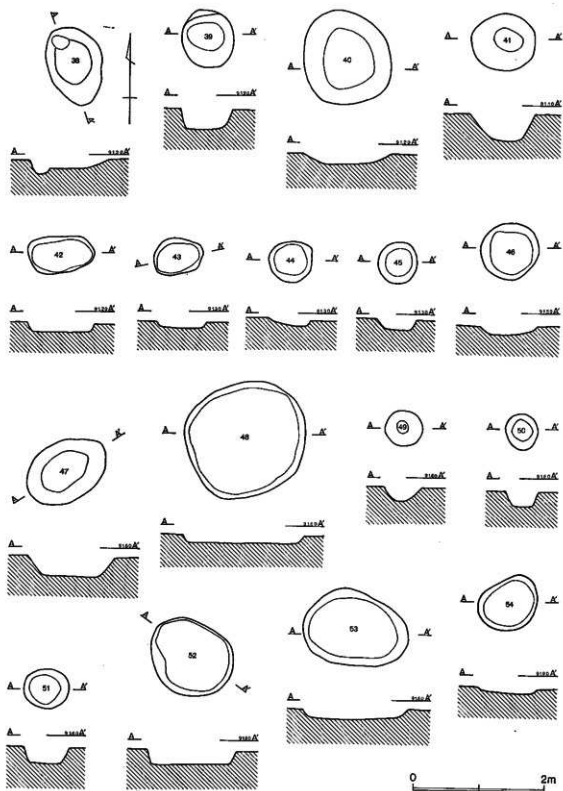
番号	グループ	長径	短径	深度	長軸方向	開口型	断面型	集石型	平均値	扁平率	造管期	備考
1	A-1	1.12	0.98	0.50	N-23°-E	Ⅱ	A	a	1.06	47	Ⅱ	27
2	A・B-2	0.84	0.78	0.16	N-49°-W	I	B	b	0.81	19	V a	21
3	A-2	0.66	0.52	0.26	N-65°-E	Ⅱ	C	b	0.575	43	勝坂	11
4	A-2	0.72	0.50	0.20	N-70°-E	Ⅱ	D	b	0.62	29	I a	15
5	A-2	0.74	0.60	0.30	N-79°-W	Ⅲ	D	a	1.665	45	Ⅱ	25
6	B-2	0.54	0.48	0.14	N-65°-E	I	B	b	0.515	29		
7	B-2	1.28	0.98	0.42	N-47°-W	Ⅱ	D	a	1.15	35		→3住
8	D-2・3	1.46	1.30	0.52	N-34°-E	I	C	a	1.37	36	勝坂	194
9	A-3	(1.30)	(1.14)	0.20	N-19°-W	Ⅲ	C	a	1.175	30		←7住
10	B-2・3	0.86	0.72	0.20	N-40°-W	Ⅱ	C	b	0.78	24	Ⅱ	21
11	B・C-2・3	1.70	(1.42)	0.28	N-30°-E	Ⅲ	B	b	1.56	17	Ⅱ b	210
12	B-3	0.96	0.90	0.40	N-36°-E	I	C	a	0.93	41	Ⅱ	←8住 41
13	C-3	1.76	1.26	0.96	N-40°-W	Ⅱ	B	b	1.52	24	V b	270
14	C-3	0.88	0.64	0.18	N-58°-E	Ⅱ	B	b	0.75	23	勝坂	26
15	C-3	0.84	0.70	0.26	N-79°-W	Ⅱ	C	b	0.805	29	Ⅱ b	51
16	C-3	0.92	0.70	0.24	N-79°-W	Ⅲ	B	b	0.815	28	Ⅱ b	41
17	D-3	0.70	0.56	0.22	N-88°-E	Ⅱ	B	a	0.625	32		←12住
18	C-3	0.50	0.46	0.14	N-45°-W	I	B	a	0.465	32	Ⅱ b	5
19	C-3	1.58	1.26	0.18	N-42°-W	Ⅱ	B	b	1.405	14	Ⅱ b	569
20	C-3	0.80	0.72	0.26	N-49°-E	Ⅱ	C	a	0.72	38		
21	B-4	0.96	0.92	0.32	N-62°-W	I	B	a	0.935	32		
22	C-4	1.18	1.02	0.28	N-30°-E	Ⅱ	B	a	1.105	25	V a	12
23	C・D-4	0.48	0.44	0.16	N-61°-E	I	B	b	0.445	40	V a	土器敷 ←17住 27
24	D-4	0.66	0.60	0.26	N-51°-E	Ⅱ	B	b	0.625	35	V a	土器敷 ←17住 42
25	D-4	不	明	0.28	不	明	C	a	1.20	28		
26	C-5	1.22	1.10	0.22	N-34°-E	I	B	a	—	—	勝坂	9
27	G-15	1.34	1.26	0.30	N-70°-W	I	B	a	1.30	23	V	7
28	G-15	1.32	1.14	0.34	N-50°-W	Ⅱ	C	b	1.235	28		
29	C-15・16	1.04	0.96	0.22	N-89°-E	I	B	b	1.00	20	I a	36
30	E-16	0.98	0.94	0.14	N-65°-W	I	B	a	0.95	14		
31	F-17・18	1.02	1.00	0.36	N-42°-W	I	C	a	0.97	35	勝坂	1
32	C-18	0.88	0.86	0.26	N-25°-W	I	D	a	0.865	35		←35住
33	E-18	1.24	1.08	0.40	N-58°-E	Ⅲ	C	a	1.125	34	V	3
34	D-21	1.02	1.00	0.32	N-81°-E	I	B	b	0.99	30		
35	E-22	1.00	0.86	0.34	N-38°-W	Ⅱ	B	b	0.90	36		
36	F-22	0.64	0.60	0.16	N-29°-W	I	B	b	0.575	35		



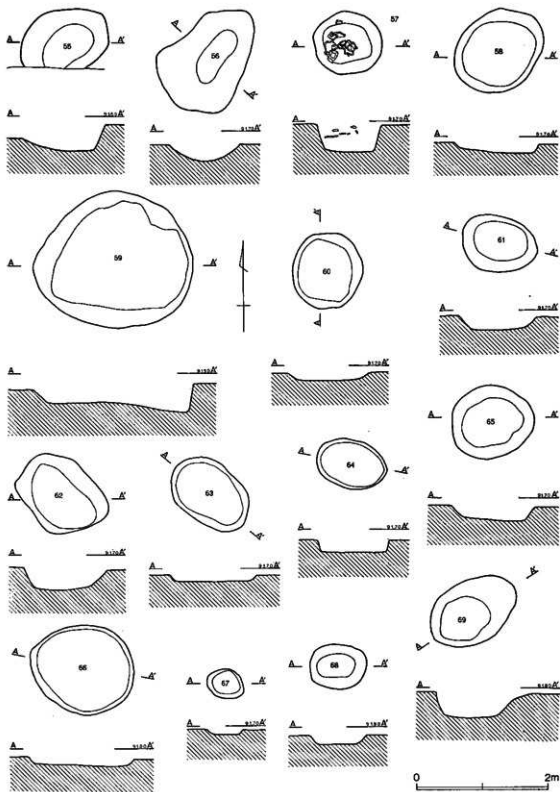
第30图 第1号~第16号、第20号土坑



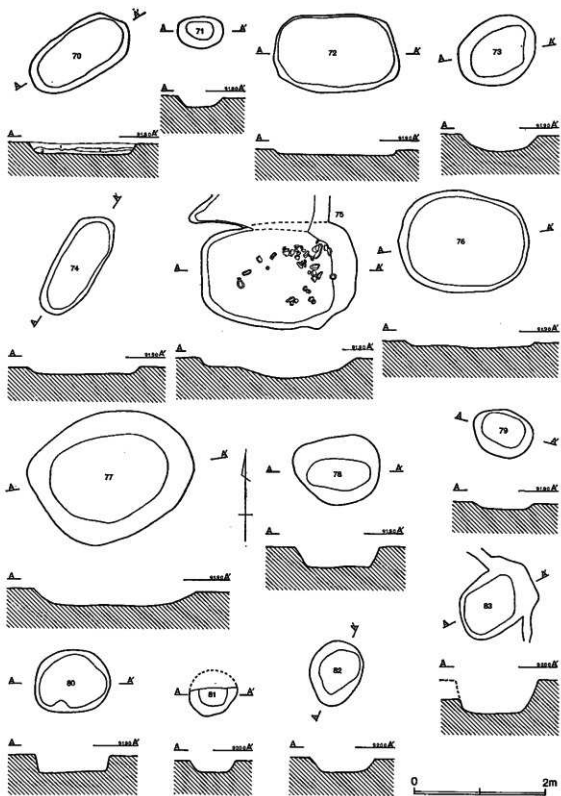
第31图 第17号~第19号、第21号~第37号土坑



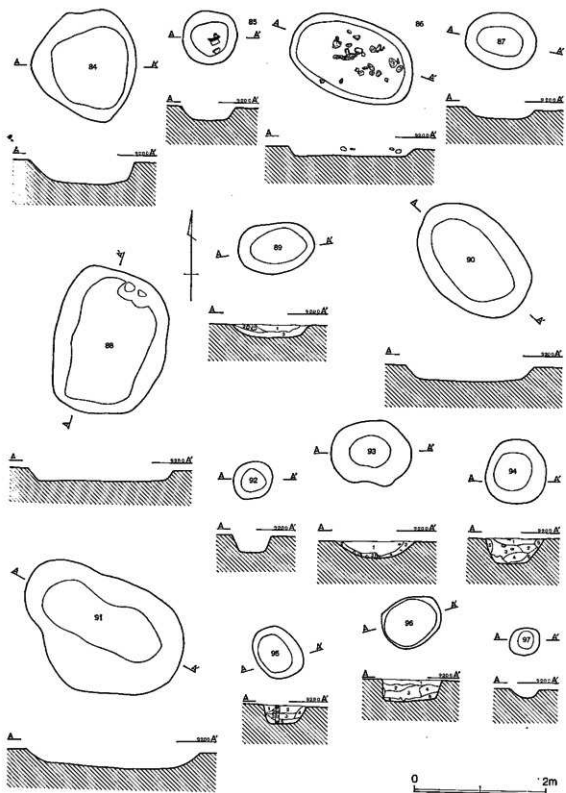
第32图 第38号~第54号土坑



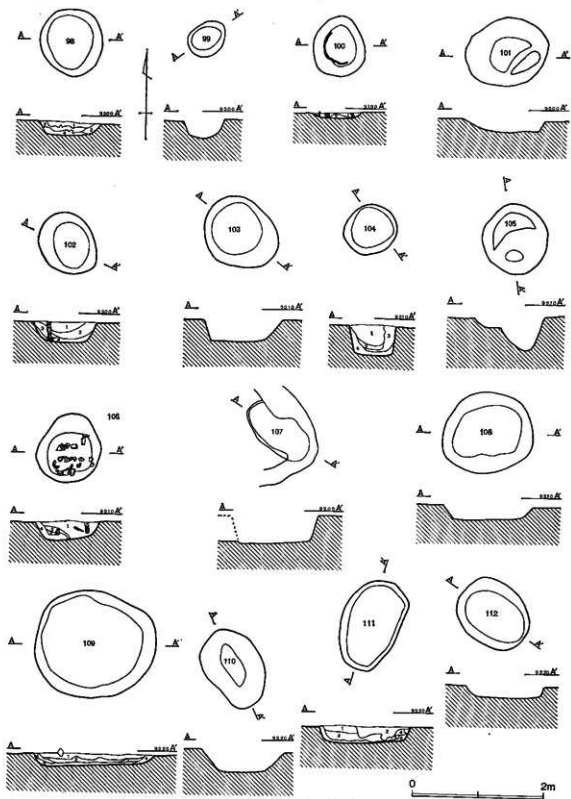
第33四 第55号~第69号上壤



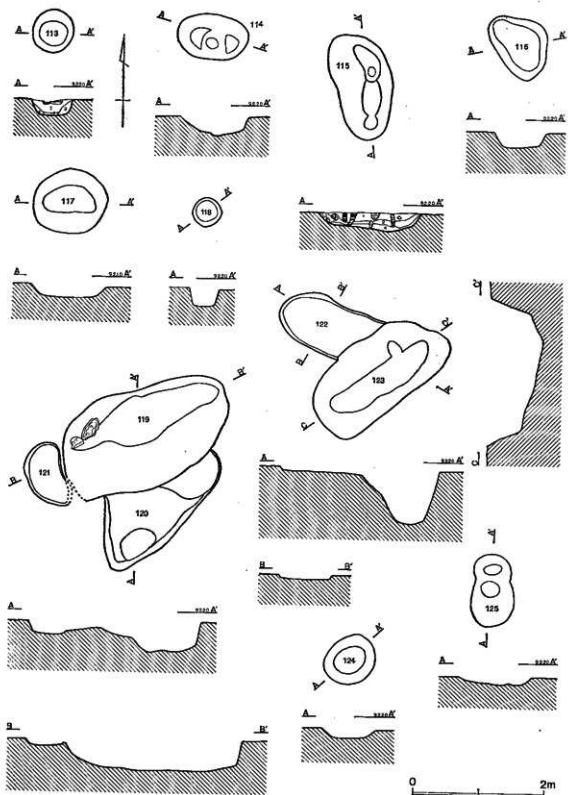
第34图 第70号~第83号土壤



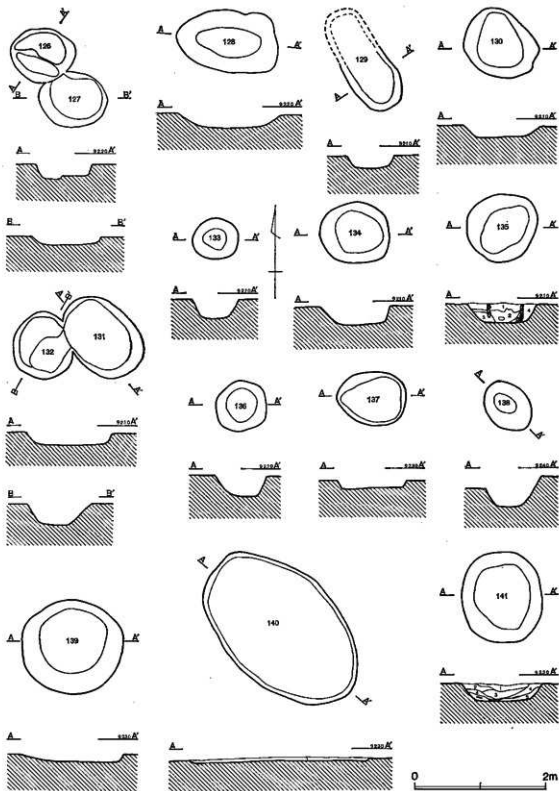
第35图 第84号~第97号土葬



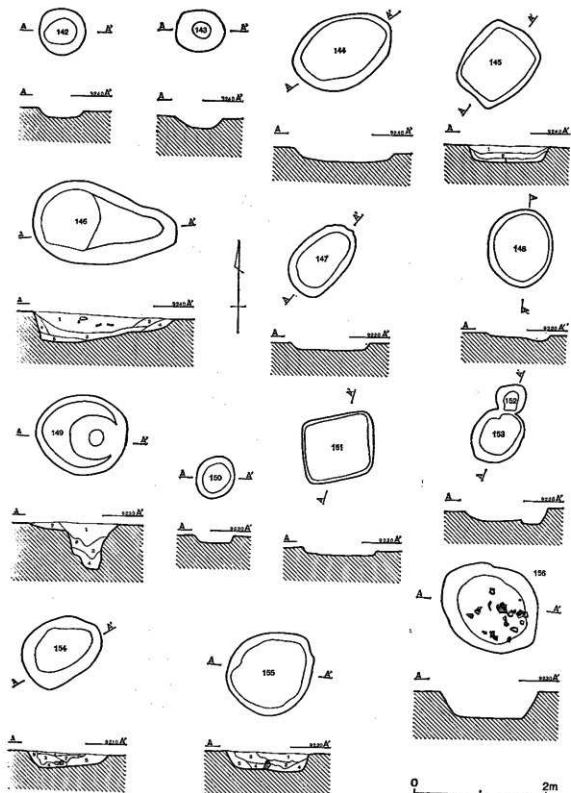
第36图 第98号~第112号土坑



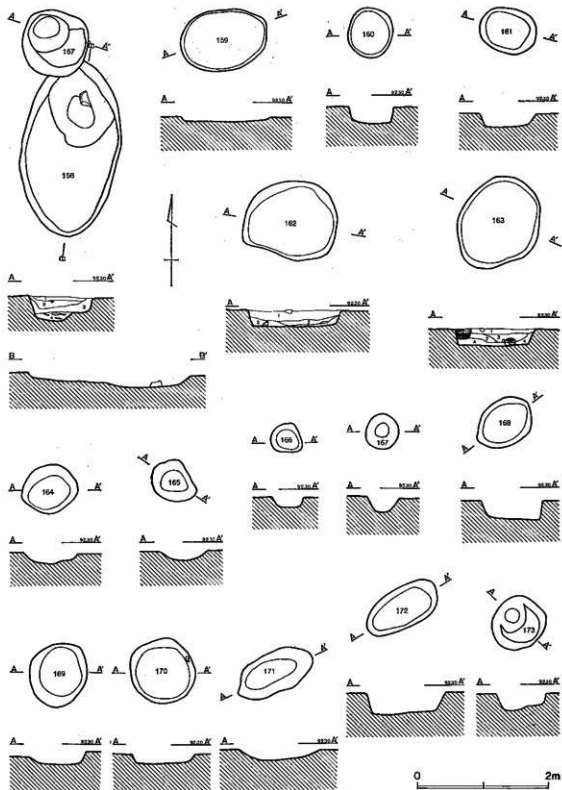
第37图 第113号~第125号土蹟



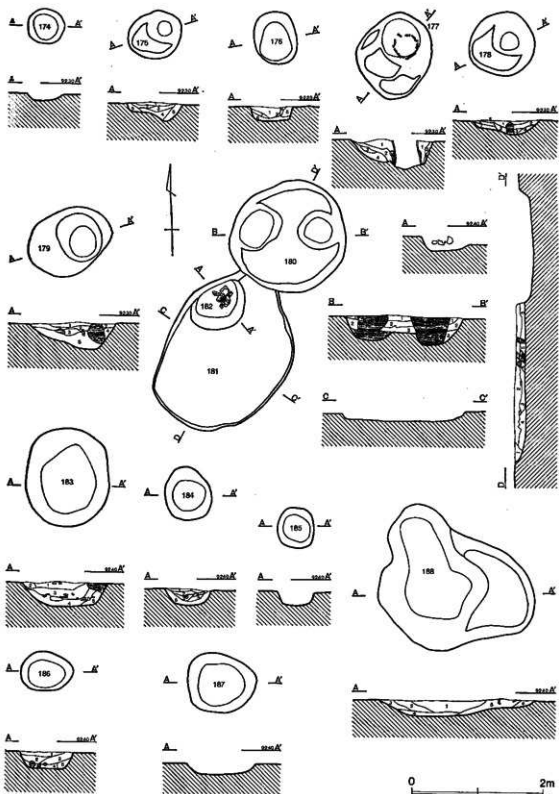
第38图 第126号~第141号土坑



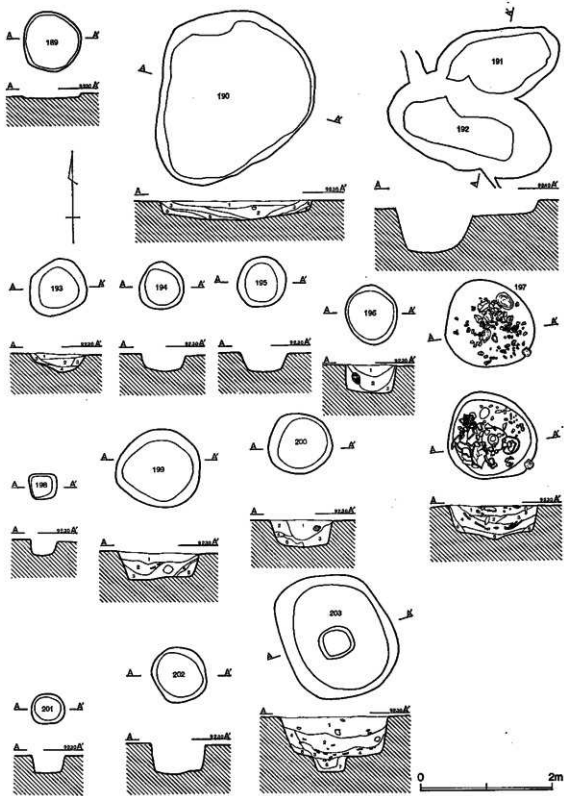
第39图 第142号~第156号土坑



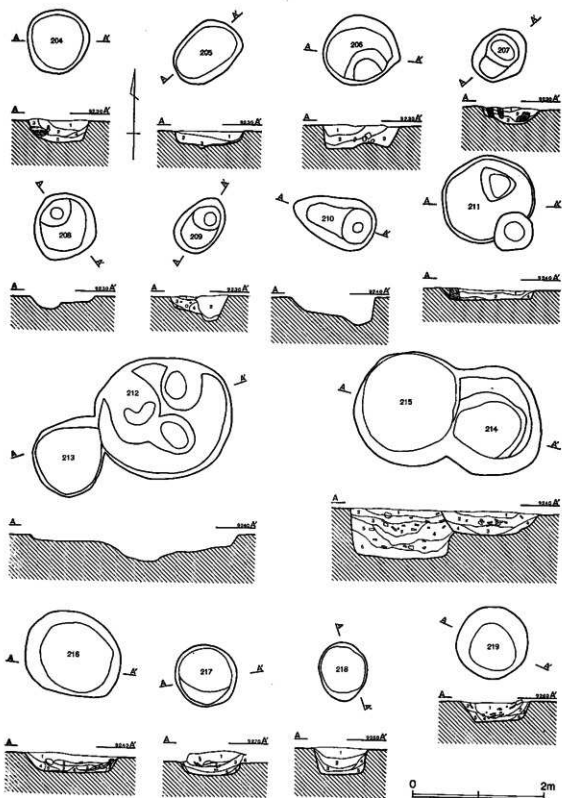
第40图 第157~173号土坑



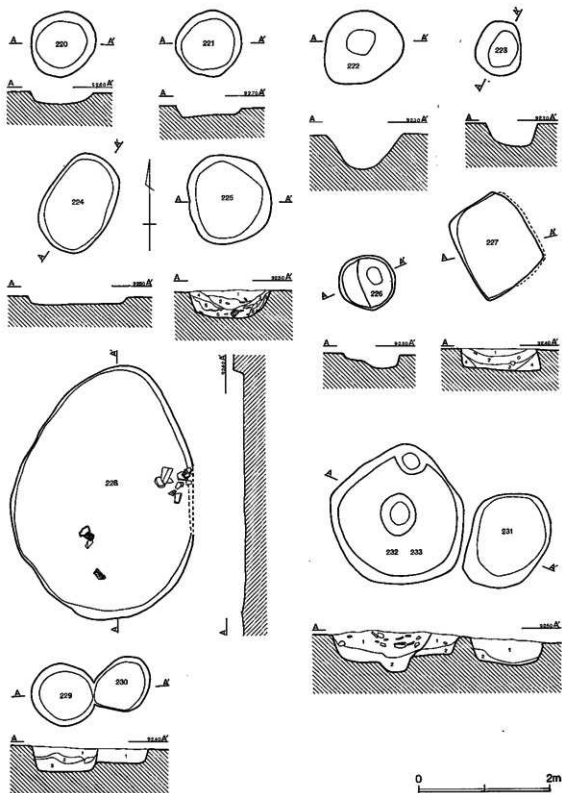
第41图 第174号~第188号土坑



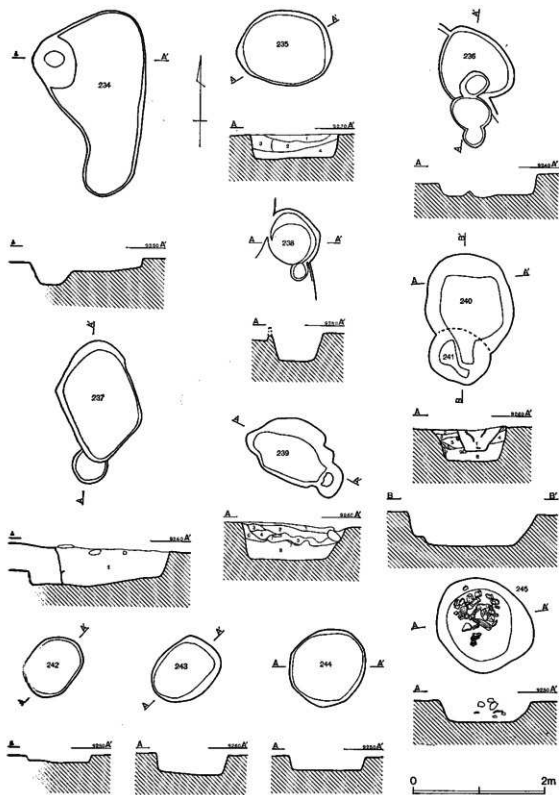
第42图 第189号~第203号土坑



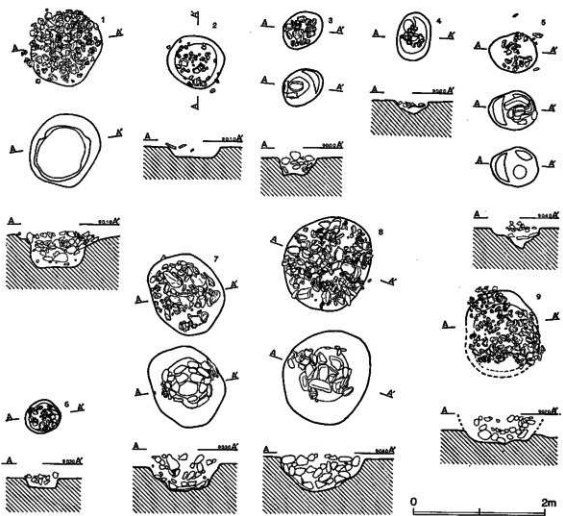
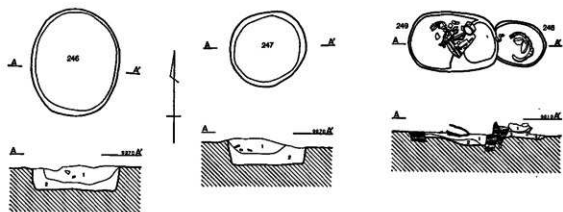
第43图 第204号~第219号土罐



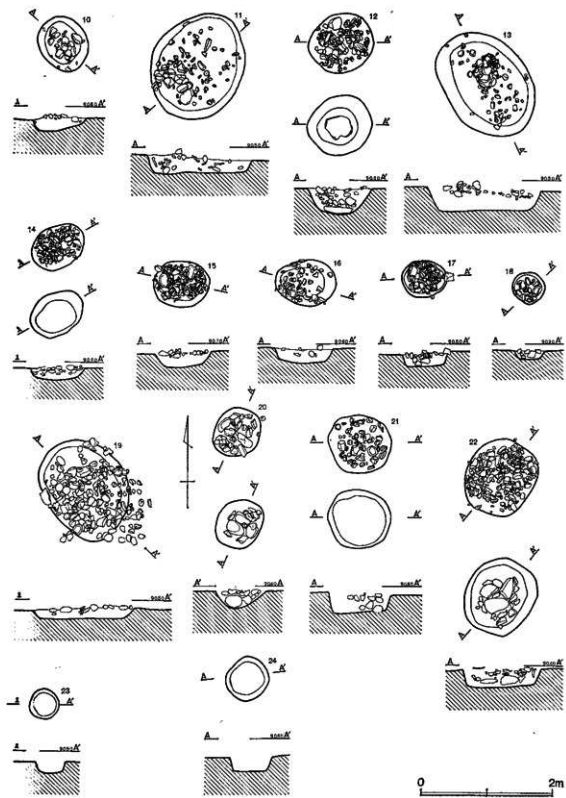
第44图 第220号~第233号土坑



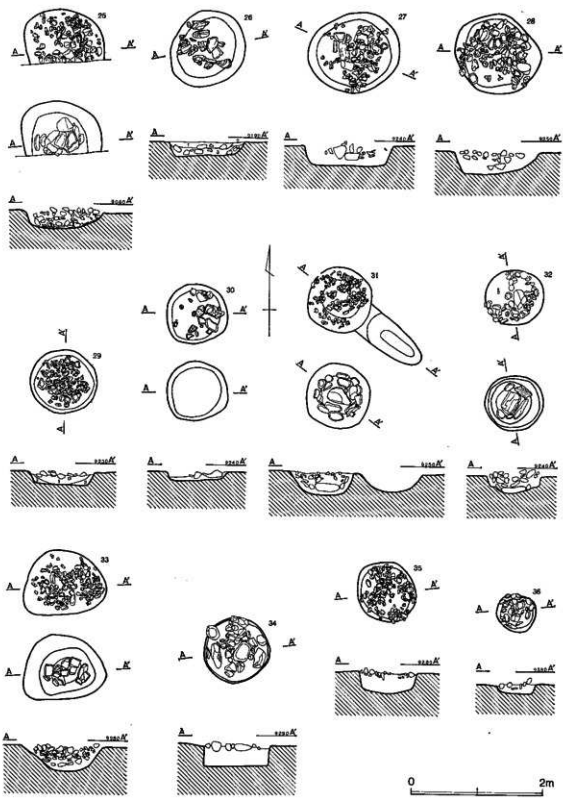
第45图 第234号~第245号土坑



第46图 第246号~第249号土壤、第1号~第9号集石



第47图 第10号~第24号集石



第48图 第25号~第36号集石

2. 出土遺物

a 土器

対象区では天箱約300箱に及ぶ莫大な量の土器が出土した。これらは、第3章で述べたとおり、風化著しく文様を喪失するものが多い。たとえば、第37号住居跡埋設土器などは垂下隆帯と矢羽状沈線が僅かな痕跡を残すのみで他は全て無文と化している。このように、復元し得ながらも実測・拓影図化かなわなかったものが少なからずある。当然、この風化は縄文施文部の原体観察に支障を来すところであり、実測図では模式的に表記した箇所も多いことを附記しておく。

遺跡内での分布は、住居跡帯に重複集中する傾向が強く、土壌群内では稀薄であった。住居跡群内においては、覆土、および直上土で濃密な分布を示し、住居跡認定の唯一の掘所が遺物集中であるものも数軒ある。遺構内垂直分布は、確認覆土に満足な厚層を保つ住居跡が少なく、細かな観察所見を用意できない。一般に、住居床面に間層を介する覆土中より多くの完形土器や大形破片が集中出土している。覆土上、下層を通じ混在率は高く、土質に起因する遺構確認時の誤認の可能性とともに、今後の検討を必要とする課題のひとつである。

以上より、本書では混在認定による掲載排除を極力避け、出土相を表現すべき資料掲載に努めた。また、壁面を見出せなかった住居跡の出土土器は、周囲の状況より認定し得たものを示した。以下の説明では、稿数の関係上、文様、器種を中心とした概要を記したに過ぎず、個別説明には立入らなかった。そこで、胎土等の一般的様相をここで概説しておきたい。

本遺跡の眼下を東流する荒川は、その上流に名勝長瀬を擁することによりつとに著名である。同地に象徴される岩畳、すなわち三波川結晶片岩の分布は本遺跡付近にまで追っており、断崖より上流を眺めれば、その末端を望むことができる。本遺跡で出土した土器の多くには、この結晶片岩を主とする混和が行われており、肉眼でも容易に識別できる。

土器製作期を追って混和の特徴を見るに、加曾利EⅠ後葉期において指向の変化があることに気付く。藤内から加曾利EⅠ後葉期の所産では、概して粒大粗く混和総量が少ない。ところが、以降では次第に粒大小く混和量が多くなる。結果、前者は原材粘土の均質感を良く留め、後者は砂質感が器表に現れる。従って、風化は加曾利EⅡ式土器において最も顕著であり、図化し得なかった土器の多くがこの土器群を指標とする時期以降の所産である。

一方、阿王台系の土器には雲母片を中心とする光彩放つ粒子が多く混和され、全体色では褐灰色(Hue 7.5 YR 4/1相当)化したものが多い。これに対する勝坂・加曾利系土器の器面色は、加曾利EⅠ後葉期までが明赤褐色(Hue 2.5 YR 5/6相当)、以降がにぶい黄橙褐色(Hue 10 YR 7/3相当)を普遍色とする。もちろん、この普遍色より逸脱するものも数多くあり、加曾利EⅠ後葉期以降ではその偏差が拡大する。また、阿王台系土器では、前記の他に色調や混和砂粒の粒大・量の組合わせに様々な変化があり、別統としての製作・搬入を彷彿させる。

以上、肉眼での観察であるため主観のそしりは免れ得ないが、本遺跡出土土器に見る片岩混和と含有の特徴は、荒川流系砂削粘土を原材とする中期土器群の典型的な姿であるといえるだろう。

なお、挿図番号は遺構ごとの連番とし、土壌と集石は5基程度を一括して解説する。

第1号住居跡 (第88図)

床面と認定した高さ、あるいは柱穴内より25点の小片が出土したに過ぎない。これらの全てが無文、またはそれに近い小片であり、拓図として示し得たのは2点のみである。拓図を含め、文様を判別できる破片の大部分が隆帯脇に沈線を付し、区画内に爪形文と半截竹管文を加えている。

第2号住居跡 (第49～53・88図)

覆土中より天箱12箱にも及ぶ莫大な量の土器が出土した。埋設土器はない。

キャリバー形土器は25点を示した(1～20・32～36)。最も多い口縁部文様帯内の構図は、横S字状を基本としながらも相互に連続性を持たせ、帯内を流れるように展開させるものである。主文様の描出は沈線ナゾリの2本一組隆帯を用い、一部には交互刺突文を加えるものもある。また、隆帯間沈線を長く連続させず、組隆帯を連結する粘土瘤を多く加える点も本住に見る隆帯施文の特徴である。確たる頸部無文帯を配するものは7の1点のみで、他の多くは複数横位沈線、あるいは頸部に波状や鋸歯状の沈線を廻らすものが目立つ。

以上の地文は燃糸文の原体Lを利用したものが大勢で、斜行縄文を用いたものが極端に少ない。8など頸部上を燃糸文で、胴下半を縄文で埋めるように原体を使い別けるものもある。口縁部文様帯内の地文効果としては、他に沈線充填がある(1～3)。前2点は渦巻を上下に発達させ、加えて渦巻部の多くを右側に統一することにより、流れるような文様展開を作出している。また、1の小波状は1対2単位という二面性を持っており、これは5にも共通している。一方、頸部や胴部に杵状文帯を設定し、これを展開させているものもある(1・9・13・16・17)。特に、13は頸部から胴部まで数段にわたる沈線帯や垂下渦巻隆帯等、異風である。また、16・17に見る胴部の加飾も稀少例の一つだろう。35の文様は詳細不明。

深鉢の他器種では、緩やかに内彎しながら開花する口縁部無文帯を擁し、区画線下を単文とするものがある(22～24・39)。また、地文を有するが38も同題のものであろう。これらのうち、22・23では無文口縁部に異種の突起物を加えることにより、1と同様な二面性を持たせている。口縁部が無文となるものには25・27・37もある。25・37は無文部が外反する点に特徴があり、一旦膨張した胴部が再度収縮する屈曲点に横位区画線が配されるものであろう。一方、27は有刻の波状口縁が特異であり、40も細部では変化あるものの、文様構成上は近い仲間となろう。

勝坂式の直系統を受継ぐものには21がある。22～24の無文内彎口縁土器とも類似するが、こちらは胴部文様帯土器としての姿をそのままに残している。区画、主構図ともに幅広の扁平隆帯によって作出され、沈線や交互刺突文が加えられる。無文口縁部には葉巻状把手が突出し、把手部を正面として、主文の渦巻方向に二面性を持たせている。

浅鉢は、緩やかに内彎するもの、急激に内傾するもの、肩部に文様帯を持つもの等があり、4点で赤彩を観察できた、また、41は燃糸を地文として横位隆帯を施す器種不明の破片であるが、内面のみに赤彩が加えられている。

第3号住居跡 (第54・55・89図)

復元可能であった土器は埋設、伏置土器である。4の伏置深鉢を除く3個体は連弧文土器で占められている。1は炉石下に埋設されていたものであり、石囲中に入った2よりは少なくとも埋設期

を廻らせることができる。一方、3・4が前二者のどちらに伴うものかは判定するに至らなかった。

連弧文土器3個体は、いずれも胴下半を切断されているが、それぞれが異種に属す三態を示している。口縁部は基本的に平縁だが3は小波状を呈している。また、同番は胴部の分帯横位区画線を用いることがなく、連弧の頂部よりの懸垂文を施すのみである。一方、2では二帯設けた連弧状波状文下に附加文として稗状文と蕨手状小渦巻を、また、1では連弧の下位線を三角状に施文することにより附加文の性格を持たせている。連弧作出の沈線は、1・3が2本、2が結果として3本となる。そして、地文は2・3が条線、1が燃糸文という相違を見せている。ところが、連弧線内の磨消は、いずれも行われていない。その他、器形について見ると、3の胴膨張部が上半に片寄っている点にも特徴差が現れている。

これらに対する覆土中出土の土器は、いずれも小破片であり、拓影化し得たのは5のキャリバー形土器のみである。同番の渦巻文は、沈線で隆帯脇をナゾることなく施文されている。

第4号住居跡(第55・89図)

遺物分布集中による認定住居跡であるため、認定できた遺物は少ない。図示したものはキャリバー形土器が中心だが、縮化した渦巻と楕円区画による口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部懸垂文と同渦巻文が特徴的である。3は壘形土器把手部、7は浅鉢文様帯部である。3は文様描出法、胎土より本住の造営期とは期を異にする勝坂系土器と思われる。

第5号住居跡(第56・89図)

第4号住居跡と同じく、遺物集中点を辿り認定した住居である。キャリバー形土器の口縁部文様は、2本一組の隆帯を利用し渦巻文を構成するが、ナゾリを意図したはずの沈線が蕨手化したり、上下区画線を連結する区画文を作出するなど2本隆帯構成の変質を窺わせる。地文は燃糸文が多いが、1は縄文地文でクランク文主構成を採用している。

他では2の無文口縁深鉢と浅鉢(4・5・10)が主なる出土品である。4は連続刺突によって文様帯内を加飾しており、他より先出する可能性もある。同じく、10は蛇体を思わせる隆帯上と、口縁直下の外面にのみ赤彩が施されている。

第6号住居跡(第56・90図)

前2軒の住居跡同様、遺物分布によって認定した住居跡である。

1・7は本住の造営期より先出するものである。前者は頸部に無文帯を持ち、口縁部文様帯は三角を基調とした半円区画によって構成されている。また、余白は沈線による三叉文や截断竹管による押圧痕が施される。7は並列の押し文を用いる阿玉台系土器。

本住居跡に伴うと思われるキャリバー形土器は2・8~10の4点である。頸部無文帯を有さず、連続弧状区画の頂部や渦巻部を目安とする懸垂文が直接施文されている。一方、連弧文土器には3・11・12がある。3は縦位沈線列で器面を分割した後に、3本一組の連弧を廻らす異質の土器。

壘形、あるいは類するものには4・13・14がある。前2点は口縁無文部の表現法、区画線の有無などに大きな差がある。14は詳細不明。また、15は台付土器脚部である。

出土土器総体としては、条線、矢羽状沈線などの地文が縄文地文と並び多用されるのが目立つ。また、10では円形刺突文も見られ、これらに囲まれた突起頂部には渦巻文が加えられている。

第7号住居跡（第57・58・90図）

南半部の調査が不可能であったものの、出土土器は多く、天箱5箱ほどを見た。15点を示したが、うち4個体が埋設土器である。4が炉内に供されたものであり、1・3・5は直線状に埋置されていた。埋設期の同時性、先後は判明していない。

キャリパー形土器は9点を示した。1は沈線のみで口縁部文様を描くことにより、周辺を造出し様隆帯にと転化させている。区画文と渦巻文を主要素として文様帯内を埋めるが、渦巻文を彷彿させる箇所は僅かである。地文縄文を疎に施し、蛇行沈線を7単位垂下させる。蛇行沈線の明る位置は区画間4本と中央3本があり、正置時の正背二面性を持たせている。

他の同系土器には退行した渦巻（8～10・12）と連続弧状区画（11）がある。前者の8・10では渦巻内に地文を施すのが特徴である。また、後者の区画隆帯は平坦で頂部に渦巻文を配することも無い。キャリパー形以外の器種が多いことも本住の特色とならうか。条線、縄文、無文の単文より連弧文（15）、大甕（7・13）、浅鉢（6）など多岐にわたっている。1・4の縄文施文は横位。

第8号住居跡（第58・91図）

天箱1箱ほどの出土で混在も多い。また、炉埋設土器があったが、風化のため復元できず、図示したものは全て覆土中の出土である。実測、拓影合わせて13点を示したが、このうち4点がキャリパー形土器口縁の文様帯部である。1は縮化した口縁部文様帯内の渦巻文と区画文、そして幅広い頸部無文帯が特徴であり、6も同様な文様構成をとる。一方、7は口縁部文様帯下位区画線を有しながらも帯中に連続弧状文を展開させる類である。

これに対する他器種には台付土器（2）と脚台部（12・13）、浅鉢（3）などがある。2と13は同一個体と思われるのだが、残存部に隔りがあり、接合できない。また、11は燃糸文を地文として縦横位に凹線を施すものであり、器種不明。内面下半に多量のヌスが付着している。

第9号住居跡（第59・91図）

遺物集中区認定住居跡であり、同区出土土器として14点を示した。1～9が勝坂系で、10～14を阿玉台系土器として扱った。

勝坂系土器のなかで口縁部文様帯を擁するものは4の1点のみであり、最も多く出土したのが胴部文様帯土器（9・10）とそれに類する土器（1・2）である。1は下帯を楕円区画施文で限定するなど5と同じ横帯文土器にも似ている。また、6は今調査で検出することの少なかった多段楕円区画文土器である。5を除いて、隆帯上には刻みが施され、さらに隆帯脇に転ずれば、爪形を添えるもの（1・5）と沈線を加えるもの（4・7～9）とに二分できる。余白充填には截断竹管の押圧が多用されている。

これに対する阿玉台系土器は、隆帯脇を複列の角押し、若しくはこれに類する押し文によって加飾する。胴下半の蛇行隆帯は中位の横位隆帯より垂下し、隆帯上には指頭による押圧も加わる。

第10号住居跡（第59・92図）

炉内に胴下半を切断された横帯文土器（2）が埋設されていた他、覆土中よりは天箱2箱ほどの土器が出土した。2は復元かなわなかった部分が多い。

横帯文系の土器と判定し得るものでは1・3・7の4点を示した。区画設定の基本施文法や充填

文は多岐にわたっており、一定しない。口縁部文様帯を残すものには1・2・7がある。いずれも連続三角区画施文、若しくはそれに類する区画設定を用いており、2では一部が横長となり口縁部横断面を菱形化させている。また、7は隆帯脇に直接爪形文を添え、余白に山形沈線を充填する典型的な構成を採用している。

一方、これらの胴部文様については不明な点が多く、全容を把握し得るのは3の1点のみである。同番は小無文帯を介する多段楕円区画施文を用いている。上段の楕円列は一単位のみ楕円化を逸しており、加えて各曲線部が耳たぶ状に肥大するのが特徴的である。隆帯脇の爪形は2列の三角押文とも表現すべき鋭利さを残しており、楕円内には山形沈線が充填される。1も同様な区画法を用いたと思われ、内部の充填は沈線線を利用する。また、2の胴部文様は、風化著しいため判読できなかったが僅かに横区画隆帯の痕跡が残り、頸部無文帯の存在を彷彿させる。また、頸部が帯内充填文を加えぬ無文帯となることも特徴として挙げられる。

その他では小型同筒土器(4・6)と器種不明土器(5)、阿玉台系土器(8)を示した。4は隆帯区画内の充填を背竹管工具による列点文と沈線列の二種で行っている点の特徴となろう。また、8は大波状口縁の頂部にあたる。基本的には双頭をなすが、一方が大型化し、貫通孔を抱いている。隆帯上には縄文が施され、脇は単施文沈線でナゾられている。

第11号住居跡(第60~64・92図)

今回報告の遺構のうち、最多の土器が出土した住居跡であるが、壁面を確認できなかったため、範囲を限定した認定遺物である。北端には埋設土器(1)があるものの、阿玉台式土器であり、本住の推定造営期(加曾利E I中葉段階)とは著しく掛け離れている。他の多くの出土土器は前述期の一括性を持つ良好なものであり、埋設土器に関しては調査時の誤認か掘残しであるという結論に達した。しかし、本住に関わるかも知れぬ周溝との先後など、残している問題も多い。

キャリパー形土器は32点(2~21・32~43)を示した。口縁部文様帯内に見る隆帯は、沈線ナゾリの2本一組隆帯を基本とし、渦巻部と接続部の差が明瞭となるものが多い。そして、組隆帯間を連結する粘土密は極端に少ない。また、上下文様帯区画線を連絡する縦線隆帯を用いるものが用じ、全体として区画文化が進んでいる。単位文相互の連結は欠くことのできぬ要素となっており、横帯内を隆帯文様が流れるように展開している。中には頂部に小渦巻を配する連続弧状区画のもの(8・32)もあり、類似する2・7・38のタイプや十字状区画(9・43)とともに本住の基本的な主構図となっている。

頸部では無文帯化が進んでおり、胴部には隆帯、沈線による渦巻、懸垂文が施されるものもある。第2号住居跡に多かった頸部の波状沈線は、ここでは極端に少なく、僅かな痕跡を残す8も無文帯下に配される形となっている。一方、口縁部形態では小波状口縁が多く見られ、発達した橋状把手(2~4・8・35)も現れる。地文は撫糸文と縄文の比が接近しており、他では無文、沈線の充填も少なからずある。12・13は器形屈折点を文様下限線と見たた地文のみの同形土器。

キャリパー形土器に対する浅鉢の多さも本住の特徴である。この二種以外の器種は殆ど見られない。頸部に文様帯を有するものは3個体を示した。いずれも有刻隆帯による楕円区画法を用いている。また、25は波状隆帯にのみ赤彩を施すもので、波状文末端は鎌首をもたげた蛇体とも映る。そ

の他、無文口縁深鉢(44)、有孔鉢(46)、器台(31)、脚台(47)等が出土している。

明らかに時期を異にするものは48である。後期初頭の所産で、充填縄文帯の開放位置と区画沈線の蛇行化、そしてこれらの配列は他に多くの例を見ない。

また、45は摺糸文地に乱雑な沈線文を加えるものだが、所属期の判断がつかない。

第12号住居跡(第65・93図)

覆土中より天箱2箱ほどの土器が出土した。全体の文様を彷彿させるものが2個体ある。

勝坂系の土器は器種不明なものも多く、文様も一定していない。横帯文土器と推定されるのが1である。同番は胴部文様帯に連続三角文転じた波状文を貼付する。隆帯脇は截断竹管による平行沈線で、さらに外を爪形文で縁どる。複数隆帯を介した現存部上端は無文帯が配されるようである。そして、今一つ器種の判定をし得るものに2がある。全面縄文土器の口縁部であり、直下には僅かな無文帯を配し、頸部は急折して胴部に至る。また、欠損部には把手が加えられていた痕跡もあり、これに続く沈線、爪形の痕跡が残る。

その他確実な勝坂系と思われるのは3・4のみで、5・6は器種不明、7～9は阿玉台系土器との折衷かとも思える破片である。五者はいずれも押し引き、角押文を隆帯、沈線に添えている。このうち、7・8は同一個体で、隆帯脇の押し引きを特徴としている。詳しい文様構成は不明だが、波頂(7)より垂下した隆帯が下方でJ字(8)化する構図が基本と思われる。8の下端では文様帯区画線らしき隆帯も残る。なお、これらは胎土に光彩放つ粒子を含まないものの、7・8などは明らかに当地とは異質の粘土を使用している。

胎土、施文法が阿玉台系土器の要素を充足するのは10～14の5点である。12・13は一回施文の複数角押を隆帯脇に附随させている。そして、主構図は波状口縁を前提としたY・X字状垂下隆帯を採用している。一方、14は横位区画線より派生する蛇行隆帯を胴部に廻らし、隆帯間に乱雑な押し引きを展開させている。隆帯脇は無施文。また、10では一列の角押が、そして11では平行沈線が隆帯脇に添えられている。

第13号住居跡

出土土器はない。

第14号住居跡(第65・93図)

3がが埋設土器であり、覆土中よりは天箱2箱程の破片が出土した。しかし、風化摩滅したものや無文部片が多く、図化し得たのは7点のみである。また、前代までの所産が多く混入していた。

実測図化したものは全て深鉢であるが、器種に大きな隔りがある。1は口縁部文様帯のみを主構成とする深鉢。把手部を基点とした半角状の幅広隆帯を基本線とし、隆帯上に交互刺突や沈線を、余白には沈線の三叉文、櫛状工具刺突、短沈線を施文している。胴下半は緩やかに内屈し、底部へと至る。一方、2は隆帯で画された胴上半部文様帯内に渦巻化した2本一組の沈線が廻っている。現存部縄文単文である3・4を合わせ、縄文施文方向には縦横位の双方があり、4では異原体を用いて縦位羽状を作出している。5は単開口の無文深鉢。鋭角に整えられた口唇部に特徴がある。

拓図3点は混入の可能性が強いものに集中してしまった。6は爪形列に並走する三角押文が特徴となる口縁部文様帯片、7は押し引きを加える浅鉢片、8は刺切模様みの残る阿玉台系土器である。

第15号住居跡 (第66・94図)

天箱2箱ほどの土器が出土した。20点を示したが、明らかに時期差を感じさせる5・13・16を含む。出土土器全体では沈線、条線列を地文、充填文として用いたものが目立つ。

キャリバー形土器は、5を含め、10点を図化した。1～3・10～12は頸部に確たる無文帯を有し、文様帯内の縮化渦巻は1・15に見ることができる。このうち、前者では楕円区画部と一体化する部分もある。また、3・9は連続弧状区画口縁部文様帯を採用し、3の胴部は無文帯を介在することなく、懸垂文が文様帯と直結している。

菱形土器には17～19がある。いずれも同部位で、胴上半屈折部周辺にあたる。17・18は大渦巻を幹とした文様が展開されると思われ、地文は前者が沈線列、後者が縄文を用いている。一方、14・15は器種不明、20は浅鉢文様帯部である。15は直開口の深鉢で、全面を条線で加飾するものとも推し得る。一部に平行沈線の横位線が見られるが詳細は不明である。

第16号住居跡 (第66・94図)

覆土中より天箱半箱程の破片が出土した。器種に変化が多く、同系においても一律でない構成を用いている。

1は欠損する口縁直下に沈線ナソリを加えるS字類似隆帯が貼付され、一部では交互刺突も追加されている。他の同一個体片と合わせ考えるに、横S字隆帯は相互に連結する4単位構成で屈曲部を廻っていたと思われる。また、胴中央の隆帯には指頭押圧が施されている。

一方、2・3・9は胴上位に隆帯で画された文様帯を擁する胴部文様帯土器である。2では沈線のみが文様帯内を加飾し、3・9では地文上に貼付された隆帯が区画文化する。同じ区画だが、7・8は口縁部文様帯内に三角、楕円区画を基調とし、内部を交互刺突、渦巻状沈線で埋める。両片は同一個体であり、文様帯直下に極端な屈折部を有し、山形把手(7)を一部に用いている。

また、4・10は他片に後続する時期の所産である。

第17号住居跡 (第67～70・95図)

覆土中よりは天箱5箱ほどの土器が出土している。復元し得たものの半数はキャリバー形土器の胴部であり、確立化した頸部無文帯を配することが多い。同様に、隆帯、沈線による蛇行文、渦巻文等を廻らせるものが多く、胴下半に膨らみを持たずに頸部が大きく外反するのが特徴的である。

口縁部文様帯内は、やや縮化した渦巻文構成が中心となる。隆帯は2本一組が多いものの、末端での変化が多く、2・5では突起、4では橋状把手と化している。主たる構図は連続弧状区画(2・5・6)や十字区画(1・19)などが特徴的で、渦巻部に附加する剣先状文(1・2・17・18)も多い。全体では区画文化が進む過程と受取れよう。また、地文との分離にナソリ沈線への傾斜が窺え、1・17・19・20などでは2本隆帯の平坦化に伴う貼付感の消失が進んでいる。地文は懸糸文と斜行縄文の二種があるが、後者が優勢である。なお、3は他より先出する可能性が強い。

他器種では15・16・21がある。16は今調査で唯一復元かかった有孔土器である。鉢形上位に隆帯を配し、これを僅かにかすめて穿孔を行う。穿孔は推定8単位。一方、21は大甕頸部片である。

第18号住居跡 (第70・95図)

天箱2箱ほどの土器が覆土中より出土した。器形復元可能土器は2個体ある。このうち、1は炉

内埋設土器であり、全体の構成を彷彿させるものは同番のみである。

キャリバー形土器は4点(3~6)を示した。口縁部文様帯内はいずれも渦巻文を介する区画文によって構成され、4では楕円区画文が渦巻文を抱込む。同番を除き、文様帯下には頸部無文帯が配されるが、3・5では口縁部文様帯下位区画線が曖昧となっている。6は曾利系胴部片。

一方、連弧文土器は4点(1・7~9)を示した。1を除けば文様構成が判然としなない。同番は3本一組の沈線を基本として重層連弧を描くが、上下分帯区画線とは結合せず、連弧独自で展開することを本意として施文されている。連弧単位は上より7・7・6。7~9の地文が条線で賄われているのに対し、こちらは捺糸文を用いている。これに対する後出3点は全て同一個体であり、上半帯に連弧を、下半帯に懸垂文を配する型のものである。

他には2の赤彩台付土器脚台部、若しくは器台がある。いずれの器種であるかは判断がつかなかった。しかし、残存部最上端ではタガ状隆帯とも思える隆起が残るため、前者の可能性が高い。

一方、10・11は縄文後期の所産と思しき破片で、両片は同一個体。細条線を地文とし、細隆起線区画の後、沈線を充填する。構成等の詳細は不明であり、内面調整等の特徴にて時期を推定した。

第19号住居跡(第71図)

本住居跡に伴うものとして確定し得たのは1のみである。同番は口縁より底部まで変化なく移行する大型深鉢。主構図は微隆起線区画によって作出している。口縁下の無文帯に連結した渦巻文が二段にわたって施され、これが4単位めぐる。渦巻上には微隆起を誇張した突起部が設けられている。区画外は全て充填縄文。砂粒混和多く風化著しい。

第20号住居跡(第95図)

出土遺物は極端に少なく、図示し得たのは1の無文赤彩浅鉢片のみである。また残る破片の中にも時期判定に有効な破片がない。

第21号住居跡(第71図)

2点を示した。このうち1は炉埋設土器である。一方、2は本住居跡の造営期とは関連を持たず、重複していたであろう土壌あるいは単独の埋嚢の付属遺物と思われる。しかし覆土中ではこれを確認できず、本住の出土遺物として扱った。

1は胴部のみ残存する横帯文深鉢。文様帯下限を楕円区画文によって代え、頸部には沈線線による文様帯らしい構成を見るが詳細不明。幅広の区画内は崩れた連続三角文が廻らされ、隆帯に沿った平行沈線線には背竹管による角押と半截竹管文が施され、さらに、横帯下端では三角押文も一周している。楕円区画と連続三角文の単位は4であるが、双方の区画が一致しない。

一方、2は緩く内彎する波状縁部を基準として蕨手状渦巻が描かれている。文様描出は二本隆帯を幅広くナゾる方法で行われ、展開図の如き類希な文様構図を作出する。ナゾりは充填法の縄文施文後に行われている。

第22号住居跡(第72~76・96図)

確認覆土は満足の深度を有さなかったにもかかわらず、天箱10箱にも及ぶ大量の土器が出土した。混在も多かったが、全体では従来画されている先後の要素が混合した様となっている。検出した破片はキャリバー形土器のそれが多く、他器種、特に浅鉢は極端に少なかった。

キャリバー形土器は32個体を示した(1~22・27~36)。口縁部文様帯内の文様描出は、沈線を添える2本一組隆帯が主として担当しており、組隆帯を連結する粘土瘤も幾つかの土器に見られる。描出される構図は横S字状を基調とするものが多用され、単位文間の連結を行うことも少なくない。他には十字状区画文(1・15)や半球状突起による区画文等もあり、1では十字上段の隆帯が肥大連続する特異な杵状文を採用している。

一般に、区画文化した文様帯を持つ土器ほど低隆帯が施され、S字類似の構図を採用するものの中で渦巻間が長いほど隆帯間連結の粘土瘤を施す例が多い。また、地文は燃糸文が斜行縄文をおさえるが、両者の割合はかなり接近している。

頸部には無文帯を配するものも多いが、設定を行わないものや、横位波状沈線列で頸部に趣向を凝らすものが一般的である。また、5・31・33のように口縁部文様帯の下位区画を行わないものもある。一方、胴下半では縄文、燃糸文の単文が目立ち、懸垂文や渦巻文を加えるものは頸部に無文帯や横位区画線を有することを前提としている。

他種では無筋斜縄文のみのコップ形土器(24)、や浅鉢(25・38~40)、器台(26)などがある。また、23は棒状粘土を口縁下に配列し、頸部を無文帯としている。キャリバー形土器の文様帯構成法にも類似するが、詳細不明である。

第23号住居跡(第76・97図)

覆土中より天箱1箱強の土器が出土した。他の勝坂期の住居跡出土品と同じく、器種は多岐に及び、判定にまで至らないものも多い。

横帯文土器としては1~3の3点が挙げられよう。区画と主構図は有刻隆帯と、それをナゾる平行沈線、さらに区画内を埋める爪形文で賄われている。そして、1は半截竹管文と三叉状陰刻文が余白を埋めている。また、2では三叉状陰刻と三角押列による山形文が、3では沈線列が同じ責を果たす。1・3の区画は連続三角文を基本としており、前者ではこの単位を利用した眼鏡状の把手が付けられる。これに対する2の詳細は不明だが、複数段設定された横帯間は無文として残すことなく、爪形で隙間なく埋められている。

他の勝坂系土器では縦位区画文土器と類似種(4・5)、抽象文土器類似種(7~9)などを示した。4は縄文地文と三叉状文が区画内に施され、5では半截竹管文が充填される。一方、7は縄文地文上に抽象文作出法と同じ施文法(爪形と山形沈線)で縦位の垂下文を描く。また、8・9は単文施文土器に挿入される独立幾可文の一部で、前者は平行沈線を、後者は指ナゲの暗文を利用している。6は無文地に有刻隆帯にて渦巻文を描くものだが、器形その他、判別つかなかった。

異系や時期を異にするものは10~13がある。このうち、12は隆帯脇に平行沈線を添える阿玉台系土器で地文縄文が観察できる。また、10・11は雲母片を含まぬが、阿玉台系土器に近似する胎土を用いており、異質の痕を受ける。文様は勝坂系土器に普遍的な連続三角区画と隆帯脇の爪形文が特徴であるが、爪形列が隆帯脇より開放されて、独自に区画文を成する点で異風である。13は加曾利E I式キャリバー形土器の把手部。

第24号住居跡(第76・97図)

覆土中より56点、埋設土器として2点を検出した。これらの多くが無文の浅鉢片で、造営期判定

に窮した。浅鉢は図示した3個体(1・2・5)の他に少なくとも1個体があり、出土点数に対する浅鉢の多さが特徴的な住居とも言える。

他で、文様判別可能なものは3・4の2点である。3はキャリバー形土器頸部。区画文化した口縁部文様帯内にやや曲線的な渦巻文が加えられる。一方、4は、図示していない同一個体片を見るに、口縁下より直接蛇行沈線、隆帯が垂下する。

第25号住居跡(第77・97図)

埋設土器3個体を含め、5個体を示した。覆土中よりは天箱3箱ほどの出土しかなく、1として示したキャリバー形土器は本住の造営期とは関わりのないものである。2・3は中央に並列埋設され、4は壁際に単独で埋置されていたが、3者はいずれも倒立位の伏壺として出土した。

2・3はいずれも平縁のキャリバー形土器、口縁部文様帯の主構図は区画文が相互に入組み、楕円区画部は崩化している。また、その間に配される渦巻は内部に地文を施すほどに退行し、2では楕円区画文と同値となっている。区画隆帯は扁平で、脇をナゾる沈線は幅広となる。また、文様帯の下位区画が一定せず、区画隆帯は下方で曖昧となり消滅するのも特徴の一つである。胴部は幅広分帯の磨消縄文帯で占められている。双方ともに、口縁部と胴部の文様帯単位が一致しない。

一方、4は直開口の大甕上半である。文様帯区画を2列の短沈線で代え、以下を低隆帯による区画文にて飾る。展開図によっても明らかだが、区画内に配される大渦巻文は2単位であり、隆帯をナゾる縦位蕨手状沈線の渦巻方向などより、正背の二面性を持って文様が構成されていることがわかる。区画内は短沈線で充填されるが、それぞれに異風の趣向を凝らしている。

第26号住居跡(第78・98図)

埋設土器はなく、覆土中より天箱2箱ほどの土器が出土した。混在が多く、図示した中には造営期に先後するものが多い。しかし、多くは沈線列を専ら用いる勝坂末葉期の所産であった。

横帯文土器は7があたり、10も胴下半部であろう。7は三叉状陰刻と余白への爪形文で器面を埋める。頸部の分帯部に相当し、隆帯脇は平行沈線が添えられる。頸部は無文帯となり、口縁部文様帯の連続三角区画の一端が窺える。一方、9は縦位区画文土器である。本遺跡のそれは変形区画が多いのだが、同番は数少ない方形区画を用いた例の重層部にあたる。区画は平行沈線を用い、内部は区画線に沿った沈線列が充填されている。

これらに対する後出的要素では11の単段楕円区画文土器と8・12・13の胴部文様帯土器がある。前者は区画帯幅が狭く、充填沈線列が斜方向となる点に特徴が見出せる。また、後者のうち、8・13は区画、主構図作出隆帯が複数となり、12・13では幅広の沈線が余白を埋める。13の展開は連続三角文、12はその変化部と思われ、12の充填文は区画内で二分されることがない。

器形を復元し得たものは1の小型円筒土器と2の単施文縄文土器がある。前者は隆帯を使用せず沈線と刻みで文様帯内の描出を賄っている。交互刺突帯によって画された文様帯内を予め縦位に区画し梯子状文で内部を埋めるが、横X字状区画を題材として正背二面性を持つ文様が展開したと思われる。2も1と同様に円筒形となるのだが、地文上に暗文で重弧文を描いている。

14~16は浅鉢とそれに類する器種と思われるが、前二者の場合、深鉢にも見られる断面形と文様であるため断定はできない。一方、17~19は阿玉台系土器であるが、17・18には雲母片が混和され

ていない。18は大波状口縁の把手部であり、幅広い角押し（爪形）が隆帯に沿って施文される。19は金色の雲母を多く含んでおり、縄文地文上に沈線の付属する有刻隆帯が展開する。

第27号住居跡

出土土器はない。

第28号住居跡（第79・98図）

全て覆土中の出土で、天箱1箱ほどの破片が出土した。

図示したものは、6を除きキャリバー形土器である。出土口縁部片には数単位の小波状を呈するものが多く、1～4もこれにあたる。1は崩化した楕円区画文が相互に入組み、波頂下の渦巻文が楕円文化している。大型化した渦巻内には地文として刺突が加えられ、これは2～4の縄文施文にも共通している。また、2の波頂裏には小突起も施されている。胴部の分帯が観察できるのは1・5の2点であるが、5では無文、縄文帯の双方で、中央に沈線を追加している。

一方、6は無文の鉢形土器。内傾する口縁部形態は両耳壺系の器形の一部と思われる。赤彩有。

第29号住居跡（第79・80・99図）

炉内に上下を切断された縄文のみの土器（5）が埋設されていた。壁面が確認できなかったために、覆土中の出土遺物は推定範囲内出土品をあてた。

本住出土土器の中で最も特徴的なのが胴部文様帯土器（2・3）である。双方とも口径超45cm、推定器高60cm級の大型品である。口縁下を無文とする変形を呈し、上位屈折部と下位に扁平幅広い隆帯の区画線を廻らし胴膨張部に文様帯を限定している。文様帯内部の主区画文も同様な隆帯によって隔われており、2では燃糸文と刻みを、3は複数沈線と交互刺突が隆帯上に加えられている。文様帯内の主構図は、2が縦区画の後渦巻文、3が波状化した連続三角文である。後者では4単位波頂の一つを分割し渦巻文を加えている。また、前者のそれは推定5単位で、口縁部には、中空把手も加えられている。文様帯内の地文は3が沈線列の充填であるのに対し、2では燃糸文地文を用い、文様帯下にも同文が続いている。

他には3点を示した。1はキャリバー様の器形を用い、口縁直下に2本の横位突帯を設定している。4単位波状の頂部では2の間を渡す橋状突起が取付けられ、他系の要素を想起させる。以下の地文は燃糸文が担い、頸部には横位沈線列が廻る。一方、4は隆帯部赤彩浅鉢、6は阿玉台系土器の波状口縁部であるが、後者は本住の造営期より遡る時期のものであろう。

第30号住居跡（第80・99図）

天箱1箱程の土器が出土した。図示したものはキャリバー形土器が中心である。隆帯によって口縁部文様帯内を加飾するものは、2本一組の隆帯を用いることが多い。隆帯脇は沈線でナゾられ、貼付感の残る断面形状が特徴となる。流れるように文様帯内を展開しながらも、その末端には縮化した渦巻が付されたり（4・5）、小区画を構成（2）している。1は所謂ブラジャータイプの土器。これらの頸部は無文帯として確立しており、地文は縄文が主となっている。同形土器の胴部としては7の隆帯大渦巻片を示し得たのみである。

一方、8は変形土器の無文内彎口縁部であるが、本住の造営期より遡る時期の所産であらう。3は器台。

第31号住居跡（第81図）

床面より多少浮いた形だが、器形を推し得る2個体が出土している。ところが、1については部分的な復元に留まってしまった。他には風化した小片が40点ほど出土したに過ぎない。

1は文様帯区画線より派生する扁平隆帯による渦巻が特徴的なキャリバー形土器である。胴部は幅狭の無文帯と蛇行沈線が廻らされる。一方、2は壘形土器の胴部である。縄文を地文として指頭押圧を加える7本の隆帯が垂下するが、正背がそれぞれ3と4単位になる二面性を持っている。

第32号住居跡（第81・82・99図）

覆土中より天箱2箱ほどの土器が出土した。

本住の特徴となるのは縦位区画土器（1・2・5）である。3点ともに隆帯で基本区画を設定し、さらに沈線が内部を区画する。隆帯に沿って平行沈線を施すのを常とし、1・2では爪形文や截断竹管の押圧文を述べている。小区画は方形となるものがなく、1では基本隆帯のうねりに影響されて三角形や菱形の区画を用いるに至っている。同番では連続三角区画を基本とする同土器では稀な口縁部文様帯が付属しており、推定4単位の小突起が配される。器形も変化のあるキャリバー形で、2に見る内傾口縁形態や、5の円筒形など同土器に普遍的な形態とは異質である。文様の展開は正背の二面性を有している。

これらに類似するのが4・9・10である。4・10は縄文地文を縦長に区画し爪形、半弧状文を加えている。一方、9の詳しい展開は不明で、これは横帯文土器と思しき8でも同様である。8の場合、横帯間に配されるはずの無文帯が重層している。同じ横帯文土器の下半では11の楕円区画部もある。隆帯脇に直接爪形文が添えられる底部片である。

また、器種そのものが不明であるのが3・12・13である。このうち、3は抽象文土器に類するが詳しい文様展開は不明。文様描出は1などと同じだが、地文縄文間に無文帯を介在させる点に特徴がある。他には縄文単文の14・浅鉢の6・16などがあるが、16は雲母片を多量に混和し、主文を押引き沈線で描く阿玉台系土器である。

第33号住居跡（第82・100図）

300点ほど出土したが、風化を受けた小片が多く、図示し得たのは3点のみである。

1は円筒形深鉢の文様帯部。刻み、あるいは交互刺突が加えられた幅広隆帯下の空白は沈線によって補填される。爪形様刻みは隆帯上に限定されている。一方、2・3の両点は胴上半に文様帯を配す壘形土器である。幅広の隆帯上に交互刺突を加え、刺突間には沈線を施している。その結果、扁平な隆帯は分割され、二本のそれとも映る。1と同様、隆帯下の余白は沈線が充填される。

第34号住居跡

出土土器として認定し得たものはない。

第35号住居跡

南壁際に深鉢胴部片が埋設されていたものの、風化著しく復元かなわなかった。他に本住出土と認定し得るものはなく、不明と言わざるを得ない。

第36号住居跡（第83・84・100図）

埋設土器は2個体あったが、埋設土器№2は風化のため図化を果たせなかった。同土器はキャリ

バー形土器底部で、縦位沈線らしき痕跡を見るが、他は判別がつかない。炉内に埋設されていた3を含め、本住よりは天箱9箱ほどの土器が出土している。

キャリバー形土器は13点を示した。多くは平坦な陸帯を幅広く沈線でナゾることで口縁部文様帯内の区画文を作出している。下位区画線は腹味で、1・15では胴部文様と入組んでいる。主構図は楕円区画文と渦巻文であるが、多くの楕円区画文は渦巻と交わることによって変形化し、渦巻文は曲率が緩み地文が進出するものもある。

これらの胴部は2線間無文の懸垂文が縄文帯と交互に配されるが、1では無文帯に蕨手状沈線が、5では縄文帯に蛇行沈線が加えられる。前者では実測図右端の無文帯が広がる徴候を見せており、H字状区画を成する可能性もある。また、4のそれは上端で連結し、逆U字状化している。同文を利用する例として16も挙げることができるが、こちらは口縁部文様帯を欠失する型である。無文帯の作出は磨消縄文法を用いるのが大勢だが、4・16は充填法を用いている。

他器種では連弧文土器、菱形土器、浅鉢形土器などがある。連弧文土器(9・17)は3本一組の沈線によって連弧を描出する。また、菱形土器(18・20~22)のうち、後三者は同一個体片であり、斜沈線列上にソーメン状浮文を貼付している。そして、浅鉢(10・11・19)のうち無文のものは、口径と器高の比が近い点に特徴がある。

第37号住居跡(第83・101図)

埋設土器を検出したが、風化著しく実測図化を果たせなかった。陸帯縦位区画内に矢羽状沈線を加える中部系キャリバー形土器の胴下半がこれにあたる。

覆土中よりは天箱1箱弱の土器が出土している。混在も多いが、加曾利EⅡ中葉期に特徴的な土器が最もまとまっている。2・3はキャリバー形土器口縁部の文様帯部、渦巻と楕円区画が入組んで区画配列が崩化している。しかし渦巻中には縄文施文を行っていない。一方、1は大甕の上半部だが、頸部刺突帯と直下の渦巻文が判別できるのみで詳細は不明。5は文様帯付の浅鉢、6は有孔罎付の壺形土器である。

第38号住居跡(第85・101図)

覆土中より天箱3箱の土器が出土した。

キャリバー形土器は7点を示した。大部分が口縁部文様帯に縮化した渦巻文を持ち、渦巻文間を楕円区画で埋める。陸帯は平坦な作り出し様となり、陸帯自体より、その内外に施された沈線が文様表現の担い手となっている。

7点のうち、明確な頸部無文帯を有するのは2の1点のみで、他は口縁部文様帯下位区画線にまで胴部縄文が迫っている。7は縄文中に3本一組の懸垂文を施すが、外沈線間を磨消しておらず、これは大渦巻を描く1においても同様である。また、4では唯一磨消縄文らしき痕跡を残すが詳しい構成がわからない。短沈線を充填する区画文の一部が波頂部で棒状の突起へと発達するものだが、頸部へと伸びた同突起がどのように変化するかは不明。

他器種では連弧文土器(8・9)と菱形土器(10)がある。前2点は同一個体と思えるが、3本一組の短沈線を鋸歯状に連続させることにより連弧に代えている。一方、10は曾利系要素のソーメン状浮文を沈線列上に渡す口縁直下の屈曲部。

第39号住居跡 (第86・101・102図)

埋設土器が2個体あり、2・3がこれにあたる。前者は倒立位で埋置された伏甕であり、後者は正位のまま埋設されていた。また、覆土中より天箱4箱ほどの土器が出土している。

キャリバー形土器は7点を示した(1・2・4~8)が、混在の可能性を残すものも含んでいる。一般的な特徴を列記すると、口縁文様帯は区画文化が進み、2・7などでは渦巻文の形骸化が進んでいる。また、1・4・7には頸部無文帯が配されており、埋設土器である2との違いを見せている。2の胴部は2線間磨消縄文が廻らされている。無文帯幅は狭く、設定基準は口縁部文様帯の単位に従っている。

連弧文土器は3つの埋設土器と9を示した。前者の上半部は三角区画文の交互連続と、その間に挿入された蹠手状渦巻文によって3本一組の沈線構成を保持している。余白には前述渦巻を含め、小渦巻が配され、これは下半部でも同様である。そして、下半部の渦巻方向では上2、下4という変則配置を用いており、上方向を両側面に見れば、正背の二面性を意図したものととれる。地文は、3・9ともに条線だが、3では沈線間を磨消している。

他器種では11・12の甕形土器がある。いずれも沈線列を基本とし、11では斜位浮文で頸部区画帯加飾している。また、10は波状口縁を有する直開口深鉢である。隆帯区画を頸部に配し、以下は同文による懸垂文、区画内には頂部渦巻の鋸歯状文を施している。

第40号住居跡 (第87・102図)

埋設土器が2個体あり、1・2がこれに相当する。両者は同一狭内に埋置されていたものであり、少なくとも、埋設時の同時性は確実である。

キャリバー形土器は、埋設2個体を含め6点を示した。口縁文様帯内は槽田区画の変形化が進んでおり、1・6では三角形状となっている。また、1の渦巻部は曲率が緩み、内部にも地文を施す区画文と化している。区画の作出は、平坦な隆帯を基調としながらも、渦巻部などでは沈線描出への依存が大きい。一方、胴部文様帯は磨消縄文による懸垂文が一般的で、1の縄文帯中には3本一組となる蛇行沈線らしき文様も加えられている。

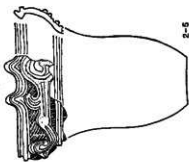
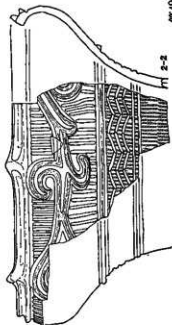
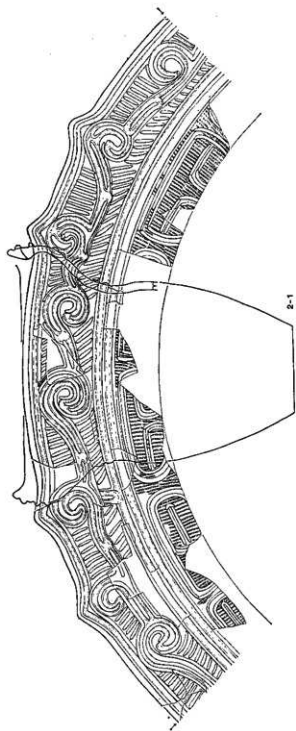
他器種では連弧文土器(9)、大甕(10)、浅鉢(4・11)がある。10・11の文様描出は隆帯で賄われ、9の地文は斜行縄文と縦位条線を重畳させる。また、4は双頭の突起を有し、丸底と思われる稀有なもので、あるいは脚台付土器となるやも知れぬ。

第41号住居跡 (第87・102図)

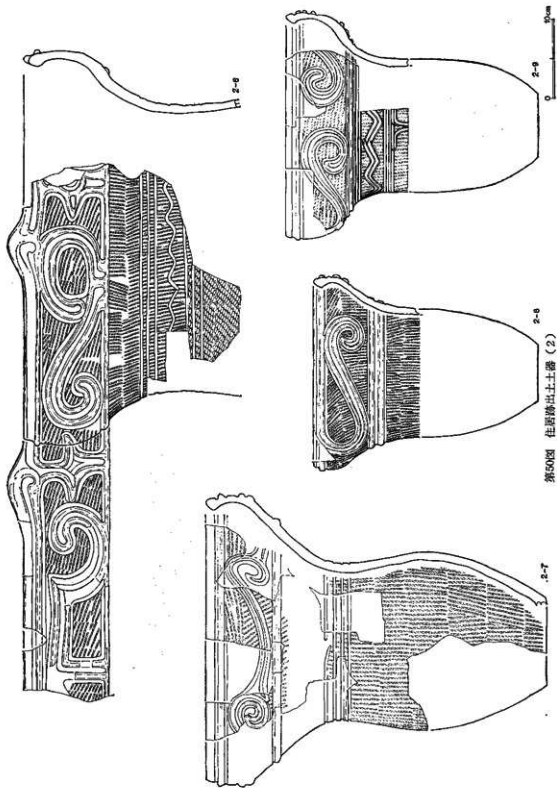
3点を示した。このうち、1は炉内に埋設されたものであり、上下を切断されている。2はキャリバー形土器口縁の文様帯部。幅広の沈線にて平坦な隆帯をナゾる。一方、1・3は胴部磨消縄文区画部である。無文帯幅は狭く、1では12単位の縄文帯が廻る。

第42号住居跡

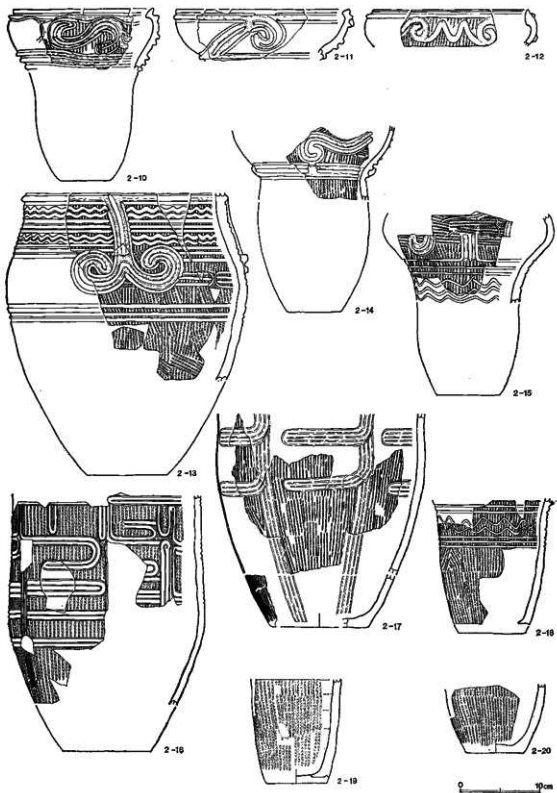
摩滅した小片が28点ほど出土したのみで、拓影等の図示はしていない。僅かながら残された文様を見るに、区画間に縮化した渦巻を扁平な隆帯で作出する口縁文様帯と、頸部に無文帯を有するキャリバー形土器片が多い。



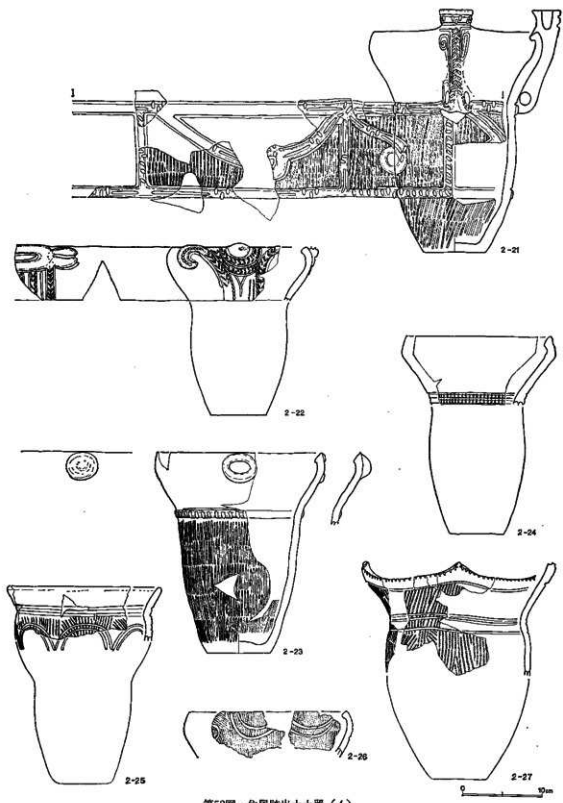
第49圖 佐原跡出土土器(1)



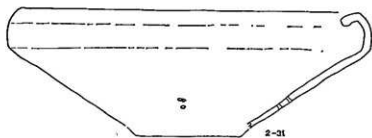
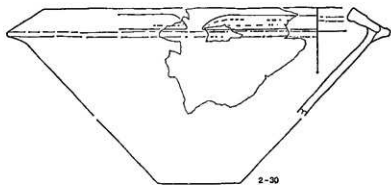
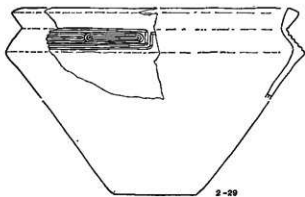
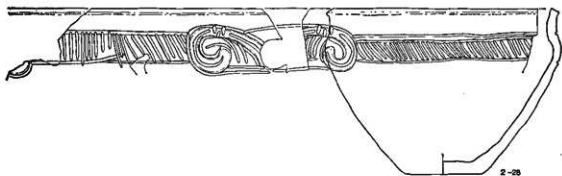
第50图 桂原跡出土土器(2)



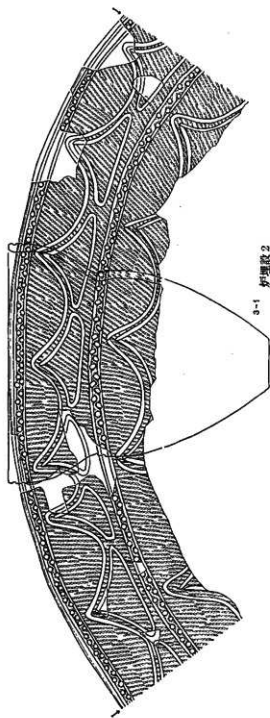
第51图 住居跡出土土器(3)



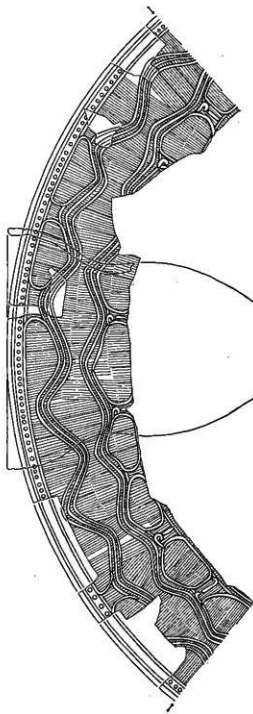
第52图 住居跡出土土器(4)



第53圖 住居跡出土土器(5)



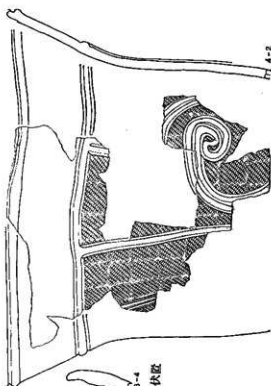
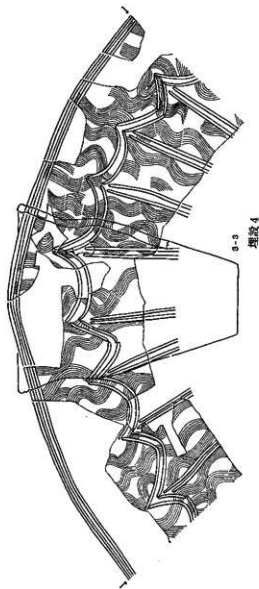
3-1 炉壁段 2



3-2 炉壁段 1

第54图 在居庸出土器(6)





3-4
伏設

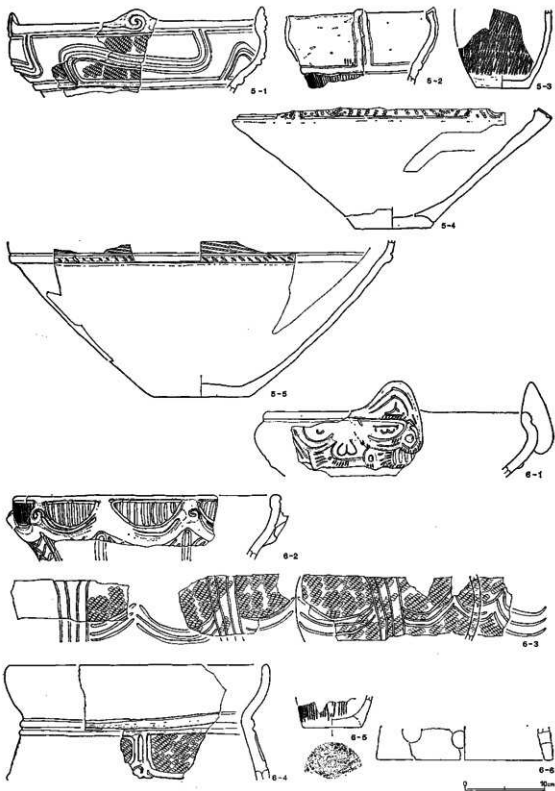


4-1

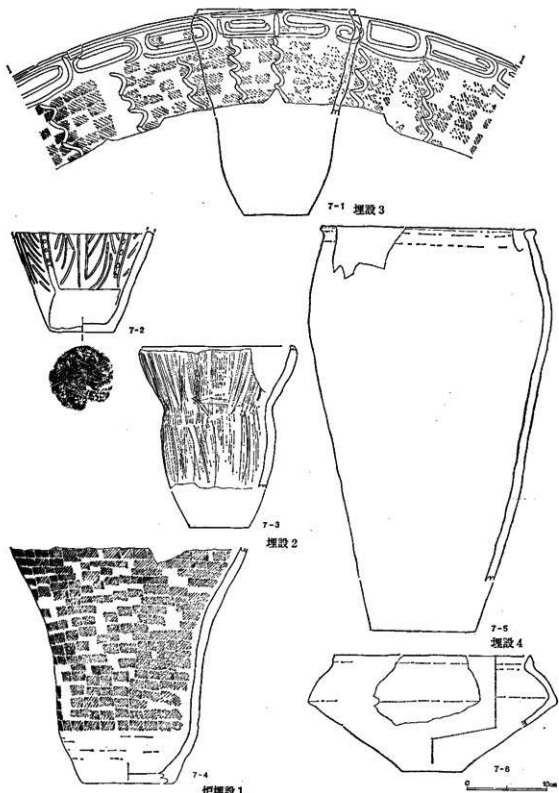


4-2

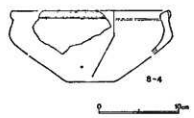
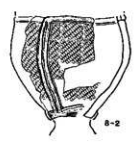
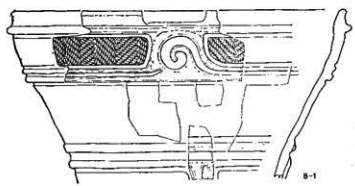
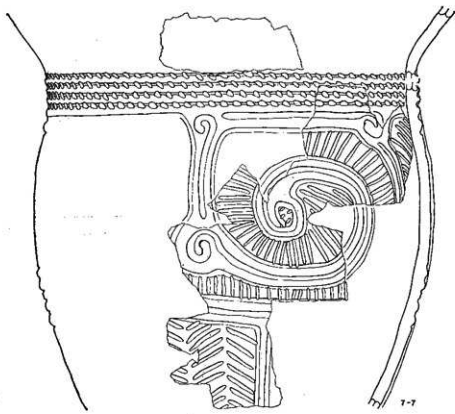
第55圖 住居跡出土器(7)



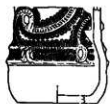
第56圖 住居跡出土土器(8)



第57圖 住居跡出土土器 (9)



第58圖 住居跡出土土器 (10)



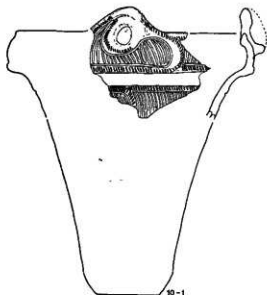
9-1



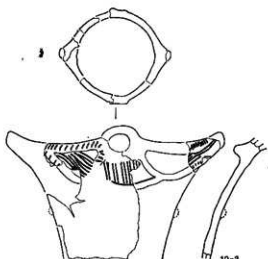
9-2



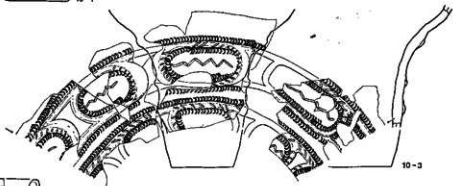
9-3



10-1



10-2
炉壇設1



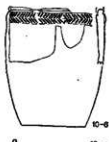
10-3



10-4



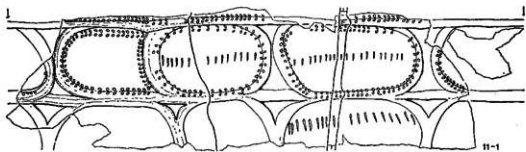
10-5



10-6

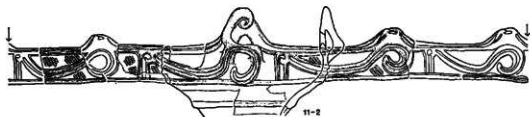
0 10cm

第59回 住居跡出土土器 (11)

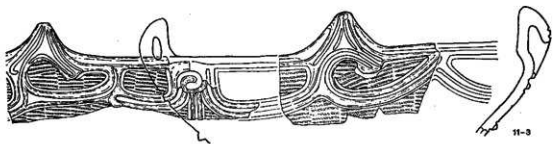


11-1

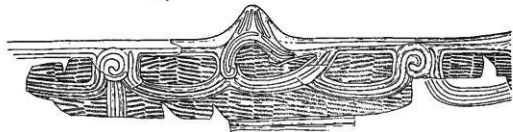
埋設1



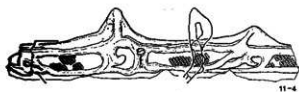
11-2



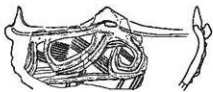
11-3



第60圖 住居跡出土土器(12)



11-4



11-5



11-6



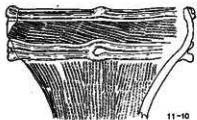
11-7



11-8



11-9



11-10



11-11



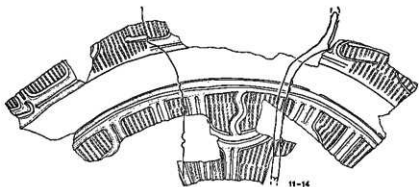
11-12



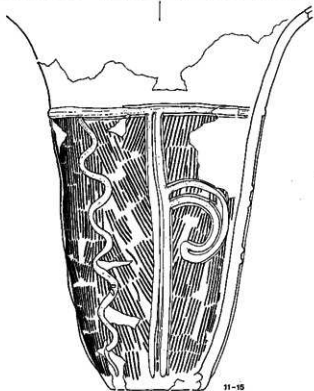
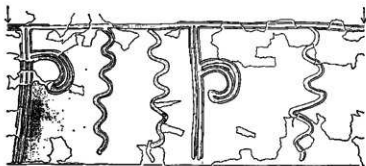
11-13



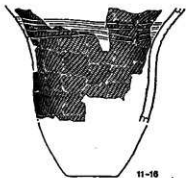
第61圖 住居跡出土土器 (13)



11-14



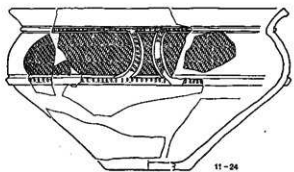
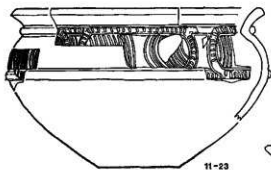
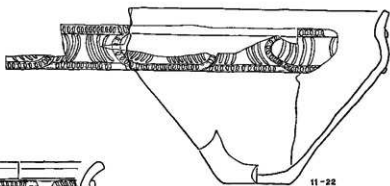
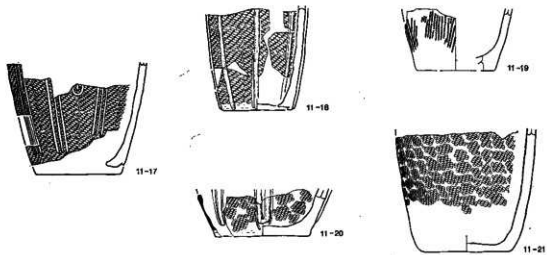
11-15



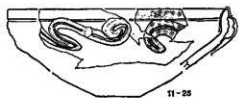
11-16



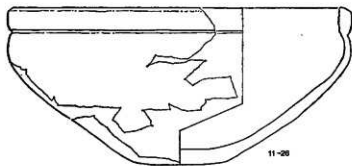
第62図 住居跡出土土器(14)



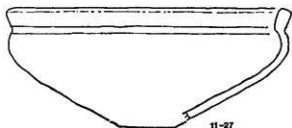
第63圖 住居跡出土土器 (15)



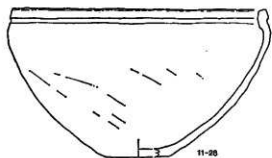
11-25



11-26



11-27



11-28



11-29



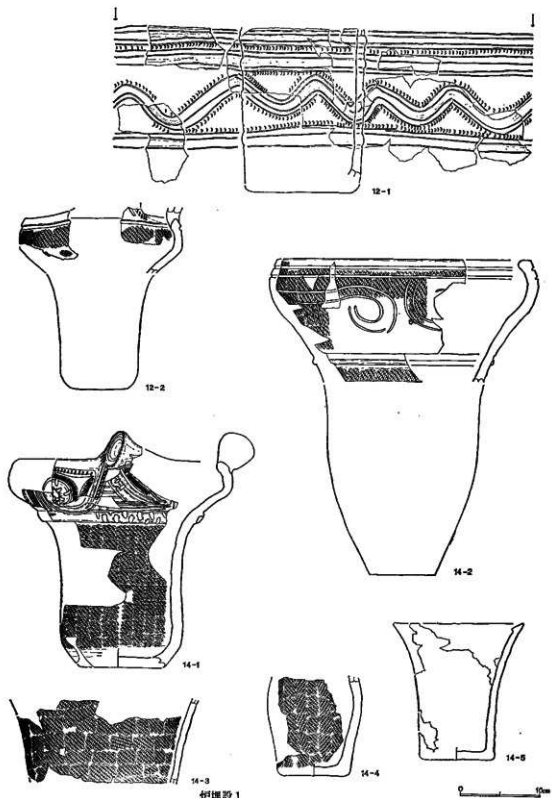
11-30



11-31

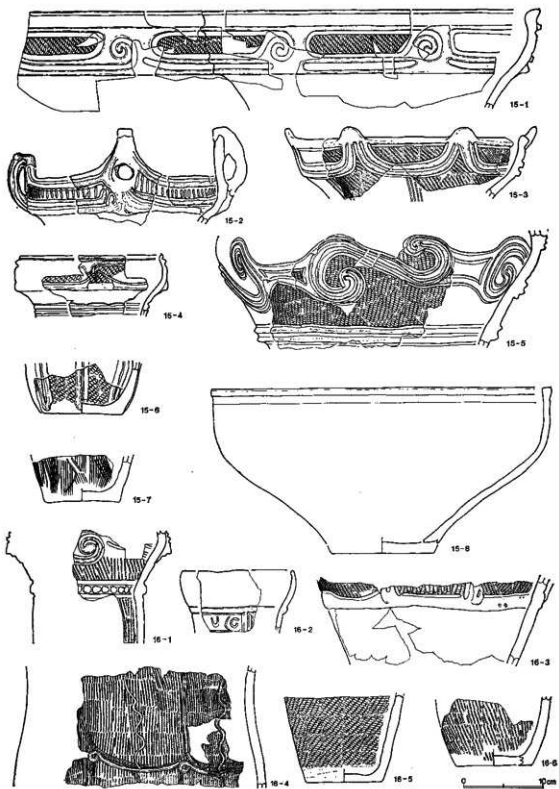


第64圖 住居跡出土土器 (16)

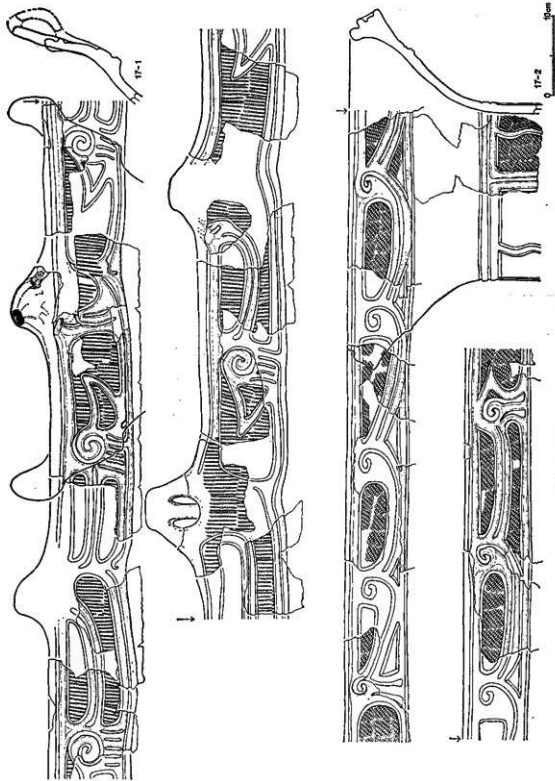


炉埋設 1

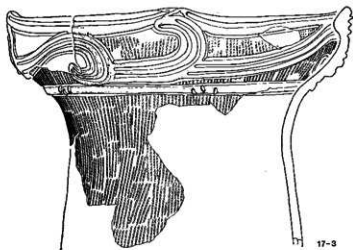
第65图 住居跡出土土器 (17)



第66图 住居跡出土土器 (18)



第67圖 住居跡出土土器 (19)



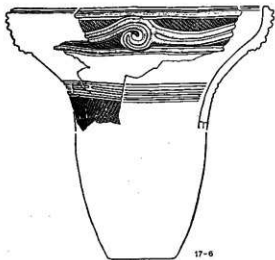
17-3



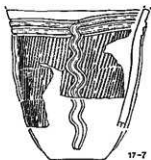
17-4



17-5



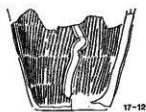
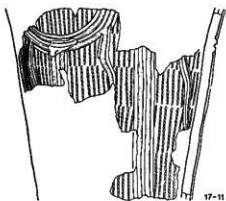
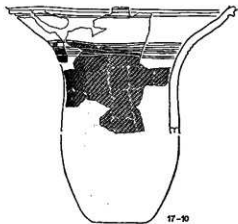
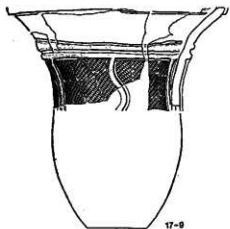
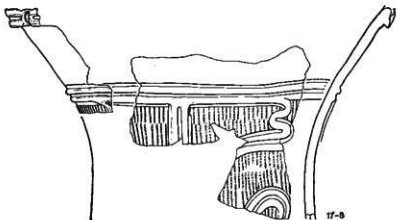
17-6



17-7



第68圖 住居跡出土土器 (20)



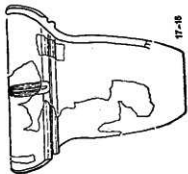
第69圖 住居跡出土土器 (21)



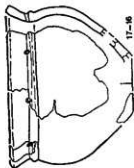
17-13



17-14



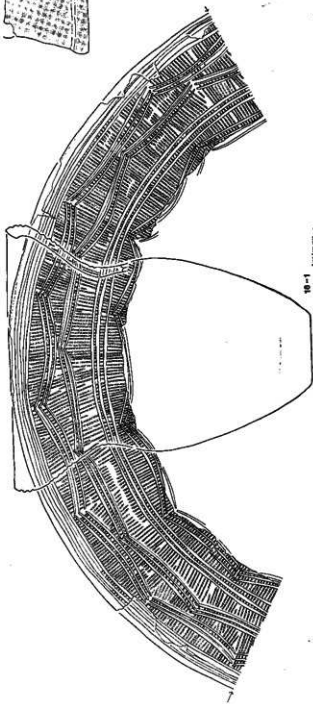
17-15



17-16



18-2

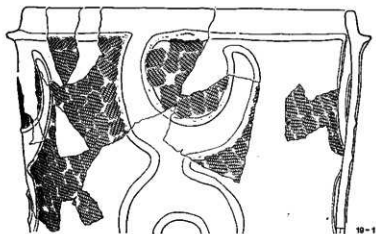


18-1

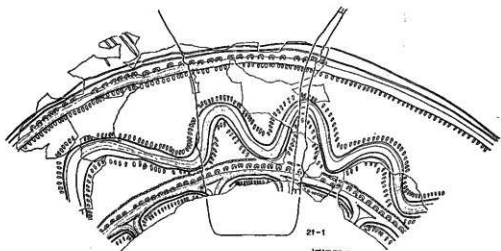
剖面図1

第70回 住居跡出土土器 (22)



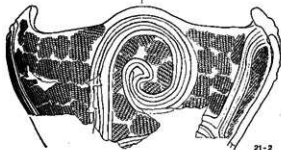


10-1



21-1

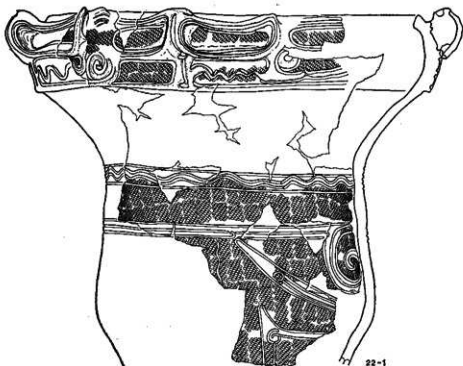
炉埕段 1



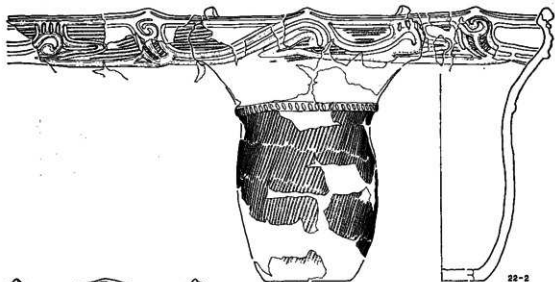
21-2

0 10cm

第71圖 住居跡出土土器 (23)



22-1



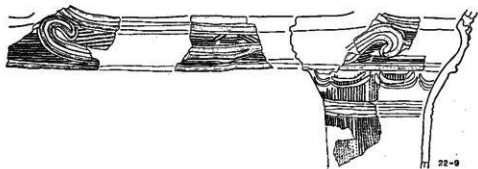
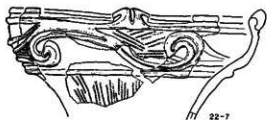
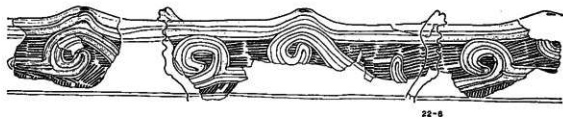
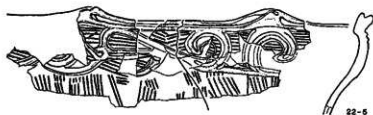
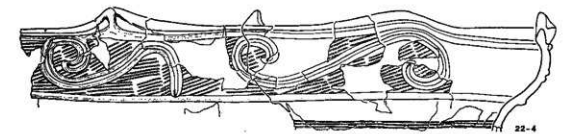
22-2



22-3



第72圖 住居跡出土土器 (24)

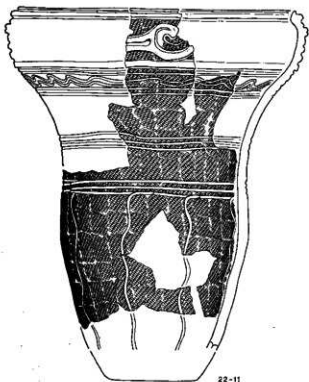


0 10cm

第73图 住居跡出土土器 (25)



22-10



22-11



22-12



22-13



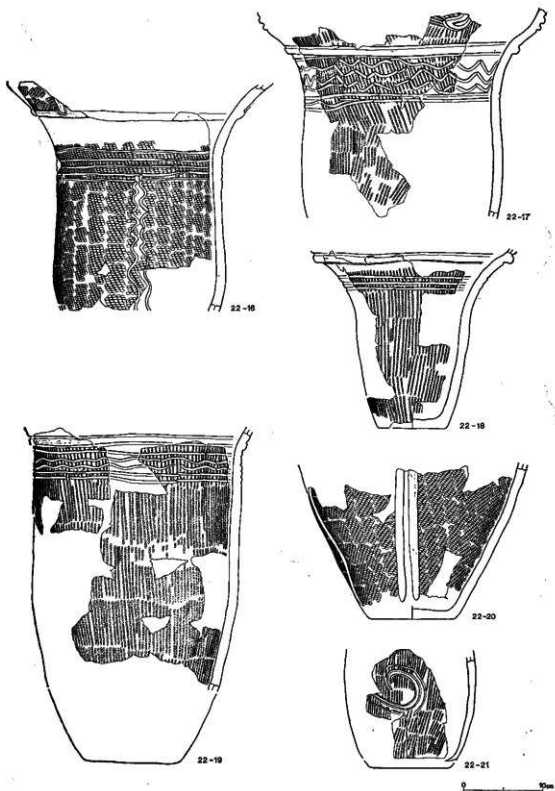
22-14



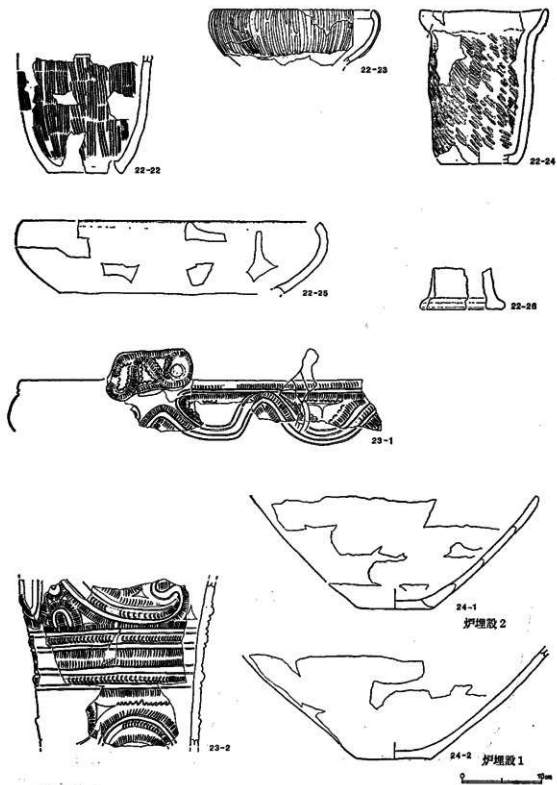
22-15

0 10cm

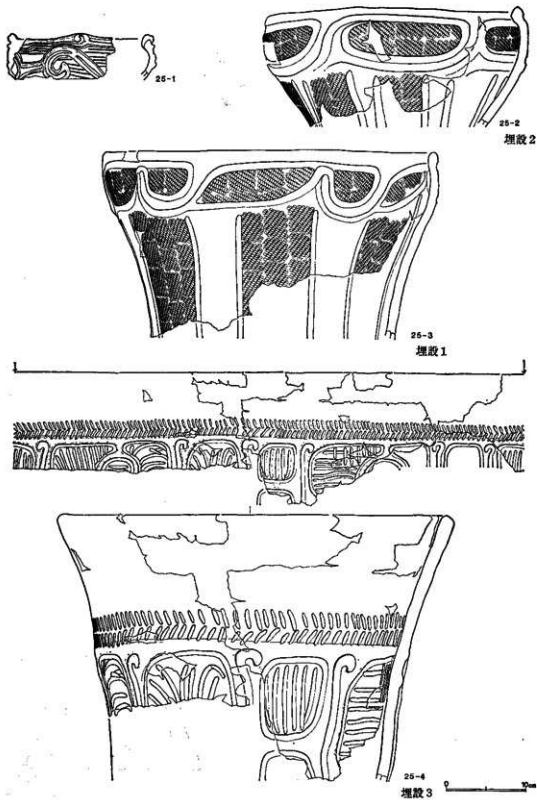
第74图 住居跡出土土器 (26)



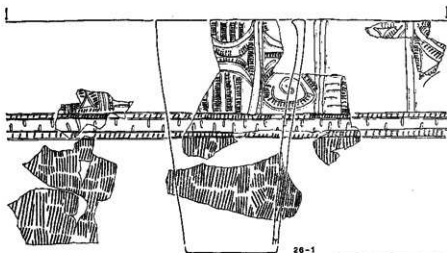
第75圖 住居跡出土土器 (27)



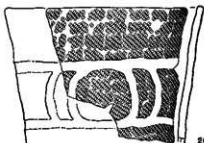
第76图 住居跡出土土器 (28)



第77圖 住居跡出土土器 (29)



26-1



26-2



26-3



26-4



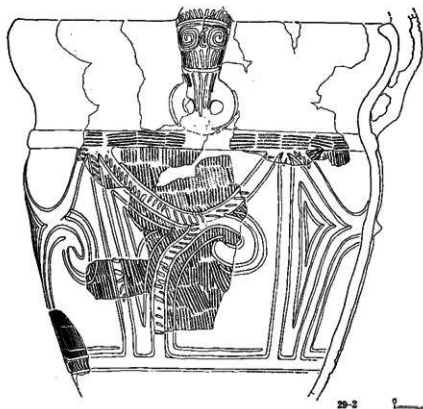
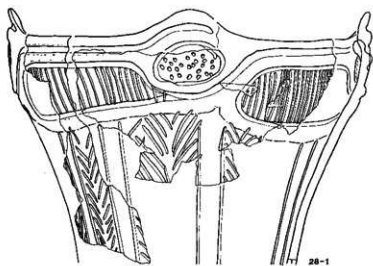
26-5



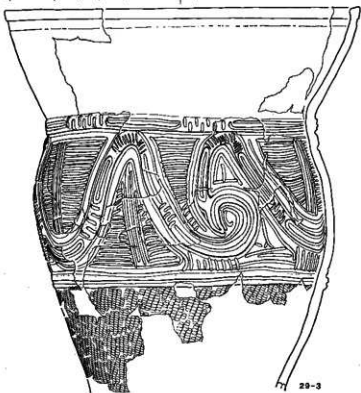
26-6

0 10cm

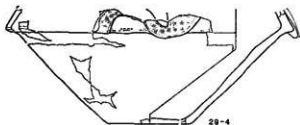
第78圖 住居跡出土土器 (30)



第79圖 住居跡出土土器 (31)



29-3

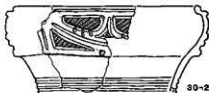


29-4



炉埋設 1

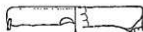
29-5



30-2



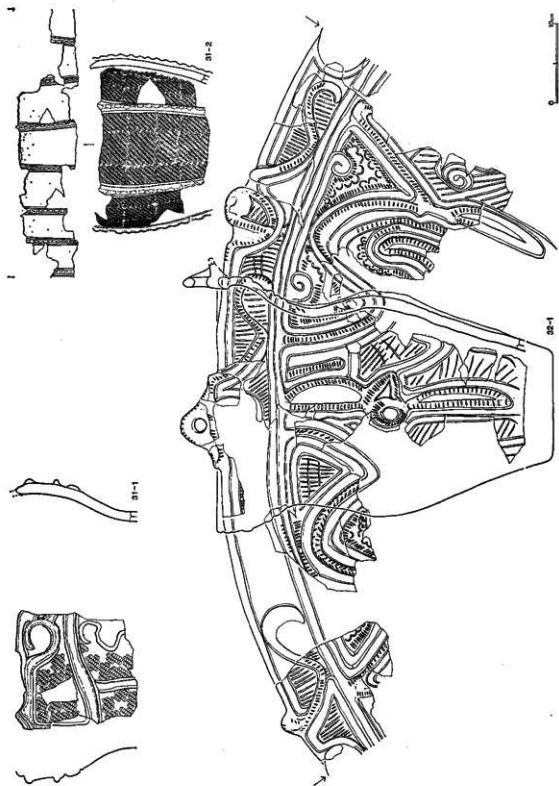
30-1



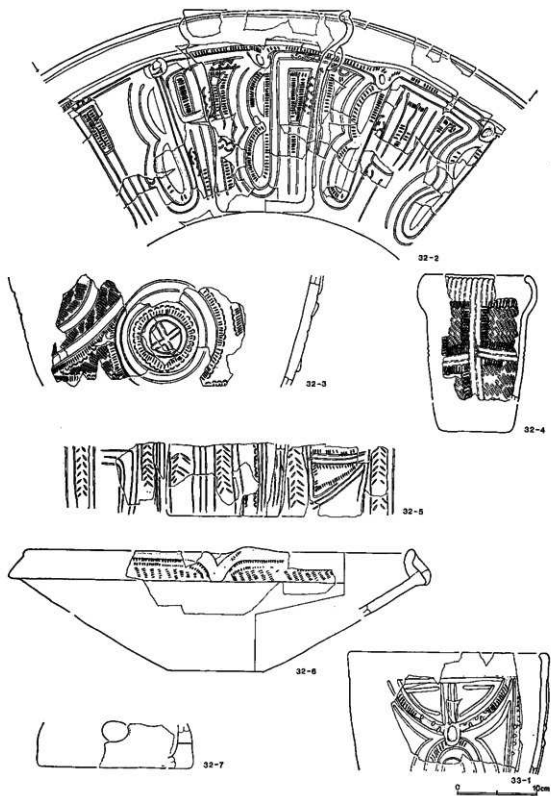
30-3

0 10cm

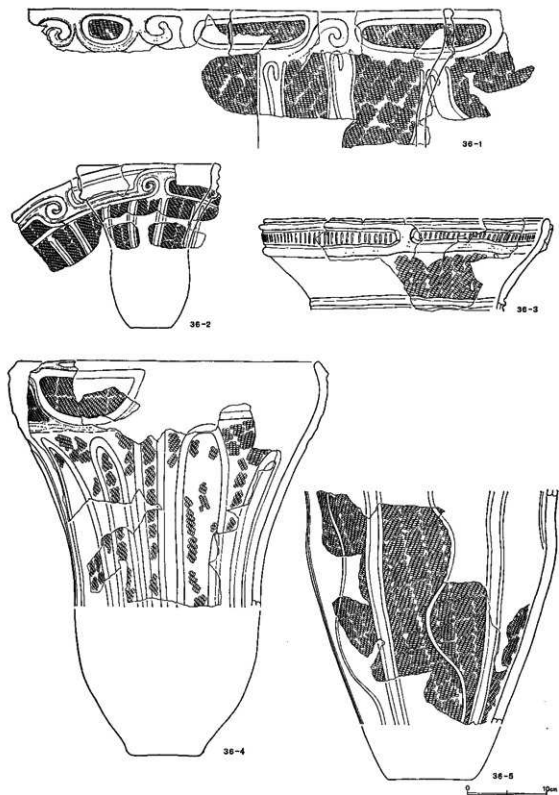
第80图 住居跡出土土器 (32)



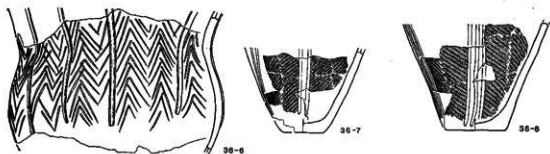
第81圖 住野跡出土器 (33)



第82圖 住居跡出土土器 (34)



第83图 住居跡出土土器 (35)

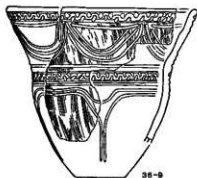


36-6

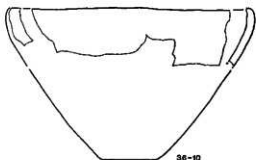
36-7

36-8

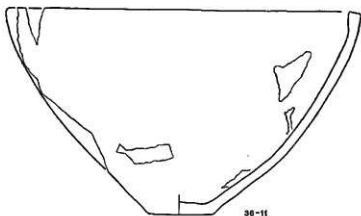
炉埋設 1



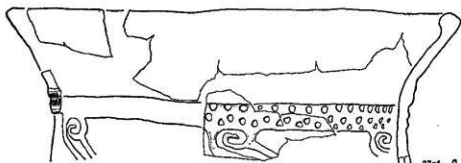
36-9



36-10

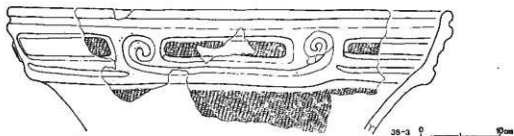
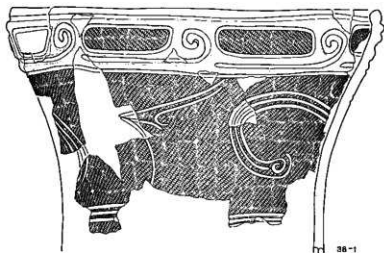
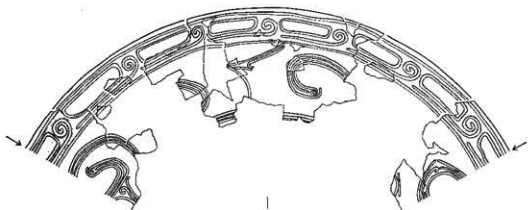


36-11

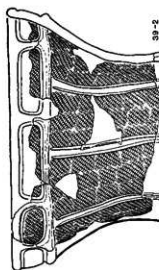
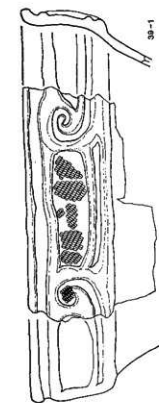


37-1 0 10cm

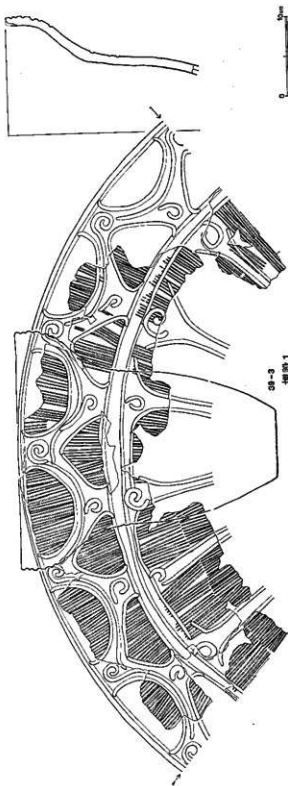
第84图 住居跡出土土器 (36)



第85图 住居跡出土土器 (37)



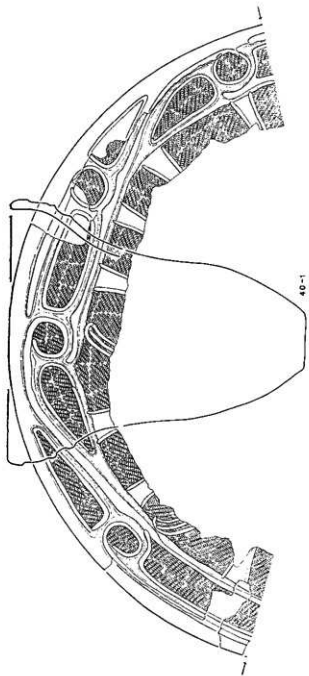
埋設 2



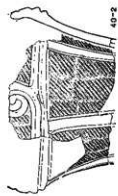
埋設 1

第86号 佐野勝出土器 (38)





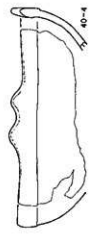
40-1
埋藏1



40-2
埋藏2



40-3



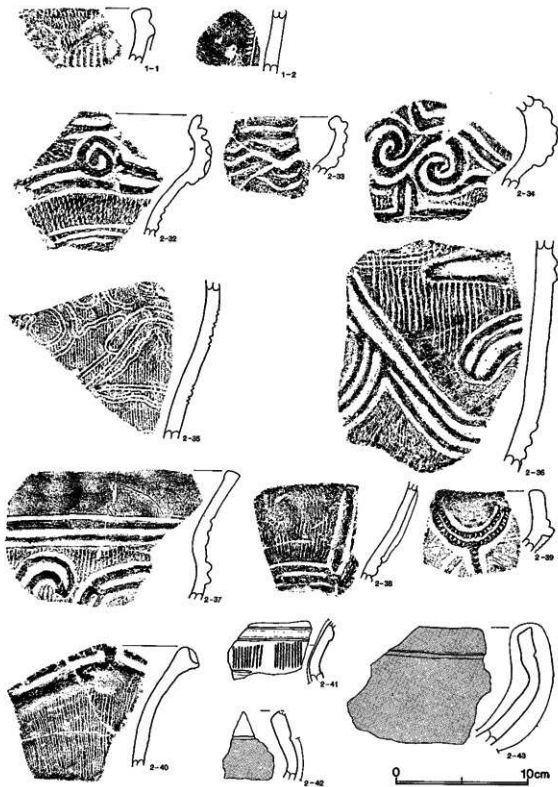
40-4



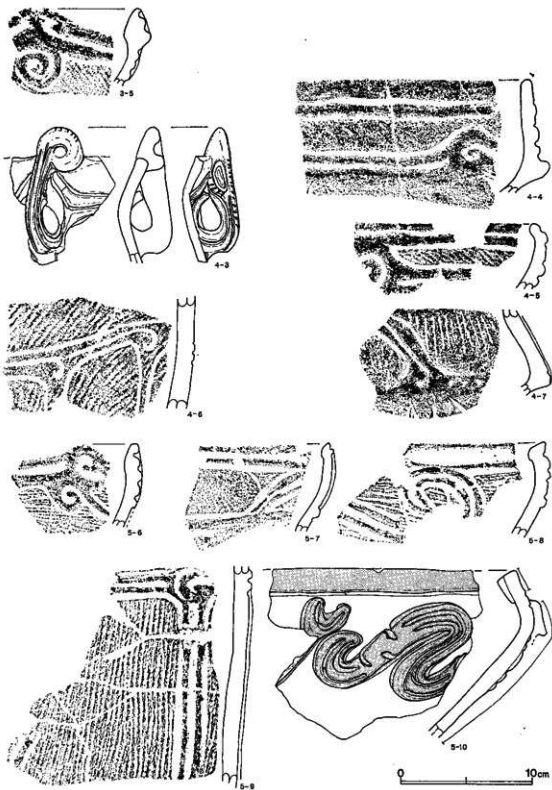
41-1
埋藏1



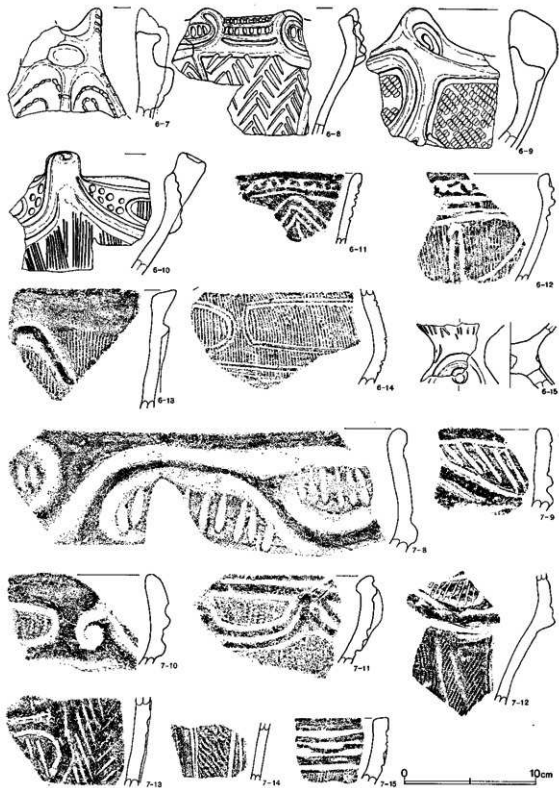
第87圖 住居跡出土土器 (39)



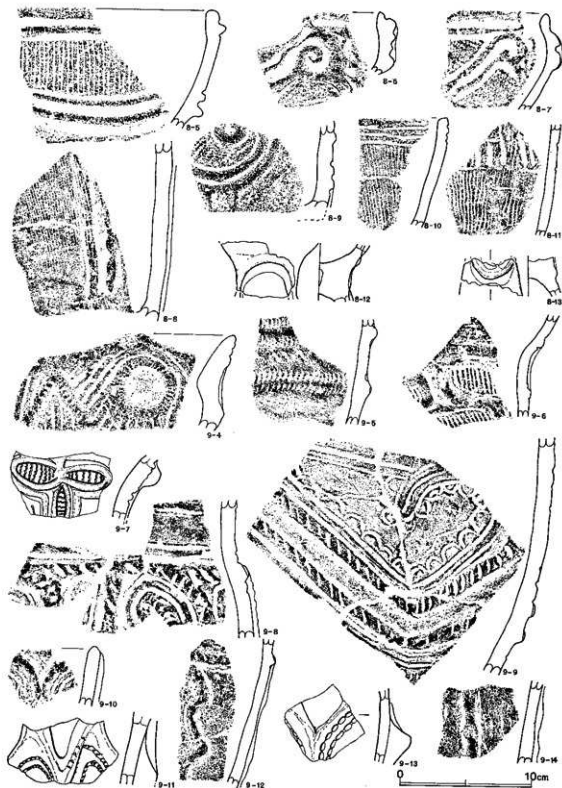
第88图 住居跡出土土器 (40)



第89圖 住居跡出土土器(41)



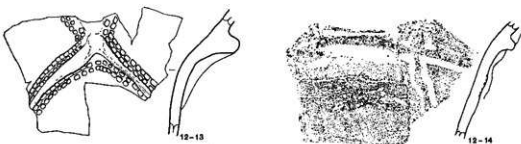
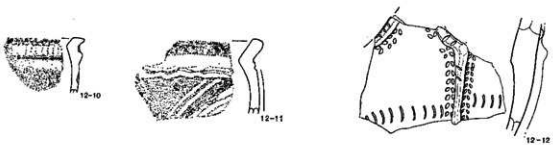
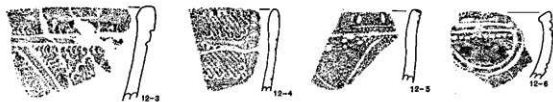
第90圖 住呂跡出土土器(42)



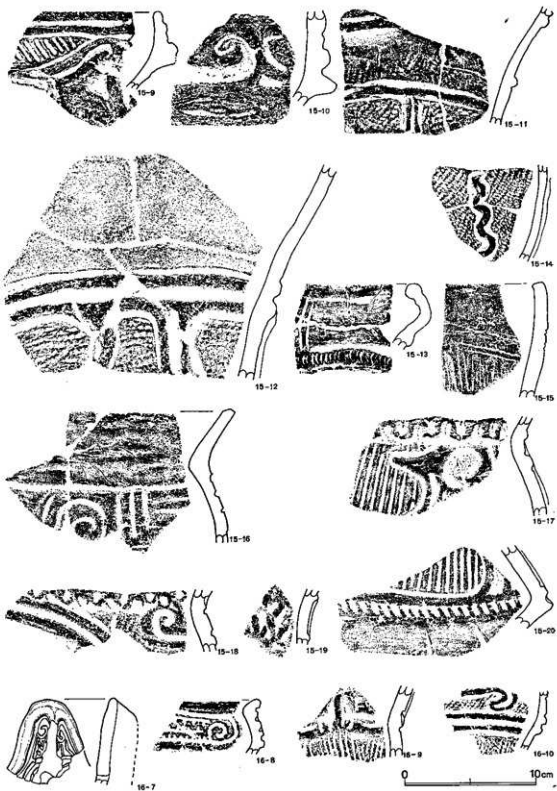
第91圖 住居跡出土土器 (43)



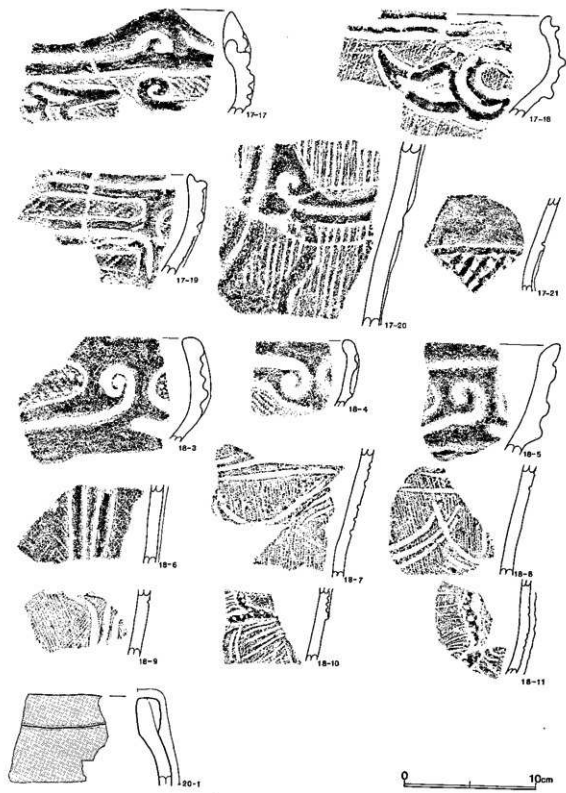
第92圖 住居跡出土土器 (44)



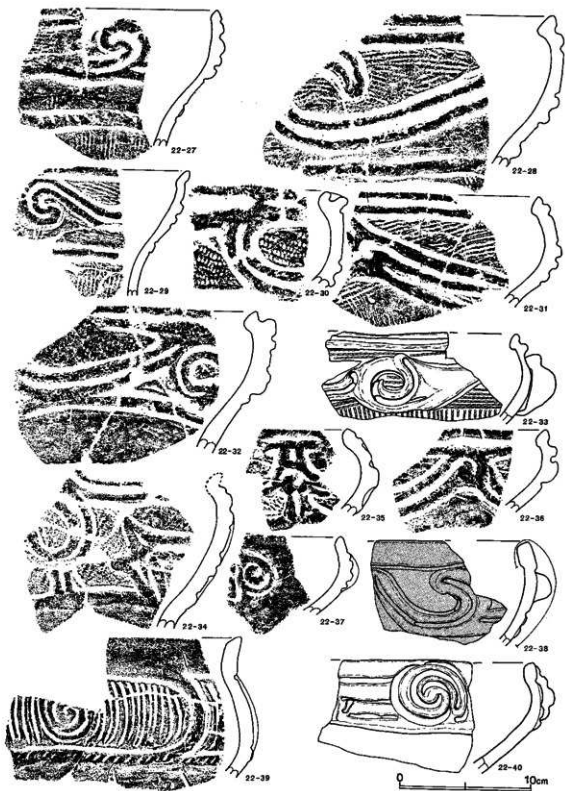
第93圖 住居跡出土土器 (45)



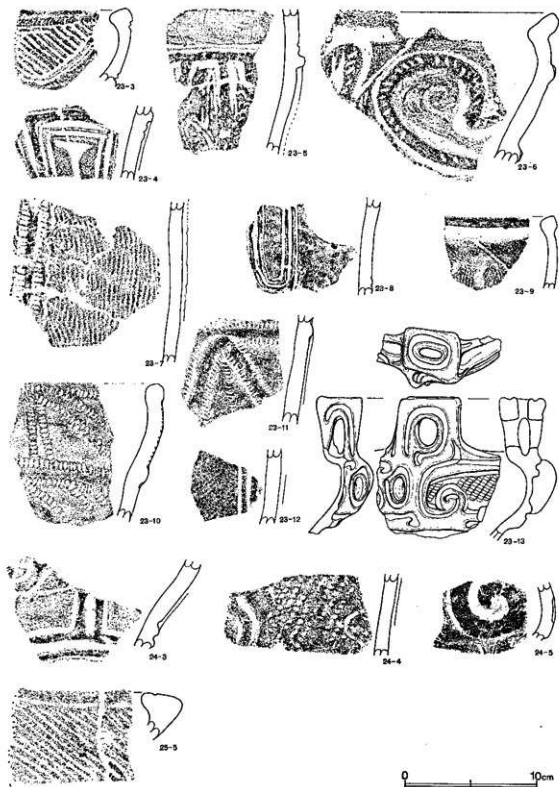
第94图 住居跡出土土器 (46)



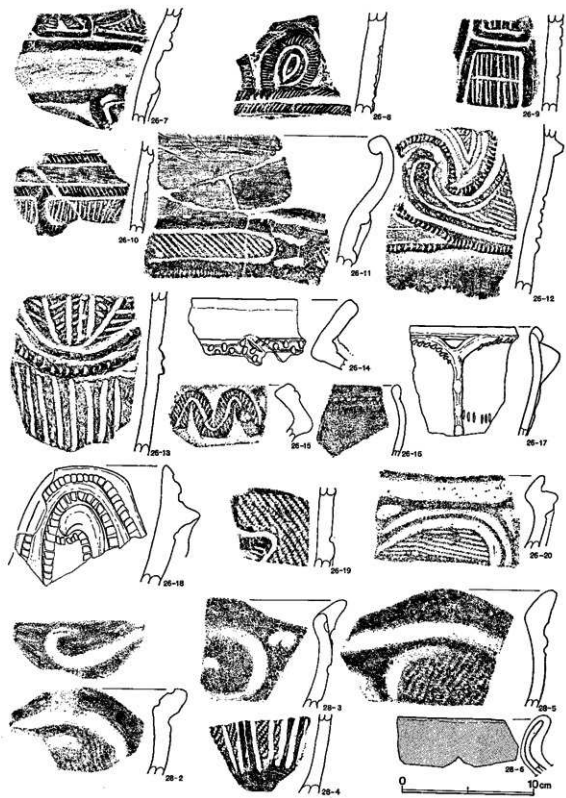
第96圖 佳厚跡出土土器 (47)



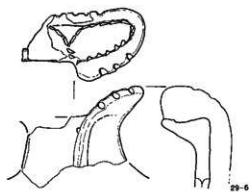
第96图 住居跡出土土器(48)



第97圖 住居跡出土土器(49)



第98图 住居跡出土土器 (50)



29-6



30-4

30-5



30-6

30-7

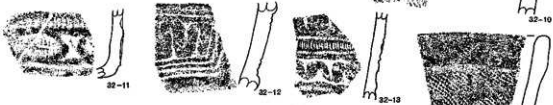
30-8



32-8

32-9

32-10



32-11

32-12

32-13

32-14

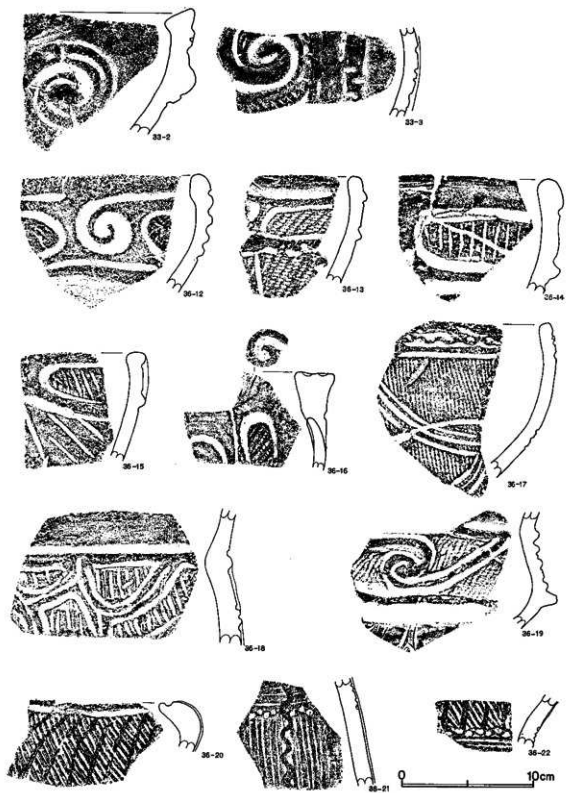


32-15

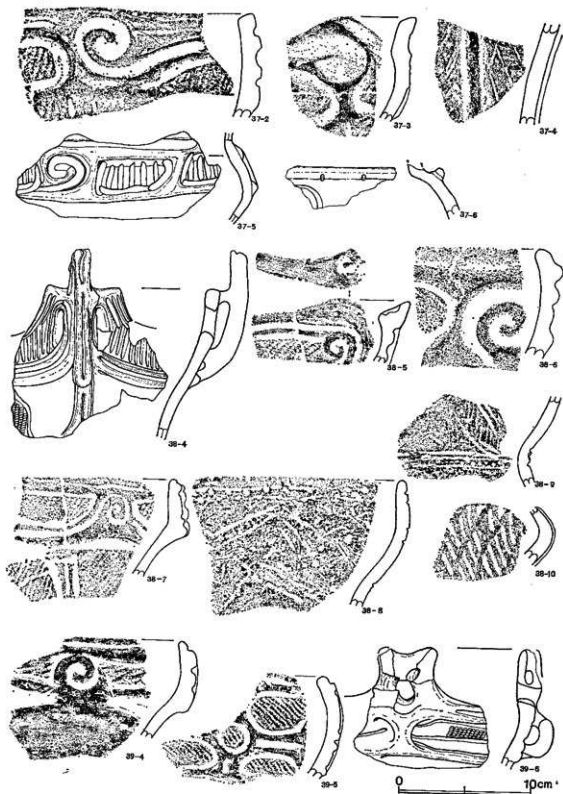
32-16

0 10cm

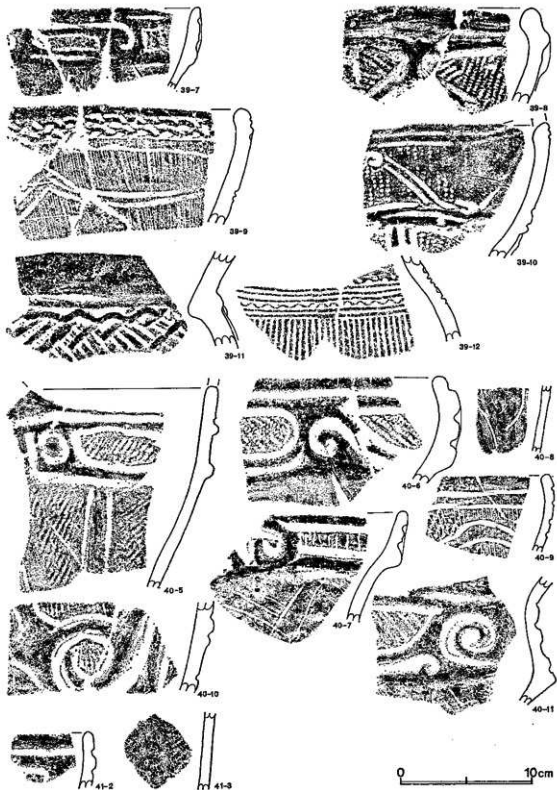
第99图 住居跡出土土器 (51)



第100图 住居跡出土土器 (52)



第101圖 住居跡出土土器 (53)



第102图 住居跡出土土器 (54)

第1～5号土壌 (第103・110図)

第1・2・4・5号土壌より出土している。第4号土壌は大片の出土もあるが、風化著しく詳しい判定には及ばなかった。また、第5号土壌では燃糸文の施文と貼付感の残る2本一組隆帯を施した口縁部文様帯片が出土している。一方、第2号土壌よりは、出土点数が少ないものの器形復元可能な個体が出土している。2-1がそれで、口縁直下を無文帯として残し、以下の燃糸文上に2段のタガ状隆帯を廻らす。上段の隆帯は2本一組で、4単位の瘤状突起と刺突文が加えられる。2-2は口縁部文様帯にあたり、有刻2本一組隆帯とそれが発達した突起が特徴的である。

第6～10号土壌 (第103図)

第6・7号土壌より出土している。前者では本遺跡の加曾利EⅡ式土器によく見る砂質胎土の小片が多いが、詳細期は不明。一方、後者では7-1が出土している。崩化した楕円区画文と内部に地文を施す渦巻文を交互に配する口縁部文様帯を有し、胴部は幅広の磨消縄文帯が繰返される。

第11～15号土壌 (第103・110図)

第11・13・14号土壌より出土している。3土壌よりそれぞれ1点を図示したが、11-1は無文鉢形土器であり詳細不明。また第14号土壌よりは、実測図底部の他に沈線列で余白を埋める胴部文様帯土器や、燃糸文地文部片が出土している。一方、第13号土壌では無文部小片が多く、文様を窺えるのは13-1のみである。同番は、描出法からすると口縁下に膨らみを持つ縦位区画文土器の可能性が大きい。内彫り様の截断竹管平沈線にて区画を描出し、脇には爪形文を、そして余白には円形竹管刺突文と三叉状陰刻文を加える。

第16～20号土壌

第17～19号土壌で出土しているが図示はしていない。第19号土壌では有刻隆帯の胴部文様帯土器らしき小片が出土したが、詳細不明。また、第17号土壌では燃糸文地文片と、2本一組沈線ナゾリ隆帯を用いる口縁部文様帯片が出土した。一方、第18号土壌出土の有文土器は、有刻隆帯区画の余白を沈線列で埋め、胴下半を燃糸単文とするものが多い。他では内彎度の緩い無文浅鉢が出土。

第21～25号土壌 (第110図)

第22・24号土壌より出土しているが、うち1点を示した。24-1がそれで、突起状波頂下に渦巻文を配するキャリバー形土器の口縁部文様帯片である。渦巻中に地文を持たず貼付隆帯は断面が三角形形状となるようナゾられている。一方、第22号土壌よりは無文小片が3点出土したにすぎない。

第26～30号土壌

第29・30号土壌よりそれぞれ3点が出土しているが、図示はしていない。双方とも平坦な隆帯による口縁部文様帯や、摩滅した胴部縄文帯が識別できる程度の小片である。

第31～35号土壌 (第110図)

第33号土壌を除く4土壌より出土しているが図示したのは第31号土壌の2点である。31-1はキャリバー形土器磨消縄文帯部であり、31-2では器面全面に矢羽状沈線を施文する。また、同墳では他に条線のみ破片も出土している。同期の第32号土壌よりは磨消縄文帯が付属するキャリバー形土器口縁部文様帯片と、変形土器無文口縁部が出土した。

一方、第34号、35号土壌においては風化著しく、判然としないものが多い。かろうじて残された

有文土器は、前者が燃糸文地文の2本一組隆帯で大渦巻を描くキャリバー形土器口縁部文様帯片であり、後者が平行沈線区画内を爪形文と半截竹管文で埋める小片である。

第36～40号土壌 (第103・110図)

第36・37号土壌の2基より出土している。前者では沈線区画による連続波状文土器を示した。同域で他に文様判別可能な破片はない。対する後者では出土土器のほとんどが無文部にあたり、37-1も同様である。図化しなかった破片の中には249-1に類似する三角波状口縁部片があり、胴部文様帯土器を彷彿させる。有文土器は1点あるが、これは有刻隆帯区画内を沈線で埋めるものである。

第41～45号土壌 (第110図)

第42・44号土壌より出土した。前者の場合、風化小片が全てであり、文様の判別ができなかった。そのため、胎土と隆帯部の特徴を頼りとし、時期判定に至ったものである。一方、後者よりは大片を含む19点の出土があったが、多くは風化を経た同一個体片で、横位幅広隆帯区画とそれに連結する縦位隆帯のみが観察できるにすぎない。図化し得たのは別個体の1点(44-1)で、こちらは隆帯に平行沈線を添えた半截竹管文充填の口縁部片である。

第46～50号土壌 (第110図)

第46～48号土壌の3基より出土しているが、第47号土壌のそれはキャリバー形土器胴部の磨擦部小片の1点にすぎない。図化し得たのは第48号土壌出土の雲母粒多く含む1点で、区画文内部に山形文を施している。同域では他に単施文沈線を添える有刻隆帯と、燃糸文地文の沈線土器が多く出土した。全体相よりすれば、48-1は混入品の疑いが強い。

第51～55号土壌

第52・53号土壌よりそれぞれ1点が出土しているにすぎない。前者はキャリバー形土器胴部の沈線区画部であり、後者では地文残す同形土器の頸部波状沈線帯部片であった。

第56～60号土壌 (第110図)

5基全てより出土しているが、第56号土壌よりはキャリバー形土器胴部にあたる縦位区画部片の1点のみである。また、第58号土壌も小片に残された微細な爪形、沈線文が時期判定の拠所であった。一方、第57号土壌では79点が出土したが、同一個体の無文浅鉢が大部分で、図化し得たのは、57-1のみである。同土器は楕円区画帯を直上にもつ底部で、隆帯脇は直接爪形文で飾られている。

第59号土壌では59点が出土した。しかし、これも第57号土壌と同じく文様構成を推し得る破片が少なく、キャリバー形土器胴部の59-1を示したにすぎない。また、第60号土壌では25点を検出したものの、拓図化の条件を満たすものがない。文様描出法を総合すると、隆帯脇の爪形文が普遍的であり、両者間に平行沈線を介するものでは爪形が密に、しかも深く施文されている。そして、三角押文が充填文として活用されるなど、本遺跡出土の勝坂式土器の大勢より古相を示している。

第61～65号土壌

第62号土壌で7点が出土したのみである。文様が判別できるのは唯一キャリバー形土器胴部の磨消縄文帯片であった。

第66～70号土壌

5基ともに土器を検出していない。

第71～75号土墳（第110図）

第72・73、そして75号土墳より出土している。しかし、前二者では拓影化の条件を満たすものがなく、第75号土墳の2点だけを示した。75-1は阿玉台系土器であり、75-2も他地域の影響を受けたものだろう。75-2は単沈線区画の内外に縄文を施し、これが一際突出した把手部にも進出する。他の同墳出土土器は、沈線文様の小型円筒深鉢や単沈線ナソリの有刻隆帯、余白部沈線充填などの要素が占めている。従って75-1は主体期に先行する時期の所産と思われる。

一方、第72号土墳ではキャリバー形土器の磨消縄文部が唯一の文様である。第73号土墳では有刻隆帯に沿う平行沈線と爪形文を施す破片、複列の押引文を加える阿玉台系土器などが出土した。

第76～80号土墳

5基ともに出土土器はない。

第81～85号土墳（第103・110図）

第83号と第85号土墳より出土している。第83号土墳では13点が出土したが、うち2点を示した。両点ともに阿玉台系土器であり、半截竹管施文による複列の押引文を隆帯脇に施文する。83-1は扇状把手の一部であり、把手部より垂下した隆帯が方形の口縁部文様帯を作出するものだろう。また、83-2は重層楕円区画を構成するものである。押引きは大部分が沈線化している。

一方、第85号土墳よりは2点が出土したが、文様判別可能であったのは85-1のみである。同番は壘形土器の上半で、燃糸地文上に半截竹管で文様を描く。渦巻文を主題としているようだが詳細は不明である。また、頸部施文も全て同工具で賤っている。

第86～90号土墳（第110図）

第86・88号土墳より、それぞれ18、26点が出土している。しかし、図化し得たのは第88号土墳出土品のみである。88-1は頸部楕円区画文土器で、隆帯区画内を斜格子で埋める。これに対する88-2は光彩放つ粒子を大量に含む阿玉台系土器である。山形波状口縁部の中心に瘤状突起を配し、指ナデされた隆帯脇は竹管による爪形押引で飾る。波頂下は粘土帯を貼付して山形に隆起させており、口唇部には刻みが加えられる異質のものである。

一方、第86号土墳では有刻隆帯と区画内沈線列充填を残す破片が多く出土している。しかし、器種や文様構成を推し得るものはない。

第91～95号土墳

第91・93・94号土墳より出土しているが、全て風化著しい小片であるため図示はしていない。第91・94号土墳出土品で文様が判別できるものは、キャリバー形土器胴部の磨消縄文区画部が全てである。一方、第93号土墳では他に無文帯中に沈線懸垂文を追加するものや、縄文帯区画が逆U字状化するものもある。

第96～100号土墳（第110図）

第96・100号土墳よりそれぞれ9、10点が出土している。図化したのは第96号土墳のそれで、キャリバー形土器胴部磨消縄文部である。沈線による懸垂区画を採用しているが、同墳よりは他に隆帯区画のものも出土している。一方、第100号土墳出土品は大甕の同一個体片が全てであり、口縁下の無文帯部が半周ほど接合できた。しかし、隆帯区画の胴部片までは接合しななかつた。

第101～105号土壌

第102・103号土壌より出土したが、拓図化の条件を満たすものはなかった。第102号土壌よりは燃糸地文片が、第103号土壌よりはキャリパー形土器の胴部隆帯渦巻文片が出土している。

第106～110号土壌（第110図）

土器出土を見たのは第106号土壌のみである。33点が出土したが、無文浅鉢片がほとんどで、赤彩の観察できた106-1を示した。浅鉢は少なくとも3個体以上はあり、大片も出土している。

第111～115号土壌（第103図）

第113号土壌で2点が出土したにすぎない。図示した底部は2本沈線間に地文を残すキャリパー形土器。

第116～120号土壌

第119号土壌より49点が出土している。主なものは加曾利EⅡ期のキャリパー形土器片であるが、EⅢ・EⅣ期の破片も若干出土した。

第121～125号土壌（第111図）

第122～124号土壌の3基より出土している。このうち第122号土壌の2点を図化した。122-1は勝坂系の縦位区画土器で、122-2は加曾利E系キャリパー形土器の胴部片である。残されたものは後者と同期が主であり、幅狭磨滑縄文を特徴としている。また、これは第124号土壌でも同様である。一方、第123号土壌では充墳縄文を用いる沈線区画の連続波状土器が出土している。

第126～130号土壌（第103図）

第126・128号土壌から出土しているが、後者は風化した小片で判別がつかない。一方、前者よりは126-1の両耳壺肩部が出土している。逆U字状区画縄文帯と蕨手状懸垂沈線が交互に廻るが、実測図中央左側の区画には平坦な隆帯が添えられている。蕨手状部の方向基準は不明。

第131～135号土壌（第133図）

第133号土壌を除く4基より出土しているが、図化したのは131-1の1点である。同番はキャリパー形土器底部で、乱雑な沈線による懸垂区画中に縄文を充墳施文している。同墳よりは他に無文浅鉢片が出土している。図化し得なかったものの、文様が判明するものは第132・135号土壌にある。前者では貼付感残る隆帯を施文する口縁部文様帯片と胴部の蛇行沈線片が、そして後者では平行沈線脇に爪形を並走させる小片と阿玉台系土器無文部などが出土している。一方、第134号土壌ではほとんどが無文の胴下位片で、文様を判別できなかった。

第136～140号土壌

第136・138・140号土壌より出土したが、後二者は小片1点のみの出土であり詳細は不明である。また、第136号土壌も14点が出土したが、風化小片が多く、胎土が目安の大時期区分に留まった。

第141～145号土壌（第104図）

第141・145号土壌より出土したが、前者では注目すべき完形土器が出土した。141-1がそれで、円筒形の正背に人形と判じ得る隆帯文を配している。器面の分帯は截断竹管平行沈線区画による三帯の横帯を基本とし、さらに内部を別個の構成で区画する。上段は縦位区画、中段は楕円区画、そして下段には連続三角区画による大神を設定し、個別に微妙な変化を与えている。区画内の充墳は

爪形文と半截竹管文か山形沈線の組合わせ、沈線列のいずれかが担う。区画線をも含めた平行沈線は深々と施文され、半内彫り線となるのも特徴の一つである。人形はこれら三帯の細区画に基本では準じながらも全てにまたがった形で象形化されている。隆帯施文を用いるのは人形部に限られ、実測図正面では陰刻を有効に利用している。正面像は三穴の眼鏡状突起を頸部とし、幅広く貼付した隆起部よりは渦巻部を末端とする腕状隆帯が広がる。下半は陰刻区画中に本土器唯一の縄文が施文されている。これらに近い構図を用いながらも、背面像はより簡素に表現されており、体部の隆起も低い。胎土は砂質に富み、器面色は赤褐色化している。なお、出土状況は散乱した形であった。

一方、第145号土壌よりは2片の風化小片が出土しているのみである。

第146～150号土壌 (第111図)

唯一第146号土壌より66点が出土しており、2点のキャリバー形土器を図化した。146-1は縮化した渦巻と楕円区画を配す口縁部文様帯を有し、頸部無文帯を介さずに隆帯懸垂文が施される。一方、146-2は胴部磨消縄文部であるが、同墳の残された破片には磨消縄文手法を見ない。

第151～155号土壌

第155号土壌より23点が出土しているが、図示していない。いずれも小片で2本一組隆帯を用いるキャリバー形土器の口縁部文様帯片が観察できる程度である。

第156～160号土壌 (第104・105・111図)

第156～158号土壌の3基で出土しているが、第158号土壌出土品は風化小片多く、158-1の無文赤彩浅鉢を示したのみで詳しい時期等は不明である。これに対し、前二者では比較的良好な資料を検出している。第156号土壌よりは2本一組隆帯で主構図を描出すキャリバー形土器が多く出土している。地文は燃糸文を見るのみで、頸部に無文帯を有するものがない。156-1と156-3がこれにあたるが、156-2は阿玉台系土器である。

また、第157号土壌よりはキャリバー形土器2点を示した。157-1は縮化した渦巻と楕円区画が特徴的な口縁部文様帯を有し、157-2では連続弧状区画が用いられている。両者の頸部は無文帯となり、後者では橋状把手の痕跡が残る。

第161～165号土壌 (第105図)

第161号土壌から1点、第162号土壌より5点が出土している。前者では胴部片1点のみで、図示したのは後者の2点である。162-1は逆行した口縁部文様帯内区画文と、逆U字状区画が特徴的なキャリバー形土器。胴部文様帯では区画ごとに蹼手状沈線が加えられ、有文部のそれは蛇行している。一方、162-2は隆帯文の浅鉢肩部で、器表は全面が赤彩されている。

第166～170号土壌

5基ともに出土土器はない。

第171～175号土壌

第172号土壌に1点が出土した。有刻隆帯区画と沈線充填を特徴とする胴部文様帯土器である。

第176～180号土壌 (第105・111図)

第177・179・180号土壌の3基で出土した。特に、第177号土壌では大甕胴部が逆位埋設状態で出土した。177-1がそれで、幅広隆帯を主文表現に利用し、余白には短沈線を充填している。詳しい

構成は不明だが大渦巻を主構図とするようで、接合果たせなかつた破片には頸部区画隆帯や隆帯上の蹠手状沈線が残るものもある。

第189号土壌では33点が出土し、このうち2点を示した。179-1は平行沈線のみで区画文を描出する。また、179-2はキャリバー形土器胴部の磨消縄文部である。本墳は勝坂系土器の混在著しいが主勢は後者の時期にある。胴部片としては、無文帯内に1本の沈線を追加するものや、有文帯内に蛇行沈線を加えるものなどがある。一方、第180号土壌では半截竹管文や爪形を添える平行沈線区画の勝坂系土器が出土している。

第181～185号土壌（第105・111図）

5基までより出土しており、各1点を示した。時期降るものとしては第181・182号土壌がある。前者では181-1の連続波状文の完形土器が出土している。胴下半を欠くが、上半は全周に近い残存であり、散乱した出土状況であったものの、人為的埋設の可能性も捨て切れない。連続波状区画の上限は二段の刻みが廻り、区画の波頂と入組むように逆U字状区画縄文帯が進出する。また、無文部では蹠手状沈線が加えられている。一方、第182号土壌では、182-1を含め、キャリバー形土器の胴部磨消縄文片が主だったものである。

時期遡るものは第183～185号土壌の三者である。これらでは有刻隆帯脇に平行沈線を添える例が多く、183-1の縦位区画文土器がその典型である。同墳では他に、乱雑な細沈線を充填する縦位区画文土器や、平行沈線脇を爪形、三角押文で加飾する破片等が出土している。これに対し、185-1は有刻隆帯脇に爪形文と山形沈線を加える。また、184-1は網代痕残る阿玉台系土器底部である。

第186～190号土壌（第105・111図）

第187号土壌を除く4基より出土している。このうち、第190号土壌では風化小片が全てであり、詳細はわからない。また、第188号土壌も同様で、加えて勝坂系土器の混在が多い。文様判別可能なものは、188-1を含めキャリバー形土器口縁部文様帯部であり、確立した区画文と平坦な隆帯が特徴である。一方、第186・189号土壌では胴部の磨消縄文片が多く出土している。189-1は同形土器の胴下半部であり、こちらは隆帯を分帯線としている。

第191～195号土壌（第111図）

第191・192号土壌より出土している。前者は同一個体片と思しき沈線区画の頸部無文帯片が全てである。これに対し、第192号土壌では胴部磨消縄文を有するキャリバー形土器を中心として73点が出土した。192-1は同形土器の口縁部であり、192-2は大甕の肩部にあたる。後者は指ナゲ隆帯による大渦巻が主構図となり、隆帯で画された頸部には2段の刺突列が加えられている。

第196～200号土壌（第106・112図）

土器出土を見たのは第197号土壌と第200号土壌である。前者よりの出土品は天箱2箱にも及ぶ。器形を推し得る個体は4点ある。197-1は縦位羽状縄文を地文とする大型キャリバー形土器で、確立した区画文と幅狭な頸部無文帯が特徴である。胴部懸垂文は直、蛇行を繰返し、蛇行線は口縁部文様帯の渦巻下に配するのを基本としている。また、197-5も同形土器口縁部で、頸部を無文で残すものの、区画線を欠いている。

これに対する197-2は連弧文土器である。胴中位区画により二分帯を構成し、上帯は燃糸文を地

文とした鋸歯状文の組合わせが連続状文を構成している。また、浅鉢は3個体を示したが、197-6は造営期にかかるものかを決し難い。197-3は内彎器形の有文様帯浅鉢であり、蛇行する2本陸帯の末端が渦巻化する。一方、197-4は肩部文様帯を持つ類で、十字状区画内に短沈線を充填している。

一方、4点が出土した第200号土壌は、風化小片が全てであるため詳細不明である。

第201～205号土壌 (第112図)

第202～204号土壌の3基より出土した。特に、第203号土壌では527点を検出したが、風化著しい小片が多く、復元し得る個体を見なかった。図示したものは6点あるが、このうち、203-4・203-5は勝坂系土器の混入品である。203-1・203-2を含むキャリバー形土器は縄文を地文とし、口縁部文様帯内は区画文化が進んでおり、前者は楕円区画部に、後者は連続弧状区画部に相当する。頸部無文帯は安定した存在で、203-2では連続弧状区画が文様帯下位区画線と兼ねる。胴部では陸帯懸垂文が発達しており、渦巻化したものが203-3の胴部破片である。

一方、第202号土壌よりは磨消縄文のキャリバー形土器胴部片が出土している。また、第204号土壌は無文部片が全てであり、胎土等より大時期判定を行った。

第206～210号土壌 (第112図)

第208号土壌を除く4基より出土しているが、小片多く、判然としない。第207・209・210号土壌は、いずれもキャリバー形土器の胴部磨消縄文が特徴であり、207-1や210-1もこの部分に相当する。なかでも第209号土壌では無文帯中に懸垂沈線を加えるものや、円形刺突残の口縁部文様帯片が出土している。一方、第206号土壌では頸部無文帯を有する同形土器片を検出している。

第211～215号土壌 (第107・112図)

第211号土壌を除く4基から出土しているが、特に第214・215号土壌では多くを見た。4基のうち、第212・215号土壌では同期の所産が多く出土した。確立した頸部無文帯と、区画化した口縁部文様帯内構図を特徴とするキャリバー形土器が多い。第212号土壌では崩れた区画文を有する212-1を示したが、混在の可能性が強い。残された破片には、前述の他に、頸部無文帯より明える陸帯懸垂文部片も多く出土している。

一方、第215号土壌は遺物量に反して文様構成を彷彿させるものが少ない。口縁部文様帯内は前述の特徴が主体を占めるが、剣先状文(215-3)や、連続弧状区画を文様帯下限線としないもの(218-1)など先行要素も多い。215-4は無文内彎口縁を有する深鉢、215-5は直開口壺の頸部である。また、215-6は連続弧状土器胴区画部であるが、重複する第214号土壌に伴うものだろう。

これに対し、第213・214号土壌ではキャリバー形土器に見られる磨消縄文や、口縁部文様帯内区画文の連結が特徴となる。とはいうものの、第214号土壌の出土品に磨消縄文を見るのは稀で、214-1の実測図中に見る無文部も、風化のために地文の有無を判定できずに空白化した箇所であり、図示してない破片には懸垂文が多い。同番は楕円区画の一部が渦巻文と連結し、独立を保つ同区画を介して計6単位の区画文が配される。214-3は地文沈線の変形土器で、214-2は浅鉢、要いずれにも決し難い。一方、第213号土壌は渦巻内に地文を付すキャリバー形土器の口縁部等があり、区画は相互に入組むことが多い。

第216～220号土墳 (第107・113図)

第216・217・219号土墳の3基より出土しており、それぞれを図示した。216-1は頸部に無施文部を残すキャリバー形土器。頸部無文帯を意図しながらも、口縁部文様帯直下よりの懸垂文や下位区画線を有さないなど曖昧化している。口縁部は、楕円区画文と渦巻文が一部連結している。一方、216-2・216-3は混入の勝坂系土器で、前者は施文法からすると著しく内屈する可能性もある。

頸部に確たる無文帯を配するものは第219号土墳に多い。図示した中では219-2・219-3があたり、渦巻文と楕円区画文に相互干渉がない。胴部では縄文地文中の懸垂文が多く、2本一組沈線をを用いたものもある。なお、219-1と219-4が本墳に伴うかは不明である。一方、第217号土墳では、口縁部文様帯直下より磨消縄文法を用いる胴部文を配している。口縁下の低隆帯区画文は崩壊著しく、胴部の無文、縄文帯内に懸垂文を追加するものが多い。

第221～225号土墳 (第107・113図)

第221号土墳を除く4基より出土しているが、第224号土墳のものは風化著しく判別つかなかった。また、第223号土墳も図示した縄文地文大甕の他には文様が判然としない。さらに、222-1の器種も判定つかない。同番は222-2と同一個体であり、両片より推すれば、胴中位のすぼまる縦位区画文土器とも思われる。区画隆帯脇に平行沈線を添え、内部は三角押文や類似文で埋められる。同墳よりは阿玉台系土器を模倣した粗製品も出土している。残る破片を総合すると、隆帯脇に竹管背面押圧の爪形文を沿わせ、全体で、胴中位より明えるX字状文となるらしい。

一方、第225号土墳では多くの大片的出土を見たものの、風化著しく図化できなかつた。この大片的多くは大型キャリバー形土器の同一個体片と思しきもので、口縁部には箱状突起、そして頸部無文帯を介した胴部には2本隆帯による懸垂文が加えられている。他に2本一組隆帯による渦巻文を持つ同形土器(225-1)がある。

第226～230号土墳 (第107・113図)

第226号土墳を除く4土墳より出土している。うち、第227号と第228号土墳より各1点を図示した。227-1は口縁直下より幅狭の磨消縄文区画を垂下させ、縄文帯内には蛇行沈線を加える。同墳よりは他に、磨消縄文区画部や、同縄文帯部に蛇行沈線を加えるキャリバー形土器片が多く出土している。一方、228-1は同形土器上半部であり、矢羽状沈線を区画内に充填している。口縁部文様帯内は渦巻部の浮上する突起を中心として区画文化され、胴部では蛇行隆帯が観察できる。

これに対し、第229号土墳では縄文地文上の隆帯文が目立ち、多くはキャリバー形土器の胴部懸垂文に相当する。また、第230号土墳では隆帯脇に爪形、半鏡竹管文を添える破片が出土している。

第231～235号土墳 (第108・113図)

第231・232・235号土墳の3基より出土している。最も良好な資料を検出したのが第232号土墳である。2点を実測図化した。232-1は楕円区画と渦巻が合体するキャリバー形土器である。口縁部文様帯下位区画線となる複数隆帯の直下より幅狭の磨消縄文帯が設定される。一方、232-2は条線地文の連弧文土器。上下分帯区画線が胴上位に片寄るもので、上帯は交互連接の基本を持ちながら、一部で区画文をこれに充当している。沈線は3・4本組の二種。また、同墳よりは、連弧文土器の下半や無文浅鉢も多くの出土を見た。

第231号土壌では82点が出土したが、文様構成を彷彿させる破片がなく、2点を図示したに過ぎない。231-1は大甕頸部で短沈線を廻らす区画帯下より主構図を描く隆帯が伸びる。231-2は口唇上文様帯付の赤彩深鉢。また、第235号土壌よりは区画内沈線充填の勝坂系土器が出土している。

第236～240号土壌（第108・113図）

第239号土壌を除く4基に出土を見たが、特に第240号土壌で大量に検出している。同出土品は3点を示した。いずれもキャリバー形土器片であり、240-1・240-3では幅狭の磨消縄文帯が特徴的である。前者は隆帯による曲線的な区画文を口縁部文様帯の主文とし、同文を以って下位区画線に代えている。また、240-2では隆帯渦巻部が突起化する区画文を構成し、内部を短沈線と円形刺突で充填する。頸部には蛇行隆帯らしき痕跡を残すが、判然としないため無文として表現した。

一方、第237号土壌よりは連続波状区画土器の上半部（237-1）が出土している。沈線による区画は口縁下より続く縄文帯を幅広く設定し、同帯には逆S字状文が加えられている。墳内より散乱した状況で出土したが、口縁部の復元は全周が可能で、下位の限界は同一部位にあたる箇所が多い。従って、埋設土器として供された可能性も指摘できよう。

他の第236・238号土壌では扁平隆帯の、区画整う有頸部無文帯キャリバー形土器が出土した。

第241～245号土壌（第108・113図）

第242・244・245号土壌より出している。特に多くの出土を見たのが第245号土壌である。内容はキャリバー形土器が中心で、低隆帯による整然とした区画文を有する口縁部文様帯が特徴であり、245-1もこれにあたる。また、同帯は頸部文様帯を擁しているが、これも他片に共通しており、同下位区画線よりは直、蛇行する懸垂文が萌え出る（245-1）。

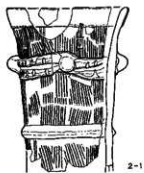
一方、第242・244号土壌では拓影化の条件を満たすものがなかった。前者は燃系地文片が、そして後者では幅狭のキャリバー形土器胴部磨消縄文帯と、連弧土器下半や分帯部が出土した。

第246～249号土壌（第108・109・113図）

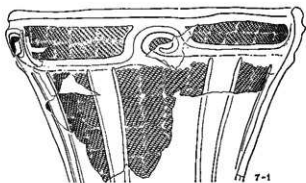
対象4基全てより出している。特に第249号土壌出土の一括3点は勝坂期の良好な資料である。249-1は2単位波状を呈する胴部文様帯土器である。波頂部下は大小の把手が膨張口縁部を飾り、有刻2本隆帯で画された胴部文様帯内には8単位の連続三角文が廻る。このうち、小把手下の頂部では単位文を分割して渦巻文を挿入しており、隆帯脇は平行沈線が加えられる。余白は爪形文と、突脚図裏面では半鋸竹管文も添えられ、前者は把手部の加飾にも用いられている。膨張口縁部は縄文を地文とした平行沈線によって文様が描かれるようだが風化のため詳細不明である。

これに並ぶのが249-2の縦位区画土器である。円筒形上端の内彎口縁部には蛇体様の隆帯文が施され、他所には平行沈線による文様を加えられているが、風化著しく判別できない。正背二面性を持った縦位区画部は有刻隆帯によって区画され、内部には乱雑な沈線が充填される。この中で、両脇の円環状隆帯下に属する菱形区画は人間を含む何らかの象徴とも取れるが、区画設定が雑で判明できない。そして、前二者に伴って249-3の縄文施土器も出している。

一方、第246・247号土壌ではキャリバー形土器が主体であり、拓図2点に見る如く、渦巻文内にも地文が進出している。また、第248号土壌では風化小片が全てであった。



2-1



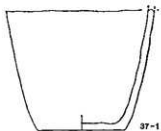
7-1



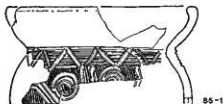
13-1



14-1



37-1



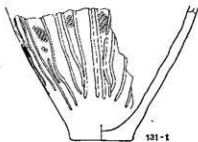
85-1



113-1



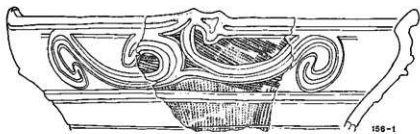
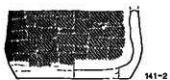
120-1



131-1

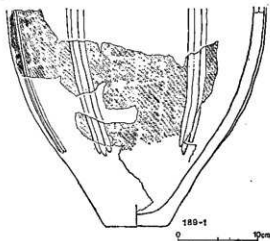
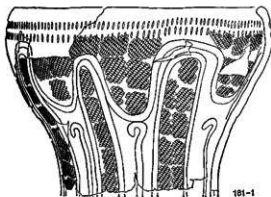
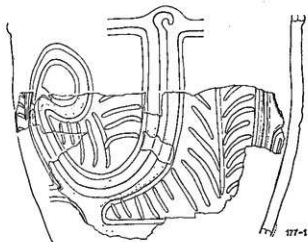
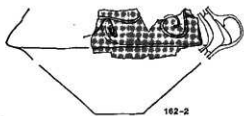
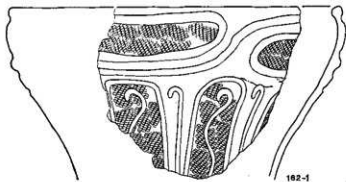


第103圖 土壤出土土器(1)

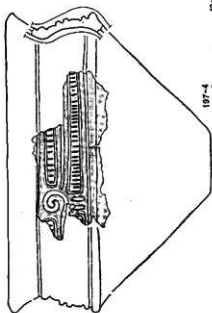
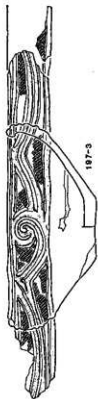
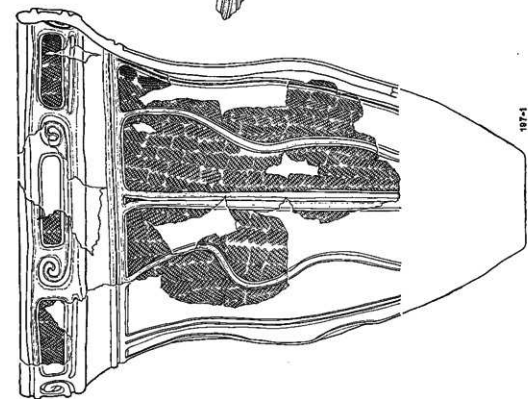


0 10cm

第104圖 土壙出土土器(2)

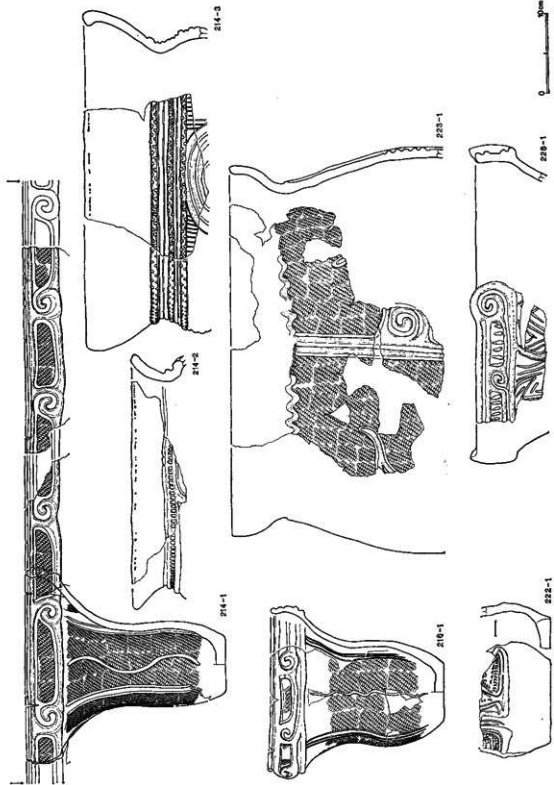


第105圖 土竈出土土器(3)



10cm

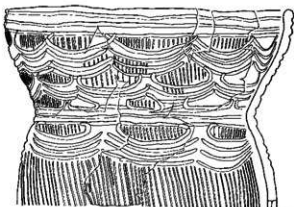
第106圖 土廣出土器 (4)



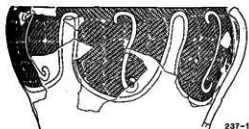
第107圖 土質出土器 (5)



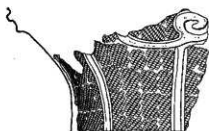
232-1



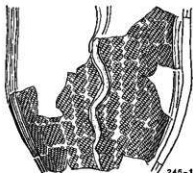
232-2



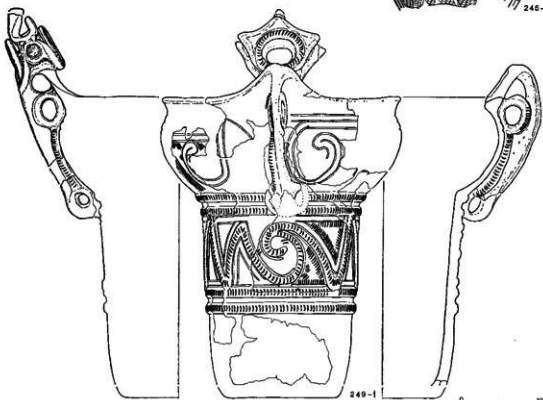
237-1



240-1



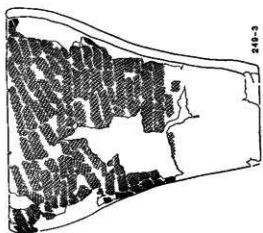
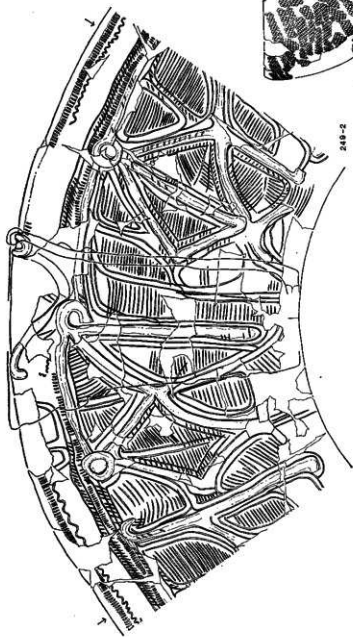
246-1



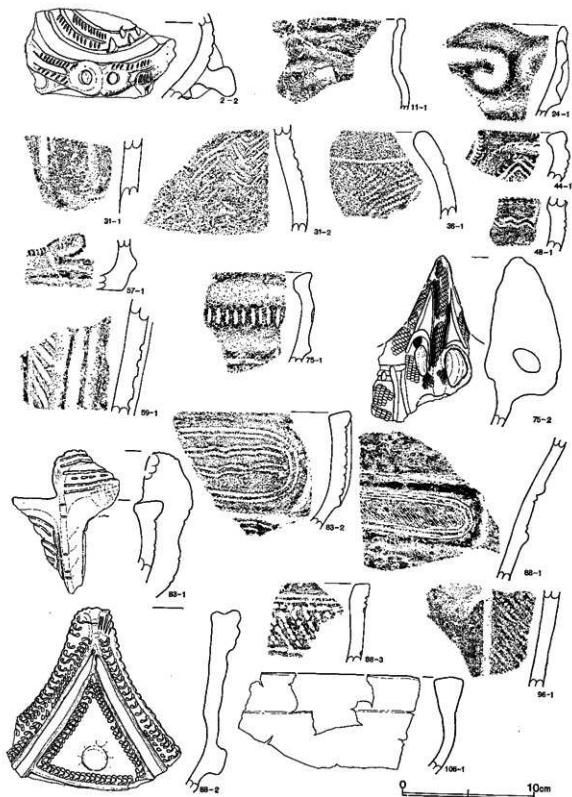
249-1



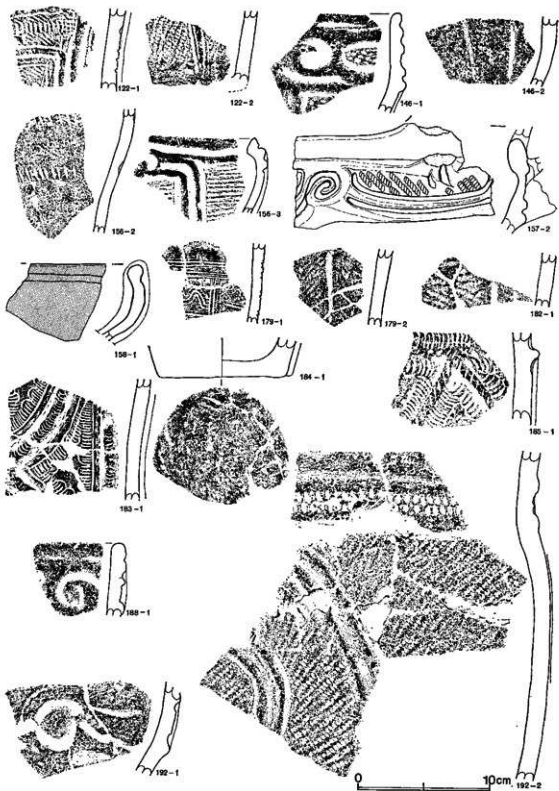
第108圖 土塊出土土器 (6)



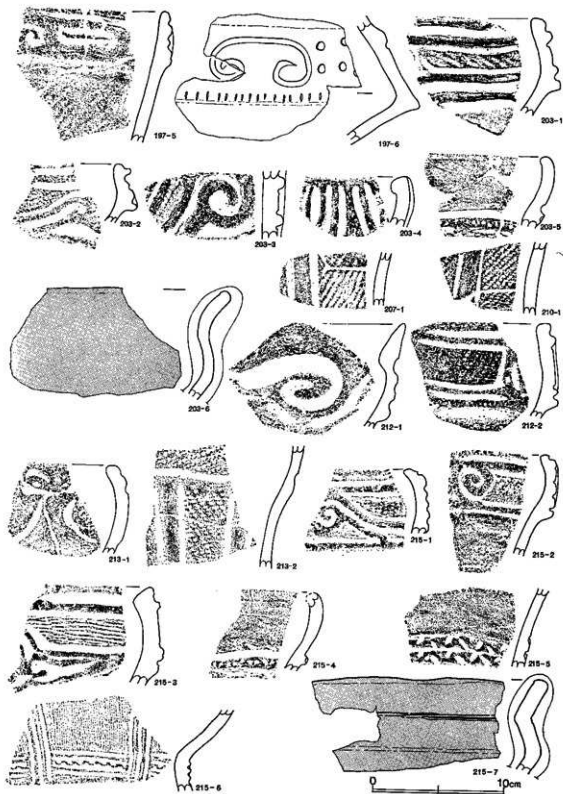
第109圖 土橋出土土器(7)



第110图 土质出土土器(8)



第111四 土模出土土器(9)



第112圖 土壘出土土器 (10)



第113图 土横出土土器 (11)

第1～5号集石 (第115図)

5基全てより出土している。最も古い様相を残すのは第4号集石である。陸帯脇に爪形や三角押を添えるものが多く、図示してない破片では三角押による区画内充填も見られる。4-1は横帯文土器の胴部重層菱形区画部であり、現存部上下端には爪形のみならず三角押列も加えられている。そして、斜位に充填される山形文は転位法で施文され、鋭い痕跡を残す。器種不明だが4-2は本集石唯一の陸帯脇に平行沈線を見る破片で、余白は爪形、三叉文で埋められている。一方、第3号集石では同系の無文部が出土している。

これに対し、第2号集石ではキャリバー形土器胴部片を図示した(2-1)。縄文地文上に陸帯懸垂文を加えるが、他に頸部無文帯片も出土している。

第6～10号集石

第8・10号集石より、それぞれ194、21点が出土しているが、図化し得る破片を見ない。前者の破片数は多いものの、爪形残る小片が数点存在したにすぎず、詳しい時期判定には至らなかった。一方、後者では燃糸地文上に2本一組陸帯を用いるキャリバー形土器口縁部文様帯片が出土した。

第11～15号集石 (第114～116図)

5基全てより出土しているが、第14号集石では無文小片多く、詳しい時期判定かなわなかった。これに対し、第11・13号集石では多量の出土を見た。第11号集石はキャリバー形土器片が多い。口縁部文様帯は燃糸地文の2本一組陸帯で作出され、頸部には無文帯、若しくは波状沈線帯が配される。また、胴部に陸帯による渦巻文や懸垂文を加えることも少なくない。図示した3点のうち、11-1と11-3がこれにあたり、11-2は先出する勝坂系土器であろう。

一方、第13号集石では、キャリバー形土器の他に、連弧文土器、大甕なども多く出土した。キャリバー形土器は頸部に無文帯を配するものと、これを介さず懸垂文が施されるものとが混合している。また、胴部懸垂文は陸帯によるものが多く、沈線にて賄うものもその間を磨消さない。連弧文土器は、13-3に見る如く、3本沈線の一端に渦巻を付属させるものが主である。地文は燃糸、条線の二種があり、連弧の単位数が多いことも特徴の一つとなる。13-2は混在の勝坂系土器。

残る第12号集石では、陸帯脇に平行沈線や爪形、半截竹管文が付属する文様を多用している。また、第15号集石では頸部無文帯を用いたキャリバー形土器で、2本一組陸帯で文様帯内の構図を作出するものが多い。

第16～20号集石 (第114・116図)

第16・18・19号集石で出土している。特に、第19号集石では大量の出土を見た。出土土器はキャリバー形土器を中心としており、口縁部文様帯内は2本一組の陸帯で構成される。用いられる構図は区画化が進んでおり、渦巻部は接続部への傾斜が強くなっている。一部には頸部無文帯を配するものも見られ、縄文地文の破片数も比較的多い。一方、時期遡る阿玉台系土器も数点出土した。19-2は扇状把手部で、垂下した陸帯が方形区画の口縁部文様帯を構成する。陸帯脇の角押しは単列。

また、同集石におけるキャリバー形土器の傾向は、第16・18号集石でも近似しており、図示した3点をはじめとして区画文構成が主流となっている。

第21～25号集石 (第114・116図)

第22～24号集石で出土したが、3基ともにほぼ同じ傾向を持している。第23・24号は土器敷であったため大片が多い。しかし、前者のそれは浅鉢下半などであり、図示はせず、第24号集石の3点のみを示した。總体的に、キャリバー形土器の区画文化が確立しており、頸部無文帯の存在とともに、3基の特徴となる。24-1の場合、連続弧状区画を用い、胴部では縄文と条線を重複施文している。一方、24-3は同形土器の箱状把手部で、24-2は胴部曲線からして変形となろう。

第26～30号集石 (第116図)

第26・27・29号集石で出土している。このうち、第26号集石では風化小片が出土したのみで、詳しい時期判定には及ばなかった。また、第27号集石についても同様である。一方、第29号集石では区画線脇に三角押文を伴うもの(29-1・2)が出土しており、29-1では三叉状陰刻文も加えられている。他には平行沈線を添えたものもあり、爪形と混合している。

第31～36号集石

対象6基のうち、第31号集石で1点、第33号集石で3点出土している。双方ともに風化小片であり、隆帯や胎土の特徴で大時期区分を施したにすぎない。

単独埋壺 (第114図)

第26号住居跡の土層観察帯に検出した(第20図B-B')のものであり、その掘方形状は不明である。埋設時は明らかに同住居跡の覆土を掘込んでおり、本土器埋設行為の後出性が確認できる。上下を切断されたキャリバー形土器であり、胴部文様帯上半の文様展開を残している。逆U字状区画内部には縄文が充填され、再度行われた区画沈線のナゾリはこの一部を消している。無文帯にはZ字状文を配し、これが少なくとも2段続く。文様展開は10単位で、全て同一の単位文が繰返される。

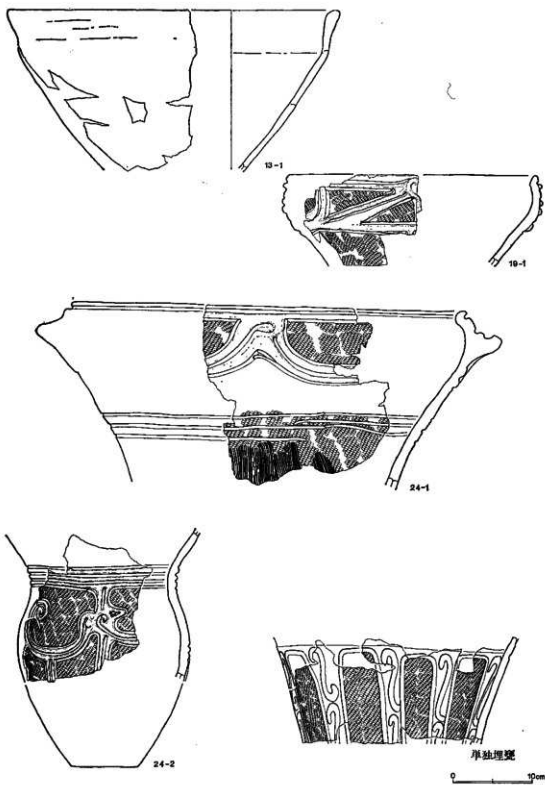
グリッド出土土器 (第117～119図)

遺構出土に認定し得ない土器を指したが、本節初で述べた如く、分布は遺構上層に集中している。また、遺構内出土破片と接合したものも多いが、それらは当該遺構に所属するものとした。なお、4はF-15、5はC-4、10はF-18でまとめて出土したものである。直下に遺構の存在を予想したもの、確認できなかった。

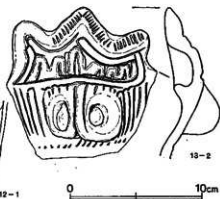
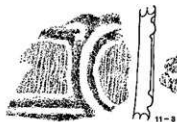
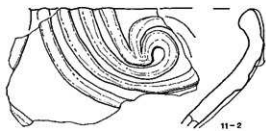
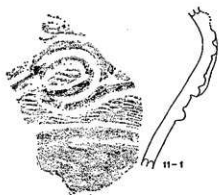
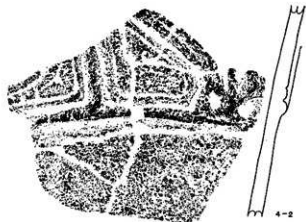
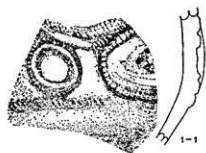
竹管文系の土器は12～17の6点を示した。それぞれ、12は連続山形、13は爪形、14～16はキャリバー形平行沈線、17は同浮線施文法を用いている。一方、勝坂、阿玉台系には1・2、18～21がある。把手(18～20)は環鏡状を基本とし、爪形、半截竹管文が加えられる。1は区画内沈線充填の胴部文様帯土器、2・21は雲母多く含む阿玉台系土器である。

加曾利E、曾利系には大別してキャリバー形(3～8・22)、変形(10・23・24)と連続波状区画文土器(9)がある。頸部無文帯を持たない3・4は、沈線によって分割される隆帯で区画文を作出する。後者は連続弧状に類する区画を用いるが、一箇所のみ単位文が変化している。また、頸部無文帯を配する5・22のうち、前者の胴部文様帯では正背二面性を持つ渦巻文が基本構図となる。

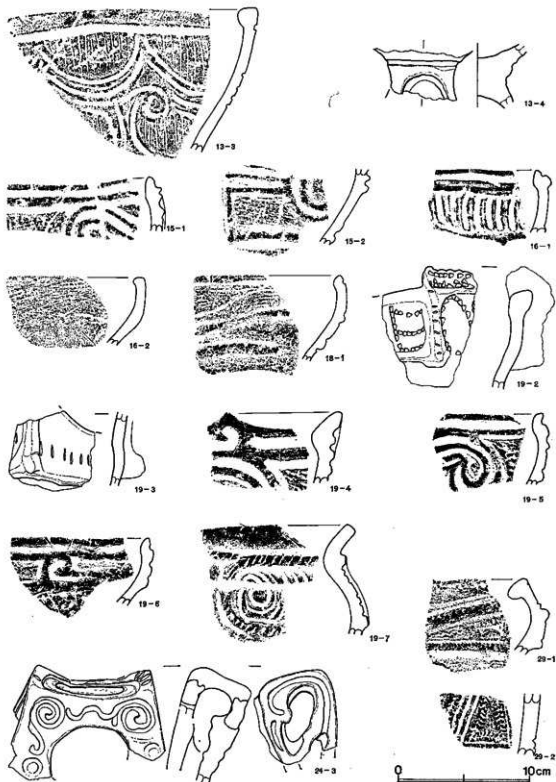
一方、変形土器3点は矢羽状沈線充填(10)と条線地文に斜位浮文を貼付するものに細別できる。10は推定4区画にわたって隆帯懸垂文を廻らす、24も同様で、こちらは胴部の突起を目安としている。また、9の連続波状区画文土器では上位区画の一部が翻り、渦巻化している。(黒坂)



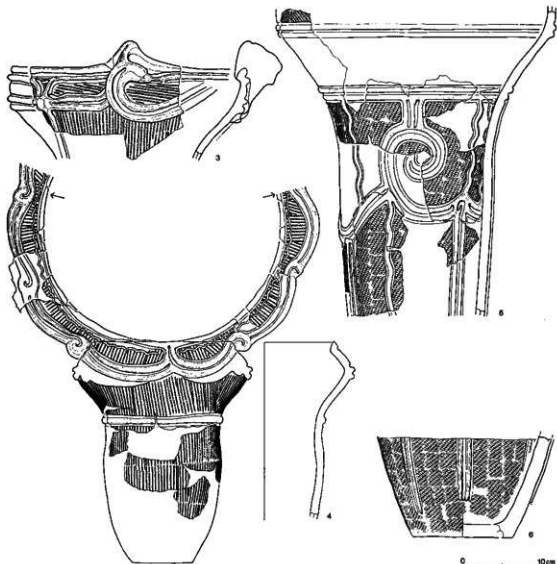
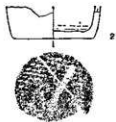
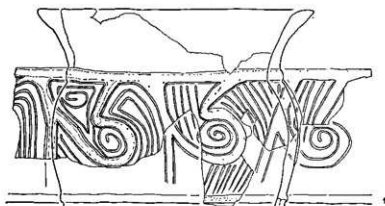
第114图 集石出土土器(1)、单独埋甕



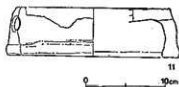
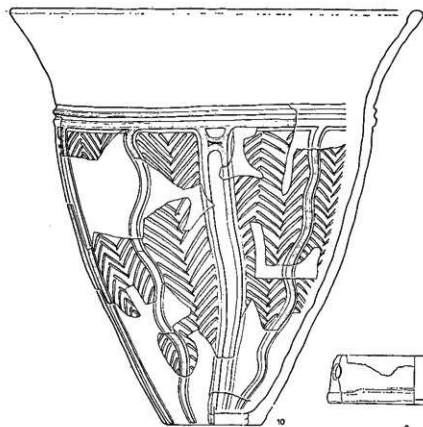
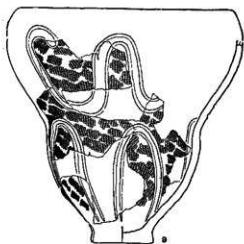
第115图 集石出土土器(2)



第116图 集石出土土器(9)



第117図 グリフ出土上器(1)



第118図 グリフ出土土器(2)



第119図 グリフ出土土器(3)

b 石器

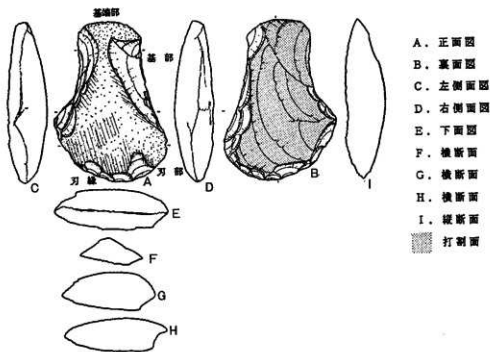
北塚原遺跡の住居跡及び土壌、集石から出土した石器の組成は、打製石斧が432点と圧倒的多数を占め、磨製石斧13点、石鏃8点となっている。これは、荒川流域における縄文時代中期の遺跡の一般的な石器組成と言える。

以下各遺構ごとに説明を行なっていくが、組成の圧倒的多数を占める打製石斧に関しては、その説明を円滑にするため、石器の部分名称の統一をはかる事にした。これは著者の打製石斧に対する見方を示すことになるかもしれない。

第120図は実測図の名部位にその名称を示したものである。使用した用語は佐原真(1977)・田中英司(1979)両氏の用語例にできる限り従った。スクリーントーンの部分は打割面と思われる剥離面を示した。「打割面」と言う用語は、小林公明氏の「偏平円礫打割技法」と呼んだ技法。偏平な礫を台石にストンと振り降ろすことによって、二枚貝のような石剝(剝片)を得、その石剝(剝片)を素材として打製石斧を製作したと言う考えであり、筆者も基本的にこの考えにそうため、「偏平円礫打割技法」によって作られた剥離面を「打割面」と呼ぶことにした。

第2号住居跡(第121図、第126~127図)

石鏃が1点出土した。作りは粗く未製品の可能性もある。2は石核と考えられるが、剥離方向は両側縁からの大きな剥離と、下縁からの小さな剥離が見られる。打製石斧は7点図示したが、完形品は3点である。3は正面基部の刃部側に自然面を残し、刃部は下方からの調整剥離によって円刃



第120図 打製石斧部位名称標式図

にしている。4・5は打割の際の縁辺をそのまま刃縁にしている。8は基部の中ほどで欠損している。正裏ともに自然面を残さず、刃部は下方からの大きな剝離によって偏刃になっている。礫器は2点図示した。10は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残し、調整剝離は周縁に施している。製作技法では打製石斧と共通する点が多い。

第3号住居跡（第127～128図）

本住居跡は石器の出土量が少なく、打製石斧が2点と石皿、砥石が検出された。打製石斧の1は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残している。調整剝離は両側縁のみで刃部には施されていない。刃縁に磨耗度が見られる。2は正裏両面に自然面を残し、素材にした原石の厚さを想定することができる。刃部は正裏両面に下方からの調整剝離が行なわれている。形状は直刃である。石皿は大きな礫を輪切状にしたもので、周縁に自然面を残している。砥面は火を受けているため、赤化しボロボロになっている。

第4号住居跡（第129図）

本住居跡からは打製石斧が1点出土しただけである。正に自然面、裏面に打割面を大きく残し、調整剝離は両側縁と刃部に施している。刃部の形状は基部の両側の袂りの終わりから、扇状に大きく開く円刃である。正面の刃部及び基部に磨耗度が見られる。

第5号住居跡（第121図、第129～131図）

楔形石器が1点出土した。本遺跡では楔形石器の出土は少ない。縦断面は凸レンズ状で作りは整っている。2は石核である。上面は自然面を残し、そのフラットな面を打面としている。剝片剝離作業は上面から下方へと規則的に行なわれている。打製石斧は19点と比較的纏まって出土した。3は自然面を正面の基端部側と刃部側に残している。裏面の打割面は中央部に残し、周縁加工は丁寧な施されている。刃部調整はあまり施されず、正面に磨耗度が見られる。4は正面に自然石、裏面に打割面を大きく残し、刃部は打割面の縁辺をそのまま利用している。5は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部の調整剝離は部分的で、形状は円刃である。磨耗度は刃部から基部にかけて、裏面右側縁に顕著に見られる。7は基端部に自然面を残し、正裏両面に打割面が見られる。これは打割の際に偏平礫が3枚ぐらいに割れ、その中の部分を素材とし、使用したものである。刃部は正面の左側に磨耗度が傾より、右側は小さな剝離が見られる。使用による欠損の可能性もある。8は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部には磨耗度は見られず、基端に長軸に対し直行する方向に磨耗度が見られる。11は正裏両面とも自然面を残さない。刃部の磨耗は激しく稜がさだかでなく、面を形成している。15は磨製石斧である。刃部を大きく欠損するが、刃面を部分的に残し、柄が見られる。基端及び右側縁に敲打痕がある。

第6号住居跡（第131～132図）

打製石斧が19点出土した。図示したのは7点である。1は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残している。刃部は正面のみに剝離が見られ、刃縁の線が整っていない事から、調整剝離とするよりも、欠損と考えた方が妥当と思われる。2は基端部を少し欠損するが、1とはほぼ同じ作りである。3は小形品である。裏面に自然面を残している。刃部の調整剝離は少なく、磨耗度が刃縁裏面に見られる。石質は目の細かい良質な砂岩である。5は厚さがあり正面に自然石を残す。7は長さ21.3

cmと大形品である。正面は大きく自然面を残す。基部の上部に両側より抉りを施している。刃部は縦断面を見ると鈍角であり、刃部を意識して作り出しているとは思えない。

第7号住居跡(第132~134図)

本住居跡からは打製石斧が27点と纏まって出土した。1は正面に自然、裏面に打割面を大きく残している。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用し、形状は直刃に近い。磨耗痕は正裏面に見られる。3は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は正面から裏面への規則的な調整剝離が施されている。磨耗痕は、刃部は両面に見られ、基部は正面のみ長軸に直行する方向で見られる。5は正裏両面に打割面が見られる。刃部は裏面から正面方向に調整剝離が見られるが、磨耗が激しいため稜は不明確になっている。形状は円刃に近い。6は正面は自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は正裏両面に調整剝離を施し、形状は直刃にちかい。磨耗痕は両面の刃縁と、正面基部に長軸と直行する方向に見られる。7は小形品である。正面に自然面、裏面に打割面を大きく残し、刃部は打割面の縁辺を利用している。8は正面に自然面を大きく残す。裏面には打割面は見られず、他の打製石斧より厚手である。調整剝離は正面から裏面に面的加工を施している。16は正面と裏面基部部に自然面を残す。基部加工は面的に行われ、刃部はノミ状に研磨されている。

第8号住居跡(第135~137図)

本住居跡からは打製石斧が比較的纏まって出土した。1は正面基部と刃部に自然面を残し、裏面には打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用している。磨耗痕は正裏両面の刃縁部に見られる。3は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用し、磨耗痕は正裏両面の刃縁に見られる。平面形状は基部部に向かって細くなり三角形になる。5は風化が激しく細部は不明確であるが正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。7は正面刃部と左側面に自然面を残し、裏面は打割面をそのまま残す。厚さがあり側面を作るように調整剝離を施している。8は正裏両面とも自然面を残さない。刃部は欠損しているが、残存部を見ると研磨が施されており、打製石斧と呼ぶよりも磨製石斧に近いものと思われる。11は敲石である。上端を欠損している。

第9号住居跡(第121・137図)

石鏃が2点出土した。1は先端部を欠損している。正面に自然面、裏面主要剝離を残す。調整剝離は右側縁と基部に施してある。2は欠損が大きく全体形状はつかみにくい。基部は凹基無茎である。打製石斧は5点出土した。4は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部の調整剝離は、裏面は面的に施されている。右側は下方からの剝離で欠損している。5は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部正面は調整剝離が面的に施されている。6は正面から基部部、裏面と自然面を残し、素材の礫の形状が復元できる。刃部は裏面に調整剝離が施されており、形状は円刃である。磨耗痕は明確でない。7は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用している。基部部は欠損しており、縦断面は楔状になっている。

第10号住居跡(第138図)

本住居跡からは石器の出土量は少ない。打製石斧は4点出土した。1は正裏両面ともに自然面を残さず、裏面には打割面を大きく残す。調整剝離は正面は面的、裏面は周縁的に施す。刃部の形状

は直刃で磨耗痕は両面に見られる。3は正面基端部に自然を残し、裏面は打割面を大きく残す。正面の調整剝離は両側縁から規則的に施されている。刃部は両面からの細かい規則的剝離が施されている。磨耗痕は正面刃縁に見られる。4は正面に自然面を大きく残す。裏面は打割面は不明確で調整剝離は周縁からの面的加工である。刃部も剝離加工が施され、厚くしてある。5は小形品である。正裏両面に自然面を残さず、打割面も不明確である。刃部形状は直刃であり、磨耗痕は見られない。6は楕円形の扁平礫の長軸両端に剝離が施されており、石錘状をしているが実際には不明である。

第11号住居跡(第122図、第138~144図)

本住居跡からは打製石斧が76点出土した。これは北塚屋遺跡のなかで最も多くの石器を出土した住居跡である。石核は3点出土し、その内1点を図示した。1は正面の一部に自然面を残し、上面からの安定した剝離作業と側縁からの調整剝離が見られる。上面は裏面から正面方向の大きな剝離によって形成されている。下面は右側縁からの剝離と裏面から正面方向の2つの剝離によって構成されている。裏面は右側からの3つの大きな剝離と左側縁からの1つの大きな剝離と、調整剝離によって形成される。以上石核に残された剝離作業を見てきたが、第5号住居跡の2の石核同様に安定した技術によって、剥片剝離作業が行なわれていたことが思われる。しかし、本遺跡においてこのような石核と関連する剥片類の数が少ないなど、なお今後の課題とすべき問題が多い。

打製石斧は形態の分る27点を図示した。2は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は裏面から正面方向の調整剝離が施されている。左側は欠損しているが、形状は直刃と思われる。磨耗痕は正面刃縁に見られる。3は大形品である。正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用している。形状は直刃である。磨耗痕は正面刃縁と基部の部分的に見られる。4は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は正面に3つの不規則な剝離面と裏面に規則的な剝離面が見られる。形状は直刃である。磨耗痕は正面の刃縁及び基部の一部に見られる。5は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は打割面と逆方向の大きな剝離面の縁辺をそのまま利用している。形状は直刃に近い円刃である。磨耗痕は正面の刃縁に少し見られる。以上3~5は長さ12cm以上の大形品のグループである。6は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部は裏面に面的な調整剝離が施されており、形状は円刃になっている。磨耗痕は確認できなかった。9は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用している。形状は偏刃である。裏面の基端部近くは両側縁からの面的剝離によって作られている。10は正面に自然面、裏面には打割面を大きく残す。刃部は両面に調整剝離を施している、形状は直刃に近い。磨耗痕は正面の刃縁に見られ、基部には長軸に直行する方向に少し見られる。11は正面の刃部及び基部の右側に自然面を残し、基部右側を大きな剝離面によって構成されている。この剝離面は打割面の方向と一致し、打割の際に同時に剝離したものと思われる。裏面は打割面を大きく残す。刃部は裏面に規則的な調整剝離が施され、形状は先尖状になっている。磨耗痕は両面の刃縁に見られる。14は正面の基部及び基端部に自然面、裏面に打割面を残す。刃部は正裏両面とも面的な調整剝離が施されている、磨耗痕は正面刃部に著しく研磨の可能性も考えられる。形状は円刃である。11は正面刃部と基端面に自然石を残し、素材とした礫の形状を想定させる例である。裏面は打割面を大き

く残す。刃部は正面に規則的な調整剥離が施され、形状は円刃である。磨耗度は刃縁両面に見られる。19は正面基部に自然面、裏面に打割面を残す。全体の形状は細身である。刃部の正面は両側縁からの剥離によって自然面を取り除いている。裏面には刃部下面からの剥離を施されており、縦断面を見ると裏面刃部に鑄を持ち鋭利に作り出している。20は正面基部部に自然面を少し残すだけで、両面に打割面を大きく残す。刃部は調整剥離が施されているが、規則性に欠ける。形状は直刃である。21は正面基部と基部の一部に自然面を残す。裏面の打割面は不明確である。両側縁からの調整剥離は面的に施され、刃部も多方向からの剥離によって構成されている。23は左側面に自然石を残し、正裏両面に打割面を残す。刃部は両側縁からの調整剥離によって尖頭状に作り出している。24は小形品である。正面刃部は自然石を残し、裏面の打割面には調整剥離を施していない。刃部の形状は円刃である。25は基端面に自然石を残し、正裏両面に打割面を大きく残す。刃部は両面とも調整剥離が施されており、形状は尖頭状に作っている。29・30は磨製石斧の欠損品と思われるものである。29は全面に蔽打が施されている。

第12号住居跡（第144～145図）

1は打製石斧である。正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は正面に調整剥離が面的に施されている。形状は円刃である。磨耗度は刃縁両面に見られる。2は磨製石斧である。刃部を大きく欠損している。蔽打によって形状を作り出した後に研磨を施しているが、基部に関しては研磨が部分的にしか見られない。基端面は剥離によって作り出している。3は磨製石斧の未製品と思われる。正裏両面の中央部に自然面を残し、両側縁より蔽打による成形を施している。刃部は研磨が施されているが、刃としては厚く未完成のままである。

第14号住居跡（第145図）

本住居跡からはほとんど石器が出土しなかった。1は礫器である。両面に自然面を大きく残し、刃部と思われる部分は欠損している。

第15号住居跡（第122・145～147図）

1は石核である。正面に自然面を残し、裏面は分割の際の節理面を大きく残している。打製石斧は10点図示した。2は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。基部部の自然面が裏面まで伸びているので、素材とした礫の形状を考えるため、縦断面を2本図示した。刃部は裏面に不規則な調整剥離が施されている。磨耗度は両面の刃縁に見られる。形状は円刃である。3は正面に自然面、裏面に打割面を残す。裏面の調整剥離は刃部近くに両側縁からの面的剥離が施されている。刃部は前面からの剥離が裏面に施され、正面は自然面をそのまま利用している。形状は直刃である。磨耗度は刃縁両面と、正面基部は長軸に直行する方向に見られる。4は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は両面とも規則的な調整剥離が施され、全体形状はノミ状に見える。磨耗度は確認できなかった。6は正面及び裏面刃部左側に自然面を残す。裏面は2つの剥離によって構成され、中央に稜線を持つ、横断面は逆三角形を呈している。刃部は細かい調整剥離が両面に施され、形状は直刃である。磨耗度は両面の刃縁と、裏面の基部に見られる。8は正面に自然面、裏面は打割の際に節理で割れたと思われる節理面を残している。刃部は正面は面的剥離を施した後、細かい調整剥離を施している。裏面は不規則ではあるが調整剥離を施している。形状は直刃に近い円刃である。

11は打製石斧とするよりも、磨製石斧とすべきかもしれない。正面は全面に研磨を施しており、いくつもの稜を持っている。裏面は剝離正面によって構成されている。

第16号住居跡（第147～149図）

1は正面基部部に自然面を残し、裏面は打割面が不明瞭である。刃部は正面に下面からの剝離が見られ、形状は直刃である。磨耗度は確認できなかった。2は正面刃部に自然面を残し、裏面は打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用している、形状は円刃である。磨耗度は両面の刃縁に見られる。基部部は欠損している。3は正面に打割面、裏面に自然面を残す。刃部は裏面には規則的な調整剝離が施されている。磨耗度は著るしく、正面は刃部に面を構成している。形状は円刃である。8は石匙と考えられる石器である。上面は自然面を残し、刃部には剥片の縁辺をそのまま利用し、剝離加工を施していない。9は横刃形石器である。正面から上面に自然を残す。刃部は裏面から正面方向に規則的に施されている。

第17号住居跡（第149図）

1は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す、刃部は両面とも調整剝離が施され、形状は円刃である。磨耗度は正面の刃縁に見られる。2は裏面に打割面を大きく残し、正面に自然面を残さない。刃部右側縁を大きく欠損している。3は正面に自然面を残し、裏面には打割面が明確でない。刃部の調整剝離は、正面は面的で、裏面は細かい剝離が施されている。基部部は欠損している。4は礫器である。扁平の礫の周縁に剝離を施しており、下端及び裏面の右側縁を刃部としているものと思われる。5は棒状の礫の下端に敲打痕が見られる。

第18号住居跡（第123・150図）

本住居跡は石器の出土量は少なかったが、撮・削器が2点とチャート製の大形剥片が検出された。1は裏面に自然面を残し、正面上部に刃部を作っている。3は正面に自然面を残した頁岩製の大形剥片である。左側縁を刃部としている。打製石斧は完成品は出土しなかった。5は楕円礫を素材としたチャップパー状の礫器である。

第19号住居跡（第122・150図）

本住居跡よりはチャート製の石核と、礫器が検出されたのみであった。

第20号住居跡（第150図）

本住居跡では打製石斧の欠損品が1点検出されたのみであった。

第22号住居跡（第150～152図）

本住居跡からは打製石斧が比較的纏まって出土した。1は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部は裏面は下方より調整剝離が施されており、正面は自然面をそのまま利用している。形状は円刃である。磨耗度は両面の刃縁に見られる。3は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺を利用している。磨耗度は確認できなかった。6は正面に自然面、裏面に打割面を残す。裏面の調整剝離は面的で刃部近くに集中した。刃部は裏面に前方よりの剝離が見られ、欠損しているものと思われる。磨耗度は正面刃部に見られる。7は比較的小形のものである。正面に自然面、裏に打割面を残す、刃部は両面に調整剝離が施され、形状は直刃である。磨耗度は裏面に少し見られる。8は厚手の作りである。自然面は正面の刃部右側と基部部に少し見られるだけで、打

剖面は明確でない。右側面に敲打痕がある。磨耗痕は両面の刃縁に見られた。

第23号住居跡（第152～153図）

1は正面の一部に自然面を残し、裏面に打割面を大きく残す。刃部は裏面右側縁の剝離面が磨耗痕を切っている事から、若干欠損している可能性がある。2は正面基端部と裏面刃部近くに自然面を少し残す、刃部の形状は偏刃で両面に磨耗痕が見られる。3は裏面に自然面を大きく残し、正面は上下からの大きな剝離によって作られている。刃部は正面に調整剝離が施されている。形状は円刃である。5は礫器である。基端両側に抉が入っており、下端を欠損している。

第26号住居跡（第123・153～154図）

本住居跡より石鏃が2点出土した。2点とも基部は凹基無茎で大きさも近い。3は尖頭器である。正面には自然面を残し、基部に調整剝離を施している。裏面は両側縁からの面的な剝離によって作っている。先端部は上方からの剝離によって抉られており、欠損の可能性もある。打製石斧は6点図示した。1は正面に自然面、裏面に打割面を残す、刃部は裏面の前方からの大きな剝離によって作り出しており、調整剝離は施されていない。磨耗痕は両面の刃部に見られる。5は基端部に自然面を残し、基端面に研磨痕が見られる。刃部は正面に規則的な調整剝離が施され、形状は円刃である。磨耗痕は両面の刃部の稜を磨耗している。6は自然面を残さず、打割面は裏面に見られる。刃部の調整剝離は、正面は両側縁から施し、裏面は前方からの不規則な剝離が見られる。形状は直刃である。10は凹石である。大形の河原石に4ヶ所の凹が見られる。

第28号住居跡（第124・154図）

1は搥・削器である。剝片の右側縁に刃部を作っている。2は打製石斧である。正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部の調整剝離は裏面は面的剝離、正面は規則的な細かい剝離を施している。形状は円刃である。磨耗痕は正面の刃縁に見られる。

第30号住居跡（第124図）

石鏃が1点出土した。先端部を欠損している。基部に浅い抉りが入り、裏面に主要剝離面を残す。

第32号住居跡（第154図）

打製石斧の欠損品を2点図示した。1は基部を大きく欠損している。2は刃部を大きく欠損している。

第33号住居跡（第155図）

1は打製石斧である。両面に大きく自然面を残し、素材とした礫の原形をあまり変えていない。刃部は裏面に下方からの1回剝離によって作っている。形状は円刃である。磨耗痕は正面刃縁に見られる。

第34号住居跡（第155図）

凹石が1点検出された。両面に凹を有し、右側面に敲打痕がある。

第35号住居跡（第155図）

1は正面の刃部左側及び基部に自然面を残し、正裏両面に打割面を大きく残す。刃部は下面からの剝離によって欠損している。2は正面に自然面・裏面に打割面を大きく残す。刃部は両面に調整剝離が施されている。形状は円刃である。磨耗痕は正面刃縁に少し見られる。

第36号住居跡 (第124・156~159図)

石鏃が3点出土した。1は一般の石鏃より大きく、厚手である。基部は凹基無茎で、形態は押型文系土器群に伴なりトロトロ石器に似ているが、当格時期の土器は検出されていない。先端にフシット状の剝離が入っている。2・3は基部は凹基無茎である。2は裏面は主要剝離を残す。3は右脚を欠損している。4は石核である。上面は節理面によってフラットな面石を作っている。裏面の一部に自然面を残す。剝片剝離は全周から中心に向かって行なわれている。打製石斧は19点図示した。5は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用している。形状は円刃である。磨耗痕は正面の刃縁と基部の側縁に見られる。7は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部は裏面に規則的な調整剝離が施され、形状は円刃である。磨耗痕は両面の刃縁と正面基部に見られる。9は正面に自然面を大きく残し、裏面は両側縁からの剝離面で構成され、中央に稜線を持つ。刃部は正面に規則的な調整剝離が施され、形状は直刃である。磨耗痕は正面刃縁に見られる。10は正面刃部に自然面を残し、裏面に大きく打割面を残す。刃部の調整剝離を見ると、正面は不規則な浅い剝離が施され、裏面は2つの深い剝離によって作られている。形状は不定形の円刃である。磨耗痕は正面刃縁と、基部右側の自然面と剝離面の境に見られる。12は正面基端部に少し自然面を見るだけで、両面に大きく打割面を残す。刃部は両面に調整剝離を施しており、形状は円刃である。磨耗痕は裏面刃部に見られる。14は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部は正面に規則的な調整剝離を施し、裏面は面的剝離によって構成されている。形状は円刃である。磨耗痕は正面の刃部と基部の自然面と剝離面の境に見られる。また裏面については、磨耗が著るしく刃縁及び基部の一部で剝離の稜線を消し、面を構成している所がある。21・22は小形品である。21は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺を利用している。刃縁の磨耗が著るしく丸くなっている。22は風化が激しく細部は不明である。大きさは21とほぼ同じである。

第37号住居跡 (第159図)

1は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部の調整剝離は裏面は両側縁からの面的剝離を施し、正面は左側縁からの大きな剝離と下方からの剝離が見られる。形状は右側縁を少し欠損しているが、直刃に近い円刃である。磨耗痕は両面の刃部に見られる。3は正面基部の左側に自然面を残し、裏面は打割面を大きく残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用している、正面は下方からの大きな剝離が見られる。形状は少し先が尖る円刃である。磨耗痕は確認できなかった。4は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部の調整剝離を見ると、裏面は左下方よりの大きな剝離を施した後、細かい規則的な剝離を施している。磨耗痕は正面刃部の両側縁に見られる。

第38号住居跡 (第160図)

2は両面の基部の一部に自然面を残し、裏面に打割面を見る。刃部は多方向からの剝離によって構成されており、形状は円刃である。磨耗痕は著しく、両面の刃部及び基部に見られる。

第39号住居跡 (第160図)

1は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部の磨耗痕は著しく、両面とも面を構成している。これは使用によるものと考えられるよりも、研磨を施したと考える方が妥当かもしれない。

以上の第37~39号住居跡は切り合っており、以下この3軒のいずれに直接伴うか明確でないも

のを見ていく。

1は正面基端部に自然面を残し、打割面も正面に残す刃部は先尖状に作り出している。磨耗痕は見られなかった。5は裸器である。正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部は打割面の縁辺をそのまま利用している。

第40号住居跡（第124・162～164図）

1は石鏃である。基部には浅い抉りが入る凹基無茎である。2は切片の右側縁にリタッチを施した削器である。打製石斧は9点図示した。3は正面に自然面、裏面に打割面を大きく残す。刃部は裏面に不規則な調整剥離が見られる。形状は円刃である。磨耗痕は正面刃縁に見られる。6は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部は裏面に下方よりの面的剥離が施されている。形状は円刃である。磨耗痕は裏面刃縁が著しく面を成している、正面は刃縁に見られる。7は正面に自然面、裏面に打割面を残す。刃部は裏面に規則的な調整剥離が施され、形状は円刃である。磨耗痕は正面刃縁に見られる。9は正面刃部に自然面を残し、裏面に大きく打割面を残す。刃部は両面に調整剥離を施している。形状は円刃である。磨耗痕は正面刃縁及び基部の自然面と剥離面の境に見られる。12は定角式磨製石斧の欠損品である。

第42号住居跡（第124図）

石鏃が1点出土した。平基無茎で左脚部を欠損する。

第197号土墳（第125図）

1は石鏃の脚部である。

第18号土墳（第125図）

1は石鏃である。作りは粗く刃部加工を施していない。このような粗製石鏃を土墳内から検出した例として、神谷原遺跡を上げられる。

グリッド（第125・164図）

グリッド出土の石器の数は多い、ここでは遺構出土の石器を補うかたちで図示した。1は有茎尖頭器である。本遺跡においては最も古い時期ものと言える。先端を少し欠損するが全体形状は把握できる。身部先端部近の両側縁に、正面から裏面方向の剥離によって抉りが入っている。茎部は返し部が明確でなく中林遺跡出土の有茎尖頭器に近い。2・3は石鏃である。2点とも先端部を欠損している。4は石鏃と思われる。第10号住居跡から出土した石鏃状石器以外は、本遺跡では石鏃は検出されていない。石鏃の性格から単独で出土するとは考えにくく、また周辺の縄文時代中期遺跡でも検出されていない。この事を考え合すると本石器を石鏃とは考えにくく、今後の検討が必要かもしれない。5～7は磨製石斧である。5は細身の定角式磨製石斧である。刃部は裏面に鋸を持ち形状は円刃である。6は小形の定角式磨製石斧である。刃部は裏面に鋸を持ち形状は円刃である。7は刃部である。基部は大きく欠損している。

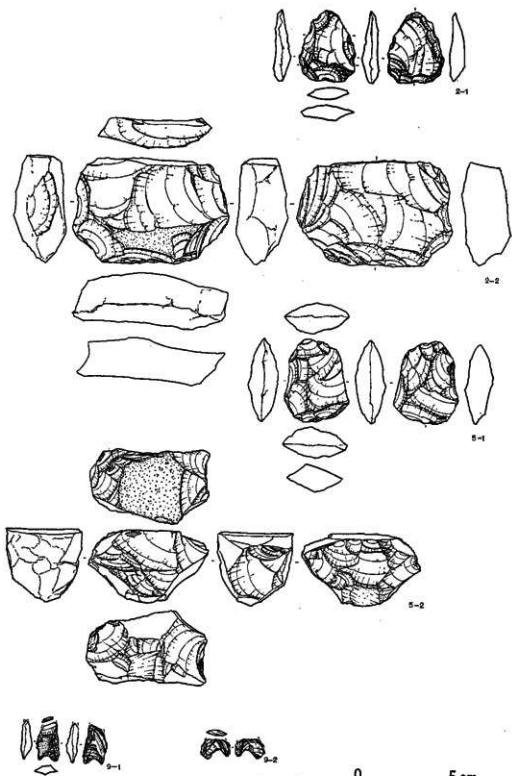
（西井）

第11表 出土石器点数一覧表(1)

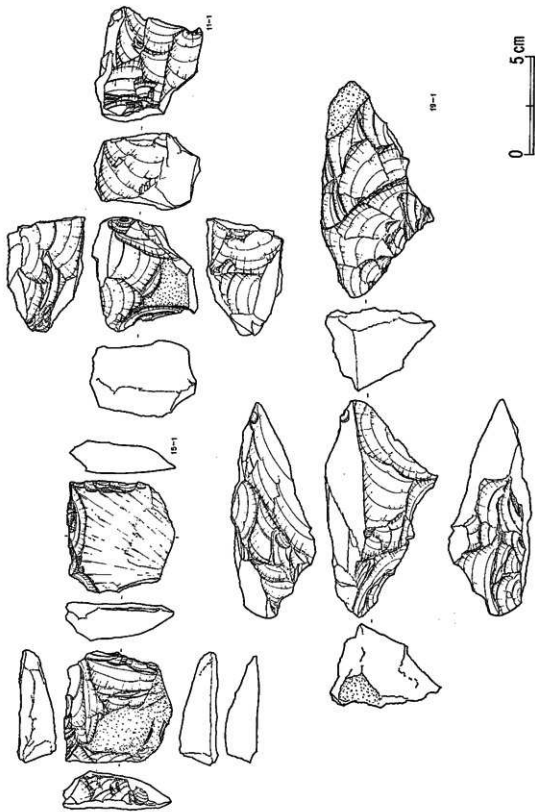
	打石	製斧 磨石	石鏃	削・掻器	剝片類	石核	礮器	磨石類	石皿	その他	計
第1号住											0
第2号住	11		1		9	1	3	3	2		30
第3号住	2								1	砥石 1	4
第4号住	1				2						3
第5号住	19	1			7	1	3			砥石 1	32
第6号住	19	1			52		26	4	1		103
第7号住	27	1			18		1	4			51
第8号住	15	1			6		3	3			28
第9号住	10		2	1	33		12	5			63
第10号住	4							2		石鏃? 1	7
第11号住	76	2			57	3	23	14		砥石 2	177
第12号住	5	3			10	2	7	4			31
第13号住											0
第14号住					1		1			砥石 1	3
第15号住	21				1	1	5	1			29
第16号住	8			2	10		1	4			25
第17号住	5				15		6				26
第18号住	2			2	12		2				18
第19号住					2	1	2	1			6
第20号住	1										1
第21号住								1			1
第22号住	22			3	12		1	3			41
第23号住	8				3		1				12
第24号住					2		1				3
第25号住	2		1	1			1	1			6
第26号住	14		2	2	7		4	3		尖頭器 1 楔形石器 1	34
第27号住											0
第28号住	2				5						7
第29号住											0
第30号住			1		8						9
第31号住					7						7
第32号住	3				2			1			6
第33号住	3				2						5
第34号住	1						1	1			3
第35号住	4				3			1	1		9
第36号住	40			1	15	1	1			砥石 1	59
第37号住	6				3						9
第38号住	4				6				1		11
第39号住	3				2			1			6
第40号住	30	1		1	14			2			48
第41号住								1			1
第42号住			1								1
合計	368	10	8	13	326	10	105	60	6	9	915

第12表 出土石器点数一覧表(2)

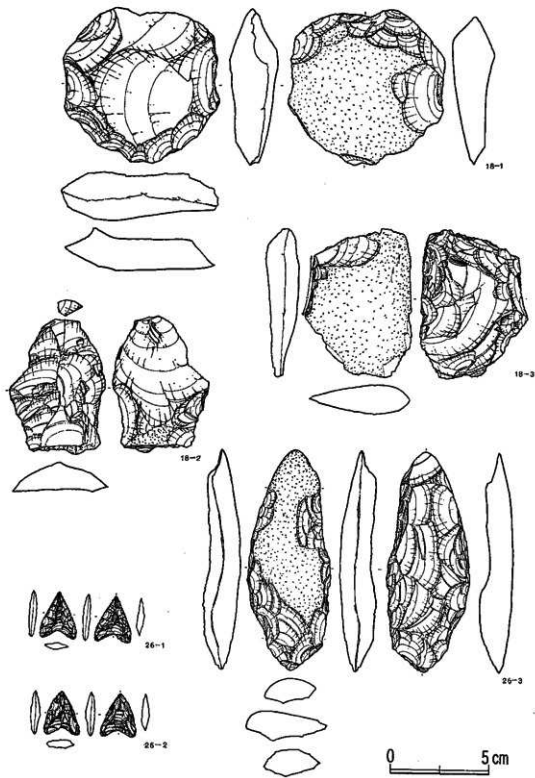
	打石 製斧	磨石 製斧	石鏡	削・掘器	剥片類	石核	礫器	磨石類	石皿	その他	計
第2号土壌	2										2
第4号土壌									1		1
第11号土壌	1										1
第12号土壌	1				1						2
第13号土壌	1						1				2
第17号土壌	1										1
第18号土壌	1				1					石匙 1	3
第29号土壌					1						1
第44号土壌							1				1
第68号土壌	2										2
第75号土壌	2	1						1			4
第83号土壌					1			1			2
第86号土壌					1			1			2
第93号土壌	1										1
第96号土壌	1										1
第103号土壌					1						1
第119号土壌					1						1
第122号土壌					2			1			3
第135号土壌					1						1
第140号土壌				1							1
第146号土壌	1										1
第149号土壌	1										1
第156号土壌	1							1			2
第157号土壌							1				1
第167号土壌	1										1
第180号土壌					1						1
第187号土壌	2				8						10
第188号土壌		1			1						2
第197号土壌	3							4			7
第202号土壌					2						2
第203号土壌	8	1			2		1				12
第212号土壌	1										1
第213号土壌	2										2
第214号土壌	2		1	1	18		1	1	1		25
第215号土壌	1				8					砥石 1	10
第216号土壌	1				1						2
第217号土壌	1						1	1	1		4
第219号土壌	1				1						2
第222号土壌	1				3						6
第225号土壌	3				5				1		9
第229号土壌								1			1
第240号土壌	6				1						7
第243号土壌								1			1
第244号土壌	1										1
第245号土壌					1						1
土壌計	49	3	1	2	61	0	8	13	4	2	144
第1号集石					3						0
第2号集石	1				1						4
第5号集石					2						1
第8号集石	2				7	2	1				4
第11号集石											10
第13号集石	6							1			7
第14号集石	1										1
第15号集石	3				2			1		砥石 2	8
第16号集石					1						1
第17号集石								1			1
第19号集石	2				2		1				5
第24号集石					2			2	1		1
第32号集石									1		1
集石計	15	0	0	0	20	2	2	5	2	2	48
遺構出土計	432	13	9	15	407	12	115	78	12	13	1,106



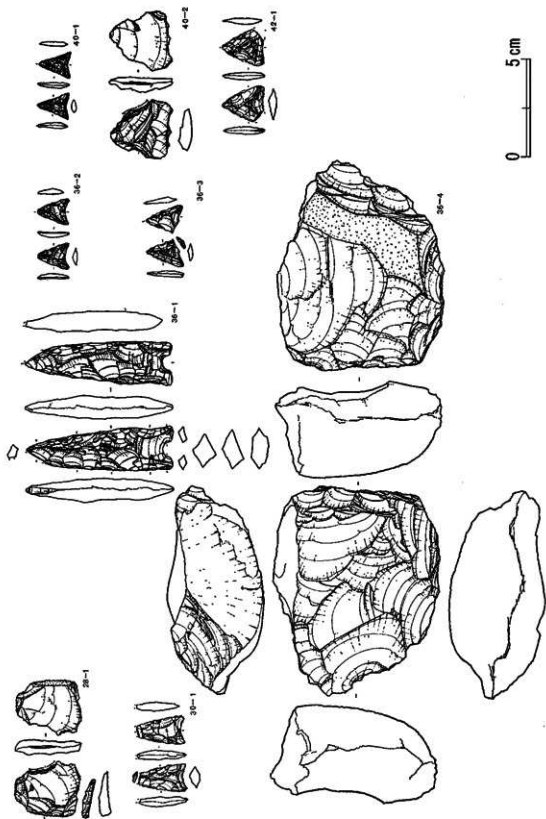
第121圖 出土石器(1)住居跡



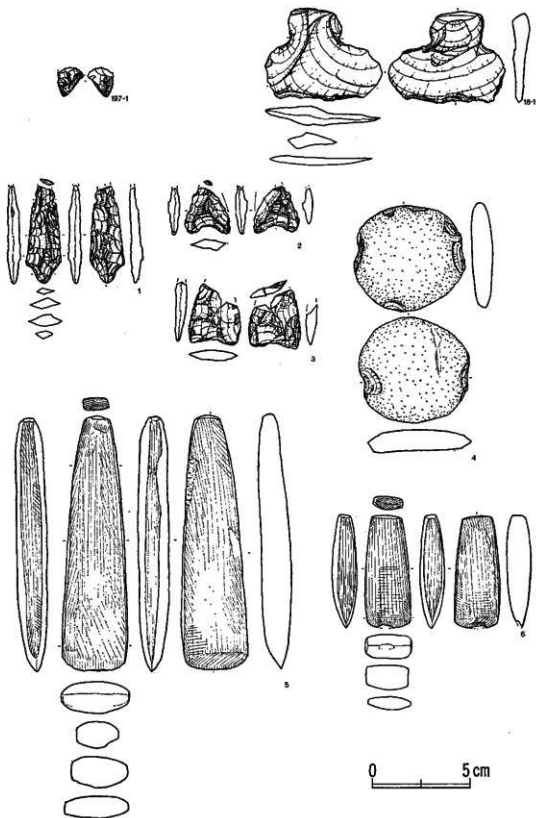
第122圖 出土石器(2) 住野跡



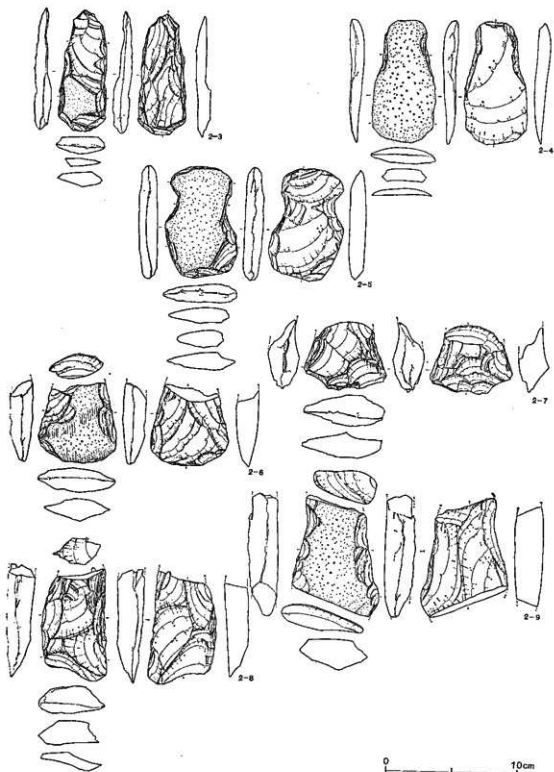
第123圖 出土石器(3)住居跡



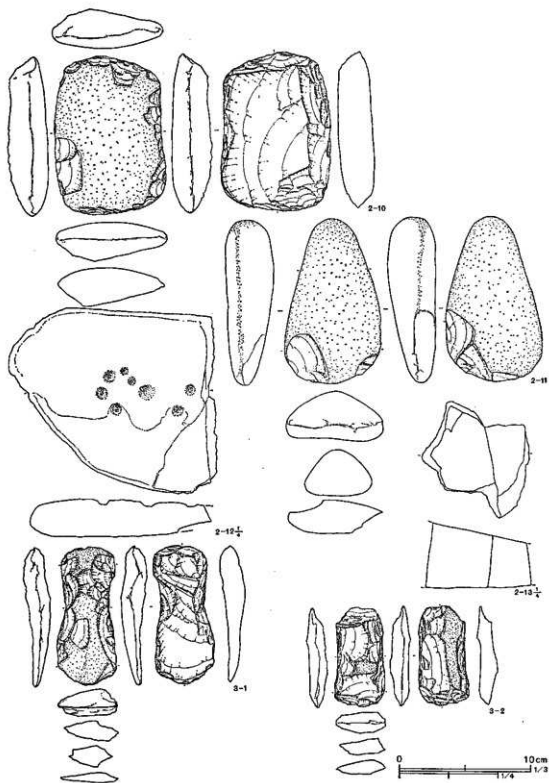
第124圖 出土石器(4) 位置跡



第125図 出土石器(5)土橋・グリフ



第126圖 出土石器(6)住居跡



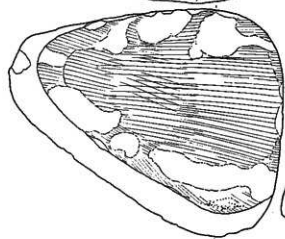
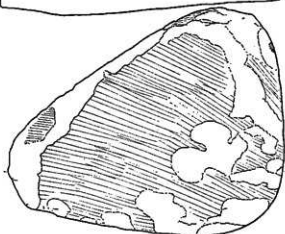
第127图 出土石器(7)住居跡



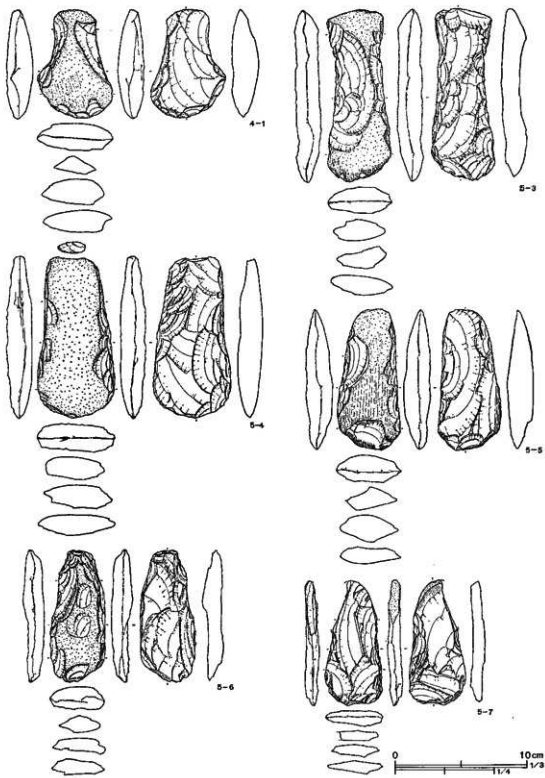
9-3-1



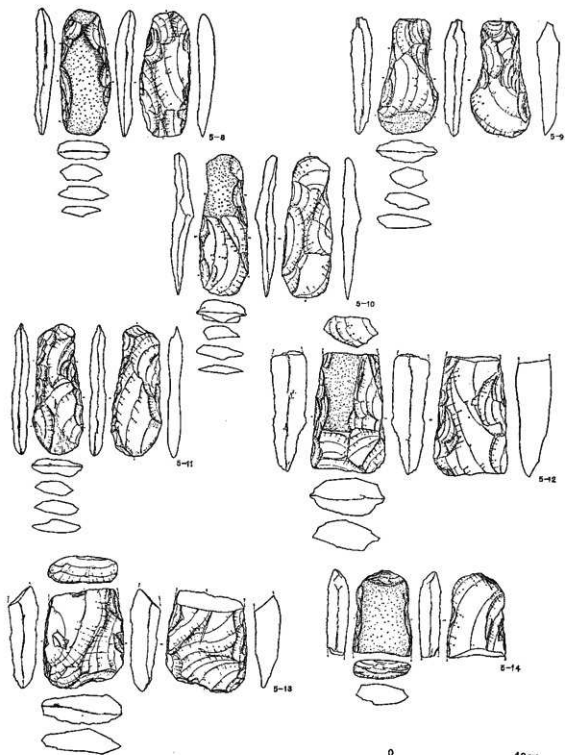
9-4-1



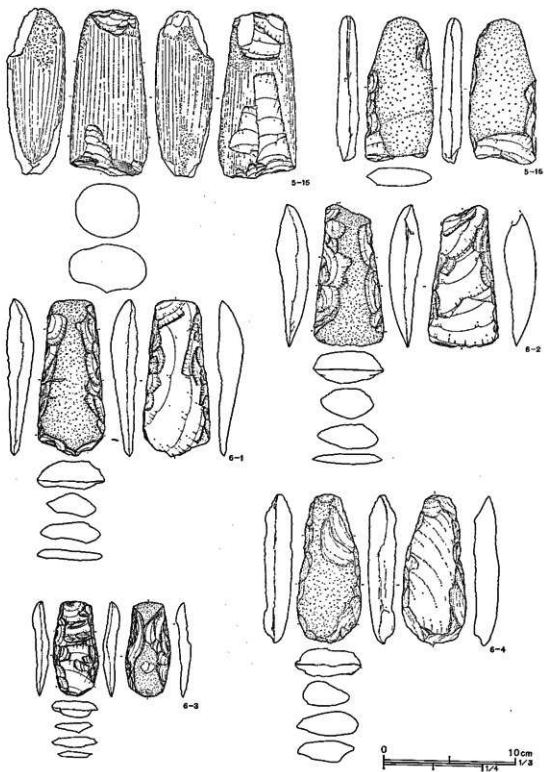
第128圖 出土石器(8)住居跡



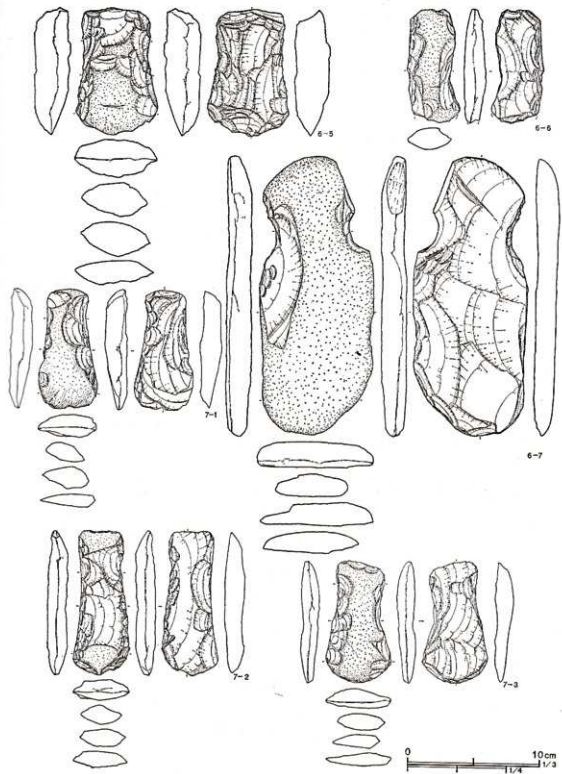
第129图 出土石器(9)住居跡



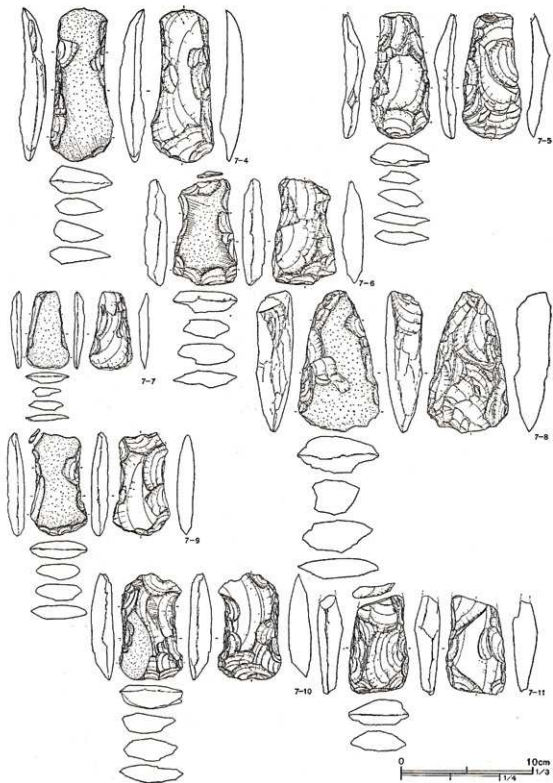
第130圖 出土石器 (10) 住居跡



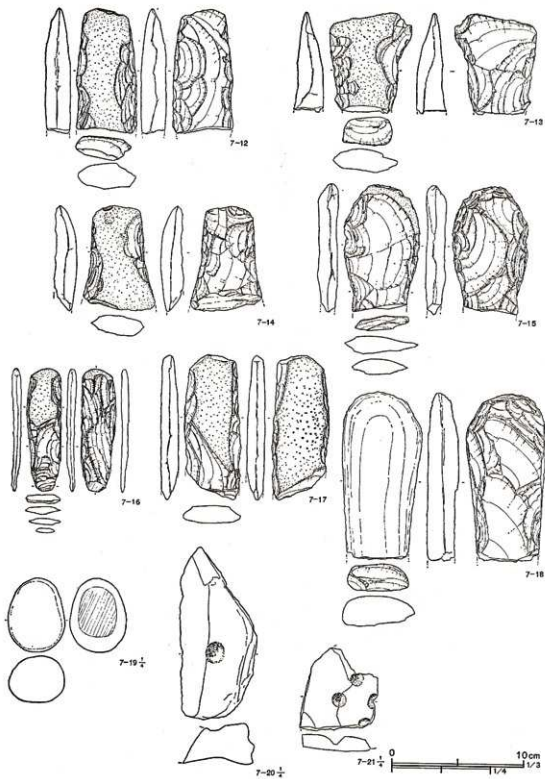
第131圖 出土石器 (11) 住居跡



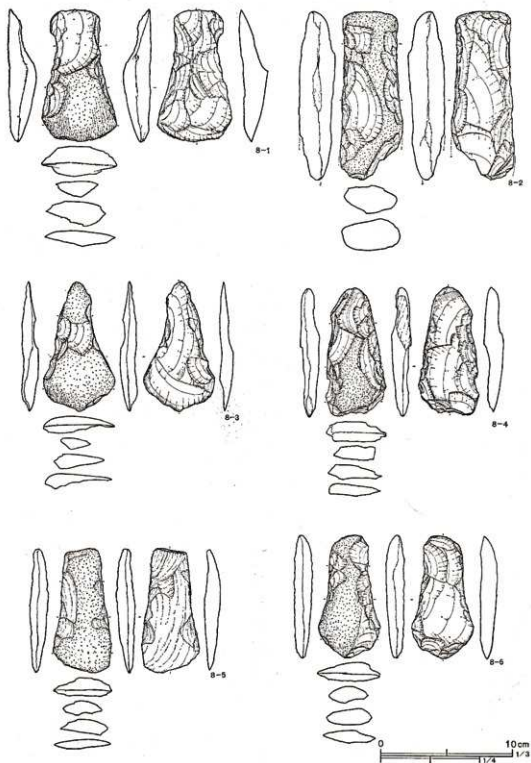
第132圖 出土石器 (12) 住層跡



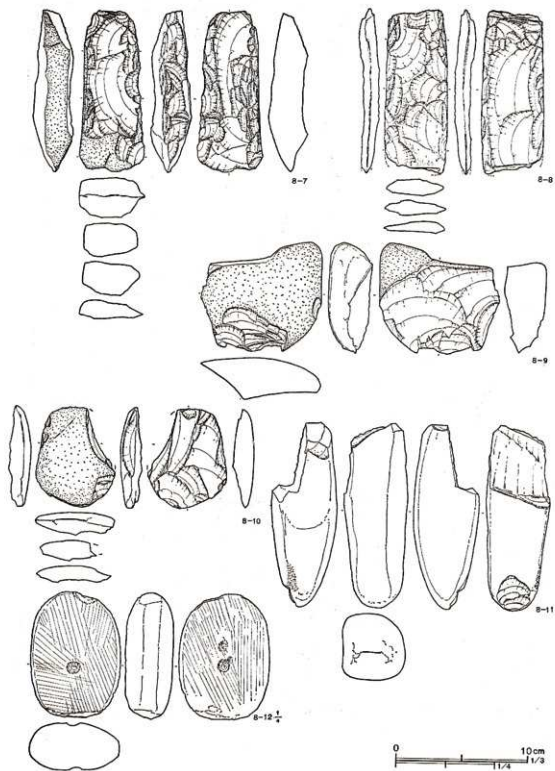
第133图 出土石器 (13) 住居跡



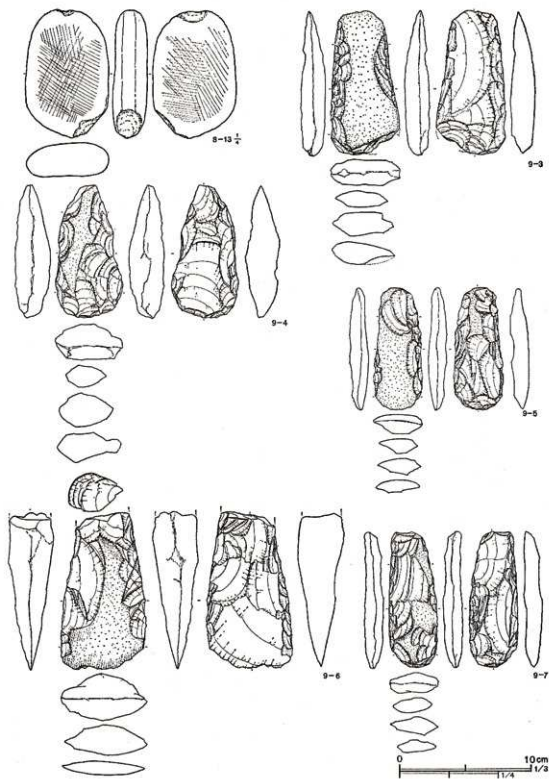
第134圖 出土石器(14)住居跡



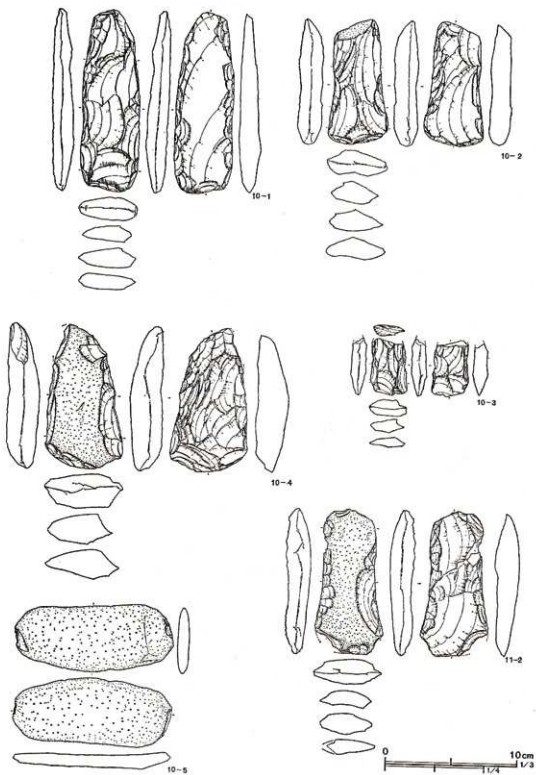
第135圖 出土石器 (15) 住居跡



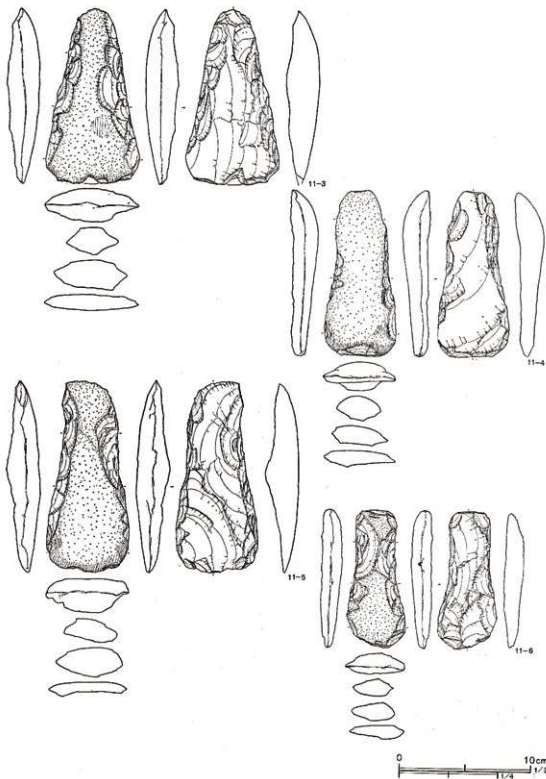
第136圖 出土石器(16)住居跡



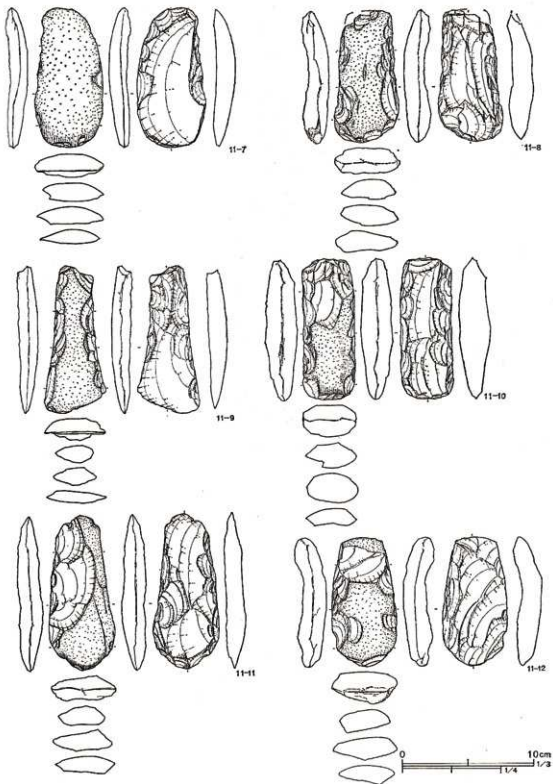
第137图 出土石器 (17) 住居跡



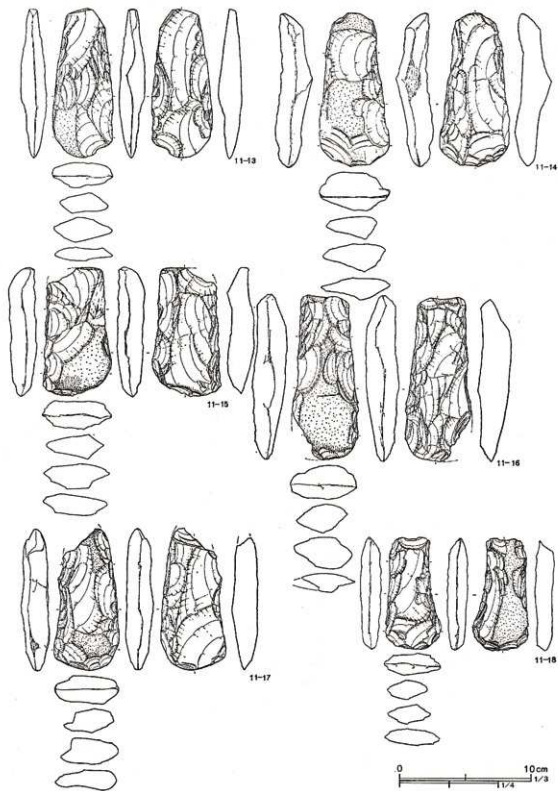
第138圖 出土石器 (18) 住居跡



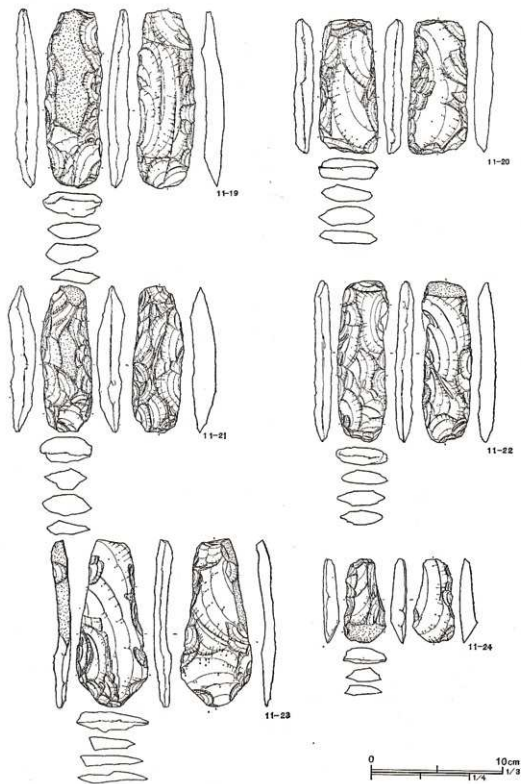
第139圖 出土石器(19) 住居跡



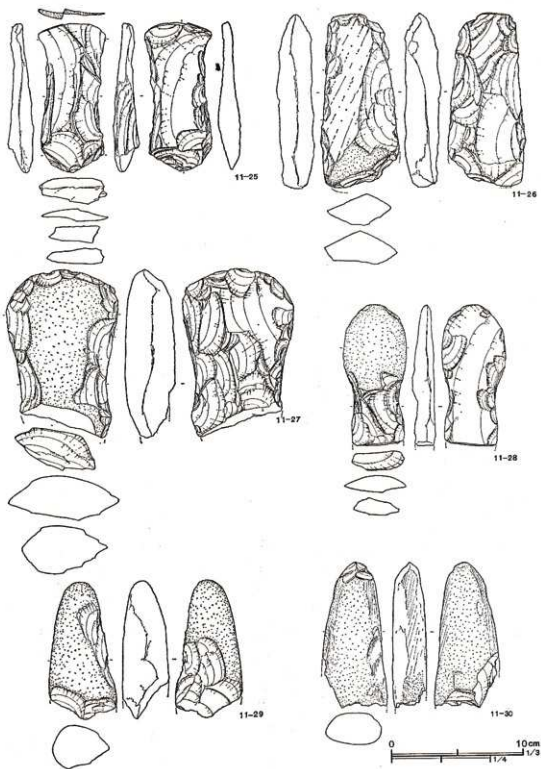
第140圖 出土石器 (20) 住居跡



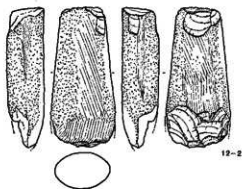
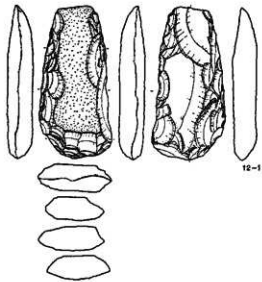
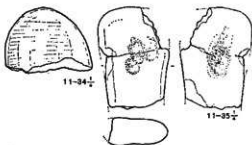
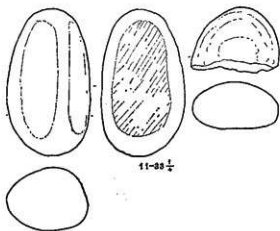
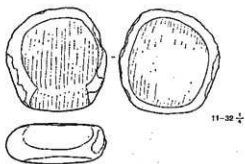
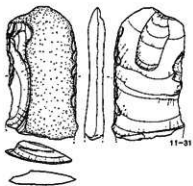
第141圖 出土石器 (21) 住居跡



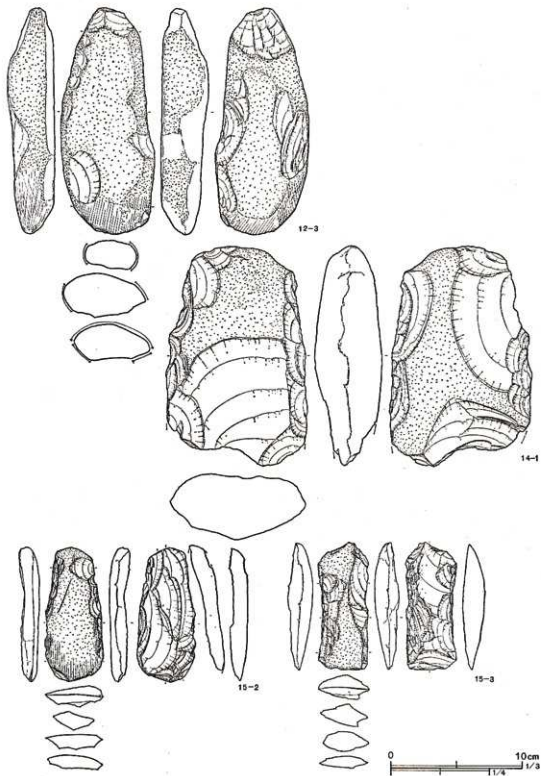
第142图 出土石器(22)住居跡



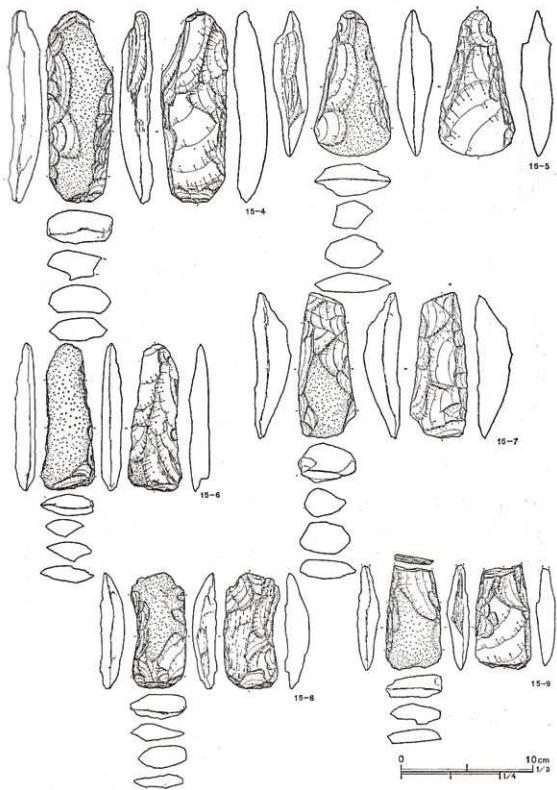
第143圖 出土石器 (23) 住居跡



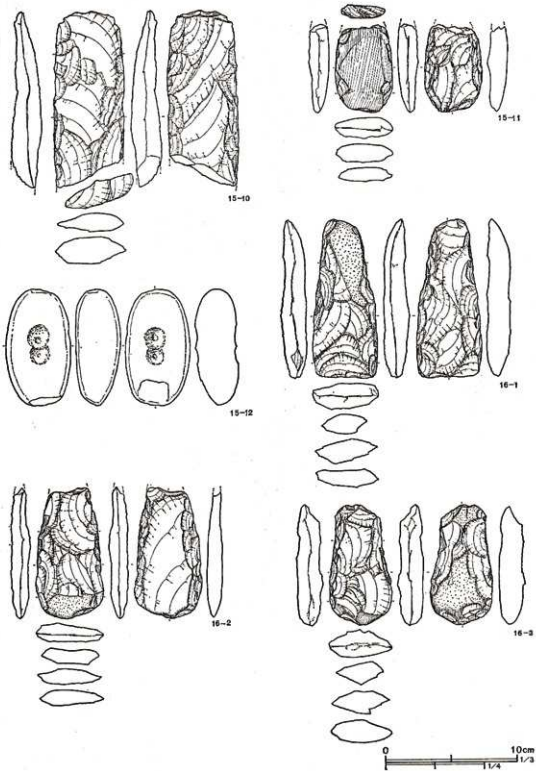
第144圖 出土石器(24) 住居跡



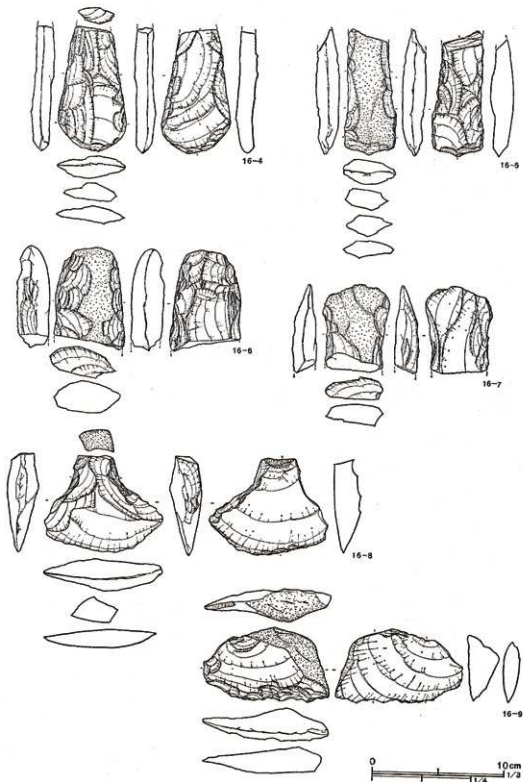
第145圖 出土石器 (25) 住居跡



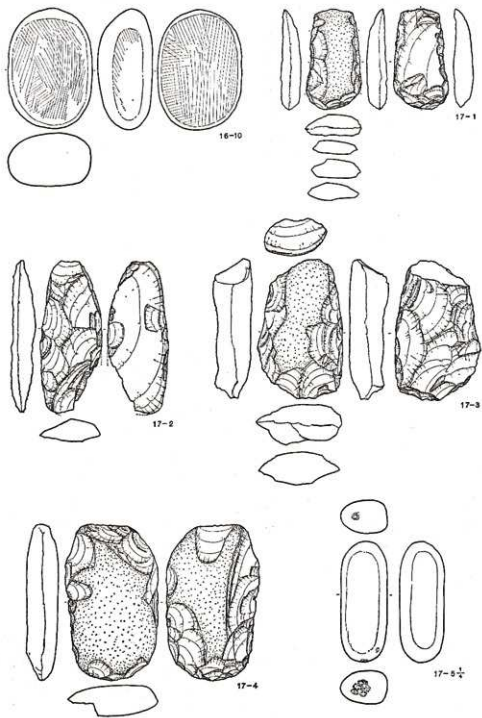
第146圖 出土石器 (26) 住居跡



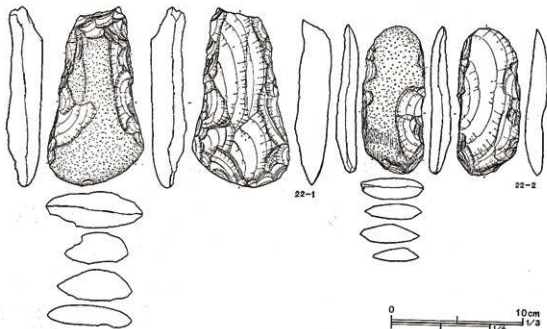
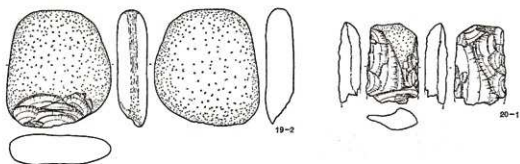
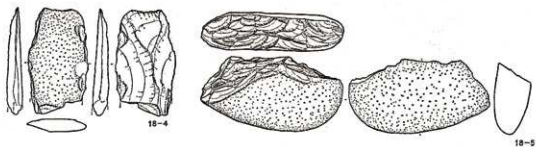
第147图 出土石器(27)住居跡



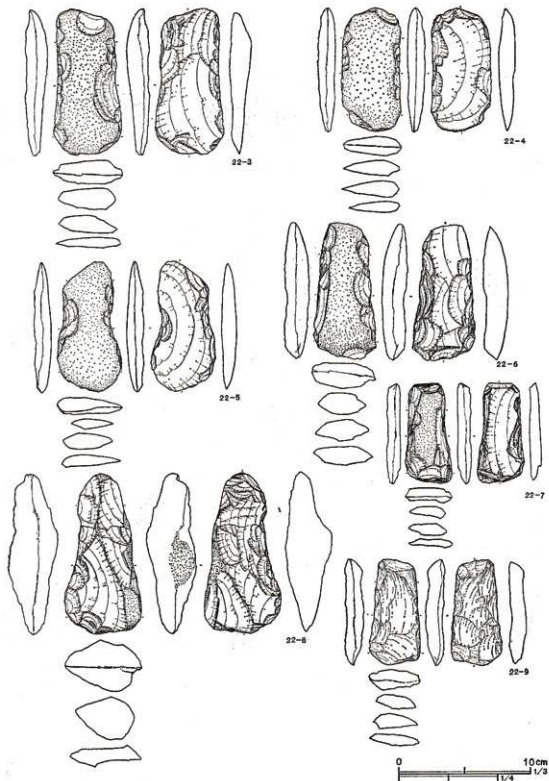
第148圖 出土石器(28)住居跡



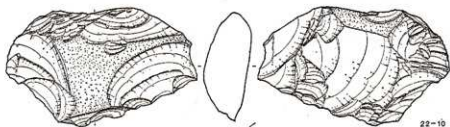
第149圖 出土石器 (29) 住居跡



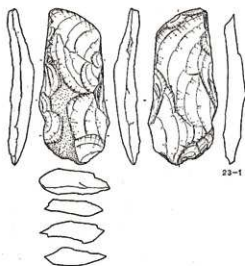
第150圖 出土石器(30)住居跡



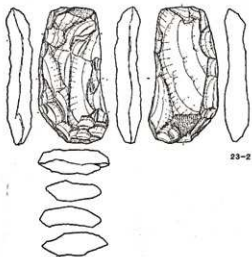
第151圖 出土石器(31)住居跡



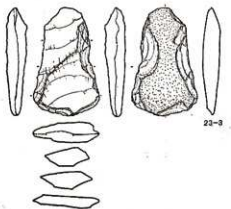
22-10



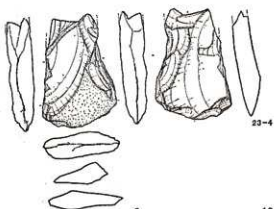
23-1



23-2



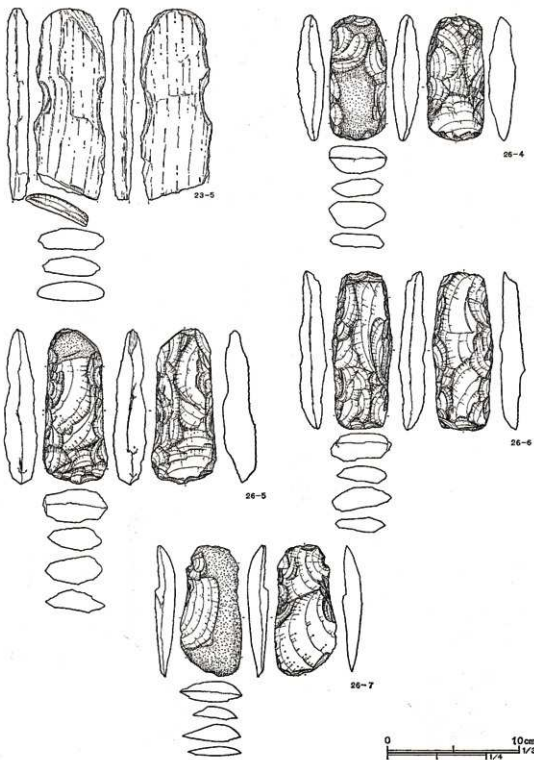
23-3



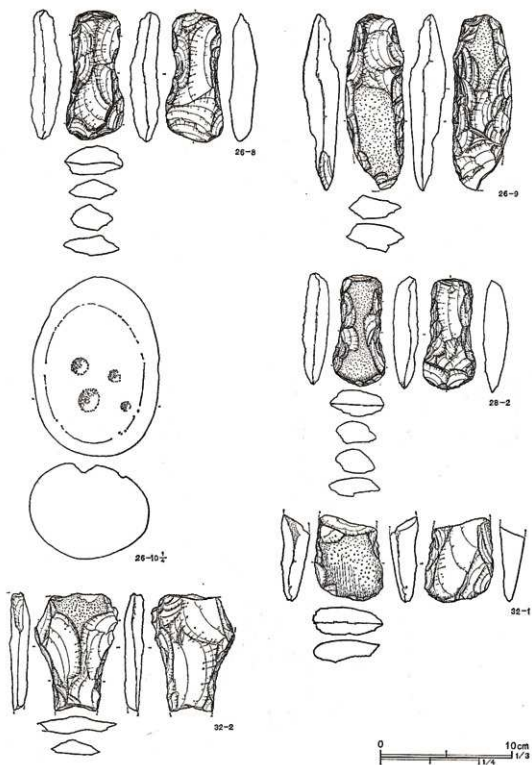
23-4



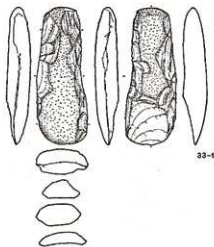
第152圖 出土石器 (32) 住居跡



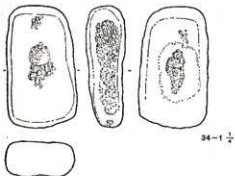
第153图 出土石器 (33) 住居跡



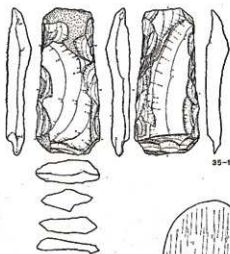
第154圖 出土石器 (34) 住居跡



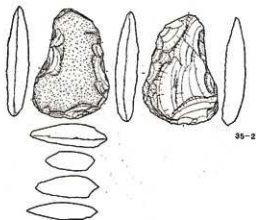
33-1



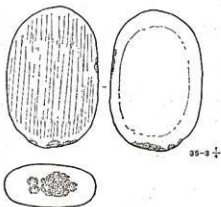
34-1 $\frac{1}{2}$



35-1



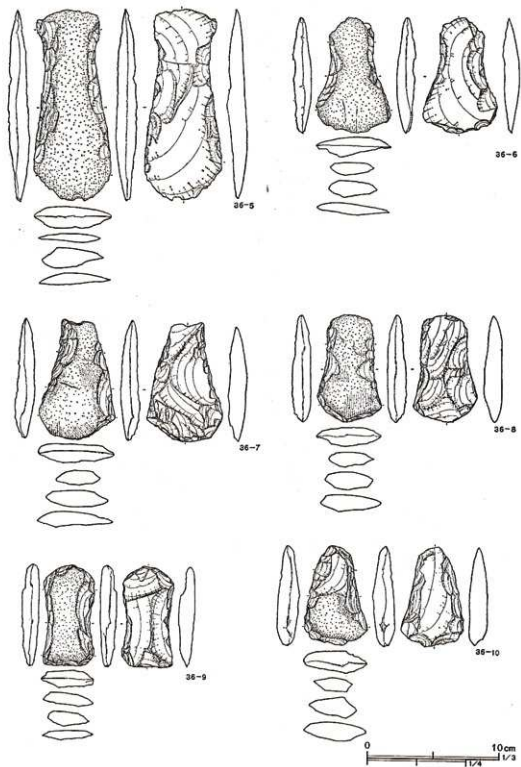
35-2



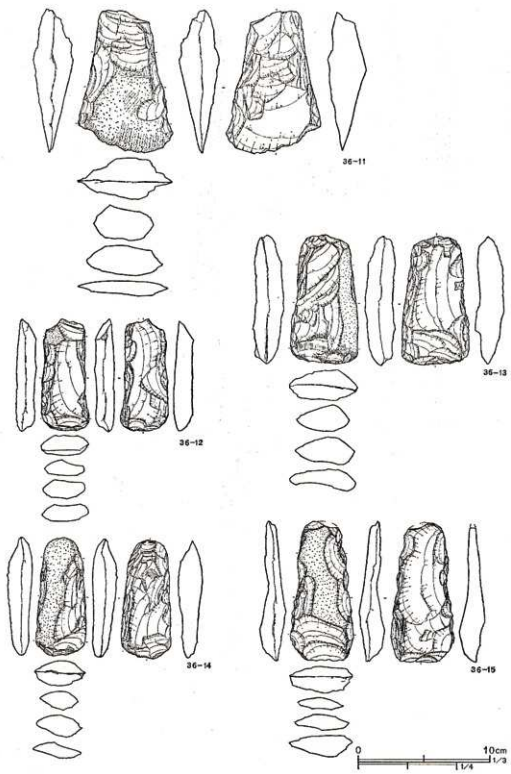
35-3 $\frac{1}{2}$



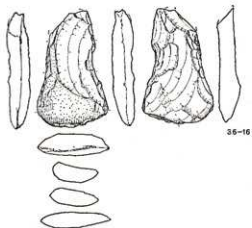
第155圖 出土石器(35) 住居跡



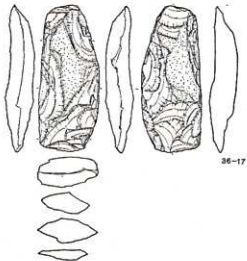
第156圖 出土石器(36)住居跡



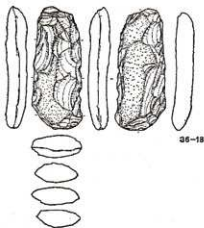
第157圖 出土石器(37)住居跡



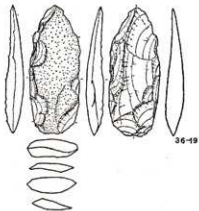
36-16



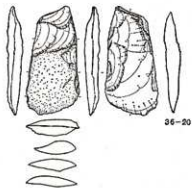
36-17



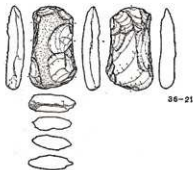
36-18



36-19



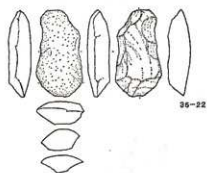
36-20



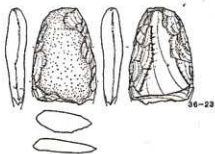
36-21



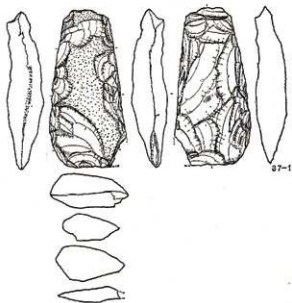
第158圖 出土石器 (38) 住居跡



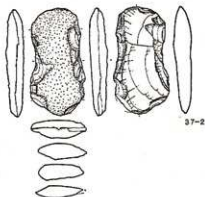
36-22



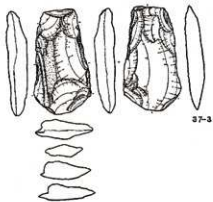
36-23



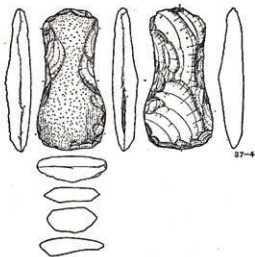
37-1



37-2



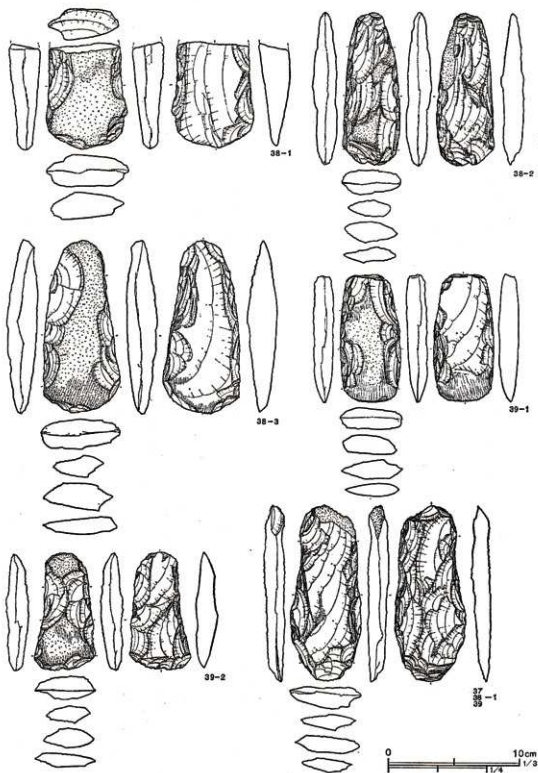
37-3



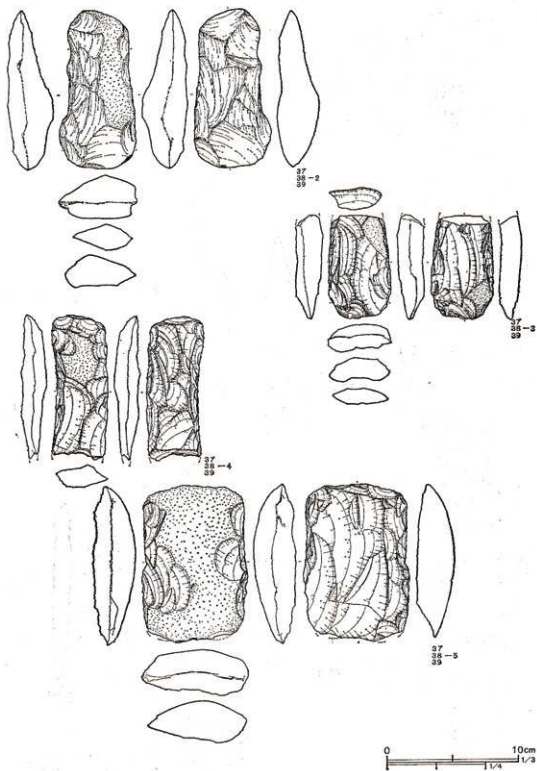
37-4



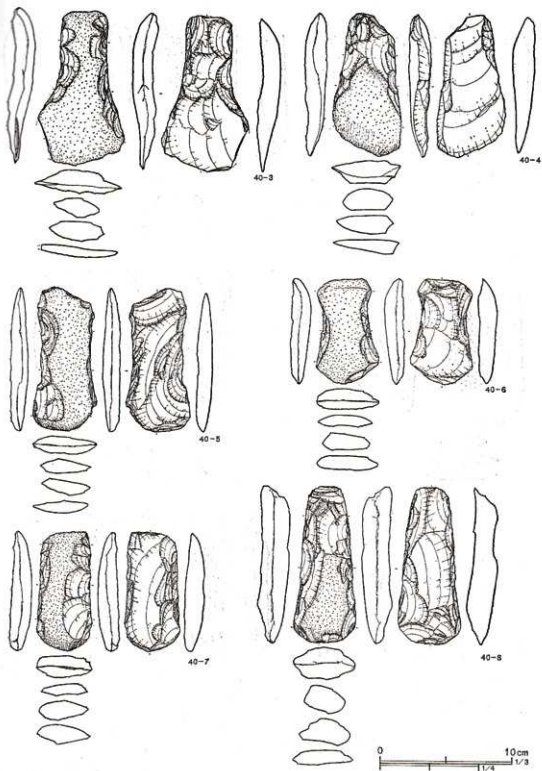
第159圖 出土石器(39)住居跡



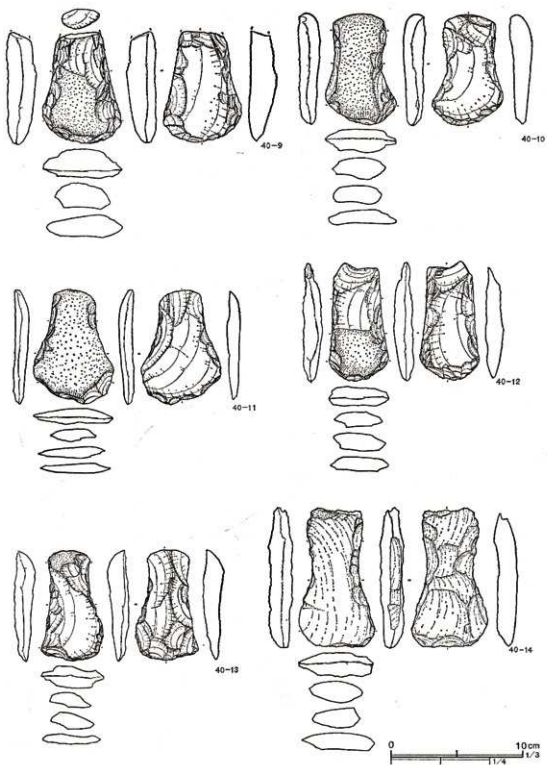
第160圖 出土石器(40)住居跡



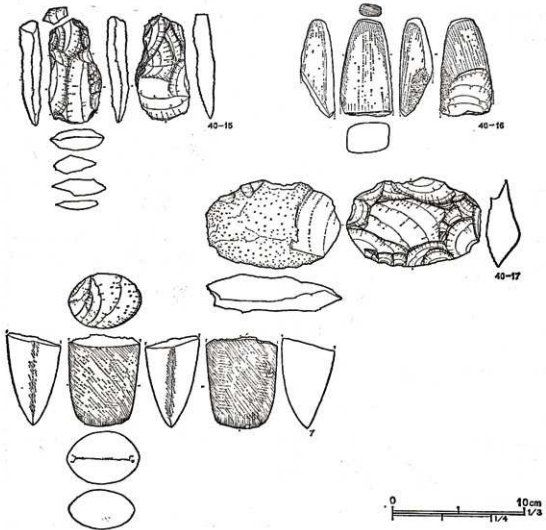
第161圖 出土石器(41)住居跡



第162圖 出土石器(42)住居跡



第163图 出土石器(43)住居跡



第164図 出土石器(44) 住居跡・グリッド

第13表 石器計測表(1)

出土地	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
2号住居跡	1	石 鏃	3.6	2.9	0.9	16	チャート	
	2	石 核	5.4	8.0	2.7	150	ホルンフェルス	
	3	打製石斧	9.3	3.7	1.3	45	粘板岩	
	4	〃	9.4	4.8	1.1	55	砂 岩	
	5	〃	8.5	5.5	1.5	85	〃	
	6	〃	(6.2)	5.9	1.7	70	〃	
	7	〃	(5.2)	6.2	2.3	70	ホルンフェルス	
	8	〃	(8.7)	5.1	2.0	100	〃	
	9	〃	(9.3)	6.6	2.3	160	砂 岩	
	10	礫 器	8.1	4.9	1.8	440	〃	
	11	〃	12.6	7.3	3.7	405	〃	
	12	凹 石	1.8	21.9	3.8	2,235	〃	
	13	石 皿	—	—	—	850	砂 岩	
3号住居跡	1	打製石斧	10.6	4.6	1.9	102	ホルンフェルス	
	2	〃	7.6	3.8	1.6	68	砂 岩	
	3	砥 石	—	—	—	422	〃	
	4	石 皿	28.1	22.8	10.5	—	〃	
4号住居跡	1	打製石斧	8.3	5.7	2.0	102	砂 岩	
5号住居跡	1	楔形石器	4.2	3.3	1.6	14	チャート	
	2	石 核	3.7	6.1	3.8	30	〃	
	3	打製石斧	10.5	4.9	1.8	155	砂 岩	
	4	〃	12.2	5.9	1.9	196	ホルンフェルス	
	5	〃	10.6	4.8	1.6	125	砂 岩	
	6	〃	10.0	4.3	1.6	88	〃	
	7	〃	9.6	4.3	1.0	55	〃	
	8	〃	9.5	3.9	1.4	72	チャート	
	9	〃	8.8	4.6	1.7	72	ホルンフェルス	
	10	〃	10.7	3.8	1.7	65	ホルンフェルス	
	11	〃	10.0	2.9	1.3	62	砂 岩	
	12	〃	(9.2)	5.6	2.7	178	〃	
	13	〃	(7.7)	6.1	2.3	85	〃	
	14	〃	(6.5)	4.5	1.8	72	泥 岩	
	15	磨製石斧	(12.5)	6.0	4.4	540	凝灰岩	
	16	礫 器	11.0	5.2	1.7	140	砂 岩	
6号住居跡	1	打製石斧	11.9	5.2	2.1	138	砂 岩	
	2	〃	10.8	5.4	2.5	152	〃	
	3	〃	7.2	3.5	1.3	35	〃	
	4	〃	11.4	4.9	2.2	152	〃	
	5	〃	9.7	6.3	2.8	218	ホルンフェルス	
	6	〃	(8.6)	4.3	1.8	72	砂 岩	
	7	〃	21.3	8.8	2.0	585	〃	
7号住居跡	1	打製石斧	9.1	4.5	1.8	78	砂 岩	
	2	〃	11.0	4.3	1.6	80	〃	
	3	〃	9.2	5.0	1.4	70	〃	
	4	〃	11.5	4.4	2.0	11.2	〃	
	5	〃	9.3	4.5	1.8	65	〃	
	6	〃	8.0	4.9	1.7	82	〃	
	7	〃	5.8	3.3	0.8	15	ホルンフェルス	
	8	〃	10.7	6.2	2.9	230	凝灰岩	
	9	〃	7.7	4.4	1.3	55	砂 岩	
	10	〃	12.1	8.3	3.0	80	〃	
	11	〃	(7.4)	4.6	2.0	70	安山岩	
	12	〃	(9.5)	4.6	1.9	125	砂 岩	
	13	〃	(7.6)	6.3	2.3	110	〃	
	14	〃	(8.0)	5.5	1.8	85	〃	
	15	〃	(9.7)	5.8	1.6	115	安山岩	
	16	〃	9.2	2.7	0.8	22	泥 岩	
	17	礫 器	(10.9)	4.4	1.4	105	砂 岩	
	18	〃	(12.8)	0.1	2.5	290	〃	
	19	すり石	7.4	5.7	—	290	安山岩	
	20	凹 石	—	—	—	615	〃	
	21	〃	—	—	—	132	〃	
8号住居跡	1	打製石斧	10.1	5.1	2.1	108	砂 岩	
	2	〃	12.8	4.8	2.8	224	〃	
	3	〃	9.9	5.4	1.3	58	〃	
	4	〃	9.7	4.7	1.6	75	〃	
	5	〃	9.5	4.4	1.5	70	ホルンフェルス	

第14表 石器計測表(2)

出土地	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
8号住居跡	6	打製石斧	9.4	4.7	1.5	72	砂 岩	
	7	〃	12.3	4.9	3.1	245	ホルンフェルス	
	8	〃	(12.5)	4.8	1.6		砂 岩	
	9	礫 器	8.4	9.2	3.4	305	ホルンフェルス	
	10	〃	7.7	6.1	1.7	88	砂 岩	
	11	蔽 石	(14.1)	4.9	5.1	500	〃	
12	すり石	9.5	6.9	3.8	840	〃		
9号住居跡	1	石 鏃	—	1.3	0.5	0.7	黒曜石	
	2	〃	—	—	—	0.8	〃	
	3	打製石斧	11.0	5.3	2.0	135	砂 岩	
	4	〃	10.2	5.2	2.7	155	ホルンフェルス	
	5	〃	9.3	3.8	1.5	65	砂 岩	
	6	〃	(11.9)	6.5	3.5	265	〃	
	7	〃	10.4	3.8	1.5	90	〃	
10号住居跡	1	打製石斧	13.9	4.5	1.8	148	砂 岩	
	2	〃	9.6	4.6	1.9	96	〃	
	3	〃	11.0	5.9	2.5	192	〃	
	4	〃	(4.3)	2.8	1.2	18	〃	
	5	石鏃状石器	12.1	5.2	1.3	127	〃	
11号住居跡	1	石 核	5.5	5.8	3.9	46	チャート	
	2	打製石斧	11.0	5.2	1.9	124	砂 岩	
	3	〃	13.3	7.1	2.5	248	〃	
	4	〃	12.6	5.5	2.2	154	〃	
	5	〃	14.5	6.3	2.6	225	〃	
	6	〃	10.5	4.5	1.8	82	〃	
	7	〃	10.6	5.2	1.7	122	〃	
	8	〃	10.1	5.0	2.1	122	〃	
	9	〃	11.2	4.7	1.5	85	〃	
	10	〃	10.8	4.1	2.5	155	〃	
	11	〃	11.8	5.1	1.9	134	〃	
	12	〃	9.9	4.9	2.2	140	ホルンフェルス	
	13	〃	11.3	4.6	2.0	118	〃	
	14	〃	11.7	5.4	2.8	184	砂 岩	
	15	〃	9.9	5.2	2.2	140	〃	
	16	〃	12.5	5.1	2.7	198	〃	
	17	〃	10.7	5.1	2.2	148	〃	
	18	〃	8.6	4.3	1.6	78	ホルンフェルス	
	19	〃	13.5	4.5	1.8	140	砂 岩	
	20	〃	10.3	4.6	1.5	108	チャート	
	21	〃	11.2	3.9	2.1	103	砂 岩	
	22	〃	12.3	3.9	1.4	92	ホルンフェルス	
	23	〃	12.8	5.5	1.4	105	砂 岩	
	24	〃	6.4	3.2	1.2	32	ホルンフェルス	
	25	〃	11.5	4.8	2.0	138	〃	
	26	〃	13.3	6.0	2.9	255	砂 岩	
	27	〃	(12.8)	8.6	3.8	495	〃	
	28	〃	(10.8)	4.9	1.8	120	ホルンフェルス	
	29	磨製石斧	(10.5)	5.2	3.6	244	凝灰岩	
	30	〃	(11.1)	4.9	2.7	234	砂 岩	
	31	削・掻器	10.1	5.5	1.6	105	ホルンフェルス	
	32	すり石	8.0	7.6	3.1	672	砂 岩	
	33	〃	11.2	6.4	4.9	684	〃	
	34	〃	5.0	6.7	3.5	392	〃	
	35	凹 石	7.2	5.4	2.2	286	〃	
12号住居跡	1	打製石斧	11.7	5.5	2.0	180	砂 岩	
	2	磨製石斧	10.7	5.0	2.9	240	〃	
	3	磨製石斧の未製品	17.3	7.2	3.7	755	〃	
14号住居跡	1	礫 器	(16.8)	10.9	5.2	1,030	砂 岩	
15号住居跡	1	石 核	5.5	5.8	2.0	75	チャート	
	2	打製石斧	10.2	4.4	1.7	85	砂 岩	
	3	〃	9.7	3.9	1.9	75	チャート	
	4	〃	14.5	5.1	2.6	255	ホルンフェルス	
	5	〃	11.0	5.9	2.7	158	砂 岩	
	6	〃	11.2	4.1	1.6	95	〃	
	7	〃	11.0	4.4	2.9	148	ホルンフェルス	

第15表 石器計測表(3)

出土地	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(9)	石 材	備 考
15号住居跡	8	打製石斧	8.8	4.3	1.9	85	砂 岩	
	9	〃	(8.0)	4.3	1.8	80	〃	
	10	〃	(13.4)	5.5	2.4	230	〃	
	11	〃	(6.7)	4.4	1.6	72	〃	
	12	凹 石	8.7	5.1	—	485	〃	
16号住居跡	1	打製石斧	12.2	5.0	2.0	155	砂 岩	
	2	〃	10.0	5.2	1.5	95	〃	
	3	〃	9.2	4.8	2.1	98	〃	
	4	〃	(9.5)	5.3	1.8	102	ホルンフェルト	
	5	〃	(9.5)	4.0	1.8	84	砂 岩	
	6	〃	(7.8)	5.4	2.5	135	ホルンフェルト	
	7	〃	(6.6)	5.2	1.9	82	砂 岩	
	8	石 匙	7.5	9.0	2.4	60	〃	
	9	横刃形石器	5.6	9.7	2.5	125	ホルンフェルト	
	10	すり石	9.2	6.5	4.3	900	砂 岩	
17号住居跡	1	打製石斧	7.6	4.2	1.6	68	砂 岩	
	2	〃	11.5	4.7	1.9	108	〃	
	3	〃	10.6	6.6	3.0	225	〃	
	4	礫 器	12.0	7.1	2.4	282	〃	
	5	礫 石	9.2	3.6	—	370	〃	
18号住居跡	1	削・撥器	7.9	8.0	2.5	64	砂 岩	
	2	剝 片	6.9	4.9	1.5	32	チャート	
	3	撥・削器	7.5	5.4	1.7	121	頁 岩	
	4	打製石斧	8.0	4.6	1.3	55	砂 岩	
	5	礫 器	5.7	10.8	2.8	246	〃	
19号住居跡	1	石 核	5.7	11.1	4.3	180	チャート	
	2	礫 器	8.9	8.0	2.8	222	砂 岩	
20号住居跡	1	打製石斧	(6.1)	4.0	1.8	50	砂 岩	
22号住居跡	1	打製石斧	13.6	7.4	2.8	282	砂 岩	
	2	〃	11.2	4.8	1.7	117	〃	
	3	〃	11.1	5.3	1.8	115	〃	
	4	〃	9.4	4.7	1.4	75	〃	
	5	〃	9.9	5.0	1.3	75	〃	
	6	〃	10.4	4.9	2.0	125	〃	
	7	〃	7.6	3.7	1.1	46	〃	
	8	〃	12.2	5.8	3.9	218	〃	
	9	〃	8.1	3.9	1.5	55	ホルンフェルス	
	10	礫 器	8.8	14.5	4.3	468	安山岩	
23号住居跡	1	打製石斧	11.9	5.5	2.1	125	砂 岩	
	2	〃	10.4	5.4	2.1	145	〃	
	3	〃	8.3	5.1	1.6	72	〃	
	4	〃	(8.6)	5.7	2.0	112	ホルンフェルス	
	5	礫 器	14.6	5.5	1.7	184	〃	
26号住居跡	1	石 鏃	2.3	1.9	0.4	11	チャート	
	2	〃	2.2	1.8	0.5	11	安山岩	
	3	尖頭器	11.2	4.3	2.0	95	〃	
	4	打製石斧	9.5	4.4	2.1	115	砂 岩	
	5	〃	11.8	4.9	2.5	168	〃	
	6	〃	12.1	4.6	2.1	143	〃	
	7	〃	10.0	4.7	1.7	76	〃	
	8	〃	9.8	4.3	2.3	108	〃	
	9	〃	13.4	4.6	2.8	180	〃	
	10	凹 石	13.6	9.6	—	3,495	〃	
28号住居跡	1	削・撥器	3.4	2.8	0.8	8	チャート	
	2	打製石斧	8.4	4.1	2.0	71	砂 岩	
32号住居跡	1	打製石斧	6.5	5.3	2.2	72	砂 岩	
	2	〃	9.0	6.4	1.6	70	〃	
33号住居跡	1	打製石斧	10.5	3.9	1.8	105	砂 岩	
34号住居跡	1	凹 石	9.3	5.5	3.1	518	〃	
35号住居跡	1	打製石斧	11.2	5.0	1.9	108	チャート	
	2	〃	8.4	5.8	1.8	78	砂 岩	
	3	すり石	10.8	7.0	3.2	905	〃	
36号住居跡	1	石 鏃	7.4	2.3	1.3	57	チャート	
	2	〃	1.6	1.4	0.4	2	〃	
	3	〃	1.9	1.4	0.4	1	〃	
	4	石 核	8.5	10.7	5.0	535	〃	
	5	打製石斧	14.5	5.9	1.7	145	砂 岩	

第16表 石器計測表(4)

出土地	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考	
36号住居跡	6	打製石斧	8.7	5.7	1.5	72	砂 岩		
	7	〃	9.2	5.8	1.6	86	〃		
	8	〃	8.2	4.9	1.5	72	〃		
	9	〃	7.7	4.0	1.3	58	〃		
	10	〃	7.6	4.8	1.7	71	〃		
	11	〃	10.8	7.3	3.1	192	〃		
	12	〃	8.5	4.2	1.5	72	〃		
	13	〃	9.9	5.1	2.4	155	〃		
	14	〃	9.0	3.9	1.9	8.0	〃		
	15	〃	10.5	4.9	2.0	98	〃		
	16	〃	8.8	5.5	1.8	92	〃		
	17	〃	11.1	4.7	2.2	128	〃		
	18	〃	9.3	3.9	1.7	94	ホルンフェルス		
	19	〃	9.8	4.4	1.4	62	砂 岩		
	20	〃	8.3	4.2	1.2	45	〃		
	21	〃	6.3	3.6	1.5	54	凝灰岩		
	22	〃	6.6	3.6	1.8	55	ホルンフェルス		
	23	〃	(7.4)	5.1	1.7	82	砂 岩		
	37号住居跡	1	打製石斧	12.0	5.9	2.8	220	砂 岩	
		2	〃	8.1	4.3	1.4	55	〃	
		3	〃	8.0	4.3	1.6	68	ホルンフェルス	
		4	〃	10.7	5.2	2.0	132	砂 岩	
	38号住居跡	1	打製石斧	(8.1)	6.3	2.4	145	砂 岩	
2		〃	11.5	4.5	1.9	118	チャート		
3		〃	13.1	5.9	2.4	200	砂 岩		
39号住居跡	1	打製石斧	9.7	4.6	1.6	108	砂 岩		
	2	〃	8.9	4.8	1.8	80	〃		
37~39号 住居跡	1	打製石斧	13.3	5.5	1.6	148	砂 岩		
	2	〃	12.1	5.9	3.5	222	〃		
	3	〃	11.0	4.3	2.0	118	〃		
	4	〃	7.9	4.8	2.1	104	〃		
	5	礫 器	12.0	8.1	3.3	400	〃		
40号住居跡	1	石 鏃	1.6	1.3	0.4	0.5	黒曜石		
	2	石 鏃・掘器	3.2	3.1	0.8	5	チャート		
	3	打製石斧	12.0	6.6	2.0	130	砂 岩		
	4	〃	11.1	5.2	1.8	100	〃		
	5	〃	10.9	4.9	1.4	88	〃		
	6	〃	8.1	4.8	1.7	70	安山岩		
	7	〃	9.2	4.3	1.7	82	〃		
	8	〃	12.0	4.8	2.4	160	〃		
	9	〃	8.6	6.0	2.8	135	〃		
	10	〃	8.5	5.5	1.7	90	〃		
	11	〃	8.7	6.1	1.2	62	〃		
	12	〃	9.1	4.6	1.5	72	〃		
	13	〃	8.4	4.8	1.7	60	〃		
	14	〃	10.5	5.9	1.9	135	〃		
	15	〃	8.0	4.1	1.6	55	〃		
	16	磨製石斧	(7.5)	4.0	2.6	115	〃		
	17	礫 器	6.9	10.2	2.6	232	ホルンフェルス		
41号住居跡	1	石 鏃	1.8	1.8	0.4	9	チャート		
797 土 坑	1	石 鏃	—	—	—	—	黒曜石		
18 土 坑	1	石 匙	4.7	5.8	0.9	16	安山岩		
グリップ	1	有茎尖頭器	(4.9)	2.8	0.7	24	チャート		
	2	石 鏃	(2.4)	2.3	0.6	1.2	〃		
	3	〃	(3.0)	2.7	0.6	1.4	頁 岩		
	4	石 鏃	5.4	5.6	1.1	20	砂 岩		
	5	磨製石斧	13.0	3.3	1.6	62	〃		
	6	〃	5.7	2.3	1.3	21	〃		
	7	〃	(7.1)	5.4	4.0	85	〃		

C 土製品 (第165図)

土鈴 (1)

第11号住居跡の認定覆土内より出土した。潰れた状態での出土であったため、空洞中の鈴子を検出できず、従時の芳鳴を聴くことができない。試しに小石を入れてみたところ、「コロコロ」と暖い音色が響いた。

形態はひしゃげた球体で、下面に単純な渦巻文を描き、他を渦巻が基線となる放射状文で飾る。中空球体の製作は、二個の半球を合わせ行っており、内側には接合痕が明瞭に残る。また、接合痕は器表下面の渦巻文施文位置と一致し、球体面中の面限定を偲ばせる。

耳飾 (2~6)

2・3・5・6は椎骨類似形、4は白形を呈する。前者の屈曲線は縁部の逆鉤によって代えられたもの(2・6)と成形曲線によって表現するもの(3・5)がある。中空部の作出は、帯状粘土の巻付け(2・5・6)と、穿孔(3)とにわかれ、逆鉤は巻付けの際の押潰しによっている。2・5は丁寧な調整を受けており、前者では内外に赤彩度を観察できる。一方、3は片面に渦巻文を残すものであり、成形時の等間隔押圧痕を残す。

2~4は、それぞれ第10・11・26号住居跡より、5は第144号土壇、6はグリッドより出土した。

ミニチュア土器 (7~11)

5点を検出した。7を除き、指頭痕残す無文である。7は半截竹管による縦位沈線区画内に菱形状文を充てる。底部製作は円盤上に粘土帯追加を行う通常的手法を用いている。一方、8・10・11の底部製作は手捏ねと平底作出を意図する押潰しを用いており、8では胴部でも同法を行っている。9は横ナゲ痕残る口縁部。

7~10は住居跡の出土で、それぞれ第7・9・11・23号住居跡より出土した。11はグリッド中。

土製円盤 (12~21)

10点を検出した。土器無文部を利用したものが多く、13は底円盤を打割している。磨度は12・14・15・18・19・21に見られるが、全周するものがなく、最も多い12で8割程度である。重さは、13・18を除き、10~15gに収まる。

12~15・18は、それぞれ第6・9・11・15・26号住居跡、16・17の2点は第18号住居跡、19は第13号集石の出土で、他はグリッド。

(黒坂)



第165图 土 製 品

d 石製品

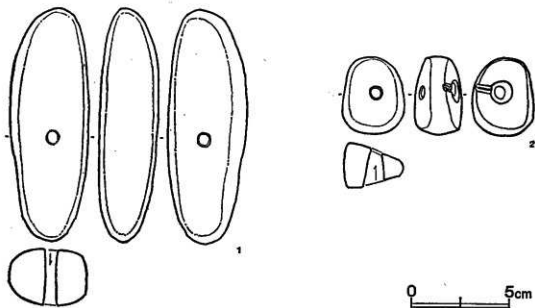
大珠 (第166図)

主軸を同じくし、近接する勝坂期の3基の土壌の内、2基から大珠が検出された。土壌の規模は長軸が約2mで、人間を埋葬するのに十分な規模を有している。土壌から検出される遺物には、あたかも埋納されたかと思われるものと、流入と思われるものがある。大珠は2点とも底面直上より検出されており、前者であると思われる。

1は第75号土壌より検出された。石質は硬玉製であり、法量は長さ12.0cm、幅4.1cm、厚さ3.2cm、重さ134gである。両端近くに風化のため剥落している所がある。

2は第76号土壌より検出された。石質は硬玉製であり、法量は長さ4.0cm、幅3.2cm、厚さ2.5cm、重さ14gである。裏面孔左側に溝状の凹がある。

(西井)



第166図 石製品

V 資料検討

1. 出土土器

今回報告の対象区よりは、天箱約 300 箱にも及ぶ莫大な量の土器が出土した。住居跡や土壌、集石、あるいは表土中からは 300 個体を優に超える復元可能土器が出土し、本書ではこのうち 276 個体を示した。しかし、遺構中出土のものは遺存状態悪く、全容を知り得たのは埋設土器や遺棄と思われる土壌出土品に集中している。

出土土器の多くは遺構に伴うものだが、出土量の偏差著しく、特に土壌、集石では造営期判定を試みる際、風化小片にこれを阻まれた。そのような中で、極力細かい時期判定を行うことを目的とし、縄文中期にかかる I～VI 期の大枠を設定し、一部でさらに細分化した。この細区分の設定幅は、本事業団紀要（谷井他 1982）と大略一致するものであり、本項執筆者の責において、他の編年案を含む対比表（第 17 表）を示した。

本書での大別基準は、土器文様検討の最小単位である文様要素によっている。勝坂系土器では区

第 17 表 時間幅概念対比表

埵埋文(1982)	北塚屋(使用慣例名)		鈴木(1981)	西村(1972)	
V (新道)	I	新道	勝坂 1 b	阿玉台 1 b	
VI (藤内 I)	a	藤内 I	2 a	II	
VI (藤内 II ~井戸尻 I)	b	藤内 II	2 b	II	
VI (井戸尻 II)	III	井戸尻	3 a 3 b	中峠	塚田(1976)
K a	a	加曾利 E II 古	加曾利 E I	加 E 第 1 段階	E I 第 1 段階
K b (加曾利 E I)	b	中	2 a 2 b	II	2 3
X	a	新	2 c	III	4
M	b	加曾利 E II 古		IV	宮崎(1982)
II a (加曾利 E I)	a	中	3	V	
II b	b	新			
III (加曾利 E II)	VI	加曾利 E II	4 a	VI	安孫子・秋山 中西(1980)
III (加曾利 E IV)	VI	加曾利 E IV	4 b	VI	

画隆帯脇の付属施文法より、また加曾利E系土器ではキャリバー形土器口縁部文様帯内の隆帯作出法と区画法、さらに胴部懸垂文の特徴によっている。第17表で明らかのように、この結果は、従来確定していた加曾利EⅠ新・EⅡ古(神奈川Ⅱc・Ⅲ)期間の一線を過小評価することに通ずるが、より細かな造営期判定を意図したところと諒解せられたい。

a 北塚屋Ⅰ～Ⅲ期(第168・169図)

勝坂期をこの三期においた。うち、Ⅰ期については遺跡発達が本格的となるⅡ期に先行する時期として漠然と設定したにすぎない。具体的にはⅡ期が井戸尻編年の藤内期、Ⅲ期が井戸尻期で大方がとらえられ、Ⅰ期は(猪沢)新道期に相当する。また、Ⅰa・b期の区分は、それぞれ藤内の細分期を念頭に置いた。

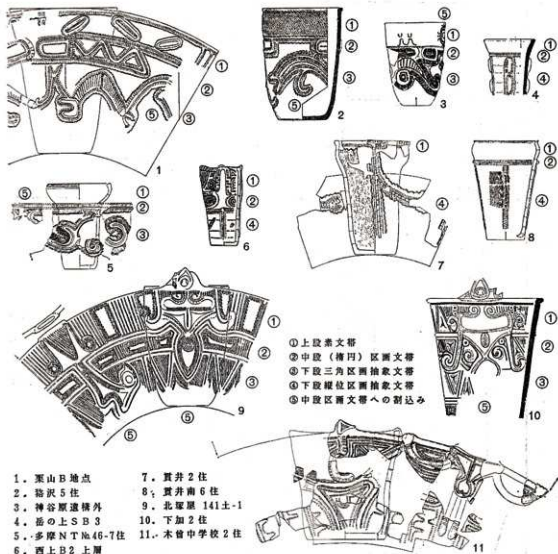
これら大区分設定の基準は、前述の如く、文様区画隆帯の付属施文法を重視した(註1)。同施文は大きく三分できる。すなわち、①爪形、あるいは類似施文による加飾(列点系施文)、②截断竹管を使用した平行沈線による加飾(截断竹管沈線系施文)、③単独施文沈線による加飾(単沈線系施文)である。北塚屋Ⅰ期は専ら①のみを採用することを以て設定し、同様に、Ⅱ期は①～③の併用、Ⅲ期は④への依存が主な目安となる。この三手法を勘案した器種別出土相を次に列記した。

横帯文土器は、①手法を用いた連続三角区画を中間帯に配する典型例が少なく、10住-7に見る程度である。同手法で菱形区画を成する4集-1を合わせても、その本流は稀薄であった。同じ手法を用いるものとして、他に10住-3が挙げられる。複段の楕円区画を横帯文土器に転用するのは少数で、上段区画部の把厚とともに特異な例といえる。一方、②手法の援用は第23号住居跡の2点や12住-1、21住-1などで行われている。この中で、第23号住出土品は三叉状陰刻や三角押文、横帯間の充填等、他に比して古い要素を残している。胴部区画内の文様構図は渦巻文を主題としており、厩棚1号住(岩井1970)出土品と同類と思われる。また、9住-1は①手法や中帯構図より、讃岐山遺跡(滝沢963)例と同系統であろう。

抽象文土器に特徴的な①手法と並走する山形沈線は、23住-7に印されるのみである。これは、わらじ虫状文を祖型とする貫井南6号住(安孫子1974)の如き縦位単文が加えられるもので、連続三角区画割付を抽象文帯に配する典型的なタイプは出土しなかった。類似する構図には②手法を用いる32住-3などがあるが、同番に近い文様は前出の貫井南6号住で出土しており、別種と化した姿が窺える。抽象文土器の基本構成は、胴上位に楕円を主とする区画帯を配して器面を三段に分け、上段を素文帯、下段を抽象文帯とする(第167図)が、同例は上下が逆転している。

一方、抽象文土器の基本構成という点からすれば、胴上位分帯を成する141土-1は抽象文型の文様構成法を踏襲した個体といえる。酷似する人形二体を配す円筒形土器が下加2号住(宮内1965)で出土している。縄文の有無など相違点もあるが、これも同一横帯構成を採用しており、該期において141土-1のような類型が認識されていたと理解できる。また、実測図正面の人形は、時期遡る猪沢期の木曾中学校2号住(川口1983)よりも出土しており、所謂山椒魚形と同様、抽象形の一枝として確立していたものとしてとらえられる。

同じく抽象形を配するのが249土-2の縦位区画文土器である。同器種は、出土個体に乏しいものの、良好な資料が出土した。隆帯区画下は②手法での加飾が常で、同統と施文法の深い関係が窺え

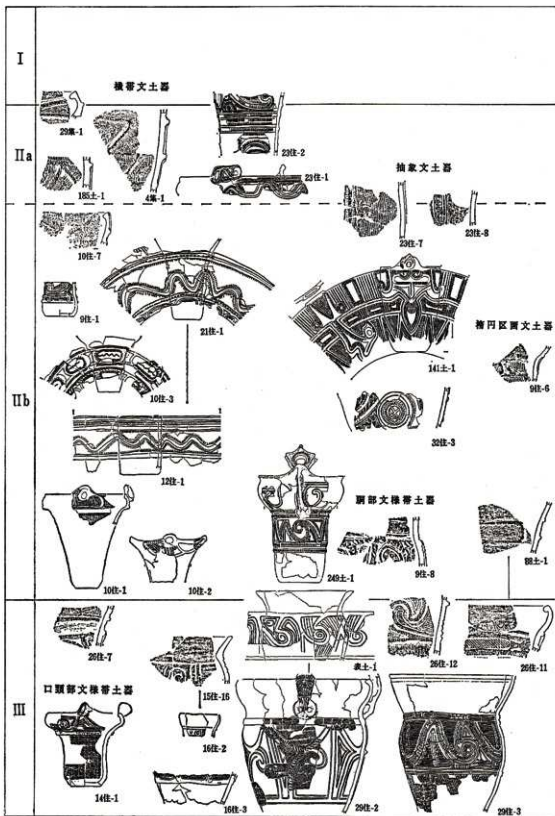


第167図 抽象文土器二態と人形類例

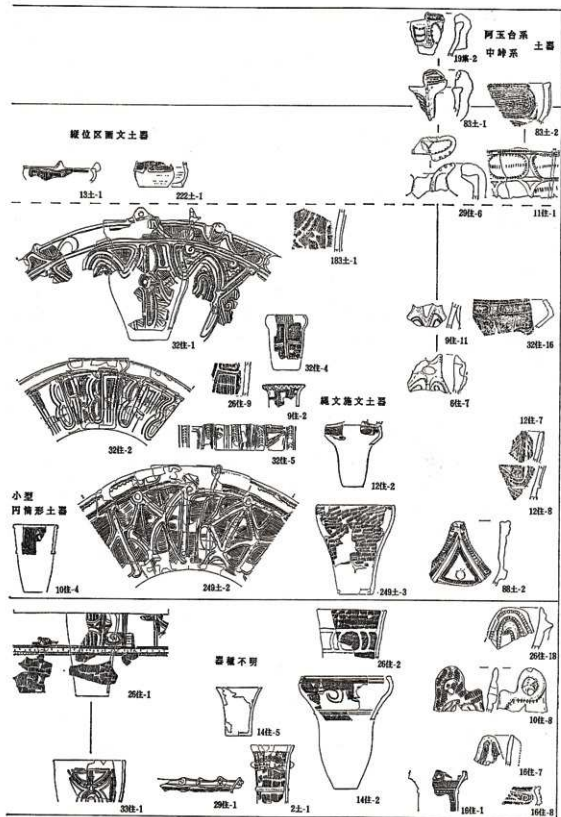
- | | |
|----------------|---------------|
| 1. 栗山B地点 | 7. 貫井2住 |
| 2. 猪沢5住 | 8. 貫井南6住 |
| 3. 神谷原遺構外 | 9. 北塚原 141土-1 |
| 4. 岳の上SB3 | 10. 下加2住 |
| 5. 多摩NT №46-7住 | 11. 木曾中学校2住 |
| 6. 西上B2上層 | |

る。区画は大区画設定線に共通性があるのみで、同形の区画文が整然と配列される型は26住-9の1点を検出しただけである。32住-1は、連続三角区画の口縁部文帯帯を擁する点で稀有な類であり、僅かに当摩3号住(白石1977)に類似例を知るのみである。一方、13土-1は日野吹上5住(上川名1970)や中山谷7住(肥留間1975)に見る、キャリアー形を呈し口縁部素文帯を欠く類と思われる。なお、249土-2の抽象形については、その原形や類例を示すことができない。

個体数、質ともに乏しい器種に楕円区画文土器がある。該期の武蔵野台地に比して、異常ともいえるその稀薄さは、本遺跡の性格を表わすものであろうか。周辺地に調査例が少ない現在では憶測の域を出ない。このうち、多段楕円区画構成が判明したのは9住-6だけで、単段のものは一律に横帯設定幅が狭い。陰帯脇の施文は④手法が主で、②手法を用いたものは88土-1の他には検出できなかった。区画内の充填は全てが沈線に依存しており、武蔵野台地に顕著な区画内に趣向を凝らす類



第168図 北塚屋I～II期の土器(1)



第169図 北塚屋Ⅰ～Ⅲ期の土器(2)

がない。また、充填沈線に斜位施文が多いことも既知の土器群とは一線を画す要素である。

器種組成差著しい中で、当該期住居跡に最も安定した存在だったのが胴部文様帯土器である。29-2・3をはじめとして大型品が多く、小沈文充填を多用する10住-2の如き小型品は少ない。これに対し、至近距離に営まれた台耕地34号住（鈴木1983）では後者の縄文無施文土器に比重が置かれ、本遺跡と相対する様相差をみせている。区画隆帯は2本一組や平坦なものが繁く用いられ、脇は殆どが②手法によっている。また、29住-2はN a期にあたる舟山5号住（谷井1975）例に継承される大型土器の典型例であり、表土-1からの変化は加曾利E系との接続を物語る好例となる。唯一②手法を用いる249土-1は、膨張素文口縁や二箇所の大把手など特異な土器で、他に例を見ない。

円筒形深鉢も施文手法的には胴部文様帯土器と差がない。文様帯構成を彷彿させるものは3点あるが、それぞれ区画内充填に異趣を見出せる。10住-4は同一区画内に沈線と列点文の二種を充填するものであり、系列内でも古い様相を持っている。同様に、爪形を伴う平行沈線列を採用する点で26住-1が挙げられる。これに対し、33住-1は交互刺突加飾隆帯や、単施文沈線の充填など、後出的な要素が多い。また、この類でも、小沈文を多用し区画隆帯が把手化するタイプを見出せない。

その他、29住-1は突出並走する隆帯上に橋状土紐を貼付するものであり、大木8a式的要素との関連が想起される。類似する構成は吹上3号住（栗原1959）や花積2A号住（下村1970）の加曾利E初頭期でも出土しているが、こちらは突出隆帯と貼付隆帯が同化しており、同番よりの変化が認められる。また、2土-1もタガ状2本隆帯と突起という奇異な構成を用いているが、器形を無視すれば、貫井南5号住出土の大木的要素を消化した中峠系土器に類似する。文様帯設定と内部構成に大きな違いは認められず、同系の強い影響下に生成された種類といえよう。

一方、東関東系と認め得る土器は、小片や混入品が多く、勝坂系土器との遺構伴出関係を確定できない。阿玉台系土器は西村編年（西村1972）の二群I b類（I b式、以下同）よりN式（10住-8）まで幅広く出土しているが、I式が最も多い。波頂形態に着目すれば、扇状把手より、襷状方形区画、山形波頂連続三角区画、J字状区画縁付板状大波頂、異段波頂の重系変容が迫れる。不足、誤認の可能性はあるが、これを勝坂系土器との伴出関係で見た場合、I式の位置が他遺跡例より若干降っている（第169図）。

中峠系の要素を残すものは極端に少なく、第16号住居跡に集中している。16住-7・8は阿玉台系土器からの三角区画を留める山形波状縁土器であるが、同じ文様を用いる村田貝塚（西村1982）などの阿玉台N式に比して波頂部の退行著しく、75土-2の変化型と同期にあたるだろう。確定し得る横S字状隆帯付の胴上位膨張土器は16住-1のみであった。

器種別の大略は以上のとおりだが、これらの組合わせは遺構数に必ずする出土量を保持しているわけではなく、多様な勝坂系土器の器種を充足するに至らない。勝坂系土器の編年は、器種衰変を主として行われてきたのだが、本遺跡では器種判定不能な小片が全ての遺構が多く、文様要素の水準を以てせねば時期判定に至らないものも多い。加えて、関東編年の中心地である武蔵野台地と隔たった当地では、細分指標となる器種の欠落や先後種の共存（註2）が結果として現れている。

冒頭に示した隆帯脇の施文三種は、特定の器種と密接な関わりがある。これらは当該器種の確立によって生成され、後の盛衰も伴にする。そして、盛期においては他器種での転用著しく、逆に原

種の組成内での比重を反映したものとなる。つまり、たとえ別器種に施されたものであろうとも、当該器種の同時存在を暗示することとなり、器種組成把握の手がかりとなる。本書の大別はこれを利用して、器種別概要でその傾向を確認できたことと思う。

具体的には①手法が横帯文土器と、②手法が縦位区画文土器、そして③手法が楕円（単段）横帯区画文土器と対応する。①の列点系施文は、他に抽象文土器で好んで用いられることが知られている。両者は異質複数段の横区画帯を重層させる点でも共通し、讃岐山遺跡や当摩3号住の如く移封も盛んである。また、③手法の単沈線系施文は単段重加飾帯（註3）を特徴とする器種に共通している。上記の他には、胴部文様帯土器、小型円筒形土器、多喜窪重文タイプなどがある。

一方、②手法の截断竹管系施文は縦位区画文土器以外に類縁種がない。また、同種では①・③手法を援用しないこと、連続三角区画や楕円区画を作出する横分帯との複合例が少ないなど、強固な独自性を保っている。

従って、①～③手法は、勝坂系土器における有加飾帯土器三大統の反映であるともいえる。もちろん、この原則に基づきながらも大統間の交接が行われるわけであり、21住-1の如き手法の変換もあれば、32住-1のような横帯の移設、西上B₂上層（和田1975）の抽象文土器のように他系要素なども相俟って総体の複雑さが増す。単純化した各大統の盛衰を従来の編年案に照らせば、鈴木保彦氏の三大別（勝坂1～3式）にはほぼ匹敵する。また、大期別設定で準拠した本事業団紀要も、時間幅比較表では同氏と差があるものの、実体として示された資料に大きな違いを認められない（註4）。

以上を前提として時期別に個体を識別すれば、Ⅰ期には混入資料である19集-2の阿玉台Ⅰb式が充てられる。同様な扇状把手は第83号土壇でも出土しているが、把手部の丸味や複列の押引文は後出的要素が濃い。阿玉台Ⅱ式の古い時期にあたろう。同式土器は、Ⅰ期末より出現することが神谷原遺跡（中西1982）などで確認されている。加えて、Ⅱ期にあたる他遺跡例では同種の把手を見ないため、前者と同期に置いた。

これに対し、勝坂系土器にはⅠ期に遡り得る確実な資料がない。Ⅱ期に属する住居跡例は第9・10・12・21・23・32号住居跡があるが、いずれも②手法を多用するなど、縦位区画文土器確立後に生ずる施文法変換の所産が現れている。この中で、第23号住居跡出土のⅠ・Ⅱは余白充填の密度、三角押による山形文、三叉状陰刻文等、Ⅰ期の手法を色濃く残しており、Ⅱa期にあたるだろう。

第23号住居跡の一部と他住居跡出土の多くはⅡb期の所産である。横帯文土器に①手法を留めるものが減少し、②手法に大きく転換が計られており、縦位区画文土器の強い影響が窺える。また、楕円区画文土器の独立によって③手法も普遍化している。総体では②手法と連携する爪形、半截竹管文の組合わせが顕著であり、Ⅱb期の特徴をよく表わしている。各遺構出土品の総合によれば、器種が最も多様となり、列点系施文種と単沈線施文種の組成比転換がこの期のうちに行われている。この点より推すれば、Ⅱb期以内での更なる分化も可能であろうが、一括資料に恵まれぬ本遺跡では明確な差が現れなかった。

抽象文土器は、基本文様構成法を継承するものの、列点系施文種の後退とともにⅡa期の主要型（第167図Ⅰ～3）より大きく変化している（同5～10図）。その結果、抽象文土器と密接な関係を持つ横帯文土器の讃岐山例なども著しい変形、断絶が予想される。9住-1は同土器の直系統下にあ

るものだが、以上より、Ⅱb期のうちでも古い段階に相当すると思われる。

阿玉台系土器は第9・12号住居跡でⅡ式複数点を検出したが、波頂形態を見るに、Ⅲ式に近い形態と区画に変化している。本事業団紀要などによれば、Ⅱb期(埴理文Ⅳ期)にもⅡ式の施文法が残るとされている。本例もこれにあたると理解され、むしろ当地におけるⅢ式の稀薄さを示す結果となった。しかし、いずれも小片資料による類推のため、不確実のそしりは免れ得ない。

Ⅲ期にあたる住居跡は第14・16・26・29・33号住居跡があるが、やはり単独で該期の構成を明らかにし得るものではない。総体は④手法の系列下であり、特に胴部文様帯土器が目立つ。この中で、第29号住居跡出土品は加曾利E系土器成立後にまで続く土器群で構成されており、Ⅲ期末の所産と見做せよう。Ⅲ期に関しては、鈴木保彦氏が武蔵野台地を中心に二細分(勝坂3a・3b式)を行っている。その指標として示されたのは、多喜窪重文タイプと、円筒形深鉢口縁部無文帯の有無(註5)の二点に過ぎず、前者を欠する本地域では、これを援用するに不足が多い。強いて様相差のみで先後を分ければ、第26号住居跡や貝塚遺跡(谷井1984)が先出性を持つと思われ、他の4軒や台耕地34号住居が後出となろうか。しかし、あくまで主観の域を出ず、今報告では細分期を設けなかった。

b 北塚屋Ⅴ期(第170・171図)

Ⅴ期は加曾利EⅠ古・中段階を指し、細別はそれぞれ前後者にあたる。加曾利E系土器の大型別は、キャリバー形土器口縁部文様帯内の隆帯作出法と文様構図の特徴で行った。本期の隆帯は2本一組の添沈線をを用いる貼付感残すもので、曲線的な横位展開文を多用する。後出のⅤ期内では平坦な隆帯の区画文化と地文縄文施文が定着しており、口縁部文様帯内の特徴に限れば慣例大期区分(EⅠ・EⅡ)間に勝る変質を見ることが出来る。

Ⅴ期は、検出遺構数に比して出土量が多い。同期の住居跡は6軒を検出したが、特に第2・11・17・22号住居跡がこの傾向を担う。所謂吹上パターン状埋没で、土器が大量に出土する該期の通例をさらに追加したこととなる。この中で、第11号住居跡は、阿玉台Ⅱ式の混在や壁面非検出など問題も残るが、後述のように強い同時性があり、細部の検討に支障を来さぬものと考えた。

Ⅴ期に属するキャリバー形土器の総体は、比較的単純な系統種で賄われている。Ⅲ期では当地に大きな影響を与えていた東関東系や、中部系構図の流入は極端に少なく、西関東在系と認識されている種類が多きを占める。

口縁部文様帯内の隆帯は、前述の定義を満たすものが大半で、いずれの個体も横S字や類似の曲線部分に主眼を置いた動的な文様展開を見せている。特に第2・22号住居跡では並走隆帯を連絡する粘土瘤の施文が盛んであり、隆帯自身が文様描出を担っていたことを表わしている。一方、第11・17号住居跡では粘土瘤を見ず、渦巻描出を沈線に依存する連続弧状区画が現れるなど、視覚に訴える主文描出が沈線に統一されるⅤ期に近い。

在系土器の素描形は、大きく双向渦巻、単向渦巻(註6)、方形区画の三者に分けられる。前二者は画然と分離できるわけではなく、2住-7と22住-7のように、近い仲間と思われるものにも両者がある。しかし、17住-2の連続弧状区画や、11住-2を典型例とするタイプなどは、単向の、萌芽方向を統一した素描が大部分であり、素描種とタイプの深い関係を窺うことができる。また、これはⅤ期以降にも継承される関係である。加えて、Ⅲ期の、中峠・大木系の影響を受けた土器には双向

性を持つものが含まれ、勝坂本流では単向が主であったことを考慮すれば、加曾利E系土器成立後における両系譜の残存、交接の姿と解することも可能である。

これに対し、方形区画は前二者と融合することなく、独自の位置を保っている。22住-1は重層区画の上位が大きく拡大するもので、大木系土器の変形模倣を彷彿させる。類似する個体は中山谷10号住でも出土しているが、他に多くの例を見ない。なお、15住-5は、貼付隆帯や縄文施文手法が木曾呂表2号住(並木1980)出土品などと共通しており、Ⅲ期に廻り得るものかも知れぬ(註7)。

これら主文に伴う附加文は、十字文や剣先状文、17住-1のような縦位短沈線等がある。横S字間を連絡する種類(2住-10)は、岩の上23号住(栗原1973)に多い蛇行単数隆帯を用いるものがなく、全てが主文と同じ隆帯で賄われている。十字文はⅣa期に特徴的な附加文であるが、2住-6に見るのみで、同期の剣先状文とともに本遺跡では稀薄な存在となっている。剣先状文が汎用されるのはⅣb期に至ってからで、縮化した渦巻や縦位短沈線との組み合わせを基本としている。大木8b式で重用される独立の剣先状文はなく、上下文様帯区画線のいずれかに接する点も特徴となろう。

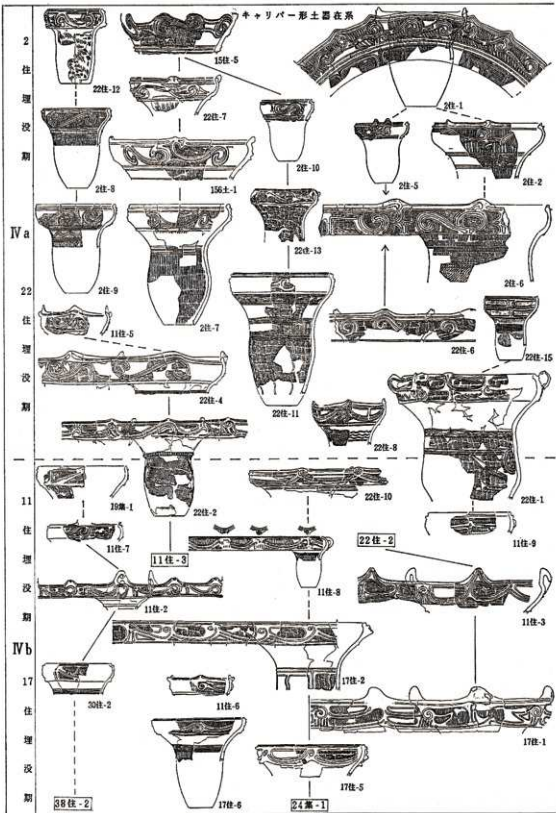
一方、頸部波状文帯の設定が多いことも本遺跡のⅣ期を特色づけている。これは、第2・22号住居跡に顕著で、第11号では僅少となり、第17号に至って皆無となる。反比例して頸部無文帯を有する個体が増加するが、22住-1や11住-8では両者が同居しており、相反関係の横帯として一概に扱えない。頸部波状文帯の分布は中村橋遺跡(大沢・芝崎1962)、子和清水77号住(松戸市1978)、上の原J D12(青木1981)など広範にわたる。中でも北・東関東域は個体多く、北塚屋Ⅲ期相当よりⅣ期にまでこれが残る。しかし、単数沈線が殆どで、複数のそれはむしろ西関東域に多い。本遺跡に匹敵する多用例は、同じ埼玉県北西部の舟山5号住があるのみで、他に例はない。その祖源はともかく、頸部波状文帯の多用は本遺跡周辺の域差として認識できるだろう。

胴部懸垂文は頸部の別帯と深い関わりを持つ。同文の採用は2住-9の段階より行われており、無文帯設定のいかんに関わらず施文されている。だが、口縁部文様帯下位区画線と連結するものではなく、複数横位線の配置が不可欠であるといえる。また、Ⅳ期に盛行する直蛇の交互配置は、本遺跡の場合、17住-2の段階より用いられている。しかし、花積2A号住では既にこれを施文した個体があり、若干の遅れが認められる。

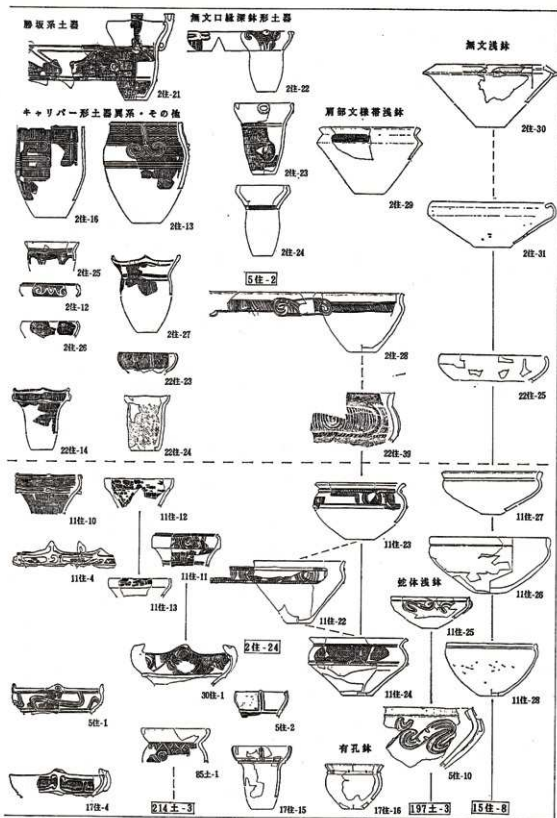
胴部文様で特異なものには2住-16と2住-13がある。前者のような幾可文は、当地周辺では例を見ない。細系統を無視した類似の施文、構成法は、三原田8区9号住(赤山1977)、大畑貝塚(馬目1975)、槻沢P87(海老原1980)など、北関東で、大木8a式の強い影響を被ったⅢ期相当の土器に多い。本例はこの施文意識を継承したものと理解されよう。

また、後者の羊角状渦巻隆帯も類似例が少なく、表面的にこれを求めても岩の上21号住出土品の口縁部文様帯内に見るのみである。本遺跡14住-1も羊角状の素描形を用いてはいるが、胴部にこれを配したものは他になく、曾利I式土器の胴部U字状隆帯を彷彿させる。一方、素描形自身は上の原J D12などの複弧文系統の土器に多用され、栃木県下では安定した存在となっている。しかし、両系との関わりの可否は決し得ず、今後の追加例に期待する他ない。

その他、他系の要素を汲むと解した個体は第171図の左に配列した。東関東系の文様を残すものには2住-12・25・27、22住-14、5住-1、17住-4などがあるが、いずれも直系として残存したもの



第170図 北塚屋N期の土器(1)



第171図 北塚屋N期の土器(2)

ではなく、変形を余儀なくされている。2住-12は、本遺跡では稀な1本隆帯を主文描出に利用しており、子和清水3号住のような純行文を描くが、地文は西関東に多い燃糸文を用いている。また、2住-27の口唇部刻みは、花積2A号住などで出土した上半無文の土器の模倣であろう。

22住-23は縦位浮文列の直下に無文帯を配する稀有な例であり、一見して時期降る中部系要素を想起する。だが、同系に見る口縁部の著しい内屈がなく、隆帯断面の特徴や無文帯の存在などは別統の設定を必要としよう。類似する構成は加曾利E系の初現期にあたる松ノ木34号住より出土しており、中部系の影響は認めざるを得ないものの、Ⅲ期からの独自の推移を辿っているようである。一方、85土-1は曾利重弧文系統の模倣品である。横S字を基本とするⅡ式の構成を用いているが、より複雑な文様展開を見せるため、通常より古く認識した。

浅鉢は、無文のそれに良好な資料を得た。第171・173図を比べれば、器高の低い口唇肥厚有凹縁形より、器高比の高い内彎口縁形への指向変化が現れている。これに『台耕地(1)』の変遷図を重ねれば、当地における該期無文浅鉢の変容過程は、ほぼ確定したといえる。

以上のように、北塚屋Ⅴ期は在系キャリバー形土器口縁部文様帯内の区画化や渦巻部の緊縮化を基準として、従来の加曾利EⅠ古・中段階にあたるⅤa・Ⅴbの細期別が可能となる。また、個体別の先後は分離かなわぬが、前述した4軒の住居跡出土相を大枠でとらえ、隆帯閉粘土瘤、頸部波状文帯や同無文帯、地文比の変化を加味してその先後を確認した場合、さらに第2→22→11→17号住居跡という変容が確認できる。

これを既存の時期区分に対比すれば、第2号、第11号住居跡がそれぞれ加曾利EⅠ古・中段階の典型例となり、第22号、第17号住居跡は第11号先後の過渡的段階にあたるだろう。既検出加曾利E系最古の第2号住居跡は、2住-21の胴部文様帯土器をはじめとして勝坂、中峠、大木系の要素を色濃く残す。しかし、在系キャリバー形土器は加曾利E系的構成法が確立しており、15住-5のような前代を偲ばせるものがない。つまり加曾利E系創成期にはなお隔りがあるといえる。

一方、第17号住居跡は、頸部無文帯や区画文の確立する段階の所産として位置づけられる。この点からすれば、Ⅴ期への移入も考えられるが、燃糸地文の多さと17住-2の存在を以てⅤb期に帰属させた。同番と17住-5の連続弧状区画は、口縁部文様帯内の単なる構図形より区画文への変化を如実に表わす好例であり、類似例は増善寺遺跡(宮崎1982)などで出土している。

c 北塚屋Ⅴ～Ⅳ期(第172・173図)

加曾利EⅠ新时期以降、EⅣ期に至るまでを北塚屋Ⅴ～Ⅳ期として扱った。前半のⅤ・Ⅳ期は既述の構図変化に加えて胴部懸垂文の変化を考慮して大枠を設定し、後半は既存の大区分に基づいてこれを分けた。具体的には、Ⅴ期が加曾利EⅠ新・EⅡ古期に、Ⅳ期が次段階以降のEⅢ期となる。また、Ⅳ・Ⅲ期は、それぞれEⅢ・EⅣ期にあたる。

今回報告分の集落構成は、Ⅳ期で大方が途絶えるわけであるが、その直前には同時期内遺構数がピークに達しており、諸行動型変化の反映として受けとれる。反面、住居跡毎の出土個体数はⅣ期より減少し、土壇出土土器の増加がこれを補っている。Ⅴ・Ⅳ期は、Ⅴ期に比して、甕や大甕などのキャリバー形土器以外の器種が組成中に一定の割合を持つようになっている。特に、Ⅴa期を主とする連弧文土器の進出が著しく、Ⅴb期では大甕が組成比を伸ばす。

V期のキャリバー形土器は、小渦巻と区画文の交互配置が確立、そして区画文との合体が行われる過程でとらえられ、その間に頸部無文帯設定の放棄が終結する。連続弧状区画には系譜の連続性が強いものの、ここに大きな文様系統の断絶がある。平坦な隆帯の重用は、渦巻文描出に際する視覚的效果の主役を隆帯から沈線へと移行させている。

渦巻方向は双向と単向の両法が対峙した形となるが、特に後者の39住-1から214土-1に至る系統変化は、頸部無文帯の消失化とともに、渦巻・区画文の合体・無意化の型式的変遷を象徴している。他遺跡例では、窓ヶ窪2号住(秋山1979)のように先後の共存なども見られ、直系認識が土器群の実相と対応するわけではない。しかし、双向系がV期に至り急激に減少する予兆を示すといえよう。一方、38住-1は22号住埋没期よりの大木的な胴部沈線文を残しており、最も後出する例となる。

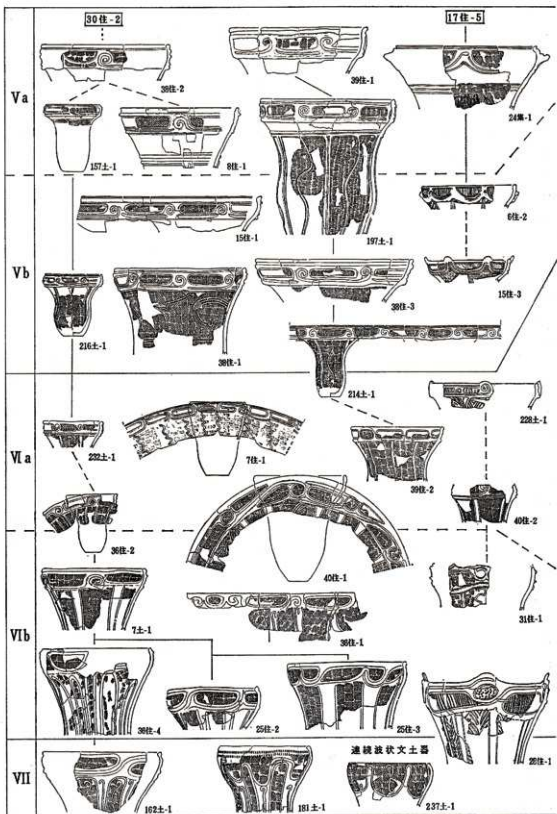
キャリバー形土器の変質や系譜の断絶、新生を特徴とするのがV期である。同じ頃、武蔵野台地は連弧文最盛期で、当地はやや劣るが、この現象の波及が系統的連続性の多くを途絶させた結果と解す他ない。前半のVa期が最も顕著で、228土-1の如き突出渦巻区画文は、平山橋5号住(高林1974)などVb期より存在するが、この期に普遍化したものである。この類は坂東山遺跡をはじめとする武蔵野台地と周辺に多く、沈線地文を好んで用いている。また、従来からの交互配置型は単向系列のみが占有比を維持し、双向は極端に減少している。渦巻部と区画部の合体は定着し、Vb期では強硬した渦巻内部に地文が施され、文様帯下位区画線の直線指向が崩れている。

連弧文土器が主体となる住居跡は第3号のみで、前述のように、その席捲を免がれた地域といえよう。18住-1は上段連弧下に三角杵状文が附属せず、正確にはVb・Vaのいずれに属するかを決し難い。しかし、3本沈線複段交互配置という連弧文土器の本来的な姿を押し、加えて、第3号住居跡、台耕地3号住のように、本地域のVa期では杵状文設定が普遍的なことより、取えて一段階を遡らした。一方、Va期として示した5点は連弧施文意識の変質が窺え、杵状文との結合が特徴となっている。また、39住-3に至っては、杵状文の交互配置によって連弧を作出し、無施文部を設けるなど、全く異質の施文工程と化している。

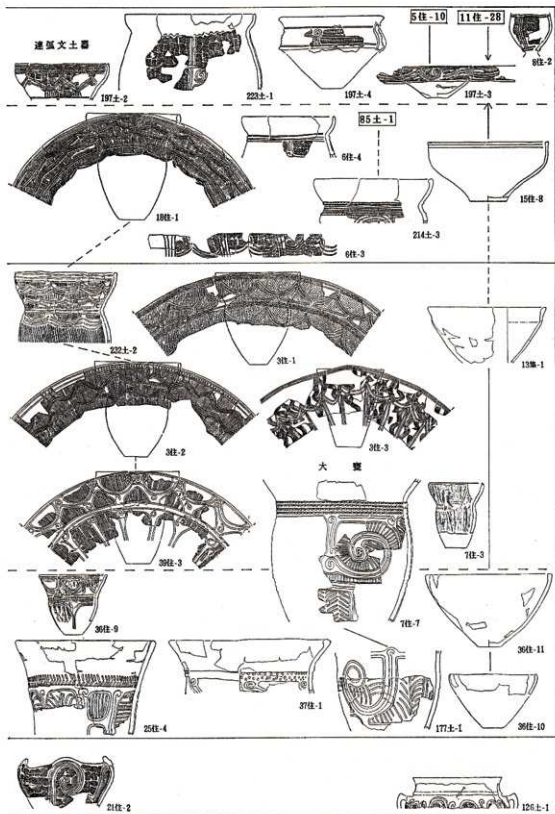
これに対し、197土-2は横分帯が連弧文土器のそれだが、渦巻上下の短沈線はVb期のキャリバー形土器口縁部文様帯内に類似性を求められる。共伴の197土-1はVa・b期の過渡期的段階にあたり、連弧文土器成立時に相当するが、その初源より、所謂喫煙系タイプ(桐生1981)に付属する胴部文様のみならず、口縁部文様の転化系が含まれていたことを示している。これに類する土器は岩の上13号住、島之上1号住(笹森1977)、台耕地46号住など埼玉県西部を中心とした地域に継承されている。39住-3は、この小渦巻系統と、変転を経た連弧文本流の複合した姿ともいえる。

連弧文土器の原型とされる喫煙系タイプは出土していない。しかし、同タイプに多い連続弧状区画文土器を見れば、類型成立時より頸部無文帯が拡大し、横位集合線が器形括れ部に下るものが多い。この頸部拡大が、中部から西関東にかけての「田の字区画」(6住-2)の参入を招いたり、連弧文土器独自の器形に応ずる二帯構成を許容する下地となっており、武蔵野台地以南に多い(註8)。

大甕は沈線充填のものが主で、その大部分が渦巻文を上帯に配した二帯構成をとる。第173図に示した4点は全てこれにあたり、Vb期若しくはその直前に相当する時期に多く用いられる。特に、7住-7、177土-1は上下分帯線が整う点で、祖源となろう甲信・伊那谷系大甕とは一線を画す。甲



第172図 北家屋V~Ⅵ期の土器(1)



第173図 北塚Ⅴ～Ⅵ期の土器(2)

信系本流では、単純深鉢が沈線充填法を獲得した後も、縦位条線施文が長期にわたり残存するのが一般的で、関東では主として神奈川県下でこれが検出されている。これに対し、沈線充填は、時代差なく北西関東に偏向し、殊に当地域では器種組成に一定比を占めている。このことは、要素横攷の際、器種別による地文限定を無視した合体が行われ、かつ、当地でこれが普及したことを示す。

一方、後半のⅣ・Ⅴ期は、出土土器量に劣るものの、興味ある個体が出土している。

21住-2は、勝坂住居への混在により詳細は不明のままだが、少なくとも関東地方に類例を見ない。同様な描出法を用いる土器は風早遺跡(青木1979)などで出土しているが、一本の貼付隆帯で文様を作出し、上帯よりの棒状化したJ字渦巻の施文を常とする。これらは口縁部無文帯の設定が欠かせぬ条件となっており、同番の構成、施文法の実質とは隔たりがある。しかし、大略二段構成と貼付隆帯による渦巻という点では共通することより、近い種類と認めて大過ないだろう。

Ⅳ期と表わした19住-1は、志久8号住(佐森1979)などに類似文様構成例がある。同例は複段J字を分割するように無文横帯が介在するが、口縁直下の無文帯が直接J字内と連絡する構成なども共通し、同類と考えられる。しかし、同番の器形と鋳状突起、微隆起線施文はより先出的な要素を具備しており、志久例と区分する必要もある、いずれにせよ、同番土器はEⅤ直後と認識されるはずであり、正確な時期は称名寺1式期の表現が妥当だろう。本土器の場合は出土個体の全てが加曾利E系であったため、中期区分のⅣ期に含めた考えた。(黒坂)

註1 これは隆帯直下の描出のみを指し、隆帯を欠くものや、区画内の充填法を指示する定義ではない。

註2 武蔵野台地を除く埼玉県内では所謂多喜重文タイプが客体的であり、普遍的指標となり得ない。また、円筒形の多段円形区画土器も稀少である。そして、第249号土壇一括品の如く、鈴木福年(鈴木1981)で先後に分離された器種(縦位区画土器と胴部文様帯土器)が共存する。

註3 重点的に加飾する横帯部分を指した。素文帯と認定し得る横帯や、縄文帯、櫛形帯を除く。また、多段円形区画文は、外見上は複段であるが、各段が連続集合している点より単段と解した。

註4 対比表の差は勝坂系後半期に顕著である。しかし、本事業団紀要に示された遺構別資料と、鈴木氏の示した主要遺跡一覧を対比すれば、埴埴Ⅳ期が勝坂2a式にほぼ一致する。同様に、Ⅳ期が2b式に、Ⅴ期が3式にあたる。遺構別で見ると、双方の差はむしろ勝坂系前半期で微妙に現れている。

註5 示された資料によると、口縁部に無文帯を有するものは、腰標12号住や松ノ木35号住(高橋1980)に特徴的な、下位区画隆帯が把手と連絡するタイプに限られているようである。これとても、当地では稀薄な存在であり、独自の分化基準の設定なくしては勝坂3a・3b式相当の一線を確定できない。

註6 一本の基部の双方より渦巻文が明れるものを双向、一方のみを単向と表現した。

註7 これに類似する個体が4km程隔った宮林遺跡1号築石より出土している(本事業団第50集)。口縁下に相反する無文帯を配し、直下に膨張部を有する器形を用いるが、隆帯施文法や構図が酷似しており、同系譜を継ぐものと理解される。

註8 一方では、157土-1、197土-1のように、頸部無文帯の狭小化が進み、野田Ⅲ8号住(新藤1976)や216上-1などを経て頸部無文帯の消滅へと進行する。ところが、その間の口縁部内には変化が少ない。これは、頸部無文帯の捨行為が及ぼした土器全身への影響力の低さを物語っている。

2. 出土石器

はじめに

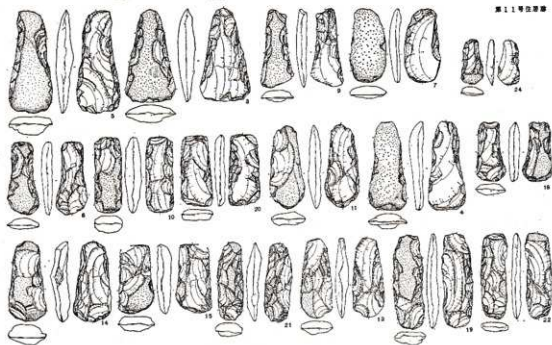
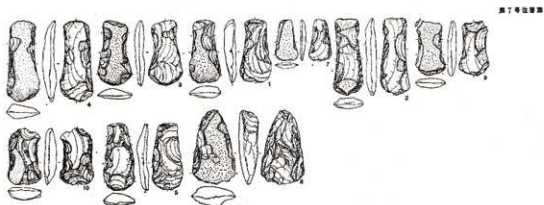
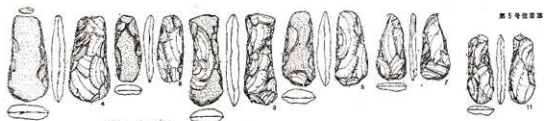
北塚屋遺跡の石器組成は荒川流域周辺における縄文時代中期の遺跡群と変わることなく、そのほとんどを打製石斧で占められている。この事は北塚屋遺跡の石器群を考えていくのに際し、まず打製石斧をいかに考えるべきか、と言う事からスタートすべきかと思う。すなわちこれ以降打製石斧の観察をもって、北塚屋遺跡の石器の結語にすることにする。

打製石斧に関する概観

所謂打製石斧と言え、石炭と並び縄文時代を代表する石器である。そのため論考も多く見られ、研究も進展しているかに思われる。しかし、「なにをもって打製石斧と呼ぶか」という点を直接論じたものは少なく、わずかに齊藤基生氏の平山橋遺跡の報告書に見るだけである。すなわち、所謂打製石斧と言う言葉で、縄文時代中期に爆発的に多くなるとしながら、時間軸では先土器時代から縄文時代晩期までの石器に使用し、空間軸では東北地方から九州地方までの石器に使用している。そのため実体としての打製石斧は捕えにくくなり、水平的・垂直的に拡散してしまっている。このような状況の中で、あくまで関東・中部地方の縄文時代中期に爆発的に見られる打製石斧を対象とし、その特殊性を明確にすることによって、逆に所謂打製石斧と呼ばれている石器群にメスを入れられると思う。

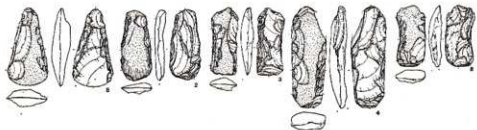
自然面と打製面

打製石斧の製作工程に関しては、何人かの先学によって論じられてきた。ここで若干の整理を試みると、まず始めに上げられるのが白石浩氏の日野吹上遺跡の報告書である。氏はこの中で、打製石斧（報告書では打製石器と呼んでいる）を若干の例外をのぞけばCore-toolであるとしている。これに対し、齊藤基生氏は剥片を主にまれに礫の裏表を整形したものを素材としていると述べている。また、小田静夫氏は貫井南遺跡の資料を基に打製石斧を分析し、正面の自然面の曲線から剥片を素材としたと考え、平面形状の短冊形と楕形を河原石のどの部分の剥片を利用したかまで想定している。齊藤・小田両氏の論考が発表されて以降、打製石斧は剥片を素材としているものが、主体をなすとする考えが一般化されてきたと思う。このような石核石器か剥片石器かという考えに対し、小林公明氏は曾利の報告書の中で一つの実験を試みている。それは「なるべく扁平で適当な大きさと形の転石を選ぶ、それを片手で持ち、周縁の適度な箇所を衝撃点に選んで、どっしりとした台石にストンと振り降ろす。そうするとパンと一撃で扁平面の石理に沿って割れ、二枚貝のような表皮をもった石片を得ることができる。うまくすると真中に表皮をもたない石片をはさんで、三枚に割り裂くこともできる。」少し長い引用になってが、このように述べている。この実験によって、従来考えていた、石核か剥片かという問題から離脱できたかと思う。現実には大きな河原石から、打製石斧の素材になる大形剥片を連続的に割ぐのは不可能であるし、実際の打製石斧を見れば、ネガ・ポジが不明な主要剥離面？を大きく残すものが多く見られるのが現実である。また、自由学園南遺跡の報告書の付録「立野川河成低地出土の大形剥片について」の項で、打製石斧の素材と思われる剥片の接合例が出ている。これは、遺跡ののっている台地直下の河成低地の裾部にあたり、遺跡

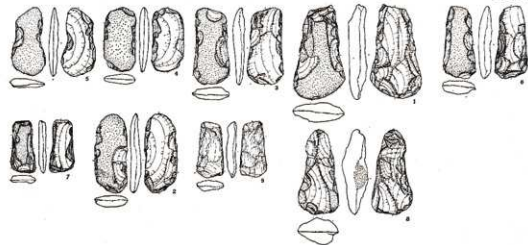


第174图 打製石斧集成图(1)

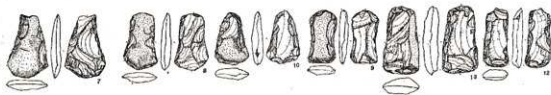
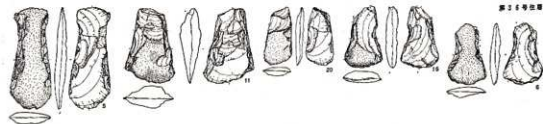
第13号位器



第22号位器



第26号位器



第175图 打製石斧集成图(2)

との関連が深いと述べている。この接合例を見ると、片面に自然面を大きく残し、もう一方の面に打割面（小林氏のその実験を扁平円礫打割技法と呼んでおり、著者もそれに従いその技法によって作られた面を、打割面と呼ぶことにした。）を大きく残している。打割後若干の調整剝離が試みられている。この点を考えると、従来遺跡とされる地点から出土している打製石斧で、接合により原石に復元できた例がなく、打製石斧の量に対し、その製作時に出ると思われる剝片の量が少ない理由をここに求めることができるかもしれない。

次に北塚屋遺跡の打製石斧を具体的に見ていくことにする。第174～176図は比較的打製石斧が纏まって出土した住居跡から、分析可能なものを集成したものである。

第5号住居跡では8点の打製石斧を使用した。正面に自然面を残すもの6点。裏面に打割面を残すもの8点全てである。

第7号住居跡では9点の打製石斧を使用した。正面に自然面を残すもの8点。裏面に打割面を残すもの8点である。また、5は両面に打割面が見られもので、打割の際に真中の部分となったものであると思われる。8は正面に自然面を大きく残し、裏面には打割面が明確でないものである。他の打製石斧と較べ厚さがあり、顔付が異なる。

第11号住居跡では17点の打製石斧を使用した。正面に自然面を残すもの15点、裏面に自然面を残すもの2点、裏面に打割面を残すもの15点であり、両面に打割面を残す20、表面に打割面を残す18、裏面に自然面と打割面が共存する22がある。また、21は正面に自然面を残すが、裏面の打割面は明確でなかった。

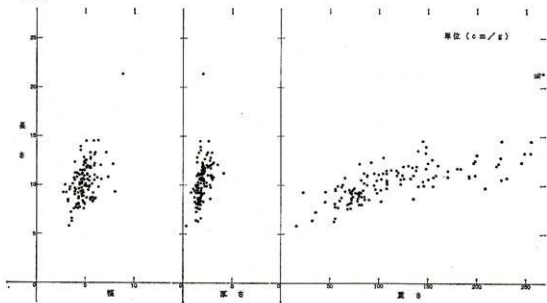
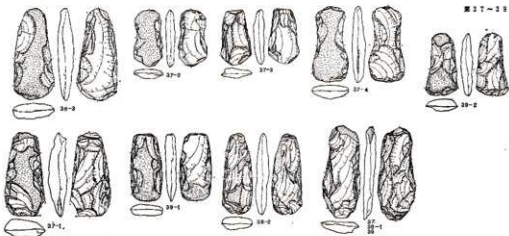
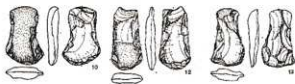
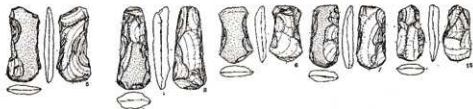
第15号住居跡では5点の打製石斧を使用した。正面に自然面を残すもの5点全てであり、裏面に打割面を残すもの4点である。また8は裏面に節理面があり、打割面の可能性も高い。

第22号住居跡では9点の打製石斧を使用した。正面に自然面を残すもの8点、裏面に打割面を残すもの7点であった。8は正面の刃部右側に少し自然面を残し、右側縁に敲痕が見られる。裏面の打割面は不明確であり、他の打製石斧と較べ厚さがある。9は風化が激しく細部に関しては不明である。

第36号住居跡では16点の打製石斧を使用した。正面に自然面を残すもの14点、両面に自然面を残すもの2点、裏面に打割面を残すもの12点、両面に打割面を残すもの1点である。9は正面に自然面を残し、裏面は両側縁からの剝離によって構成され中央に稜線が走っている。12は正面基端部に自然面を残し、両面に打割面が見られる。17・18は両面に自然面を残し、打割面は見られない。22は風化が激しく細部に関しては不明確である。

第40号住居跡では8点の打製石斧を使用した、正面に自然面を残すもの7点、裏面に打割面を残すもの8点であった。

第37～39号住居跡は切合い関係にあるので一括して示した。使用した打製石斧は9点である。正面に自然面を残すもの9点、裏面に打割面を残すもの8点、両面に自然面を残すもの1点、両面に打割面を残すもの1点である。37～39-1は正面基端部に自然面を残すのみで、正裏両面に打割面を見る。正面は打割面を大きく残し周縁調整を施している。裏面は面的な調整剝離を施し打割面は部分的に見られるだけである。



以上、各住居跡別に打製石斧に残された自然面と打割面を見てきたが、ここで若干の整理をしておく。基本的スタイルとしては正面に自然面、裏面に打割面を残すものが多く、まれに、裏面に自然面を残すもの、両面に打割面を残すものがある。これらの打製石斧は打割技法によって、素材となる石片（切片）を作出したものだと思われ、基部の調整剝離も周縁調整を主にする点で共通している。また、全体に厚さは薄身のものが多い。これに対し、打割技法によって素材を作出していない第7号住居跡-8、第22号住居跡-8は、正面に自然面を残すが、調整剝離のあり方が異なり、厚さもある。すなわち顔付が異うと言えるであろう。

刃部

打製石斧の形態分類は一般に短冊形、撥形、分鋼形の3分類が基本になっている。しかし、この分類はあくまで基部を中心にしたものでしかなく、打製石斧自体に内包されている機能区分を考えると時には、あまり有効な分類とは思えない。道具が人間の体の延長であるならば、直接物に対応する刃部が存在し、その刃部と人間を繋ぐ媒介として基部及び柄が存在すると思う。その意味で斎藤基生氏が貫井遺跡の報告書で試みた、打製石斧を各部位に分解し、部位ごとの形状分類を行ない、各部位の相互の関連性を求める方法は注目すべきである。しかし、打製石斧を認識する上で始めに注意すべき部位は、物に直接対応する刃部であり、その形状分類、形態分類を行わなければ、特殊石器群としての打製石斧は浮彫にならないと思う。次に北塚屋遺跡の打製石斧を見ると、正面刃部に自然面を残し、裏面は打割面の縁辺をそのまま利用している薄刃のもの。正面若しくは裏面、またわ両面に規則的な調整剝離を施し、比較的厚刃に作っているもの2者があり、これを基本形としたいいくつかのパラエティーが存在した。また、この刃部作出の方法と平面形状の関連は、前者が打割面の縁辺の直接利用のため、円刃、直刃、偏刃の全てのパラエティーを持つものに対し、後者は刃部形状を整形しえるため、ほとんどのものが円刃であると言える。以上北塚屋遺跡においては打製石斧の刃部が2形態存在することが分った。

おわりに

北塚屋遺跡から出土した打製石斧を「自然面と打割面」の関係と「刃部」を中心に観察してきたが、最後にそこから見出された問題点に若干触れて終ることにしたい。

所謂打製石斧と呼ばれてきた石器群は、暗黙のうちに、関東地方及び中部地方の縄文時代中期に爆発的に増加する石器群を示しながら、一つの言葉として水平的、垂直的に拡散していると言える。そのため、特殊石器群としての打製石斧の実体を不明確なものにしてしまったと言える。今回の整理において、逆に打製石斧を縄文時代中期に限定する形で見てきた。その結果、打割技法を素材作出の基盤とし、基部は両面に周縁調整を施し、自然面、打割面を残すものが多く、刃部は2つの形態を中心にする石器群をもって、関東地方及び中部地方の縄文時代中期の打製石斧の主導的形態の実体と考える。

(西井)

3. 検出遺構

北塚屋遺跡は、荒川の河岸段丘上に立地する縄文中期の集落である。荒川を南に臨み、北東に擁台地をひかえる位置である。中期の遺跡は、対岸の山を南に占地した側に多く検出されている。これは、水との関連性が強いと考えられている。我々が報告書を刊行した下南原、台耕地遺跡に続き、北塚屋遺跡も同時期の集落となった。それぞれの遺跡が荒川に沿うという同じ立地条件のもとに営まれていたことは、疑いえない。荒川を遡るように、下南原、台耕地、北塚屋へとやってきたような状況である。北塚屋遺跡も140号バイパス工事の為、帯状の発掘区域であったが結果的には所謂「環状集落」を縦断したことになり、良好な資料を得ることができた。北塚屋遺跡の集落構成及び集石土壌について若干の検討を行ないたい。

本遺跡で検出された遺構は縄文関係のみで、住居跡42軒（+4軒、内2軒報告済、残2軒未報告）土壌249基、集石土壌36基、単独埋壺1基であった。住居跡は、勝坂から加曾利Ⅱ式期までのものが存在するが加曾利Ⅱ式期の住居は検出されていない。主体となるのは、勝坂式後葉～Ⅱ式期にかけての住居である。この地域は砂利等により非常に遺構及び遺物の残存状態が悪く、土器に関しては、風化の為かまろく、発掘時点で確認された土器が消滅あるいは表面摩滅の為に、図示できない状態となってしまっていたものもあった。遺構に関しても遺物が集中することによってドット図を作成し、住居と確定したものが、4軒あった。炉址及び柱穴等の確認のできなかった住居跡も多い。だが、総体でこれを見れば、中期集落では比較的整った分布を示す遺跡と解せるだろう。

先に報告した台耕地遺跡では、住居の構造について細かい分析を加えてみたが、同遺跡で認められた傾向は、本遺跡においても同様の結果が導かれたと考えられる。まず、全体をながめて見ると、中期の遺跡の特徴ではあるが、環状に廻る住居群と、その内部へのいくつかのまとまりを持つ、複数の土壌群の配置が認められた。そして調査区が東西に長く設定された為に、調査の結果、遺跡の東西の範囲はほぼ把握されたと考えて良いように思われる。すなわち、東端と西端の住居跡間を単純に直線距離で、測ると250mになっている。だが、さらにこの住居の西側にも土壌と集石土壌が検出されており、北塚屋遺跡は非常に長大な範囲を占有していた集落であることがわかる。また、南北方向に関しては、南区と寄居町教育委員会で発掘した部分によって、南側に住居が廻ることは判明したが、北側に関しては未調査であり不明と言わざるをえない。しかし、この北側の調査如何によっては本集落の形態が確定されるであろう。ことは間違いないであろう。おそらく環状に住居が廻ると考えるのが現状では常識であろうが、他のほぼ全面発掘を行ない得た中期の集落の観察からは、そのように断定できるほど単純ではないのも事実である。たとえば、台耕地、坂東山、宮地、児玉工業団地（特監塚、古井戸）等の諸遺跡の姿が思い出されよう（日本考古学協会1984）。

次に、全調査区を検討し分析したい。前述のように住居は、発掘区の東と西に群となって集中して検出された。東群と西群に分割されたように検出された住居群の空白部に200期余の土壌が、やはりいくつかの群を構成するように検出されている。北側に芯を定めて、円を描くと、その帯の中に住居及び集石土壌の80%が検出されている。これはあくまでも、任意の机上操作であるが1つの参考とはなる。住居の集中する空間、土壌の集中する空間、集石土壌の集中する空間、これらが相

互に重なり合って、本遺跡が構成されていたのである。だが、これはあくまで遺構の最終段階の姿であって、より細かく時期ごとの検討を加えれば、より詳細な遺跡内での動態が明瞭になるであろう。しかし、最終段階の姿がこうであったという事実は、当時の人達がたとえ意図していなかろうと無意識のうちに何らかの規制が働いており、その中で行動した結果だと考えられよう。前述の他の集落との比較からも同様と考えて良いであろう。遺跡が廃絶された最終段階の姿から、徐々に各遺構を消去しつつ、初瀬へとたどればこの北塚屋集落がどのように形成されたかを明らかにすることができるのである。また、勝坂期の土壌248・249号は住居群よりさらに外の最西端に位置するがこれは、集落の内側に存在すべき墓塚が、本来の機能の他に、本集落とその外部の世界をいやがうえにも意識させる位置に存することから、我々は死亡原因等を含めた死者への生者の対応の仕方、考え方、そしてさらに両者の世界に関わる何らかの意味あいの付加を読みとることができるのではないだろうかと期待されよう。今後の課題にならうかと考える。

さて、次には時期別の遺構の在り方を明らかにしながら、集落変遷の実態をながめてみよう。土器形式に基づいて1～5期に分類した。1期はいわゆる勝坂式期である。2期は加曾利Ⅰ式期、3期は加曾利Ⅱ式期、4期は加曾利Ⅲ式期、5期は加曾利Ⅳ式期とし第177図で時期別の遺構配置図を示したが、時期不明の遺構も多くあり、それもまたこの集落を構成する遺構には変わらない。なお、遺構番号、グリッド名については第5図を参照されたい。

1期は、11軒の住居跡が検出されている。最も古いのは23号住であり、G-14区に位置する。次が9、10、12号住であり、3列に位置する。9と12号住はD内で3mの距離で検出されている。12号住は、この2軒から15m程北のB内から検出された。次は21、32、1号住である。21号住はF・G-14区、32号住はC-16・17区で検出された。前述の9、10、12号住と9号住の東20mの距離にあたる。21号住と23号住も22号住を挟んで南北に位置する。次は14、16、26、29、33号住である。14、16号住はB-4区から検出され、隣接する住居跡である。26、29号住もI・J-15区から検出され、若干切り合った状態を呈している。33号住はE-17区から検出され、26、29号住から、50m程北の位置である。住居の検出された位置を考えると、東側に属する住居跡は、適当な距離で配置されたような状況を呈するのに対して、西南地区は、隣接する住居と距離を有する住居とに分けられる。

次に土壌の検出状態を述べてみたい。この時期の土壌で古い段階の248、249号土壌が、C-23区から検出されていることは前述した。土壌は詳細に時期区分をせずに集落中での位置付けに絞った。土壌も東側から、集中する区域毎に説明していきたい。2、13、18、19、20、22、35、37、44号土壌が、A・B-4～7区にかけて斜めの帯状に分布するような状態で検出された。この一群から西へ20m程空間を隔て、48、57、58、60、72、75、83、86、88号土壌が、弧状にA～C-9～12区から検出された。この区域は、集落の中央部分にあたると思われる。本土壌中には、75号土壌のように硬玉製のかつお節形の垂飾りを床面から出土したのもあり、同じ形態を呈する72号土壌とともに、東西方向を長軸として3基が、南北に並んだ状態で検出されている。また、これらは、墓塚としての可能性が強いと考えられる。また、29号集石土壌も、この群中に加わると考えたい。さらに20m程西のB-14区から、134・135・136号土壌が検出された。この3基は、

形態も規模も類似する。さらに南側にあたるD-14・15区からも、141、180、183、184、185号土壌が斜位に並ぶように検出された。またD-15、16区から、173、204号土壌も検出されている。この区域は、土壌の集中度が高い。今まで述べた土壌は、検出された住居よりも内側に属する。2号土壌は、10号住に近接している為、除きたい。さらに西側C-17区前述の32号住居内から、222号土壌が検出されているのを除くと残る、230、235、248、249号土壌は住居群から²外₂で検出されたことになる。230・235号土壌は、32号住から10m西の位置であるC-18区から検出された。円筒型の類似した土壌である。さらに40m西のC-23区から、248・249号土壌が検出されたのである。単純に東西の領域を測っても180mになる。また、西側は住居群より²外₂で検出されたが、東側は確認されていない。

さて、次に集石土壌について触れておきたい。集石土壌もグリッド順に述べていきたい。9基がこの時期の所産と考えられる。A-1区から1号集石土壌が検出された。10号住より20m東の位置である。3、4、5号集石土壌が、西へ7m離れたA-2区内から横に並んで検出された。このうち、3、4号集石土壌は2号住居内から検出されており、2住は集石土壌より新しく位置付けられているが、発掘状況等から、同時期かつ住居に付属する集石土壌とも解することができる。南側には3-B・C・Dと12、14、8号集石土壌が南北に並んで検出された。12号は10住の南3m位置にあり、14号、8号ともに9号住から2m程の位置であり、住居から遠くない距離である。さて、西側では、29、31号集石土壌がC-16・17、F-18区から検出されている。29号は、32号住の東10mの位置であり、31号は、33号住の南6mの位置にあたる。この時期は、土壌と集石土壌は同じ空間から検出されていない。土壌に比べると群構成を考えられる程集中度がない。

次に2期について触れておきたい。住居跡は10軒確認されている。中でも2、22号住が古く位置付けられている。2号住はA-2区、22号住はG-14区から検出されている。次は、5、11、17、30号住である。B-2~C・D-4区にかけて斜めに並んでいる。2住もこの延長線上に位置する。30号住は、B・C-16区に位置し、22号住から40m北にあたる。さて次は、42、4、8号住である。24号住はE-15区から検出され、22、30号住の中間の位置である。42号住は、B-21区に位置し検出された住居の中では西端にあたる。2号住とは185mの距離がある。4、8号住は、C-2区とB・C-3区に位置する。東側にあたる住居は斜めのベルト状に5軒検出されたことになろう。30、24号住は土壌群を挟むような状態である。

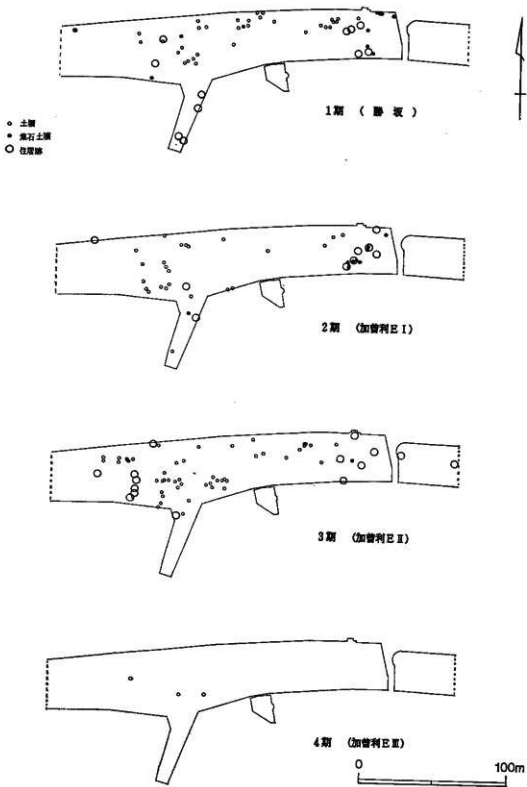
次に土壌について触れたい。B-4~6区から、5、17、34号土壌が検出された。さらに40m程西の位置から53号土壌が検出され、また30m西から、85号土壌がこの時期のものとして確認された。34号から53号土壌までは、この時期の土壌は確認されておらず、土壌自体も極めて少ない空間である。85号の南、E-12区から、102、103号土壌が検出された。85号の西・B-14区から132号土壌が検出され、B-15区からは、157、155、156号土壌が並んで検出された。D-16区からは、197、205、206号土壌が検出された。E-16区からは、212、215、225号土壌が検出された。また、24号住と22号住の間の住置から188号土壌が検出されている。さらに南I-16区から、29号住に隣接して219号土壌が検出された。225号・土壌の西、E-17区から、C-18区にかけて、227、242、239、238、236号土壌が検出されている。この197、206、205、212、215、225、227、242、239、238、236号土

墳は、円を描くような配置を示し、42号住と22号住の中間に当たる。1期の土壌群とは別の分布域を構成している。

さて集石土壌はどのように検出されているであろうか。2期と考えられる集石土壌は10基検出された。内9基が、A-1、B-3、C-4区に位置する。残る1基がG-15区から検出された。土壌の分布とは明らかに異なっているといえよう。細かく見ると、2号住の東から、2号集石が検出され、5号住内から、10、11号集石土壌が検出されており、11号住内からは、19号集石が、さらに隣接して、東側から、16号集石、2m程離れて、15号集石と続く。17号住に隣接して北側から22号集石が検出されている。また、17号住内には23、24号集石土壌が、検出されており、住居と同時期と考えられる。この区域は、極めて集石土壌の密度が高い。相対的にみても、C-3・4区は高い密集度を示す。これに反して、西側地区は、住居が少ないのと比例して、集石土壌も少ない。27号集石土壌は、22号住の西4mの位置から検出された。

次に3期について触れたい。この時期は14軒の住居跡が確認されており、他よりも多い軒数である。古い時期から、6、15、38、18号住があげられる。6、15、18号住は、C・D-3・4区から約10m程の間隔を有して検出された。38号住はD・E-18区から検出されている。140m西の位置である。次は、3、7、39、40、41号住である。さらに報告済のC-1、C-2号住も同時期と考えられる。東からC-1、C-2となり、3号住の東50mと10mの位置にあたる。C-1号住が、本集落内における東端の住居跡となろう。C-1号住とC-2号住間は土壌等の遺構も検出されておらず空白地帯となっている。C-2号住、3号住、7号住は等距離に配置したように検出されている。39、40号住は、E-18区に位置し、切り合っている。この区域は、前述の38、39、40号住の3軒が切り合って検出された。41号住はさらに西のD-20・21区区から検出されており、C-1号住との直線距離を測ると240mである。次に25、28、31、36、37号住があげられる。25号住がF・G-15、28号住がJ-15区、31号住がB-17区、36号住はC・D-18区で隣接してD-18区から37号住が検出され、B-17区から31号住が検出されており南北に配置したような状況を呈する。36号住は35号住と切り合っているが、時期が確認されていない。3期は、18列に集中して住居が検出されている。また、住居の位置する空間が、他の時期と比較すると、拡張したように思われる。

次に土壌について触れたい。この時期の土壌も1、2期と同様に、若干のまとまりを示している。B-4区からC-8区にかけて、6、24、29、30、31、32、42、46号土壌が検出された。これらは1、2期の土壌を挟むような検出状態である。また、B-9区からB-11区にかけて、52、62、59、73号土壌が検出されており、1期の土壌群と若干重なる位置である。さらにD-12・13区から3期の土壌が集中して検出された。確認されたのは、93、91、94、96、113、119、122、124、100号土壌である。さて、次に集中する区域は、D-15、19区があげられる。この区域には、207、209、210、223、177、179、182、186号土壌が検出されている。若干離れたC-15区からも161、162号土壌が検出され、1期の土壌群と一部重なるような分布を示している。また群からはなれて検出された土壌に131号、146、189号土壌があげられる。189号は25号住に接する位置であり、192号土壌も31号住に隣接する。D-15・16区の南E-16区からも、218、214、216、217号土壌が弧状に検出されている。さらに40号住内から240号土壌が検出されており、この土壌が住居より古く位置付けられて



第177図 遺構変遷図

いる。また、31号住、36号住、41号住に囲まれたように226、232、233、234、244、245号土壌が集中して検出された。さらに10m程西から、246、247号土壌が検出された。これらはC-18~20区的位置である。この時期の土壌も西側に集中する傾向が窺えよう。

次に集石土壌について見ていきたい。3期と確認できたのは8号住内、C-3区に位置する13号集石土壌のみであった。本土壌が8号住を切っている。13号集石土壌は2期の集石土壌の集中する区域に接して検出されており、1、2、3、A-4、13、C、Dを斜めに縦断するベルト状に集石土壌が確認されたことになる。これに対して、西側では集中が見い出せず、点在する状態で検出されている。さらに、住居群から離れて、3基検出されており、時期不明ではあるが、特に2基は離れており、東側の集中して検出された集石土壌とは違いを感じさせる。

4期は土壌のみが検出された。住居跡が発掘区域外から検出される可能性は充分に考えられよう。土壌は4基確認され、何れも発掘区の西側にあたるB・D~E区、D-15区、D-18区に位置する。東から、126、127号土壌、161号土壌、36号住を切った状態で検出された267号土壌の順である。これは3期の土壌群に重なる位置であり、1、2、3期の土壌と同様の検出状態を呈している。しかし、住居跡との位置関係が明らかではない。

5期は、住居跡が1軒確認されたのみである。B・C-6区に位置する柄鏡形を呈する敷石住居の19号住居である。この住居の周辺から、同時期の遺構は検出されておらず、単独で1軒存在する。位置も住居の集中する区域から離れ、4期までの遺構配置状態とは異なると考えられよう。5期の本住居跡が、4期から連続と続く遺構であるが、現状では、不明である。しかし、続いたと考えるとそれは、1~4期までとは多少の変化があると考えたい。1~3期段階までは、確実に集落としてのまとまり(規制)の中で各遺構が、時期毎の特徴を示しつつ、集落を形成したと考えられる。それが、住居、土壌、集石土壌が集中する空間として表現されたと考えたい。また、発掘区域内の東と西の比較からも配置形態の相異が窺えよう。

以上で、集落内の遺構の時空的な変遷を終えて最後に集石土壌について触れておこう。

集石土壌とは、礫の集中がみられる土壌のことであり、先土器時代から縄文時代後期に到るまでほぼ連続と検出されている。筆者は、下南原遺跡・台耕地遺跡において、集石土壌についての見解をまとめた。しかし、これらの性格、用途の究明には至らなかった。同様に、先学諸兄による形態分類や、個別礫の詳細な分析等も、今一步本質解明には至っていないように思われる。このことは、逆にこの種の遺構の性格を反映しているのかも知れない。

さて、集石土壌は、上面に礫が密集することから確認される。礫の密集度、集中性が少ない場合はここでは集石土壌の概念からはずしておきたい。従って、本遺跡の26号集石土壌は、墓墳的な性格の土壌とも考えられ、ここでいう集石土壌からは一応除外して検討を進める。

また、集石土壌の用途についても蒸し焼用の調理施設等があげられているが、とりあえず、ここでは客観的な現象面での把握に重点を置くに留めておきたい。

さて、北塚屋遺跡内から検出された集石土壌35基の時空的変遷は前述した。そこで、ここでは、全般的な型態分類を加え、それが、時空的分布とどのように係わり合うかについて検討をした。

まず、集石状態の分類をしておこう。これは、第Ⅲ章で示した二態をさらに分化したものである。

I類 表面的な集石

II類 覆土中にも濃の集中があるもの ア、上層のみ、イ、底部付近まで集中するもの

III類 底部の礫が敷石状を呈するもの ア、平石が底部に敷かれたもの イ、大き目の丸石が壁の立ち上がり付近まで敷かれたもの

さらに、土壌の形態上の差異を調べる為に、平均値を測り、扁平率を求めた。これらにより集石土壌の立体的な変化を示すことができた。この値は第10表に合せて掲載したのでそちらを参照されたい。その値を基にグラフを製作した。第178図がそれでグラフの横は土壌の大・小を示す、平均値であり、縦は扁平率を示し、数字が小さくなる程、高い扁平率を示す。すなわち、0に近づく程、小さく、浅い土壌となる。それにドット形を変える事により、I～III類までの5分類を表現した。

グラフを観察すると、破線で囲った4箇所集中がみられよう。これを左から第1グループと仮称し、順に第2、第3、第4グループとした。次に各グループの特徴について述べていきたい。

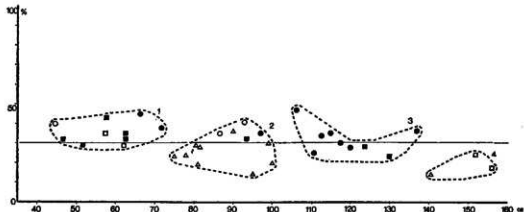
第1グループは、10基の集石土壌によって形成されている。45～73cmの範囲であり、扁平率が低い小型の土壌群である。II-I類を5基含む。特に扁平率が低いのがIII-A・I類の3基である。中間に2基のII-A類も含まれる。

第2グループは、13基の集石土壌が含まれる。75～110cmの範囲で扁平率の高い土壌が多く含まれている。I類が9基も集中し、この中でさらに2つの小グループに分類できる。80cmを中心とする扁平率の高い土壌群と、90～100cmの範囲の扁平率にバラツキのみられる4基の土壌である。III-A・Iの3基の土壌はI類より扁平率が低い。II-Iも1基存在する。

第3グループは9基の集石土壌により構成される。このグループを構成するのはII-I類の7基である。110～120cmの平均的な扁平率である30%のラインに沿って5基が集中する。残る2基は扁平率が低い。II-I類は2基含まれ扁平率が高い。

第4グループは3基で若干の偏差がある。II-A類が2基、I類が1基、何れも扁平率が高い。

次にこの図から時空間的な関連性を検討してみたい。I類とした集石土壌は扁平率が高く、浅い、中基模な土壌と、やはり浅く、長大な土壌に分かれる。先に述べた土壌は、2、10、14、16号が、第2グループで集中する。14、15、16、2号が1期に属する。これらは東側から検出された。また35、30、34、29号土壌が1群となり、西側から検出された。29号が1期に属する。29、30号と34、



第178図 集石土壌相関図

35号と対になるように検出されている。1基だけ第4グループ内に位置する19号は、Ⅱ-A類の13、11号と同じく住居跡内より検出されており、住居を切って構築し、形態も類似することから、関連性が強いと考えられよう。Ⅱ-A類は、前述の2基を除くと第1グループに属する。36、4号である。4号は2号住内から検出され、36号は集落の西端域から検出された。4号は焼土、炭化物の詰まった上に土器片が被さり、その上に礫が集中する形態を示し、36号とは相違し、同類に比定するのは難かしいと考えられよう。Ⅲ-I類は、7基確認された中の5基が第1グループ内に含まれる。18・6・3・24・17号の中で、3・24・17号が住居内から検出され、4号と同じく、住居に伴う集石とも考えられ、2・3期である。小型で扁平率は平均値より高目である。次に第2グループ内に21号があり、他の集石土壌からは離れて検出されている。第3グループ内の28・27号が確認され、27号は1期であり、同時期の22号住の西側から検出されている。Ⅲ-A類は、第1グループから1基、第2グループから2基、合計3基確認されている。第1グループは23号であり、17号住内から前述の24号と並んで検出されている。第2グループの32号も35号住内から検出されており、2基とも住居に伴う遺構と考えたい。23号は2期に属する。32号は住居跡と共に不明である。残りの1基は12号であり、1期に属する。集石土壌の集中する空間に属する。3基とも扁平率は低い。23号・32号は底石の周囲に版状の石を壁に沿って斜位に設置している。Ⅲ-I類は10基確認された。第1グループから2基5・20号、第2グループから31号が1基、主体となるのは、第3グループの7基であり、1・22・33・7・9・25・8号である。第1の2基は23号を除くと小規模であるが、扁平率は低い。5号は1期である。31号も扁平率は低く、34号住と切り合い関係になる。やはり1期に属する。第3グループ内では1・8号が1期に属する他は不明である。1・7・9号と8・22・25号が、12号を中心に対になるような状態で検出されている。Ⅲ類としてまとめて観察すると、1・8・12号が1期であり、31号も同時期である。そこで、31・33・32号が、17・18列にかかって位置することになり、東側と西側で対になるような状況を呈する。1期から全てのパリエーションが存在することになるが、特にⅢ類が多く、この時期に好まれた形態と考えられよう。2期はⅠ類に5基集中する。2期は3つの形態に分かれる。住居内で住居に伴う土壌、それらは小型である。第2グループの集中する区域に検出された中型で浅い土壌、もう一つは、住居を切って構築された楕円形の浅い土壌群である。3期は、13号のみであり、これは前述の3番目の形態にはいると考えられる。4期、5期は現発掘区域内からは検出されておらず、全国的な集石土壌の傾向と同様である。

集石土壌は1・2期、特に前者に多く作られたと考えられよう。形態と大きさの相関関係からは、期時と形態とが、分離されていることである。時期別に形態に差があり、それが、土壌及び集石の「かたち」を規定するように考えられよう。また、その時期別の検出状態を観察しても一定の規則性、意図をもって配置されたと考えられよう。

そして、これらの相違には用途・目的も含まれると考えたい。用途については、被加熱の有無、焼土、炭化物、タールの付着状態、土壌内における土器・土器片の出土状態等を考慮して、検討を加えなければならない。それは北塚屋遺跡にとどまらず、他県の遺跡とも比較検討を加えて追求したいと考えたい。用途論とからめた形での時空的変遷や配置関係については今後の課題としたい。最後にその為にも詳細な発掘、観察がなされることを切に願うものである。

(小島)

引用文献

- 青木健二 1981『上の原遺跡発掘調査報告』日本産業史研究所
- 青木秀雄・福永久美子 1979『風早遺跡』庄和町風早遺跡調査会
- 赤山容造 1977『三原田遺跡』資料合冊 群馬県文化財保護協会
- 秋山道生 1979『窓ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ』国分寺市教育委員会・窓ヶ窪遺跡調査会
- 安孫子昭二 1974『貫井南』小金井市貫井南遺跡調査会
- 安孫子昭二・秋山道生・中西 充 1980『東京・埼玉における中期後半の各段階の様相』
縄文時代・中期後半の諸問題 神奈川考古第10号 神奈川考古同人会
- 市川 修 1980『北塚屋遺跡の調査』第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会誌
- 市川 修 1982『上南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集
- 市川 修 1983『塚屋 北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集
- 岩井住男 1970『膳棚』嵐期7 埼玉大学考古学研究会
- 海老原郁雄 1980『機沢遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第34集
- 大沢麗爾・芝崎 孝 1962『東京都中村橋遺跡の中期縄文土器』考古学手帖
- 小田静夫 1976『縄文中期の打製石斧』どるめん10号
- 上川名昭・白石浩之 1970『日野吹上遺跡』日野吹上遺跡調査会
- 川口正幸 1983『木曾中学校遺跡出土の人体付土器』東京の遺跡№1 東京考古談話会
- 桐正直彦 1981『遠弧土器』縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ 雄山閣
- 栗原文藏他 1959『大和町のむかし 吹上貝塚』大和町郷土資料第3集
- 栗原文藏他 1973『岩の上・雉子山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第1集
- 小林公明 1978『曾利』長野県富士見町教育委員会
- 埼玉県教育委員会編 1979『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第13集
- 斉藤基生 1978『貫井』小金井市文化財調査報告5
- 斉藤基生 1983『打製石斧研究の現状』信濃第35巻第4号
- 笹森建一 1976『志久遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第31集
- 笹森建一 1977『前島・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告第12集
- 佐原 真 1977『石斧論—横斧から縦斧へ』考古論集
- 下村克彦 1970『花積貝塚発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第15集
- 自由学園南遺跡調査会 1984『自由学園南遺跡』
- 白石浩之他 1977『当摩遺跡・上依知遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告書第12集
- 新藤康夫 1976『們田遺跡群 1978年度調査概報』們田遺跡調査会
- 鈴木敏昭 1983『台耕地(1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
- 鈴木保彦他 1981『関東、中部、北陸』縄文土器大成2 講談社
- 高木義和 1982『南大塚遺跡』寄居町文化財調査報告第6集
- 高橋 敦 1980『松ノ木遺跡第B地点』富士見市中央遺跡群Ⅲ 富士見市教育委員会
- 高林 均・斉藤基生 1974『平山橋遺跡』東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会
- 滝沢 浩 1963『埼玉県讚岐山遺跡の中期縄文土器』考古学手帖18
- 田中英司 1979『武蔵野台地』b期前半の石器群と砂川期の設定について』神奈川考古第7号
神奈川考古同人会
- 田中英司 1983『分類のゆくえ』神奈川考古第16号、神奈川考古同人会
- 谷井 彪 1975『舟山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第9集
- 谷井 彪・細田 勝 1982『縄文中期土器群の再編』研究紀要1982 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪 1984『小川町草加出土の土器をめぐって—勝坂式後半の諸要素とその展開』
研究紀要第6号 埼玉県立歴史資料館
- 塚田 光 1976『中峠式土器の研究』下総考古学6
- 中西 充他 1982『神谷原Ⅱ』八王子們田遺跡調査会

- 並木 隆 1978『甘粕原 ゴシン 露梨子遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第35集
- 並木 隆 1980『木曾呂表遺跡』川口市教育委員会
- 西村正衛 1972『阿玉台式土器編年的研究の概要—利根川下流域を中心として—』
早稲田大学研究科紀要18
- 西村正衛 1981『茨城県江戸崎町村田貝塚、東部関東における縄文中・後期文化研究その5』学術研究30
- 日本考古学協会編 1984『シンポジウム 縄文時代集落の変遷』日本考古学協会・日本考古学協会山梨大会実行委員会
- 肥田博博他 1975『中山谷』小金井市文化財調査報告書
- 堀口萬吉 1980『埼玉県の地形と地質』埼玉県市町村誌 総説編 埼玉県地域総合調査会
- 堀口萬吉他 1983『寄居町の自然』地学編 埼玉県大里郡寄居町教育委員会
- 松戸市教育委員会編 1978『子和清水貝塚』遺物図版編1 松戸市文化財調査報告第8集
- 馬日順一他 1975『大畑貝塚調査報告』福島県いわき市教育委員会
- 宮井英一 1984『縄文時代草創期の遺構と遺物—埼玉県宮林遺跡—』考古学ジャーナル237
- 宮内正勝 1965『下加冠跡』大宮市文化財調査報告
- 宮崎朝雄・金子直行 1982『縄文中期土器群の再編』谷井・細田1982に同じ
- 宮崎朝雄 1982『増善寺遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第5集
- 寄居町 1984『寄居町史』原始・古代・中世資料編
- 和田 哲 1975『西上遺跡—縄文中期文化の研究』昭島市教育委員会

本書を作成するにあたり、下記の方々から御教示、御助力をいただきました。ここに御芳名を記して感謝申し上げます（敬称略）。

石橋宏克、井上 巖、岩淵一夫、斎藤 弘、斎藤弘道、笹森紀巳子、下村克彦、芹沢清八、高木義和、塚本師也、成田千鶴子、初山孝行、原田昌幸